
英霊達とリリカルマジカル頑張ります

MRZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英霊達とリリカルマジカル頑張ります

【Nコード】

N6636V

【作者名】

MRZ

【あらすじ】

それはまだジュエルシード事件と呼ばれる騒動が起きる前の事。高町なのは、フェイト・テストロツサ、八神はやて、ユーノ・スクライア、月村すずか、アリサ・バニングス、クロノ・ハラオウンはサーヴァントと呼ばれる存在と出会う。

それが導くのは幸せへの道かそれとも……？

始まりの夜(N&a m p・F&a m p・H&a m p・Y)(前書き)

これは自作の”英霊達とリリカルまじかる頑張ります”の再構成も
のです。

故にそちらと違つ点はユーノとクロノにサーヴァントがいる部分だ
けです。

結末等が大きく変わる事はありません。ですが、展開や細かな差異
はあります。

そちらを見たい方はどうぞ。

始まりの夜 (N & a m p · F & a m p · H & a m p · Y)

「サーヴァントセイバー、召喚に応じ参上した」

ワケがわからない。それがなのはの感情だった。自分はただ、いい子でいなくてもいい相手が欲しかっただけ。だから神様をお願いした。

(私が本音を言い合える『誰か』が欲しい)

いい子でなくても傍に居てくれる誰かが。父が入院している現在、なのはは家族の邪魔にならないように『いい子』を懸命に努めている。でも、なのはも子供だ。甘えたい時やワガママを言いたい時もある。

だから、本音を言い合える相手が欲しい。それがなのはの偽らざる気持ちだった。それもあってのちよっとした神様へのお願い。なのは自身叶うとは思ってなかった。

「でも、こんなのではないよ……」

そんな願いをした途端、目の前に金髪の女性が現れ、しかも鎧や剣といったおとぎ話のような出で立ちときている。驚きよりも残念と言う面持ちのなのはに対し、セイバーはその凛々しい表情のまま、なのはにこう問うた。

「問おう。貴方が私のマスターか」

「……違うよ。マスターじゃない」

幼いなのはに、マスターの意味は理解できなかった。でも、それは自分の求めるものじゃない事だけは、なんとなく感じ取っていた。そう思つての返答はセイバーを軽く驚かせた。

それもあつてセイバーは、幼い少女の言葉に先程までの表情ではなく、どこか不思議そうな顔をして、なのはを見つめた。その顔は、では何なのですかと問いかけているようだ。それを受けてなのはは意を決して告げた。

私は、なのはは……あなたと、ともだちになりたいの！

自分の言葉に軽く驚くセイバーを見て、なのはは嬉しく思った。自分はそんなものじゃないくらい驚かされたのだ。その十分の一でも返す事が出来たと感じ、満足したのだ。

そんななのはの笑顔を見て、セイバーも笑みを浮かべた。二度目の召喚時は月光の中であの忘れえぬ人物と出会い、今回は星光の中、幼い少女に呼ばれた。彼女が記憶しているイリヤスフィールよりも幼い彼女からは、人としては強大な魔力を感じる。

だが、それはどうでもよい事だった。今のセイバーにとっては、なのはから予想だにしない言葉が返ってきたのだ。マスターではなく、友人になつてほしいと言われたのだから。なので、セイバーもならばと思ひ表情を和らげて口を開いた。

「友、ですか……。なら、失礼ですが貴方の名前を聞かせて頂けますか？」

セイバーは、自分が出来る限りの優しい声でそう言った。その声になのはも笑みを返し、頷いた。

「あ、はい。私はなのは。高町なのはです」

「ナノハ？ ……なのは、ですね。私はセイバー。セイバーと呼んでください」

こうして少女は、初めての友を得るのと同時に、永遠の友をも得た。星の光が差し込む部屋に、二人の笑みが輝いていた……。

突然の出来事に、フェイトは戸惑っていた。それは傍にいたアルフヤリニスも同じ。フェイトが様々な魔法に挑戦していた最中、転移魔法を構成した時、それは突然現れたのだから。

「おいおい、今度は子供かよ。ま、十年後に期待か、こりゃ」

相手は全身を青いタイトのようなものでつつみ、手には紅い槍を所持している。その気配は常人ではないと分かる者には分かっただろう。アルフとリニスは全身で警戒感を示しているが、男はそんなものはどこ吹く風とばかりにフェイトを見つめている。

一人男の異常さに気付けないフェイトは、二人の雰囲気やや戸惑いながらも眼前の相手を見つめていた。気のせいかな男の視線はフェイトを値踏みしているというより、どこか苦笑している。

「そんな警戒すんな、って言っても無駄だわな」

やれやれと両手を挙げて、男はフェイトの前で膝をついた。それにフェイト達が揃って疑問符を浮かべた。何をするのかと、そう思ったのだろう。すると、それに答えるように男はそのままの姿勢で

告げる。

「サーヴァントランサー、召喚に応じ参上した。お嬢ちゃんがマスターって事でいいか？」

だが真面目だったのは途中まで。名乗りを終えると再び立ち上がり、フェイトの頭に手を乗せたのだ。それをなぜか不快に思えない事に、フェイトは驚いていた。その手は暖かく、自分を安らげるように、ぶつきらばうではあるが優しく撫でている。

そんなランサーの態度に、まず安堵したのはリニスだ。本能も、理性も、勝てない、と判断した相手。それがひとまず敵ではない。それがわかっただけでも良かった。

(フェイトも無意識に甘えているようですし、安心ですね)

リニスの視線の先では、ランサーに撫でられる事へ違和感を感じない事に、逆に違和感を覚えているフェイトと、そんな彼女にどこか楽しそうな笑いを浮かべるランサーの姿があった。その微笑ましさによりニスは一人小さく笑みを浮かべる。

本来ならば異常な存在であるランサーへもつと警戒をするべきだろう。だが、何故かそんな必要はないと思えてしまうのだ。それだけの安心感をランサーから感じるのが一番の理由。それだけではなく、フェイトがどこか嬉しそうなのも大きいのだろう。

「え？ え？ ランサー？ マスター？」

「ああ。ま、主人って意味だ」

「主人？ ……えっと、多分違うと」

「フェイトから離れる！」

フェイトの言葉を遮るようにアルフがランサーへ叫びながら噛み付いた。それにランサーは微かに驚きを見せたが、それは噛まれた事ではなくアルフが声を発した事に対してだ。

一方、そんなアルフの行動自体に驚いたのはフェイトだ。ランサーが敵ではないと理解出来たが、そんな彼へアルフが起こした行動は問題しかなかったからだ。もしここで喧嘩などになっては不味い。そう考え、フェイトは何とかアルフを止めようとした。

「あ、アルフ?! 駄目だよっ! ランサーが怪我しちゃうから！」

そんなフェイトの言葉にも決して放すまいとするアルフ。そして噛まれているにも関わらず、笑みを浮かべてフェイトを撫で続けているランサー。そんな中、頑張つてアルフを引き離そうとするフェイト。

その傍から見れば小さく笑みを浮かべる光景を眺め、リニスは思う。この男ならば、もしもの時に二人を守り抜いてくれるのでは、と。そして、願わくばその時が訪れないようにと、強く強く念じながら微笑みを浮かべて三人の傍へと歩き出すのだった……

「えっと……」

「ふむ、今回はまともな召喚のようだ」

はやては唐突な現状に、必死に頭を回転させていた。冷静になれ、

とまだ十歳にも満たない少女が自分に言い聞かせていた。両親が亡くなり、独りになってまだ日も浅い。そんな中、突如として現れた謎の男。は yet は冷静に、いたってシンプルな結論に辿り着く。

「うん。ケーサツや」

「ちょっと待て」

何やら呟いていた男を無視し、電話をしに行こうとした途端、不審者が若干焦りを帯びた声で待ったをかける。は yet はそれでも止まらない。不審者が言うつのは当然だと思い、その制止を聞き流して車椅子を動かそうとしようとしたところで 既に男が目の前にいた。

「君の考えは理解出来る。だが、私の話を聞いてほしい」

「おじさん、ドロボーやろ」

「こんな格好の泥棒がいるかい？」

そう言われて、は yet は改めて男を見る。赤いコートのようなものに、黒い服。おまけに白髪ときている。確かに、泥棒には相応しくない格好だ。泥棒は、渦巻きのような模様の袋を背負って、頭巾をしているものだった。

は yet はそう思い出し、男をドロボーとは言わない事にした。だが、ならば目の前の相手は何なのだろうと思ったのか、は yet は小首を傾げて男へ問いかけた。

「ならなんや？」

「サーヴァントだ」

即座に返された男の言葉に再び頭が混乱し出すはやて。そんな少女の姿に男は何かを思い出し、微かに笑う。かつて自分も『あの時』こうだったのだ、と思い出したのだ。日常に非日常が入り込んだあの日。何も知らぬに近い自分がある”聖杯戦争”の事を聞かされた思い出を。

なら、自分がすべきは赤い彼女の役割だ。そう思った男はどこか諭すような声ではやてへ声を掛ける。それは、どこか妹へ声を掛ける兄のような響きがあった。

「まあ落ち着け。サーヴァントは使い魔の最上級だと思ってくれればいい。そうだな……つまり分かり易く言うのなら」

そこまで言っつて、彼は言葉を濁す。目の前の少女にわかるように説明するには、あの時自らが拒否した言葉しか浮かばなかったからだ。そう、即ち召使い。だが、それは己の誇りに賭けても使つてはならない。

そこまで考えて、男は何か気付く。先程から少女以外誰も出て来ない事に。既に自分がここではやてと話し出して数分。にも関わらず両親のどちらも出てこない。寝ているとしても、視線を動かして見た時計が示す時刻は、まだそんな時間には早すぎるのだ。

「なあ……」

そんな彼を思考から引き戻したのは、消え入りそうなはやての声。見れば、俯いて膝に置かれた手が震えている。それだけで男にはこの家の事情を大体察する事が出来た。

「何かな」

だからだろう。出たのは彼でも少し驚くぐらいの穏やかな声だった。思えば初めから気配が少女以外なかった。それから導き出される答えは一つ。かつての彼が味わった孤独感。それをこの目の前の少女も感じながら生きているのだろうと。

そう思ったからこそその声。自分には姉代わりをしてくれた相手があった。だが、きっと目の前の少女にはそれさえいない。と考えれば、彼がはやてへ抱く気持ちは決まっていたのだ。

「おじさんは……ツカイマさんなんか？」

「そうだよ」

「それって、わたしのそばにいてくれるって事？」

「君が望むなら」

「なら　っ！！」

勢いよくはやてが顔を上げると、そこには男の笑顔があった。見る者を穏やかにするような笑顔があった。思わず言葉を失うはやてに男はしゃがんで、はやての震える手にそつと自分の手を重ねた。

「選んで欲しい。このまま一夜の夢として忘れて一人で生きるか、私と共に二人で生きてみるか」

我ながらズルイと、男は思う。こんな聞き方を一人で暮らす子供にすれば、後者を選ぶに決まっている。だが、男はどんな形であれ、少女に決めて欲しかった。

車椅子での生活。まだ小学校に通い立てかその直前か。どちらに

しろ、この少女に待っているのは大人でも辛い生活だ。それを支えてやりたい。だが、押し付けではなく、少女の意志でそれを選んで欲しい。それが男の問いかけの真意。

そう、彼女が望むならどんな相手にも立ち向かおう。彼女が願うなら、どんな事をも成し遂げよう。この身は一振りの剣。故に己が望み等はなく、主の望みが我が望み。それが今までの彼の在り方なのだから。

だが、これからの彼は違う。あの少女に思い出させてもらった誓い。あれが今の彼にあるのだ。だから、はやてを守りながら彼はあの日の夢を追いかけるのだろう。

「一人か、二人か……」

「どうかな？」

噛み締めるように繰り返すはやて。それを聞きながら男は小さく笑みを浮かべるも、答えを聞くべきかと思いつきに問いかけた。そんな男の声に、はやては我を取り戻したように数回瞬きをした。そして、男の予想通りの答えを……

「どつちも嫌や」

言わなかった。それどころか、両方とも蹴った。

「忘れるのは無理やし、共に生きるってのも何か違う思う」

「では」

どうするのか？　そう続けようとしたのだろう。が、それははや

ての言葉に遮られた。

家族になる。

はつきりした声で言い切ったはやて。それに男は一瞬呆気に取られた。

「……は？」

「わたしの家族になって、一緒に暮らす。共に生きるって、それは結婚みたいやんか。一緒に暮らすって言う方がしっくりくる」

先程まで弱々しい雰囲気をしていたとは思えない程の断言。はやては男の目を見つめたまま、そう言っただけで笑った。その力強さに男も黙った。何故なら、その言葉にある女性を見たから。

(ああ……どうやら俺は、よっぽど気の強い女性に縁があるらしい)

穏やかな表情を浮かべ、どこか遠い眼をする男を見て、はやては不思議そうに小首を傾げた。その男の眼差しが何を意味するかなど、まだ幼いはやてでは知る由もない。しかし、それが不思議と悪い感じがしない事だけは、確信を持って言えた。

「そういえば、まだ名乗っていなかったな。私はアーチャー。サーヴァントアーチャーだ」

「あ、わたしははやて。八神はやてや」

そうやって互いに名乗りあったところで、何故だかははやては笑い出した。それを不可解そうに見つめるアーチャー。どうかしたのか

と尋ねても、はやてはただただ笑うのみ。

ややあつて、はやては笑うのをやめ、なぜ笑い出したのかを話し出した。曰く、アーチャーの名前を聞いた時、くだらないダジャレを思いついたらしい。それがツボに入り苦しかったと、そうはやては語った。

「あまり聞きたくはないが、どんなものだ」

「ぶくつ……ア、アチャーなアーチャーや」

そう言つと、再びはやては笑い出す。どうやら相当気に入つたらしい。一方のアーチャーは「やはり聞くのではなかった」と言つて苦い顔をした。それがますますはやての笑いを刺激する。

そんなはやてを見ながら、アーチャーは小さく微笑む。この日、孤独だった少女に、久方ぶりの笑いと共に家族が戻つた……

「むく、今度は随分小さいマスターですねえ。でもおく……うん、将来に期待出来そうです！」

彼　　ユーノ・スクライアは困惑していた。彼が暮らすスクライア一族は、遺跡発掘などを生業としている部族。彼も幼いながらも知識などを身に着け、こうして仕事を手伝っているのだ。

今回はちよつとした遺跡の探検。とはいえ、既に部族の大人達が調査を終え安全などは確保されているのだが、それでも彼にとって探検だった。

故に慎重に慎重を重ねて行っていたのだが、やはりまだどこか未熟だったのか、脆くなっていた床を踏んでしまいそこが抜けてしまったのだ。幸い怪我をする事もなく済んだのだが、その落下の最中彼は願った。

誰か助けてっ！

飛行魔法をまだ習得していないため、ユーノは混乱して恐怖から心底そう願った。その直後彼の体を何かが支え、無事に下の階へ降りてくれたのだ。それをしてくれた相手こそ、今の彼の前にいる獣耳の女性だった。

「え、えっと……まずは助けてもらってありがとうございます」

「いいんですよ。貴方は私のマスターなんですから。助けるのは当然です」

女性の言葉にユーノは更に困惑。自分が主人とはどういう事なんだろうか。と、そこで彼は一つの可能性に気付いた。女性の耳と尻尾を見て獣が変化していると気付いたのだ。そこから導き出された答えは、一つだったのだから。

「もしかして……君は使い魔？」

「おおっ！ 正解ですよ、マスター。うんうん、これは中身の方も期待出来そうですね」

ユーノの指摘に感心したように頷く女性。そんな様子を眺めながら、ユーノは自分の推測が当たっていた事に納得していた。だが、同時に新しい疑問が生まれてもいた。

(やっぱりそうなんだ。でも、僕は……狐かな？ そんな使い魔を作った覚えはないんだけど……？)

そもそも使い魔自体を彼は持つていない。なのでおかしいのだ。どうして自分を助けてくれた相手がいるのかが。そんな風に考え込み始めたユーノへ、女性は少し穏やかな表情を浮かべて笑みを見せた。

「そういえば、自己紹介がまだでした。私はキャスターのサーヴァントです。気軽にキャスターって呼んでくださいね」

語尾にハートマークでもついてそうな言い方のキャスター。それにやや不思議に思いながらも、ユーノもならばと自己紹介を返した。

「あ、えっと……僕はユーノ。ユーノ・スクライア。でも、キャスターが名前だとして……サーヴァントって何？」

「厳密には名前じゃないんですけどね。それにしても、サーヴァントと言って分からないですか？ もしかして、まだ魔術師としてのお勉強はしてなかったり……？」

自分の告げた単語に首を傾げるユーノを見て、キャスターは不思議そうな声を出した。その中の魔術師との表現に、ユーノは内心違和感を覚えるも申し訳ないと頭を下げた。そんな彼の対応がどこか可愛らしく思えたが、キャスターは少し慌てて頭を上げさせた。

その後、ユーノの真面目さに微笑んでキャスターは丁寧に説明を始める。それを聞いてユーノはキャスターの異常性を理解した。彼の知る使い魔とは違う成り立ちに用語。それに出現した状況などが

らある推察が出来た。なので、確認も兼ねてキャスターへ彼は問いかけた。それは一点。魔法を知っているかとの質問。

その質問でキャスターが自信満々に頷いた。当然だと言わんばかりの態度で。だが、それも少しの間だった。ならばとユーノが見せた魔法陣にキャスターは沈黙したのだ。

「……………これが僕らの使う魔法なんだけど」

「僕らの使う……………そうですか。あのマスター、魔法って割と誰でも使えます？」

「うん。リンカーコアのある人ならちよつと勉強するだけ出来るよ。というか、マスターじゃなくて名前前で呼んで欲しいんだけど」

「名前で、ですか？ いやん、どうしましょう。マスターとキャスターじゃなくて、名前で呼び合いたいなんて真名教えちゃいたくありません！ でもでもお、それはまだ早いですし……………でも、マスターの要望ですからあ……………」

そう言っただけでキャスターの告げた呼び方は”ユーノ様”だった。それにユーノはそちらの方が照れるからと慌てて拒否。結局少しの口論の末、マスターで通す事になった。そこでついにてキャスターが尋ねたのは、リンカーコアの事。ユーノがその説明をすると、キャスターは若干黙り込んだ。

そう、彼女の知る知識と違う点が多いのだ。”魔法”についての考え方がそもそも違う。更にリンカーコアなどは彼女の知る限りはない。そこから彼女は一つの結論に辿り着いた。

「……………分かりました。どうやら私は異世界へ召喚されたようで

すね」

ユーノの告げた内容からキャスターは正しく自分のいる場所を理解した。そこからキャスターが詳しい質問などをしようとしたのだが、突然ユーノが視線を上へ向けた。

それにキャスターも後を追うように視線を動かすと、ユーノが落ちてきた穴の周囲に何人かの男性がいたのだ。それにユーノが安堵したような息を吐いた。スクライアの者達なのだ。

彼らはユーノがいない事に気付き、もしやと思ってここへ来てくれたのだ。上から聞こえる念話を忘れていたなどの指摘に一瞬情けない声を出すユーノ。そんな彼にキャスターは微笑ましいものを感じ、一人小さく笑う。

それに気恥ずかしさを感じるも、これで助かると思ってユーノは安堵した。キャスターはそれを理解し内心微笑むも、微かに不満そう表情と声でユーノへ文句を告げた。

もう、私がいるんですから助け出す事なんて簡単ですよ。

あ、その……ごめん。つい……

ふふふ……仕方ないですね。今回は許してあげます。でも、今後は気をつけてくださいね、マスター。

部族の者達が降ろしてくれたロープを前にしながら、二人はそんな会話をする。こうしてユーノとキャスターは出会った。両親を亡くして部族の中で孤独と戦っていた少年は、この日を契機に孤独を感じなくなっていく。そして、これがまた新しい物語を紡ぎ出す事になるのだった……

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

英霊達の別ヴァージョンネタ。原作の再構成の再構成という異質な
ものですが、良ければ楽しんでもらえると幸いです。

次回はさすがとアリサに加えてクロノの描写を予定。

始まりの夜 (S & a m p ; A & a m p ; K)

その日、すずかは不安の只中にいた。来月から、すずかは小学校に通う事になっている。一般的な子なら、不安よりも期待が強いのだろう。だが、彼女は一般人と呼ぶ事が出来ない理由があった。

「私は……吸血鬼」

『夜の一族』と呼ばれる吸血一族。それが、彼女の心に重くのかかっていた。初めは、何が何だか分からなかった。次は、どうしてそんな事を教えたのかと、姉の忍に怒鳴り、終いには喚き散らして部屋に籠った。

先程、ファリンが様子を伺いに来たが、放っておいてと追い払った事からも、すずかがどれ程平静でいなかったかが分かるというものだ。普段は声を荒げる事さえないすずか。そんな彼女が家族同然のファリン相手に癩癩を起こしたような声を出したのだから。

すずかも、そろそろ知っておいた方がいいと思ってね。

思い出すのは夕食後の姉の言葉。それに嫌な予感はどこかでしていた。そして、その話を理解した時、少女の頭にはある単語しか浮かばなかった。そう、即ち”化物”だ。

「普通の子は血なんか飲まない。なら、私は？ 私はどうして普通じゃないの!？」

そう泣きながら叫んで、すずかは部屋のベッドへ飛び乗った。スプリングが軋み、嫌な音を出す。この時の彼女はしらないが、この異様な身体能力の高さも彼女を特殊たらしめている要因の一つだっ

た。

感情に任せた動きが、ベッドに六歳が乗ったとは思えない程の負荷を掛けているのがその何よりの証拠だ。すずかはそんな事に意識を向ける事もなく、ただ顔を伏せて涙を流していた。

（普通じゃない私は、他の子みたいに生きていけないんだ。だって、私は……）

「化物”なんだから”

そう呟くと同時に、風がすずかの頬を撫でる。それがすずかには、自分の言葉を肯定しているように思えた。そう　　彼女を見るまでは。

風に視線を上げて窓際へそれを向けたすずかが見たのは、綺麗な髪をたなびかせ、見た事もない眼帯のようなもので両目を隠し、胸元が露わになっている黒い服を着こなしている女性の姿。

そんな恐怖を抱いて叫んでもおかしくない状況だったが、すずかが一番驚いたのは彼女の雰囲気だった。何故かはこの時の彼女には分からない。しかし、直感的に悟ったのだ。

（私に……似てる気がする）

驚きで動けないすずかに女性は無言で歩み寄って行く。何か声をかさなければと思うのだが、何故か声を出してはいけない気がしている自分がある事にすずかは気付いた。

そんな事を考えているうちに女性はすずかの前に辿り着き、おもむろにその手をすずかの頬に当てた。その手の温かさがすずかのの中にある微かな恐怖心を薄れさせていく。

「泣いて……いたのですか」

綺麗な声だった。女性は優しく涙を指で拭くと、視線の高さをす
ずかに合わせる。瞳は見えない。でも、見つめられている。すずか
は確かにそう感じた。

女性は呆けるような表情のすずかに、微かではあるが笑みを浮か
べた。それにすずかは魅入られるような眼差しを返す。それに女性
の笑みが更に深くなり、声にもそれが溶けたように優しい言葉が告
げられた。

「似ていますね……」

「えっ……？」

「ああ、いえ、気にしないでください」

「……私、似てますか？」

「……………ええ。とても」

その女性の言葉に、すずかは自分が間違っていないと確信した。
誰かは分からないが、この人なら自分を受け入れてくれる。何せ、
自分を似てると言ってくれたのだから。そう考え、すずかの心に喜
びが生まれていた。

実は、厳密に言えば女性の指した似ていると言うのは、すずかと
自分ではなく別人と彼女なのだが、それを指摘する程、女性はすず
かを知らなかった。だから女性は、目の前のすずかを見ながらある
者の面影を重ねていた。

(本当に似ています。マスターとサーヴァントはどこか共通点があると言いますが、まさかここまでとは)

あの暗い地下室で出会った相手を思い出し、ライダーはどこか感じ入るようにすずかを見つめ続けた。そこからどれくらい時間が経ったのだろう。二人はお互いを見合ったまま、一言も発せずじつじつと待っていた。時計の秒針が刻む音だけが部屋の中に響いていく。そして、すずかが意を決して話を切り出そうとしたその時……

「すずかちゃん、寝ちゃいましたか？ そろそろお風呂に入った方がいいですよ」

聞こえてきた心配そうなファリンの声に、すずかはやっとの思いで固めた勇気を完膚無きまでに砕かれた。そんなすずかを見て女性が小さく微笑む。

未だに声を掛け続けるファリンに、すずかはどこか疲れた声を返していた。それを聞き、先程の声よりは普段のものに近いと思っ嬉しそうに返事をするファリン。そんな会話を、女性はただ静かに聴いていた。

やがてファリンが下がるとすずかは拗ねたような顔をした。おそらく、自分の決意を見事に無へ返してくれた事を思い出しているのだろう。そんなすずかの顔を見て、女性は嬉しそうに語りかけた。

「良かったですね」

「何がですか」

「先程より、いい表情をしています」

そう言われてすずかは気付いた。あれほどあつた不安が、今は微塵もなかったからだ。だがその理由が分からないため、不思議そうな顔をするすずか。そんな彼女へ女性は笑みを浮かべてこう言った。

「貴方は、自分が一人ではないと気付いたからです」

女性は語る。自分にも、人とは違う事に悩み苦しんでいた”家族”がいた事を。その女性も、最後には自分を受け止めてくれる人達がいる事を思い出し、強く生きていった事を。そして、自分もまたそうしてもらった一人であると。

その話を聞いて、すずかは己の状況を改めて考え直してみた。姉がいる、ノエルがいる、ファリンがいる。例え、自分が何であろうと受け入れてくれる”家族”が自分にはいる。すずかがそう思った時、女性がその髪を撫でながら言い切った。

「それに、世の中には色々なヒトがいます。私や彼女を友人と言ってくれた者だっていたのですから」

そこで女性は一旦言葉を切った。そして万感の思いを込めてすずかへ告げる。

意外と、世界は捨てたものじゃないですよ。

そう言い切って、女性は優しく微笑んだ。その微笑みにすずかもまた笑みを返す。そして、先程女性の名を聞こうとした事を思い出した。

「あ、あの……私！ 月村すずかといいますっ！」

そう言いながら、すずかは自分に驚いていた。大声を出す事などほとんどない彼女にとって、自分が出した声量は他人のものに感じられた程だった。それでもすずかは、自分の動揺を隠せないままに女性をただ見つめて問い掛けた。

「あ、貴方の名前を教えてください」

聞き様によっては、初心な口説きにも取れそうな声。だがその瞳に映る輝きは、女性を少し驚かせた。先程までは少しも見られなかった力強さ。それをそこから感じ取ったからだ。そんな一瞬の間の後、女性はその口元を緩めて答えた。

「私はライダー。サーヴァントライダーです」

その声に込められた想いを、すずかは知らない。そしてライダーも、それに気付けない。何故ならそれは、姉が妹を得たかの様な嬉しさが滲んでいたのだから……

突然だが、アリサ・バニングスは言葉を失っていた。誘拐されたからでも、今から乱暴される所だったからでもない。誘拐などは、ここまで危ないものは初めてだがもう何度も経験しているし、乱暴されるのも覚悟していたからだ。

そう、アリサが言葉を失っているのは視界に映っている光景だった。何せここは無人の廃墟。住む者など誰もいない廃ビルなのだから。

そんな廃ビルの窓。そのむき出しのコンクリートに腰掛け、長い刀を抱えている侍がいた。折から吹く風に、着物が微かに揺れて音を立てる。そんな何かの映画のワンシーンのような景色に、アリサの周囲にいた誘拐犯達も同じ様に言葉を失っていた。

それもそうだ。何故なら、確かに先程まではそこに誰もいなかったのだから。気が付けば突然そこに彼はいた。だから、誰も言葉がなかったのだ。そんな周囲を他所に、まるで自分しかないように侍は静かに口を開いた。

まことよい月夜よなあ。

誰もが言葉を失う中、侍はそう言い出した。まるでそれは独り言でも漏らしたように。

「俗世は様変わりしておるが、月の美しさは変わらぬ」

ずっと左手を上へ上げ、その形を何かを持つように変えた。アリサには、それが何か理解できた。父親がよくお酒を飲む時にする仕草だったからだ。

「このような時は静かに杯を傾け、雅を感じるがよいのだが……」

そこまで言っつて、侍はアリサ達を初めて見た。それだけでアリサは安心感を感じていた。侍が何者かは知らない。もしかしたらこの廃ビルの幽霊かもしれない。それでも、それでもだ。

（ああ、アタシ助かったわ）

そう心から確信してアリサが安堵したのを契機に、誘拐犯達は侍に向かって動き出した。その手にはナイフや拳銃と言った凶器が握

られていたが、侍はそれらをまるで気にも留めず、ただ一言だけ告げた。

無粋よなあ。

それだけ言うと、いつの間にか彼はアリサの傍へ立っていた。何が起きたか分からぬため、戸惑う誘拐犯達を眺めて侍は静かに手にした刀を構える。

たったそれだけ。それだけにも関わらず、誘拐犯達は誰一人として動けなくなつた。彼らは誘拐のプロフェツショナルチーム。当然、修羅場等も経験している。今更、刃物を所持した男が一人現れた所でどうという事はないはずだった。

だが、現実には誰も動こうとしない。いや、出来ない。本能が、理性が告げる。コレからは助からないと。逃げるとさえ思えない。ここにいる全員が同じ心境だった。ああ、ここで自分は死んだ。そう心から思ったのだ。

一方の侍はまったく動かない誘拐犯達を見て、僅かに、傍にいたアリサさえ気付かない程の声で呟いた。それは微かな気遣いから出たものだ。

「幼子には目の毒よな」

そして放たれた斬撃は、誘拐犯達を全員倒した。”死”ではなく”気絶”という形を以って。事の全てを見ていたアリサだったが、流石に一撃で終わると思っていなかったのか、何度も目を瞬かせていた。

すると、アリサは急に体が軽くなるのを感じた。見れば体を縛っていた縄が綺麗に切られている。どうしてと思うとその答えはすぐ

に告げられた。

「これで動けるであろう」

視線を動かせば侍が平然と刀を手に佇んでいた。彼が縄を見事に切断したのだ。アリサはその技術に驚きながらも日本の礼儀に則り、起き上がると同時に彼へ頭を軽く下げた。

「ありがとうございます。誰だか知りませんが、ひとまずお礼を言わせて頂きます」

そんなアリサの言葉に侍が軽く驚いた。自分のどこかに変な所でもあったのだろうか。確か日本の礼儀はこれでいいはず。そんな風

にアリサが思っていると、答えは予想の斜め上をいつていた。

「なんと、異国の娘が流れるような日本語を」

「ちよおおおっと待ちなさい！」

あまりの言葉に、アリサは装うとしていた良家のお嬢さまの仮面をすぐに捨て去った。古風だとは思っていたが、どうやら目の前の侍は本気で時代錯誤の存在らしい。簡単な話を聞けば、気が付くところ

ここに居て、自分が襲われそうになっているのを見つけたのだと言う。

アリサはそんな事を飄々と語る侍を、心底胡散臭いものを見るように見つめていた。だが、それでも自分の恩人には違いない。そう思い直し、アリサは自分の感情にけりをつけた。

「まあいいわ。とにかく助けてもらったんだし、お礼はちゃんとするから」

「ふむ、私は別に構わぬが……」

「アタシが構うの！ とりあえず名前を聞かせて。いつまでもお侍さんじゃ呼びにくいわ」

「それもそうよな。私はアサシンのサーヴァント。名を佐々木小次郎と言う」

「アサシン？ サーヴァント？ 何でそこだけ外国語なのよ。ま、いつか。じゃ、小次郎でいいのね」

そこからアリサが色々と質問しようとした時だ。俄かに下の方から声が出てきたのだ。その中の声の一つに、アリサがよく知るものがあった。傍付きの鮫島のものだったのだ。

本当にこれで助かった。そうアリサが思った時、小次郎がゆっくりとその頭に手を置いた。何を、と言おうとしてアリサは言えなかった。視界が滲んできたからだ。それに何だとアリサが疑問に思う前に小次郎が呟いた。

「幼き身でよく耐えたものよ。だが、恐怖に涙するは恥ではない」

「べ、別に……っく……アタシは……怖く、なんて」

「そうであろう。そなたが涙するは嬉し涙よ。なら、何を躊躇う事がある。思う存分流せばよい。私と月以外は誰もおらぬし」

私は何も見ておらぬ。

それが切欠だった。アリサは流れ出す涙を止める事が出来なかつ

た。ただ声を押し殺して泣いていた。それを視界から外し、小次郎は月夜を眺める。彼の手から伝わる温もりと、流す涙の暖かさに、アリサはある決意を固める。

(アタシを泣かせてタダですむと思わない事ね！ 絶対お返ししてやるんだからっ！)

余談だが、この後現れた鯨島達が小次郎も誘拐犯と勘違いし、取り押さえようとしたところをアリサが一喝するのだが、その様子を見て小次郎が大いに笑った事だけ記しておく。

クロノ・ハラオウンは足元に転がる男達を眺め、小さくため息を吐いた。彼らは違法行為に手を染めていた犯罪者。質量兵器の密輸をしていたのだ。その証拠を掴み逮捕する事。それが今回の執務官として与えられた彼の仕事だった。

だが、これをやったのはクロノではない。彼の目の前で退屈そうにしている女性がやったのだ。それも、魔法を使わず肉体のみで。クロノはそれを改めて頭の中で整理すると、ため息混じりに視線を女性へ向けた。

「それで……一体君は何者だ？ 突然目の前に現れ、僕の制止を聞かずに突撃し、しかも魔法も使わず相手を制圧するなんて正気の沙汰じゃない」

「最後の言い方はちょっと気に障るけど、ま、いっか。私は……一応まだバーサーカーって事になるのかな？ そのサーヴァント。」

よろしく頼むね、坊や」

クロノはそんなバーサーカーの言葉に眩暈を感じた。色々と尋ねたい事はある。だが、一番にはつきりさせる事が出来た。クロノは努めて冷静にと自身へ言い聞かせながら、彼女へ問いかけた。

「まさかとは思うが、その”坊や”とは僕の事か？」

「以外に誰がいる？」

即答。しかも、声にはどうしてそんな分かりきった事を聞くのかとの疑問も混じっていた。それを感じ取り、クロノは湧き上がる怒りを抑えて一旦呼吸を整えてもう一度口を開いた。

「坊やは止めてくれないか。名乗るのが遅くなったが、僕はクロノ・ハラウンと言うんだ。それで、君の名はバーサーカーでいいの？ もし違うのなら、名前を教えてくださいと助かるんだが」

「あー、つまり子供扱いは止めてって事か。分かった。じゃ、クロノって呼べばいいのね。それと名前はそれでもいいよ」

「ちょっと待て。それでもいいとはどういう事だ？」

予想外の返事にクロノは心から疑問を浮かべて問いかけた。言った事をそのまま受け取れば、目の前の女性は名前を軽く考えている事になる。それはあまり好ましい考え方ではない。

そう考え、クロノはそんな事をそのままにする訳にはいかないと思った。なので、バーサーカーへその意図を問い質した。彼女はそんなクロノにやや楽しそうにはあったが、簡単に説明をしていく。サーヴァントの事や真名の事にバーサーカーとの名の意味などを。

その説明を聞き終えたクロノは、はつきりと理解した事があった。それは目の前の存在が自分の常識を超えた存在だという事。ある種の死者蘇生のようなサーヴァントの仕組み。彼女自身は違うとは言っただが、本来はそうなる事だと説明したのだ。

彼の知る使い魔は動物を素体として生まれるものだ。決して人を指して使い魔などと呼ばない。大体、人を使い魔にするなど前代未聞。そう考えれば、彼女の異常さが分かると言っものだった。

しかも、使い魔に低級上級などの概念はない。その点からも目の前の相手が自分とは違う概念を有している事は明らかと言えた。次元漂流者に近いかもしれない。そう判断した故にクロノは彼女へこう言い切った。

君の話は分かった。だが、僕は君を使い魔などと思えない。だから、出来る事ならバーサーカーと呼びたくない。

へえ、真面目なんだ。いいよ。なら私の名前を教えてあげる。私はアルクエイド・ブリュンスタッド。アルクエイドでいいから。

クロノの言葉を好ましく取ったアルクエイドは、どこか懐かしむように笑顔で言葉を返す。会話は一先ずそこまできとなり、クロノは倒れる男達へバインドを施して拘束していく。それを眺め、アルクエイドは不思議そうな声を漏らしていた。

「……どうかしたのか？」

「いや、私の知っている魔術とは大分違うなあって」

「魔術？ いや、これは魔法だ」

「え？ クロノは”魔法使い”なの？」

「まあそう言えなくてもないが……いや少し待てよ。アルクエイド、君のいた世界の事を詳しく教えてくれるか？」

何か認識がずれている気がする。そう判断し、クロノは男達の拘束を終えてアルクエイドへ詳しい話を聞こうとする。だが、それを遮るようにクロノの頭へ念話が聞こえてきた。

【クロノ君、大丈夫？】

【エイミーか。ああ、無事に制圧したと報告しただろう。心配しなくていい】

アルクエイドの話を聞きながら、エイミーへ現状を出来るだけ告げていくクロノ。ちゃんとアルクエイドへ相槌も打ちつつ、エイミーへの念話もこなしていた。マルチタスクと呼ばれる技能だ。

やがてクロノはアルクエイドの話から彼女の世界の恐ろしさを知る。魔法と違い非殺傷などが無い魔術。更に彼女は管理外世界である”地球”出身である事も把握出来たのだ。それがクロノとしてはある意味一番大きな問題だった。管理外である地球には魔法文化はないはず。クロノはそう記憶していたからだ。

（グレーム提督から聞いた話でもそれは間違いない。とすれば……地球には管理局が知らないだけで、密かに魔法と似たようなものが存在しているのかもしれないな）

これは一度個人的に調べてみる必要があるかもしれない。そんな風に思いながら顎に手を当てるクロノだったが、彼女はそんな彼に

不思議そうな表情を見せていた。

「どうしたの？」

「いや……アルクエイド、君は地球で生まれた事に間違いはないんだな？」

「そうだよ」

クロノの確認にアルクエイドはそうあっさり返して視線を動かす。向けた先は天井。そこには先程の戦闘で出来た穴があり、星空が見える。しかし月が二つ見える事に気付き、彼女はその景色に小さく呟いた。

ふうん、やっぱりここにある地球は私が暮らしてた場所とは違うんだろうなあ。これはまた面倒事になるかも……

その呟きはクロノには聞こえなかった。しかし、表情から寂しいとの気持ちは伝わったのだろう。咳払いを小さくすると、アルクエイドへ真剣な表情で告げた。

「いきなり知らない場所に来たんだ。不安になるのも無理はない。だが、執務官の名に誓って、君を絶対に地球へ送り届けるから安心してくれていい」

それにしばらく目を開けたまま呆然となるアルクエイド。そんな彼女にクロノは力強い眼差しを返す。次元漂流者と思い、安心させなければならぬとの使命感があったからだ。

そんな彼の気持ちを知ってか知らずか、アルクエイドはややあつてから嬉しそうに笑い出した。それは子供が出すような無邪気な笑

で無理でした。セイバーとセイバーじゃ出会った後が大変なので。

ファーストデイズ（S & a m p · R）

「ではスズカ、ファリンと買い物に行つて来ます」

「うん。ライダー、ファリンをよろしくね」

「ふふっ、わかっています」

笑みを浮かべるライダーにつられる様にすずかも笑う。最近序列変更があり、ファリンはライダーの妹分になってしまっている。まあ、本人もライダーお姉様と呼んでいる辺り満更でもないようだが。

「では……」

「行つてらっしゃい」

メイド服を翻し、ライダーは歩き出す。歩きながら少しずれた眼鏡を指で直して。既に違和感がなくなりだした格好を思いながら、ライダーは思う。自分も変わったな、と。

あの日、彼女に似た面影を持つすずかに出会った『始まりの夜』から既に半月。月村の家にも慣れ、メイド服にも慣れた。清楚な雰囲気はどこか妖艶さが漂うのは、ライダーが着ているせいだろう。しかし、当初家主である忍はミニスカートタイプを着せようとしたのだ。それはライダーとすずかの抵抗&弁護により阻止され、ノエル達と同様のロングとなった経緯がある。

（あの日の朝は……色々とありましたね）

思い出すのは出会いの日の朝。ライダーとすずかの二人が強く結びついた時の事……

柔らかな日差しと鳥のさえずり。それを目覚ましに、すずかはゆつくり目を覚ます。すると、何か違和感を感じた。

「あれ……？ 何で……」

窓とカーテンは開いていたはず。そう続けようとして、すずかの意識が覚醒する。

「そつだ！ ライダーは！？」

「呼びましたか？」

どこか不思議そうに答えた声に、すずかは慌てて振り向く。そこには、昨夜と同じ格好で眼鏡を掛けたライダーの姿があった。その手にした絵本がどこかシユールだ。

「えつと……」

「はい」

「お、おはよう。……ライダー」

「おはようございます、スズカ」

その何とも言えない光景にすずかは若干戸惑うも、何とか挨拶を交わす。ライダーはそれを平然と受け入れ、返した。そして、またその視線を絵本へ戻す。ちなみに、手にした絵本はすずかのお気に入り、のファンタジー物だったりする。

しばらくライダーのページをめくる音だけが部屋に響く。その光景を見つめ、すずかはある疑問を浮かべた。そう、何かが違うのだ。昨夜会った時とは違う。そう感じるすずかは、それを確かめようとライダーへ視線を向けた。

「ライダー……」

「はい？」

すずかの声にライダーは再び視線を戻す。その瞳の美しさにすずかは魅入られそうになるものの、何とかそれを抑え付けた。そう、疑問はそこにある。

「その眼鏡は？」

「以前いた場所で頂いたものです。思い出の品、といえ品ですね」

まさか、残っているとは思いませんでしたが。そう言って、ライダーはそう感慨深そうに呟いた。すずかは、そんなライダーに何故最初から眼鏡ではなかったのかを尋ねた。それならあんなにビックリしなかったのに、と思ったのだ。

その言葉に、ライダーは笑みを浮かべて答えた。仮にこの状態でもすずかは驚いたはず。そう返したのだ。それは否定できない推理だったが、すずかは反論する。ビックリの度合いが違う。それにライダーが反論する。するかと思っただが、彼女は申し訳なさそう

な顔をした。

「そうですね。それは確かに……。すみません、スズカ」

「えっ？」

想像した事と違う反応にすずかは戸惑う。違う、そうじゃない。自分は謝ってほしかった訳じゃない。ただ、ライダーともしっかり話したかっただけなのだ。そう思い、何か言わなければと思った時だった。

ライダーが、笑っていたのだ。それはどこか悪戯を成功させたように。だけど、どこか詫びるような笑み。そこですずかも気付いた。

「もしかして……」

「はい、少しからかってみました。ですが、スズカ相手ではあまり気分はよくないですね」

そう言うと、ライダーは心底後悔しているのだろう。顎に手を当て何事かを呟いている。セイバー相手ならばとか、リンはなぜあんなにも嬉しそうに……等と言っているのだ。

その中に出てくる名前は、全てすずかには聞き慣れない名前ばかりだったが、それよりも聞きたい事があるとはかりに彼女は口を開いた。

「ねえライダー……」

すずかがそう声を掛けた瞬間、ライダーが少しだけ固まった。どうしたんだろうとすずかが見つめてみると、ライダーは何か慌てた

ように視線を動かした。

「な、なんですか？ スズカ」

「何で眼鏡を掛けるの？」

「いえ、それは……えっ？」

想像した言葉と違ったのか、ライダーは何かを弁明しようとして聞かれた事を理解した。だが、それがどうして気になるのがライダーにはわからなかった。故にどこか不思議そうな表情をすずかへ向ける。

「目が悪いって事じゃないんでしょ？ ならどうして眼鏡を掛けるの？ すごくキレイな瞳なのに」

もっとはつきり見たいな。そんなすずかの言葉に知らずライダーは喜んでいた。そして同時に悲しんでもいた。何故なら、その事を話す事はすずかの望みに応えられない事を意味するのだから。

それでも教えるべきかもしれない。そう判断し、ライダーは小さく息を吐くと真剣な眼差しをすずかへ向けた。それにどこかすずかも息を呑む。それに内心微笑みながら、ライダーは話し始めた。

「分かりました。何故私が瞳を隠していたのか、それを教えます」

ライダーは静かに語り出す。己の本当の名と、それにまつわる事実を。

蛇の怪物メドゥーサ。その名はすずかも聞いた事があった。見た者を石に変え、恐ろしい姿をした化物。ライダーはすずかに理解し

易いように、難しい言葉や単語は使わず、簡単に話した。その語り口には何の感情もなかったが、姉が出てくる話の箇所だけは、懐かしむような響きがあった。

すずかは、その話をするライダーを見て酷く心が痛んでいた。ライダーは何か悪い事をしたわけではない。それなのに怪物にされ、実の姉をその手にかけさせられた。自分の意思に関係なく、望まぬ状況に置かれた。すずかはそこでやっと気付いた。自分が感じた感覚はこの事を無意識に感じとっていたんだと。

そして、それを理解したすずかは、自分の最後を語りだそうとしたライダーに……

「もういい！ もういいよっ！！」

遮るように叫んだ。聞きたくないと言わんばかりに。怒りの感情そのままに、すずかは激しく首を振る。そんなすずかにライダーは言葉がなかった。わかったからだ。何故すずかが怒っているか。何に対して激怒しているか。

（優しい子ですね、本当に）

すずかは泣いていた。それは怒りの涙。理不尽に対する抗議の証。神様という存在に、少女は初めて憤りを感じていた。ただ愛された。その相手に奥さんがいて、怒りが愛した夫ではなく、ライダーに向かった。ライダーが誘った訳でも、近付いた訳でもない。

なのに、悪いのはライダーにされた。住む場所を追われ、姿を変えられ、大切な姉達を亡くし、最後には命さえ奪われた。しかも、それを行った者は英雄とまで称えられて。

自分が泣く事で何かが変わる訳じゃない。それでもすすかとは思った。自分がライダーの味方になるうと。例え世界を、神様を敵にしても、自分だけは、絶対に自分だけはライダーの傍にいようと。奇しくも、それはライダーの二人の姉が出した結論と同じだった。そして、すすかはライダーに抱きつき、強く抱きしめる。

「スズカ……」

「もう大丈夫だよ。ライダーには、私がいるから」

ずっと傍にいるから。その言葉にライダーも優しくすすかを抱きしめる。自分の事を我が事のように感じ、泣いているすすかへありったけの感謝と想いを込めて。

それは、すすかを起こしにきたファリンが来るまで続いた……

「あの後大変だったなあ……」

あの日の事を思い出さずかは笑う。部屋に入ってきたファリンが、ライダーを侵入者と判断して大騒ぎになったのだ。ノエルに忍までやってきて、すすかは説明に苦労したのを思い出す。

更に困った事に、ライダーがファリンとノエルに勝ってしまったため、余計にややこしい事態になったのも要因の一つだ。結局、すすかの言葉とライダーの態度で理解はされたが、そこからがまた大変だった。

ライダーが伝説の存在だと言う事。現れた理由が分からない事。そして本当は違うが、ライダーがそうした方がいいと判断したために、彼女も吸血種である事がわかったからだ。

そんな突然の事に戸惑う忍ではあったが、すずかの様子からライダーが既に彼女の中でどういう存在か把握し、それに免じて不問とした。この判断にライダーは忍にあの赤い少女の姿を重ねた。

その後、例のメイド服に関する話となり、そこでも色々であったのだが……

(でも、ライダーはどこか楽しそうだったよね)

無理難題をふっかける忍とそれを助長するファリン。それを落ちて着いて嗜めるノエルに慌てるすずか。それを眺め、ライダーは確かに笑っていたのだ。それを思い出し、すずかは小さく微笑む。

すずかは知らない。そのやりとりがかつての衛宮邸を彷彿とさせていた事を。ライダーがそれを思い出し、自分の立ち位置に内心苦笑してたのを。

そして、ライダーはすずか付きのメイドとなって、忍の悪戯めいた提案によりファリンが教育を担当したのだが……。

「これはですね……」

「どうですか？」

衛宮邸での暮らしで家事をある程度していたライダーに隙はなく、ファリンが逆に教わる方が多かったのだ。

それでも、先輩としての意地を見せようとするファリンだったが、持ち前のドジを如何なく発揮。それをライダーがフォローする結末になり、見かねたノエルがライダーの教育を変える事となって今の形へ納まるに至るのだ。

「それにしてもサーヴァントかぁ。私だけの護衛みたいなモノだつてライダーは言ってたけど……」

すずか付きなのは、ライダーがサーヴァントの意味を周囲へそう語ったからだ。そんな事を思い出しながら、ふとテーブルの上にある写真立てを眺めてすずかは思う。

（来週からは小学生だな）

あの時あった不安はもうほとんど消えた。色々なヒトがいるから、友達だつてできるはず。初めから打ち明ける事は出来なくても、いつかそれを打ち明けたい友達が出来る。それで嫌われてもいい。いざとなれば自分には家族がいる、ライダーがいる。それに……

意外と、世界は捨てたものじゃないんだから。

ライダーの言った言葉にすずかは勇気付けられた。ライダーがそう思ったのなら、きっと世界はそうなのだと。テーブルの写真立てには、月村家全員で撮った写真と、慣れないメイド服に照れているライダーとの2ショットが飾られていた。

どちらも共通しているのは、すずかが笑顔だという事。そしてすずかとライダーの手が繋がれている事だ。それを嬉しそうに見つめながらすずかは心から呟いた。

ファーストデイズ（F & amp ; L）

腕に付いた噛み痕。それにやや違和感を感じるも、それを付けた狼を眺めてランサーは目を細めて納得した。その体から感じるのは魔力。つまり、狼はそれを持つ存在。

（使い魔、か。それもかなりのモンだ。こりゃ、本気で今回は当たりだな）

サーヴァントである自分へ傷を付けられたのもそれ故だろう。そう理解し、小さく笑みを浮かべるランサーの視線がその狼の隣へ移る。その先には金髪の少女がいた。名はフェイト。彼を呼び出した存在だ。

その身に宿す魔力は並外れたモノがあり、ルーン魔術の使い手である彼から見てもやや驚くものがある。そんなフェイトだが、今彼女はリニスのお説教を聞いていた。まあ、本来はアルフに対するもののだが、自分が止め切れなかったのも悪いとフェイトが言つて二人揃って仲良くリニスに怒られていたのだ。

（あれじゃあ姉妹だな。にしても、あの女の方も魔力を感じる。だがこいつは……あの狼に似てるだど？）

その様子を眺め、ランサーはリニス相手に違和感を感じた。使い魔だろう存在と似た気配をしているリニス。その正体を知らぬ彼は、少し思案顔をした後、後で聞く事で決着する。

そして、彼はそのフェイト達の関係を把握した。どうやらフェイトは立場が一番上だが、リニスの弟子のようなもので、アルフはフェイト付きの使い魔だが、リニスにも使役されているのだろうと。よってリニスが現状一番上にいるようだ。そうランサーは理解し、

苦笑を一つ。

その様子は、やはりどこから見ても姉に叱られる妹とペットに見えなかったからだ。しかも聞こえてくるのが、無闇に人を噛んではいけないとか、フェイトの言う事をキチンと聞きなさいなどくれば、それはもう微笑ましいものだ。

自分は場違いだな、とも思いながらランサーは周囲を軽く見渡し、槍を両腕で抱えて退屈そうに呟いた。

「で、俺はいつまで突っ立ってிரいやいいんだ？」

しかし、その声は当然フェイト達には届かない。それに苦笑を深めつつ、ランサーはため息を吐いた。だが、その表情はどこか呆れるようで楽しそうに見えた……

お説教が終わった後、ランサーを待っていたのは質問攻めだった。しかし、それらはランサーにとっては予想通りのものばかりだったため、比較的早く済んだ。ただ彼が気になったのは、サーヴァントの説明をした際のリニスの反応だ。どこか驚きながらも、最後には悔しそうな顔をしたのだ。

だが、一番の問題は別にあつた。それはランサーがフェイトに質問した事。ここはどこだ、と言う問いかけ。それにフェイトではなく、リニスが答えた事から始まった一連の流れだ。

「ここは時の庭園です」

「あ？ そりゃ何だ？」

そこからリニスはランサーへ簡単にこの世界の事を説明していく。次元世界、管理局、ミッドチルダに魔導師とランサーの聞き覚えのない言葉ばかりが出てくるそれ。更にとどめとばかりにランサーを襲ったのは、試しにとリニスがやってみせた『バインド』と呼ばれる拘束魔法だ。

突然現れた光の輪に驚くランサーだったが、それが魔力で出来ている事を認識した途端、音も立てずにバインドを消した。

「……っ！？」

「中々便利な代物だが、構造が甘いんだよ」

ランサーがやったのは、バインドの魔力に自分の魔力を加えただけ。ルーン魔術の使い手たるランサーから見れば、基本デバイスありきの魔法は穴だらけなのだ。この身がキャスターとして召喚されていれば、おそらくもつと早く解除できたと語るランサーに、リニスは心の底から思った。

（（ランサーが敵でなくて良かった））

そんな事を知るはずもないランサーは、驚愕の表情を見せるフェイト達へどこか自慢げに笑みを見せているのだった……

長い通路を歩くフェイト達。向かう先は、フェイトの母親であるプレシアのいる部屋。母さんに紹介しなくてはとフェイトが思い立ち、現状に至るのだが、ランサーには気になっていいる事があった。それはアルフ達の雰囲気とリニスの忠告。

決して過去から来たなどと話してはいけません。

周囲に強く告げるその表情は普段の彼女にはないもの。故にフェイトとアルフは戸惑いながら頷き、ランサーさえ鬼気迫るモノを感じたのだ。更にランサーの話聞いていた時や現状を説明していた時と違い、今は明らかに不安そうな顔をしているのだ。

それもフェイトが母親の事を語るたびに、何とも言えない表情を浮かべていたのだから、ランサーとしては余計に気になるところだ。なので、聞くべきか否かと思っただが、会えば原因も分かるだろうとランサーは結論付けた。その考えは良くも悪くも的中すると知らずに。

やがてランサー達は大きな扉の前へ辿り着く。そこでフェイトはやや緊張したような面持ちとなり、アルフとリニスはやや辛そうな表情を見せた。ランサーはそれに疑問符を浮かべるも、何も言わずにフェイトの後を追う。

「入るね、母さん」

何故かアルフとリニスは外で待つと言って扉の前に残り、フェイトとランサーは中へと進んでいく。その先にいたのは黒髪の女性。その身体に宿る魔力はフェイトを凌ぎ、全身から他者を圧倒する気配を漂わせていた。

彼女の名はプレシア・テストロッサ。フェイトの母であり、大魔

導師と呼ばれた女性。だが、ランサーが反応したのはその威容ではなく、別の部分だ。そう、一目見ただけで彼には感じるものがあったからだ。

（魔力が安定してねえだと？　これは……さては病か？）

魔力探知に長けるサーヴァントだからこそ分かるのだ。その体が弱っている事は。しかし、目の前のプレシアはそんな様子を一切見せず、フェイトとランサーを見つめる。

その視線はどこか威圧するようにも見え、ランサーは見知らずの自分を警戒しているのだろうと思った。まだこの時は、そう考える事が出来たのだ。それが間違っていたと、彼はすぐに知る事になる。

「……その男は？」

「あ、ランサーと言って……その、私が召喚しました」

詰問するようなプレシアの聞き方に、少し怯むようにフェイトは言葉を返す。その実の娘に話しているとは思えない態度に、ランサーは怒りを通り過ぎて驚いていた。何せプレシアはまったく表情を変えず、ただモノでも見るかのようにフェイトとランサーを見ていたからだ。

今も経緯を説明するフェイトを、路傍の石でも見るかの如き目で見下ろしている。そんな異常な光景を見て、ランサーは目を覆いなくなっていた。

（おいおい、マジかよ。やっとマシなマスターかと思えば、こんなところに厄介事が隠れてやがった）

そう思うも、内心でランサーは納得していた。何故リニスとアル

フが部屋に入らなかつたか。何故フェイトが母親の事を話すたびに
気まずそうにしたのか。その答えが眼前にあつたのだ。

そんな風にランサーが自分の運の無さを嘆いている間にも、フェ
イトはプレシアへ先程あつた事を話していく。そのフェイトの話に
プレシアが興味を抱いたのはバインドを壊した方法だった。

人であるランサーが使い魔である事にも興味があつたようだが、
それよりも相手の魔力に自分の魔力を加えるという聞いた事がない
技術へ意識が向いたからだ。

その話を詳しくと言われ、フェイトは嬉しそうに語り出す。ラン
サーに説明された事を懸命に思い出しながら、精一杯フェイトは語
る。合間合間にプレシアが聞く事に詰まりながら、ランサーに助言
をもらつて答えるフェイト。

それをランサーは支えた。途中、プレシアがフェイトを通して会
話する事を面倒に感じ、自分に直接尋ねた時には一計を案じたのだ。

わりいが何言ってるかわからねえ。フェイトの言葉しか俺の
知ってる言葉に聞こえねえんだ。

それにフェイトが驚きつつ何か言おうとするが、それより先にプ
レシアが彼女へ通訳するように促し、フェイトが無視される事を回
避させる事に成功する。ランサーは気付いていたのだ。プレシアが
どんなに冷酷な態度を取ろうと、フェイトは嬉しそうにしていると
まるで会話出来る事自体が嬉しくて堪らないとばかりの表情を見
て、ランサーはフェイトがプレシアと長く言葉を交わせるようにと
したので。例えそれがどれだけ会話と呼べるものに見えなかつたと
しても。

そうして十分ほど話し、プレシアはもう聞く事はないとばかりに

二人を追い出した。それでもフェイトは、愛する母と長く話せた事に喜んでいた。そんなフェイトを、ランサーは複雑な心境で見つめていた。

そう、リニスもアルフも、今日初めて会ったランサーでさえ気付いている。プレシアはフェイトを何とも思っていないと。娘どころか人として見てるかすら怪しい。にも関わらず、フェイトはプレシアを慕っているのだ。

(かなり色々ありそうだが、それは俺が何とかする問題じゃねえ)

自分がするべきは、来るべき戦いに備えてフェイトを鍛える事。まだまだこれから伸びていくフェイトを一人前の戦士にする。それだけが自分がすべき事だと、ランサーは分かっている。分かっているが……

(だからってほっとけるかよ)

そう思うのは、彼が今まで一度も召喚されて報われた事がないからだろうか。そう、このままではフェイトは報われない。プレシアはフェイトが強くなっても立派になっても何も思わないからだ。

彼女はおそらく自分の役に立つモノにしか興味を抱かない。だがそれもすぐになくなる。アレは人として壊れた奴の目だ。ランサーはそう考え、ある男を思い出していた。

忘れようのない相手。自分の誇りを踏み躪り、利用価値がなくなった途端あっさりと捨てる事を選んだ男。その男の目に、プレシアの目はどこか似ていたのだ。

「今日は母さんがたくさん話してくれたんだ」

「そうですね。それは良かったですね」

笑顔で告げるフェイトに笑みを返すリニス。アルフはどこかその会話に複雑な表情をしていた。その光景を眺めて歩きながらランサーは誓う。それは声にならない想い。それは誰も知らない誓約。

(フェイトの想いを、あいつの努力を報われるようにしてやるか。この……槍に賭けてっ！)

槍騎士はそう誓い、苦笑を一つ。我ながら、らしくない。そう思いながらランサーは歩みを速める。まずはこの妙な雰囲気はどうにかしよう。そう思っ

「な、話してるとこ悪いが何か食わせてくれよ。腹が減ったんでな」

「ラ、ランサー、頭が重いよ」

フェイトの頭に腕組みし、そうリニスへ告げるランサー。その表情は少年のようだ。そのランサーの行為に、弱くだが抗議の声を上げるフェイト。そんな彼女もどこか嬉しそうな表情を浮かべている。それに気付き、やや意外そうな顔を見せるリニスとアルフだったが、すぐに苦笑してそれぞれに反応を返した。

「ええ、分かりました。じゃあ、食事の支度をしますね」

「ったく、いい加減腕どけな。フェイトが嫌がってるだろ」

不思議な男だと思いながらも、楽しそうな声を返すリニス。アルフはフェイトに笑みを浮かべさせている事が嬉しいのか、声にどこか優しさが滲んでいる。それを聞いてランサーは不敵な笑みを浮か

べると、アルフへこう返した。

そう思うんなら力づくでどかすんだな。

その挑発に乗るアルフを嗜めるリニス。戸惑うフェイトから離れ、笑みを浮かべて逃げ出すランサー。それを見て逃がさんとはかりに追いかけるアルフを止めないといけないと言いながらフェイトは走る。そんなランサー達を見つめてため息を吐きつつ、それでも笑みを見せるリニス。

ちらりと後ろへ視線を向け、それを見ながらランサーは思う。

ああ、こういうのも悪くねえ。

おまけ

「出来ましたよ」

「「待つてました！」」

「ふ、二人共、落ち着いて」

リニスが運んできた最後の料理を前に、今にも掴みかかろうとする二人をフェイトは何とか宥める。それにリニスが小さく笑い、静かに食卓へその皿を載せた。

「じゃあ早速……」

それを合図に食事へ手を伸ばそうとするランサー。同じようにアルフも食べようとして、何かに気付いたのか動きが止まった。それに気付いたランサーがふと手を止める。何をするのか気になったのだ。

「さすがにこのままじゃ食べにくいね」

その言葉と同時にアルフの姿が変わる。狼から人間の女性へと。ランサーはその光景に口笛一つ。視界に映っているのは、美人と呼んで差し支えない女だったからだ。

「で、どうなってるんだ？」

口笛を吹いておきながら、ランサーは悪びれもせずリニスに尋ねる。その手には、アルフが狙っていたチキンステーキがしっかりと握られている。その野性味溢れる姿に、フェイトは「手掴みなんて……」と驚き半分憧れ半分の視線でそれを見つめ、アルフはそのキレイな顔を歪めて唸っていた。

それを視界に入れながら、リニスはランサーの質問へ答えた。その表情は微かに笑みを浮かべている。

「使い魔は、アルフのように動物が素体です。ですが、主の魔力を消費する事で人の姿になることが出来るのですよ」

ちなみに私もそうです。そうリニスが告げると、ランサーは納得したような顔をした。最初感じた違和感。その答えを聞いたからだ。だが、それによる感心も一瞬。すぐにいつもの顔に戻して呟く。

ファーストデイズ二本目をお送りしました。こちらも加筆修正版となります。

今回、魔法に関して独自解釈がありますが、寛容な心で見てください。ください。

ほのぼの分がなさすぎたので、おまけで投入したらフラグ化してしまいました。

ファーストデイズ（A & amp ; A）

淡く日差しが大地を包み、穏やかな風が心地よい早朝。バニングス邸に大きな違和感が存在していた。まるで時代劇から抜け出してきたかの如き格好の男は、“物干し竿”と呼ばれる刀を縦横無尽に振り回す。

いや、それはただ振り回しているのではない。一見無秩序に見えながらも美しい剣舞をなしていたのだ。それをしばらく続け、男は最後に刀を払うと小さく息を吐いた。

「ふむ、西洋の庭もまた良きモノよ」

そう呟く男の名は佐々木小次郎。アサシンのサーヴァントにして、アリサの命の恩人であった。あの後、彼は是非お礼をさせて欲しいと言うアリサの招きを受け、ここバニングス邸に厄介になった。

昨夜はアリサの両親からお礼を述べられた。その際、名乗った名前に驚かれはしたが、二人は親が佐々木小次郎のファンだったのだらうと勝手に納得し、名前による騒動は未然に防がれたのだった。

その後は、豪勢な晚餐を味わった小次郎だったが、当然のように見た事無い料理ばかりで戸惑った。しかし、今の彼はそれよりも気になっていいる事がある。

「よもや”ぼでいーがーど”なるものになってくれとは……」

昨夜の宴席で、彼はアリサの両親からそう提案されたのだ。行くあてがないと告げた途端の申し出。しかもアリサが即座に賛同したため、小次郎がそれを断ろうとすると、すかさず彼女は疲れたから寝ると言って、彼の断るキツカケを無くしてしまったのだ。

（あの時の娘、女狐と同じ匂いがしておった。まこと女というのは油断ならん）

立ち去る時のアリサの顔を思い出し、小次郎はそう断じた。その顔は不敵に笑っていたのだ。どこからか「にひっ」と聞こえそうなくらいに。そうやって笑うアリサを思い浮かべると、それがキャスターの笑みに重なり、知らず小次郎は懐かしむように笑みを浮かべる。そんな彼を、朝日だけが見つめていた……

「いい天気ね！」

窓を開け、伸びをし終えたアリサはそう言い切り、着替えを手取る。本来、大財閥の令嬢ともなれば手伝い等をするメイド等がいともおかしくない。しかしバニングス邸には、いやアリサの周囲にはそのような者は敢えて付けられていなかった。

その理由はアリサが望まなかった事と、両親の教育方針でもある”人の上に立ちたいのならば、立たれる者の気持ちを知る事”の精神で、アリサは同年代の子が自分でする事は全て自分でこなすように育てられていた。

着替えを終え、アリサはすぐさま部屋の外へと出た。そして出迎えた鮫島への挨拶もそこそここつ尋ねた。

「小次郎はどこ？」

昨夜からこの家に滞在する事になった居候。いや、今のところは来賓といえる。だが、アリサにとってはあまり大差ないので興味は無い。今興味があるのはその現在地だ。色々と聞きたい事や言いたい事がある。

そのため、アリサは小次郎に会いたかったのだ。鮫島は、そんないつも以上に元気なアリサに微笑ましいものを感じつつ、小次郎の居るだろう場所を教えるのだった。

そんな風にアリサが捜しているとも知らず、小次郎は庭を散策していた。柳洞寺にいた頃は山門から動けず退屈していた事もあり、自由に動き回れる事に小次郎は喜びを噛み締めていた。

それにバニングス邸は西洋式の庭園であった事もそれに拍車をかけた。日本庭園にはない味を、雅を感じながら小次郎は歩く。時に呆れ、時に驚きと表情をこころと変えながら。

「いささか侘び寂びが足らぬが、これはこれでまた良いモノよ」

小次郎が特に気に入ったのは庭の中心にある噴水だった。枯山水とは正反対の発想に、小次郎は驚きと感心を抱いたのだ。

「水をこつも惜しげなく……贅沢ではあるが、これもまた文化の違いか」

ま、雅には違いないと呟き、小次郎はそろそろ屋敷に戻ろうとして、その動きが止まった。

その視線の先には、仁王を思わせるような雰囲気の腕組みしたアリサの姿があった。無論、小次郎にとってアリサがそんな姿勢をした所で脅威でも何でもない。だが、その目に宿った光が小次郎を止めるに至った。

「勝手にウロウロするなああああ！ はあ……はあ……つかげで、庭を走り回るはめになつたじゃないっ！！」

鮫島から小次郎が庭へ出て行つたと聞いたアリサは、早速とばかりに庭に出た。だが進んだ方向が彼と逆だった事と、小次郎が既に玄關へ戻り始めていたため、彼女はそのまま庭をほぼ一周するはめになつたのだ。

勿論、その最中に何度もどこかに行つてしまつたのでは、と言う不安を抱き続けた。それもあつて走る事にしたのだが、その疲れと苦しみを全て小次郎へと叩きつけたのだ。

そんなアリサの剣幕も小次郎には微笑ましいものにすぎない。それどころか、面白がつて顔に笑みさえ浮かべて答えた。

「それは健脚であるな。幼子にしては大した者よ」

「幼子つて呼ぶな！ 名前で呼べつて言つたでしょ！ ったく、居候なんだから少しは言葉つてもんを……」

「はて？ 私は構わぬと言つたものを、礼だと言つて連れてきたのはそなたではなかつたか？」

どこかからかうように問いかける小次郎の言葉に、アリサは小さく呻き答えに詰まる。小次郎が言っている事は事実だった。目の前の侍は、確かにあの時礼には及ばないと言つた。それを強引に連れてきたのは自分である。ならば、小次郎の立場は居候ではなく、丁重に扱う客人が妥当になる。

幼いながらもアリサはそこまで考え、そして悔しがつた。それは

もう誰の目からも明らかな程に。悔しさから俯き、手を握り締めているアリサを小次郎は楽しそうに見つめる。

昨夜のお返しにと、少しばかり大人気なく理屈で攻めたのだ。しかしアリサはいかに頭の巡りが良いとはいえ、まだ子供。小次郎もそう思つて、少しやり過ぎたかと反省したその瞬間。

男のくせに細かい事気にするなあああっ！

アリサが吠えた。それはもう見事に。獅子か虎かと思わんばかりの咆哮だった。小次郎は、その声で確かに空気が震えるのを感じたぐらいだ。その証拠に、表情は啞然としている。そして耳鳴りが小次郎を襲い、頭を鈍く痛めつけた。

一方、肩で息をしながらアリサはどうだと言わんばかりに胸を張る。その光景を眺め小次郎は思う。ああ、この女子は虎の子であつたか、と。だから髪が黄金色をしているのだと納得したのだ。

「と・に・か・く！ もう朝食の時間なんだから、早く来なさいよ」

「承知した。さて、異国の朝餉はいかなモノか」

「だから、ウチを異国扱いするのやめなさい」

そんな会話をしながら並んで歩く二人。時代がかつた姿の小次郎と西洋人形の如きアリサの組み合わせは、違和感を感じさせながらも、どこかしっくりくるものがあった……

用意された朝食は洋風だった。パンにスープ、サラダにベーコン。それにサニーサイドアップと呼ばれる半熟の目玉焼きが並んでいた。こんな一般的なメニューが選ばれた裏には、昨夜の食事を見た小次郎があまりにもあれこれ聞いた事を受け、アリサの母が誰でも知っている料理の方が気を遣わずに食べられるだろうと考えたからだ。

まさしく気を利かせてくれた手配だったのだが……

「この汁物は？」

「コンソメよ。野菜や鳥なんかを一緒に煮込んで作るはずよ」

「この菜物の盛り合わせは？」

「サラダ。色んな野菜を食べ易い大きさにして、ドレ……タレをかけて食べるの」

ほらこれとアリサに手渡され、小次郎はドレッシングのビンを眺める。日本語と英語が書かれたそれを、面白そうに小次郎は眺めた。そう、結局同じ結末になったのだ。小次郎が知っている料理となれば、確実なのは昔ながらの精進料理ぐらいだろう。

アリサは小次郎の様子を横目で見やり、ため息一つ。母の気遣いはどうやら無駄に終わったようだ。そう感じたのだ。小次郎にしてみれば、洋風なアリサの家にある物全てが珍しいからだ。純日本と呼べる物でない限り、小次郎の興味は尽きない。

そこまで考え、アリサはふと思う。知らない物を尋ねる時、小次郎の顔はどこか幼く見えるのだ。純粹に未知との触れ合いを楽しん

でいるように見える表情。だからだろうか。彼は子供のアリサにさえ、素直に聞く事が出来る。

そう思つてアリサは自問する。それに引き換え自分はどうかと。大人に負けじと物を知ろうとし、塾や習い事をし共に遊ぶ相手もなく、同じ年の子とは違つて生き方をしている。そんな自分がもし小次郎の立場なら、素直に子供に物を聞くなど出来ないだろうと。

それは彼女のプライドが邪魔をするから。そう結論付けると、アリサの中で浮かび上がる公式は、小次郎「プライド無し。だからそう出来るのだとアリサは納得する。それは大きな間違いなのだが、生憎それを指摘する事は誰にも出来ない。

「どうかしたか？」

「……へ？」

どうも考え込み過ぎたらしい。小次郎がアリサへ不思議そうに問いかけた声で彼女は意識を戻したのだから。故にアリサの反応はどこか間拔けたもの。だが、それに小次郎は特に何か言う事もなくさりりと言葉を返した。

「いや、何やら思い詰めた顔をしておつたのでな」

そう言つて小次郎はスープを啜る。れっきとしたマナー違反だが、日本人たる小次郎にそんな事は関係ない。堂々と両手で皿を持ち、静かに啜るその姿はどこか浮いていた。ちなみに小次郎の手元にもスプーンやフォークは置かれている。

その光景を見てアリサは頭を抱えた。

(教える事が多すぎる!)

物の名前や使い方。果ては文化やマナー等、これではまるで先生ではないか。そう思った時、アリサの脳裏にある提案が閃いた。うまくいけば、自分を子供扱いする小次郎に一泡吹かせられる作戦を。

以下、アリサのイメージ。

「いい、小次郎。あんたは外国の事を知らなさ過ぎ」

「ふむ」

「だから、アタシが教えてあげるから感謝なさい」

「おお、それはかたじけない。よろしく頼む」

「うむ！ じゃ、これからアタシの事はお嬢様と呼びなさい」

「畏まりましたお嬢様……これでよいか？」

「よいよい。苦しゅうないぞ」

「これだ！」

アリサがそう思い、小次郎に声を掛けようとした時には、もう小次郎の姿はなかった。

「嘘っ?!」

慌てて周囲を見渡すも小次郎の姿はどこにもない。見れば小次郎の食事は綺麗に平らげられていた。何時の間にと思いながらも、なら外だろう。アリサはそう結論付け、席を立って食卓を後にしようとした所で。

どうした？ もう食べぬのか？

意外と少食なのだたと失礼な事を平然と言いながら、小次郎が厨房の方から現れたのだ。その手にしているのはコンソメが並々と入った皿。それを見て呆気に取られるアリサを横切り、小次郎は静かに席に着く。

そして先程のようにスープを啜り出す。一切ぶれる事のないその所作に、アリサは感心すら覚え始めていた。そんなアリサを小次郎は一瞥すると、視線を彼女の食事へ向ける。それは、アリサに食べないのかと言わんばかりであった。

それに気付き、アリサも咳払いをしてから席に着く。そして残っていた食事を下品にならない程度に急いで食べ、アリサは隣へと視線をやる。小次郎はゆっくり味わうようにコンソメを飲んでいった。その表情は心なしが嬉しそうだ。

「そんなに気に入ったの？」

「うむ。先程板前に聞いてきたが、そなたの言う通りの作り方であった。大地の恵みをふんだんに煮込んで作るとは、贅沢よな」

そう答え、小次郎は空になった皿を見つめる。アリサの気のせい

だろうか。その横顔がどこか悲しそうに見えたのは。その理由を尋ねようと声を掛けようにも、アリサにさえその悲しみが深いだろう事が分かるくらいだ。そうしてアリサが迷っていると、小次郎が口を開いた。

「しかも色が琥珀とくれば、目にも雅なモノよ。大地の恵みに人の知恵、二つの結晶には恐れ入る」

まさに珠玉の一杯よ。そう語る小次郎は、既にいつもの小次郎であった。アリサはそれに軽く安堵するが、同時に先程見せた表情が気になって仕方なかった。

アリサは知らない。小次郎は元々百姓の出で、佐々木小次郎という存在ではなかった事を。元百姓だからこそ、己の現在を鑑みてその不条理さに思いを馳せたのを。それらを、今のアリサには知る事が出来なかった……

食事を終えたアリサは、さっき思いついた提案を小次郎へ告げた。それを聞き、願ってもないと応じる小次郎。と、ここまではアリサのシナリオ通り。だが、そうは簡単に運ばないのが世の中というもの。

「じゃ、これからはアタシを」

お嬢様と呼びなさい。そう続けようとした。だが、それを遮るように小次郎は言った。

「分かっておる。ちゃんとありさと呼べばよいのであるう？」

その小次郎の言葉にアリサは何も言えなくなった。名前と呼べと言ったのは自分だ。なら、この流れでそう言われてもおかしくないお嬢様ではないが、それでも十分だ。しかし、その顔にはありありと怒りが浮かんでいた。

その理由は一つ。名前の発音が違う。それが怒りの訳。だが小次郎は気付けない。西洋の言葉も、彼は一部を除き片言に近いのだ。

「如何したありさ。名前で呼んではならぬのか？」

「それでいいけど、そうじゃなああああいつ！！！」

そのアリサの心からの絶叫は、屋敷全体に響き渡ったのだった……

- - -
- - -
- - -

ファーストデイズ三本目です。こちらも加筆修正。

五組の中で一番漫才のような関係になるはずだったんですが、やはりはやて達に取られてしまいました。

ですが、結構この二人も賑やかです。

ファーストデイズ（H&Amp;A）

淡く太陽がアスファルトを照らし、その日差しを浴びながら一人の男が走っていく。新聞配達だろうか。一台の自転車が駆けて行く。そんな朝が動きだす音でアーチャーは目を覚ました。

「む、少し寝すぎたか？」

そう小さく呟き隣の少女に視線を移す。そこには安らかな寝息をたてて眠るはやてがいた。

あの後、詳しい話は明日にしようと告げ、アーチャーは居間で寝ようとしたのだが、それを幼い少女が消え入るような声で阻止したのだ。

一緒に、ええんやけど……あかん？

最後には小首を傾げてまで言われてはしょうがない。アーチャーは渋々ながらはやての要望に応じる事にした。それにはやては久しぶりに誰かが居てくれるという状況となったのだ。きっと甘えたいのだろう。そうアーチャーは自分へ言っただけで聞かせたのだから。

その際、二人の間でこんなやりとりがあった。それは、完全に漫才の様相を呈する会話。少し前まで、消え入るような声を出していた少女とは思えぬ程の見事な返しだった。

「わかった。ただし、今回だけだぞ」

「え、ええんやんか。わたしが大きくなるまで一緒に寝よ」

「一応聞くが、大きくとはいくつまでだ？」

「十二！」

「断る」

「ぶーぶー」

「膨れてもダメなものはダメだ」

「ケチ、アホ、イジワル、人でなし、カイシヨウナシ、ドロボーネ
コ、ウワキモン！」

「待て。今、最後の方は聞き捨てならぬものがあつたぞ」

「お昼のドラマでよー聞くんよ。ちよう意味は知らへんけど」

「……そのドラマは君には早い」

そのやりとりを終え、ベッドにはやてと共に横になるアーチャー
だったが、彼女は興奮しているのだろう。はやては一向に眠る気配
なく、アーチャーの腕に抱きついて質問を続けていた。

どこの出身等のアーチャー自身の事から、明日はどうつすると言っ
た事まで様々だ。相手をしていればその内眠るだろう。そうアーチ
ャーは思っていたが、その勢いが弱まる事がなかったため、仕方な
いとばかりにある提案をした。

もう寝た方がいいぞ。何故なら……

それは、翌朝自分より早く起きたら質問に何でも答えると言うモノ。はやてはそれを聞き、たった三分で寝た。それを見てアーチャーは苦笑する。やはり自分という存在と出会った事で精神的に疲弊していたのだらうと思ったのだ。

しかし、はやての寝付く前の意気込みを思い出し、何があっても絶対負けられないと決意したのだった。何を聞かれるか分からない。はやてが普通の少女だったのなら、アーチャーもここまで思わない。だが、彼女が年齢よりも妙にませている事を気付いた以上、変な事を聞かれては堪らない。

「……さて、食事の支度でもするか」

そんな事を思い出しながら、気を取り直して息を吐くアーチャー。寝息をたてるはやての頭を軽く撫で、アーチャーは静かに部屋を後にするのだった……

八神家のキッチンに佇むアーチャー。その背からは、戦場を詳細に観察するかの如き雰囲気が漂う。否、ここは戦場なのだ。彼にとつて家事　それも料理とはまさに戦いと呼べるもの。故に敗走はなく、必勝こそが彼の必然。

しかし、彼はキッチンをしばし眺めて呟いた。足りんな、と。彼の腕を十全に振るうためには、この調理器具だけでは力不足。ならばどうするのか。簡単だ。ないのなら創ればいい。

トレスオン
「投影、開始」

自分にとって言い慣れた言葉と共に魔術回路が動き出す。そして、アーチャーの手から。

「ふむ、こんなところか」

包丁や鍋などが手品のように現れていた。それらは世間では高級品と言われるモノばかり。どこかの万年金欠宝石少女がいれば、間違いなく売り飛ばして資金にする事請け合いの光景だ。

アーチャーはそれらと元々あったものと交換する。そして、それらを邪魔にならぬよう収納スペースへ入れた。処分するしかないはずのそれらを大事そうに扱って。その理由はただ一つ。

（彼女の母親の形見かもしれんしな）

捨てずにしたのはそれ。この家についてアーチャーはまだ知らぬ事が多すぎる。それもあって、彼は手始めとばかりに食事を作ろうとしていたのだが、冷蔵庫の中を見て固まった。

そこには、飲み物や調味料以外何も入っていないかったのだ。まさかの事態にさしもの皮肉屋も沈黙した。若干の間。その後、彼はゆっくり冷蔵庫の扉を閉じ、片手で目を覆いながら天を仰いだ。

（よもや食材が無いに等しいとは……）

はやては一人で暮らしている。そして車椅子での生活。そこから考えると、おそらく食事等は配達で賄っているのだろう。そう判断し、アーチャーはその顔を歪ませる。

早朝から開いているスーパーはあるにはある。だが、それがどこにあるかわからない今、どうする事も出来ない。だからといって諦めるのは許されない。何もせずに諦めるなど、彼には決して出来な

い結論だからだ。

「不本意ではあるが、最早それしかあるまい」

苦渋に満ちた声。活路はある。だが、それは彼の中では苦肉の策。しかし、今の彼にそれを拒否出来る余裕はない。ならばもう道は決まった。

「時間は有限。ならば、急ぐとしよう」

そう結論を出し、彼は静かに走る。はやての部屋へ消え、即座に戻り玄関へ向かう。そしてドアを開け、閑静な住宅街を駆けるアーチャー。幼き少女のため、そして己の信念のために……

包丁が野菜を刻みながら軽快な音を響かせ、コンロにかけられた鍋が僅かに震えている。黒い無地のエプロンを着け、無言でアーチャーは調理をしていた。

彼が向かった先はコンビニエンスストア。最近では生鮮食品も扱っていた事を思い出し、何軒か梯子したのだ。結果として食材は手に入ったものの、その鮮度などは納得のいくものではない。しかし、しかしである。

（食材を生かすも殺すも腕次第。ならば、私の腕で足りぬ分を補えば済む事っ！）

無論目利きをし、少しでも状態の良いものを選んではきている。

ギリギリ及第点なら、後は工夫と技術で勝負。それがアーチャーの結論。持てる全てをぶつけ、彼はこの調理に挑んでいた。

一方、アーチャー視点では静かな死闘が行われているキッチンから離れたはやての部屋。そこで心地良い眠りに浸っていたはやてだが、漂ってくる匂いと音に意識が覚醒し始めた。

(あれ……？ ええ匂いや……お出汁の匂いやな。この音は……包丁か)

そこまではんやりと思い、次の瞬間目が覚めた。誰がこれをしているのか。そして、それが何を意味するのか。

「負けてしもた……」

聞きたい事は山ほどあった。でも、答えてくれないかと思うような事もある。だからこそ、アーチャーに勝って色々聞こうとはやては意気込んでいたのだが、結果は見事に惨敗だ。

しかし、どうやってアーチャーは料理をしているのだろうかとは思ってはいない。食事は宅配にしているから冷蔵庫には使える物は何もないはずだ。それに買うにしても、近所のスーパーはまだ開いていないし、お金も持つてるとは思えない。

それだけ考え、はやてはまず着替える事にした。身体をベッドから動かし、車椅子へ。そして、タンスの中から着る物を引っ張り出していく。

(でも、朝ご飯か……。こんなに楽しみなんは久しぶりやな)

知らず鼻歌混じりに着替えるはやて。そんな時、ドアがノックさ

れ。

起きたのか、はやて。何か手伝う事はないか？

アーチャーの声がした。ノックのみで開けない所に彼の気遣いが見える。はやてはそれに少しビックリしながらも、嬉しそうに笑顔で答える。

「特にないわ。おおきにな、アーチャー」

「そうか。なら、顔を洗ったらテーブルに着いてくれ。食事の用意が出来ている」

「うん。すぐ行く」

はやてがそう答えると、アーチャーは待っているとあっさり言い残し、またキッチンへと戻っていった。その足音を聞きながら着替えを再開したはやてだったが、何故か視界が滲んでいる事に気付いた。どうしてと思った時、はやてが思い出したのはアーチャーの一言。

待っている。

両親を亡くして以来、一人で済ませていた食事。それが今日からは違う。自分を待ってくれる人が、食事を作ってくれる人が、”家族”がいる。それが涙の理由。昨夜から出来た新しい同居人、アーチャー。彼は自分の”家族”になると言ってくれた。

それがこんな形で証明されるとは、はやては思っていなかった。流れる涙もそのままにはやては小さく苦笑した。ある事を思い出したのだ。それはあの両親を亡くした日の事。

(神さまに謝らなアカンな。アーチャーと会わせてくれて、ホンマにありがとうございます)

両親を亡くした日、はやては何故自分も一緒に死なせてくれなかったのかと神を恨んだ。たった一人で生きていく。それが幼い少女にどれ程辛い事は言葉に出来ない。だが、神はやてを見捨てなかったようだ。

(でも、もしかしたら恨んだからアーチャー連れてきたのかもしれないなあ……)

はやての脳裏に、手を合わせペコペコと謝る白髭の老人の姿が浮かぶ。そして、そんな事を思っただけで涙を拭く。許してやろう。相手はよぼよぼのおじいちゃんだから。そうはやては思い、また一人笑う。そして車椅子を動かし、泣いた事を誤魔化す事も含めて洗面台へと向かうのだった……

用意された食事にははやては目を疑った。豆腐の味噌汁、だし巻き卵、ほうれん草のおひたしに焼き海苔と、実に純和風の献立が並んでいたのだ。ただ、白米だけは既製品をほぐしただけ。それでも驚くはやてにアーチャーは語る。

自分がかつとも得意とする和食を作る事は夜の内から決めていた事。そして、食材を揃えるためとはいえ、申し訳なかったがはやての財布を黙って借りた事を。

けれど、自分が苦勞した事などは一切触れない。はやての性格をアーチャーは既に把握し始めていたからだ。下手な事を言えば、顔を曇らせてしまう。だからそれらの事を聞き、はやてが笑った時アーチャーも笑った。

「ま、御託はこれぐらいにして、まずは食べてくれ」

「せやな。いただきます！」

後にはやては語る。あの時の衝撃は一生忘れないと。

「う……」

だし巻き卵を口にし、はやては固まった。その反応に僅かだがアーチャーにも緊張が走る。秒針の音だけが静かにリビングに響く。どちらも微動だにしない。ややあって、はやての口が咀嚼を再開する。

心なしかゆっくりに見えるそれを、アーチャーは真剣な眼差しで見つめる。今ならばランサーの神速の突きさえ見切るのではないかと言わんばかりの眼力で。

やがて名残惜しそうに嚙下するはやてを、アーチャーはただ黙って見守る。

「ど……」

「……ど？」

ゴクリと息を呑むアーチャー。想像と違う出だしの言葉にその顔は戸惑いを隠せない。

「どうしてこんなに美味しいんや　　っ!!」

はやての魂の絶叫にアーチャーは小さく安堵し、笑みを浮かべる。

「当然だ。私にかかれば、この程度の味など造作もない」

すまし顔で語るアーチャー。だが、その内心は安堵している事ははやては知らない。その表情からは絶対の自信が溢れているからだ。そんなアーチャーを他所に、はやては既に他の物を食べ始めていた。それも美味しいと目を輝かせながら口へ運ぶはやて。その光景を見て、アーチャーはただ嬉しそうに微笑む。あまりに美味しいため、はやてがアーチャーの分まで食べたいと言った時は、彼もどこか呆れながらも嬉しそうに少し食事を分けたのだから。

そんな食事もあり、はやては久々の心からの満腹感を味わっていた。そんな彼女を見て、密かにアーチャーは微笑ましいものを感じるのだが、それを顔には出さずに食器を持って流しへと向かう。

「ホンマにアーチャーは料理が上手いんやなあ……」

食後のお茶を飲みながら、ぼんやりとははやては呟いた。その視線の先には、手早く食器を洗うアーチャーの姿がある。本当は色々話しながら食べようと思っていたのに、あまりに美味しい食事に会話も忘れて食べ続けてしまった。結局、話は片付けが終わってからになつたの言うまでもない。

（意外とガンコなんやな、アーチャーって。今日は全部自分でやる！　なんて……）

視線の先で洗い物を続けるアーチャーを見つめ、はやては小さく苦笑。そう、手伝いを申し出たはやてにアーチャーはこう断つただ。

気持ち嬉しいが、今日は私に全てやらせてほしい。家事自体久しぶりの事なのでね。勘を取り戻しておきたい。

でも……

その代わり明日からは頼む。

そう笑みと共に言われては、はやても引き下がるを得なかった。仕方ないので自分でお茶を淹れ、こうして寛いでいるのだ。

(なんや、変な感じやな。まるで歳の離れた兄妹や)

ふとそんな事を思い、はやては笑う。そして、もしここに両親がいたらなどと思ってしまう。屈託なく笑う母と微笑む父。二人に手をつながれて歩く自分。それを後ろから呆れながらもついてくるアーチャー。

そんな光景を幻視し、はやては慌てて瞼を強く閉じる。涙がこぼれないように、アーチャーに気付かれないようにと。そんなはやての肩に何かが触れた。

「どうした。埃でも目に入ったか？」

アーチャーの手だった。その問いに無言で首を横に振るはやて。声を出さないのは、それで泣いている事がアーチャーに分かってしまふと思っただからだろう。しかし、それはアーチャーには無駄な事だった。彼はそれだけで何かを悟ると、笑みを浮かべて語り出した。

「はやて、君は確かこう言ったな。私と”家族”になってほしいと
無言で頷くはやて。それを確認しアーチャーは続ける。

「なら、我慢しないでくれ。言いたい事なら言えばいい。やりたい
ならやればいい。ダメならそう言うし、出来るのなら力になるう。
何故なら」

そう言って、アーチャーは一旦言葉を切る。そして、優しく宣言
するよようにこう締め括る。

何故なら、支え合い分かち合うのが家族だから。

まるで、一人で抱え込むなど言っているようなその言葉に、はや
ては涙が止まらなかった。抑えていた声も、もう限界だった。流れ
る涙も拭わず、ただアーチャーの手の温もりを嬉しく思いながら泣
いた。

そんなはやてをアーチャーは黙って見つめた。今必要なのは言葉
ではない。自分以外の温もりなのだ、アーチャーも知っているか
ら。故に黙って自分が傍に居ると告げるように肩へ両手を乗せる。
それをはやてがそっと握り返す。

こうして、二人は”家族”としての第一歩を歩き出す。二人は知
らない。その姿を、一匹の猫が注意深く見つめていた事を……

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

- - - - -

ファーストデイズ四本目。これも加筆修正。

はやてがおマセになった理由は、良くも悪くも保護者がいなかったからだと自分は思っています。

ファーストデイズ（N & amp; S）

突然だが、セイバーは困っていた。最優のサーヴァントとして名高きセイバーが、なす術なく固まっている。そんな状況を作りだしているのはなんと。

「ふみゆう……」

なのはだった。その手はセイバーの服の袖をしっかりと掴んでいる。さすがに鎧姿では寝れないので、それだけを消して青いドレス姿になったのだ。

早朝に目覚めたセイバーだったが、身体を起こそうとしてこの状況に気付いた。振りほどくにも、なのはが強く掴んでいる以上手をすれば起こしかねないと判断したのだが、ずっとこのままという訳にもいかなかった。

（退屈なのですが……何かないでしょうか）

元来体を動かす事が好きなセイバーはこの状況が中々辛い。必要であれば平気だ。自分は王を務めていた事もある。その程度は造作もない。はずなのだが。

ただ何もせず、じっとしているのは耐え難い。本を読もうにも動けないし、あの冬木での日々で知った瞑想をしようにも正座も出来ない。まさに進退窮まったその時、家の中の気配が動くのを感じた。しかもただの気配ではない。それは戦士の類だとセイバーは知っている。

（この家の気配は、なのはを除き三つ……その内二つがソレとは）

その二つの気配は家を後にし、外へと出て行った。遠ざかる気配にセイバーは思う。なのはに聞く事がまた増えた。あの出会いの後、ここが日本である事と、海鳴という町である事をなのはから聞き、時間を考えセイバーが寝る事を勧めたのだ。

そのため、セイバーは高町家の事を何も知らない。と、そこでセイバーはふと思う事があった。それは自分の体に関する事。”世界”と契約する前に近いのだ。まるでマスターによる影響を受けていないように。

(まさか……しかし、なのはとのラインを感じない。どういう事でしょうか?)

真剣な表情で考え込むセイバーだったが、そこへなのはの可愛らしい寝言が聞こえてきた。

「むにゃ……えへへ、お母さ〜ん……」

「ふふつ、仕方ありません。私ももう少し寝ましょう」

可愛らしい寝顔のなのはを見つめ、セイバーは笑みを浮かべるとその目を閉じる。そうやって眠ろうとするセイバーに対して世界は残酷だった。

「さ、朝食の支度をしなきゃ」

なのはの母である桃子が、普段よりも少し早くから食事の支度を開始。その音と匂いに、セイバーはすぐに目を覚ます事となったのだった……

(何があつたんだらう?)

気持ちよく目を覚ましたなのは「待て」を極限までさせられている犬の様な雰囲気を感じているセイバーの顔だった。そんな事を考えていると、なのははそのセイバーと目が合った。

その視線はまるでこの時を待っていたとばかりに鋭い。しかも、どこか殺気さえ感じさせるのだ。そんなものを小学校へ上がったもない少女へ遠慮なくぶつけるセイバー。故に、それを受けてなのはが示す反応を一つしかない。

「あつっ」

「お早うございます、なのは」

怯えるようにたじろくなのは。そんななのはの様子に気付かず、セイバーは挨拶と共に体を起こす。全身から怒気とも呼べる空気を漂わせ、彼女はなのはを見据えた。その目は何故か昨夜よりも真剣だ。何を言われるのだらう。そうなのはが覚悟した時だった。

「朝食の時間です」

「へっ? ……あ、そうだね」

「早く着替え、居間に行きましょう」

「そ………そうだね」

セイバーの有無を言わさない雰囲気に、なのははただ頷くしか出来なかった。家族がセイバーの事を知らない事も忘れるぐらいに、今のなのはは動揺していた。それはセイバーも同様である。昨夜から今まで何も食べておらず、更には食欲をそそる匂いを一時間以上嗅がされていたのだ。そのため、騎士王は食いしん王に変化していた。

急かすようなセイバーの視線を受けながら着替えを終えるなのは、それを確認するやなのはを抱き抱えて部屋を出るセイバー。一分一秒さえ惜しい。そんな思いがその行動に出ていた。

そんな早業に声を出す事も叶わず、なのはは初めてのお姫様抱っこを同性にされるといふ、非常に稀有な体験をした。一陣の風となつてリビングへと降り立つセイバー。なのははあまりの事に呆然としていた。

「着きました」

「あ、ありがとうセイバー」

唯一の救いは、家族がそれぞれ用事があり居なかった事か。恭也と美由希は学校の日直。桃子は太郎の世話と出掛けていて、テーブルには桃子の字で「あたたためて食べてね」と書いてあるメモが一枚と、ラップをかけられたまだほのかに暖かい料理の数々。

それをなのははどこか寂しそうに眺めるが、セイバーは既に今か今かと彼女の言葉を待っている。そんなセイバーに、なのはは犬の姿を再び重ね、笑みを一つ。

「セイバーは座ってて。私のご飯よそうから」

「わかりました。では、大盛りをお願いします」

「にゃはは。あ、ラップ取ってくれるとうれしいな」

「ええ、心得ています」

そんな事を言いながら嬉しそうにラップを外していくセイバーを横目に、なのはは茶碗を取り出す。自分用のものと、父の使っていたものを手にジャーを開け、ご飯をよそう。

それをそわそわしながら待つセイバー。そして、なのははから茶碗を受け取り、彼女が席に着いたのを見計らってその手を合わせる。それになのはどこか意外に感じる。西洋人然としているセイバーが日本の作法を知っている事に意外性を感じたのだ。

(セイバー、日本で暮らした事があるのかな?)

そんな事を思いつつ、なのはは笑顔でセイバーへ視線を向ける。

それにセイバーも頷き、二人は呼吸を合わせて

「いただきます」

そんな風に始まった食事は比較的早く終わりを告げた。元々なのはは分しかご飯がなかった事に加え、セイバーが凄まじい速度で御代わりした事が重なり、ご飯が綺麗になくなったのだ。

空の御釜を見せられた時のセイバーは、まさに青天の霹靂といった顔を浮かべた。なのははそれを見て、乾いた笑いを浮かべるしかなかった。その後は、なのはと二人でセイバーが茶葉を探して淹れた。

それを飲みながら、なのははセイバーに様々な事を話した。家族

の事、家庭の事、自分の事。それをセイバーは黙って聞いた。時に脱線し、思い出話になっても遮る事無く相槌を打ち、言葉に詰まりそうになるのはをただ優しく待ち、全てを話し終えた頃にはお昼近くになっていた。

「……よくわかりました。なのはは、お父上が良くなってくれば、また家族で過ごせるのですね」

「うん。お母さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんも、お父さんが入院してるから、なのはの相手ができないんだと思うの」

どこか悲しそうに答えるなのはに、セイバーは何かを決意すると静かに立ち上がる。

「なのは、その病院に行きましょう」

「え？　なんで？」

突然の申し出になのはは目を瞬かせる。自分が行っても邪魔になるだけ。その考えが脳裏をよぎる。そんななのはの思考を読み取ったのだろう。セイバーは微笑むと、力強く断言した。

私にいい考えがあります。

そのセイバーの言葉を信じて、なのはは家を出た。セイバーを連れ立って、なのはは聖祥大付属病院へと向かう。見舞いには何度か来ていたため道に迷う事はなかったが、セイバーの格好が目立つたせいで道中好奇の目で見られた。

それがなのはには少しだけ恥ずかしかったが、セイバーの方はもっと恥らっていた。しかし、それは彼女達だけの認識。やや赤面し

ながら、俯き加減に歩く姿は道行く者達がどこか微笑ましく思うぐらい可愛かったのだ。

「お姉ちゃんの服借りてくればよかったね」

「ええ。今更ながら後悔しています」

そんな会話をしながら二人は土郎のいる病室へと向かう。なのはセイバーに、道すがらどんな事をするのかと尋ねたのだが、それに彼女は答えなかった。ただ、任せてほしいとだけ告げるのみ。

結局なのはセイバーの考えを知る事が出来ぬまま、こうして病院まで来ていたのだ。やがて二人の足が止まる。そこは土郎の病室そのドアの前に立ち、なのはは恐る恐るノックする。そして意を決して声を掛けた。

「お父さん、お母さん。なのはだよ。入るね」

「えっ？　なのは？」

想像もしない娘の来訪に驚く桃子。その声に若干の罪悪感を感じるも、肩に置かれたセイバーの手に勇気を出してなのははドアを開ける。そこには、こちらを見て驚く両親の姿があった。

生死不明の重症を負いながらも不屈の精神で一命を取り留めた土郎だったが、意識は取り戻したものの未だに退院のメドは立っていない。そんな夫を献身的に支える桃子。それを聞いたセイバーは、なのはにかつてのイリヤスフィールの姿を重ね、ここまで来たのだ。

愛娘と共に現れた金髪の少女に二人は言葉を失うが、セイバーは出来る限りの柔らかな声で自己紹介を始めた。

「初めまして。私はセイバー、なのはの友人です。今日はそのお父上のお見舞いに来ました」

その言葉に再び両親は驚く。家から出た事がないはずのなのはが、年上の、それも外国人の友人を作ったという有り得ない事に。一方のなのはは、セイバーの友人という言葉に喜びを隠せず、満面の笑顔だった。

そんな簡単で疑問の尽きない挨拶だったが、娘の初めての友人が見舞いに来てくれた事に士郎も桃子も笑みを浮かべて歓迎した。そして、セイバーはそんな二人の対応に喜びを見せるも、意を決して表情を変えると真剣な面持ちでこう切り出した。

「そして、その怪我を治しにも」

セイバーはそう言うとその手を掲げて呟く。

「アヴァロン全て遠き理想郷」

次の瞬間、眩い光がセイバーを包み、その手に何かが現れる。それは聖剣の鞘にして万物から身を守るセイバーの切り札。セイバーが死後辿りつくと言われている理想郷の名を冠した癒しの力。

何が起きたのか戸惑う三人。セイバーはそれを気にも留めず、アヴァロンを士郎の体に置く。やがてそれが淡い光を放ち、士郎を輝きが包む。それを見ながら、桃子もなのはも動けずにいた。

その光はとても優しく、暖かな気持ちにさせてくるのだ。そんな光を眺め、ただ黙って見守る二人。そして輝きが消えた先には、何も変わらぬ士郎の姿とアヴァロンがあった。だが、しっかりと目に見えぬ変化は起きていた。

「……痛みが消えた……？」

信じられないとばかりに呟く土郎。そこから恐る恐るゆっくりと起き上がり、自身の体を動かし始めたのだ。それを見てセイバーは笑みを一つ浮かべアヴァロンを回収する。

やがて完全に体が治った事を理解した土郎が桃子に笑顔を向ける。それで全てを理解したのだろう。桃子も両目から涙を浮かべ、その胸に飛び込んだ。

互いに涙を浮かべ抱き合う両親の姿に、なのはも知らず涙を浮かべる。そんななのはにセイバーは優しく寄り添うのだった……

両親に手を繋がれ、嬉しそうに歩くなのは。その後ろには、それを見つめ微笑むセイバーがいる。その後、土郎は担当医を呼び退院したい旨を告げた。無論そんな事が許される訳はないのだが、再検査の結果確かに完治している事が判明し、医師達は不思議に思いながらも土郎たちの懇願と根気についに折れ、退院の運びとなって現在に至る。

「ね、お父さんお母さん。お願いがあるんだけど」

なのはの言葉に土郎は分かっていると云わんばかりに笑みを浮かべる。桃子も同様だ。

「セイバーちゃんの事だろ？」

「勿論いいわよ」

「部屋をどうするかだな」

なのはの言葉を待たずして、二人はそう言って考えを巡らせる。驚いたのはセイバーだ。まさかこんなあっさり結論を出されるとは思っていなかったからだ。

「ま、待ってください！ 貴方達はそれでいいのですか!？」

それは暗に、あんなものを見ても何も聞かないのかと問いかけていた。それを感じたのだろう。士郎は真剣な眼差しでセイバーを見る。

「確かに色々と聞きたい事はある。でも、それは君が話したくなったらで構わない」

「そうよ。不思議な光景だったけど、それが？ 貴方はなのはのためにああしてくれた。だったら、大切なのはあれが何なのかって事じゃなくて」

そこで桃子は表情を一変させて笑顔を見せた。それにセイバーが息を呑む。本当に一瞬だが、彼女は桃子にアイリスフィールを重ねたのだ。そんなセイバーに構わず、桃子はその綺麗な笑みを浮かべたままこう断言した。

セイバーちゃんがなのはのお友達って事よ。

そう言って、桃子はセイバーにウィンク一つ。それに士郎も応じ、微笑みを向ける。なのはも微笑み、セイバーを見つめる。三人の笑

顔にセイバーは一瞬呆気に取られるが、そこにあの親子の姿を幻視して笑みを浮かべ頷いた。

「そうですか。ならば、貴方達の気持ちに感謝を……」

「そんな固い態度はなし。これから一緒に暮らすんだから。私、桃子よ」

「そうだな。俺は土郎。土郎で構わないよ」

二人の雰囲気にはセイバーは面食らうが、土郎の名を聞いた時に軽い驚きを見せると、小さく呟く。

何かの縁なのでしょう……？ よもやまた”シロウ”をアヴァロンが癒すとは……

そんなセイバーに三人は顔を見合わせる。どこか懐かしむような顔に遠い視線。そして、そこはかたない哀しみを湛えた雰囲気、何か気になる事でも言ったのかと思っただからだ。

そんな三人に気付かず、セイバーはそうしてしばらく立ち尽くす。そんな彼女を現実に戻したのは、自分の体が訴える空腹の声だった。恥ずかしがるセイバーに、笑いながらも早くお昼の支度をして、と言いながら歩き出す桃子。それに苦笑しながら同意する土郎となのは。

そうして歩き出す四人の顔に浮かぶは満面の笑み。仲良く歩く親子と、それを眺めて微笑む少女。誰が見ても幸せそのものの光景がそこにはあった……

おまけ

ただ沈黙のみが高町家のリビングを支配していた。呆気に取られる土郎と桃子に苦笑いのなのは。そして、もくもくと食べ続けるセイバー。その勢いは止まる事を知らず、既にご飯は四杯目だったりする。

「モモコ、御代わりを」

「え、ええ」

さらりと告げられた言葉にやや圧倒される桃子。しかし、土郎は違う。もうこれで終わっただろうと思っていたのだ。自慢ではないが、彼もよく食べる方だ。だが、セイバーのそれは常識を超えていた。

まだ食べるのか!?

そんな心境で見つめる土郎にもう開き直ったのか笑みさえ浮かべる桃子。ちなみに、なのはも土郎も既に自分達の食事を終え、セイバーの食事を見守っている。

そして桃子が茶碗を受け取り、ジャーを開けて 動かなくなつた。どうしたのかと思うセイバー。だが残りの二人にはその理由が想像が出来た。

「ごめんなさい。もう、なくなっちゃって……」

なのはとセイバーの初日でした。加筆修正版だと、少し三人がセイバーへあの親子を思い出させました。

これで次はユーノのファーストデイズとなります。

ファーストデイズ（Y & amp ; C）

部落へ戻って大人達から叱られたユーノは、やや肩を落としていた。キャスターはそんな彼を叱った大人達へ怒りを抱くように、眉を吊り上げる。大の大人が少年を口々に責め立てたように見えていたからだ。

実際は彼らの言い分は正しく、ユーノはそれに心から納得していたので彼女の怒りはお門違いのだが、生憎それを気付ける程、彼はまだ余裕がなかった。

「もう、小さい頃なら誰だって抱く冒険心を理解しないなんて！あの連中、少し痛い目を見てもらいましょうか」

「え？ あっ！ や、止めてよキャスター！ 確かに僕が悪いんだから！ ……少しいい気になってたのかもしれない。大人達から多少なりとも信頼され始めたからって、一人で遺跡の中へ足を踏み入れるなんてね」

ユーノは最後に自嘲気味に声を出し、キャスターへ再度告げた。だから、みんなへ何かするのは止めて欲しいと。それにキャスターもユーノがそう言うならと納得し、怒りを静めた。

そして二人はユーノがあてがわれているテントへと向かう。ある意味でスクライアは遊牧民族と同じように暮らす。遺跡発掘や調査などをする世界へ移動しているのだ。とはいえ、彼らが腰を落ち着けている世界はあるので、移動するのは仕事を請け負っている者達だけ。

ユーノもその一人だったため、一人用のテントを用意されていたのだ。しかし、いくら大人用とはいえ子供一人と女性一人で過ごす

には些か狭い。どうしようとユーノが考え出した時だ。

キャスターは事も無げにあっさりと言った。そう、共に寝ればいいと。それにユーノは同意するように頷いた。彼はまだ子供。確かに多少同年代よりは精神面がませているかもしれないが、それでもまだこの頃は年上の女性と寝る事に抵抗はなかった。どこか少し緊張はしていたが。

「じゃ……お、おやすみ、キャスター」

「はい、おやすみなさい」

ユーノの雰囲気から緊張している事を悟り、小さく笑みを浮かべるキャスターは、それを解すように優しく彼を抱きしめた。それに一瞬驚くユーノだったが、すぐに安らぎを感じて目を閉じた。そのまま、遺跡探検による肉体的疲労と説教による精神的疲労からユーノはすぐに眠りに落ちる。

その寝顔を眺め、キャスターは微笑んだ。愛おしいと思えたのだ。言わば男女愛というより姉弟愛。突然の事に懸命に対応し、自身自身に納得や理解を与えたユーノの事を思い出し、彼女は微笑んだ。

（最初は色々驚きばかりでしたが、今度のマスターもアタリみたいですねえ）

あの聖杯戦争で共に戦ったマスターとムーンセルの中で消えたはずの自分。それが何故か記憶を持ったまま、異世界へ召喚された。しかも、何故か仮初めではない肉体を得て。その理由は理解出来ないが、もしかすると最後にやった事が原因かもしれないとキャスターは考えていた。

明確な根拠はない。云わば女の勘だ。しかし、本音を言えば彼女

としてはそんな事はどうでも良かった。ユーノから感じる同族に近い匂い。それが彼女が一番気になっている理由なのだから。

（最初はマスターも化けている種族かと思ったんだけど違うみたいですよ……だとすると一体この親近感は何なんでしょう？）

自分に全てを預けるように眠るユーノの髪を優しく手で梳きながら、キャスターは一人そんな事を考えながら疑問符を浮かべる。そんな彼女もやがて感じた睡魔に身を委ねて目を閉じる。ふと感じるユーノの息遣いにくすぐったくも心地良さを覚え、キャスターは微かに微笑みながら眠りとへ落ちていくのだった……

翌朝、キャスターはユーノと共に遺跡調査の手伝いをしていた。

周囲にはキャスターをユーノの使い魔として通す事にした。キャスターの獣耳がそれを納得させる要因となった事もあって、それに疑いを持つ者はいなかったのだ。

妖術を使って照明代わりをしたり、或いは邪魔な物を燃やしたりと魔法と同じ事やっつてのけるキャスターに、周囲は思わぬ戦力が出来たと喜んだ。ユーノは、キャスターが褒められる度に自分の使い魔との部分を強調する事に苦笑しながらも、どこか嬉しく思っていた。

（キャスターは僕がいるから自分もいるって言いたいんだ。つまり、僕の価値を高めたいんだろっな）

昨夜のユーノの失態を補うようにキャスターは働いた。時に若者

達から向けられる視線に鋭い睨みを返す事などはあったが、概ね平和的に時間は過ぎていった。

そして、一旦休憩となった昼食の時間。キャスターは何を思ったのか、自分が腕を振るうと言い出したのだ。それにユーノは驚くも周囲は喜びを前面に出した表情でそれを応援。ユーノはキャスターが結構働いていたため、そこまでしなくても思っただけで止めようとしたのだが……

マスターに私の手料理を食べてもらいたいです。

そう女神のような笑みで言われてしまえば、それも出来るはずがない。結局ユーノはキャスターの言葉に甘え、他の者達と料理を待つ事になった。やがて出て来た料理は、ユーノ達が見た事もない物ばかりだった。

それもそのはず。キャスターが作ったのは和食だったのだから。とはいえ、食材が違うため比較的似ている物で再現しただけ。味なども調味料などが足りない上に色々と異なるために本来とは違う物となったが、キャスターとしては及第点の出来だった。

「さ、マスター。遠慮なく召し上がれ」

「うん、頂くね」

我先にと手を出す周囲を他所に、ちゃっかりユーノの分だけ別にしてあるところにキャスターの心遣いを感じ、彼は笑顔でそれを食べる。その未知の味に驚きながらもユーノは心からキャスターへ告げた。

キャスター、これ美味しいよっ！

ふふん、当然です！ さ、まだありますからどんどん食べてくださいね。

ユーノの言葉に満面の笑みで胸を張るキャスター。しかし、それはやはりどこか母性を感じさせるもの。ユーノが夢中で食べる様を眺め、ニコニコと微笑んでいるのはまさしく姉か母のようだ。

今まで彼女は愛する異性は出来ても、子や弟や妹などは出来なかった。だからなのだろう。ユーノがどこかそういう風に見えるのだ。自分かもし母になったのなら、もし姉になったのならこんな気持ちなのだろうか。そう思いながらキャスターはユーノを優しく見つめた。

(いいですね、やっぱり男の子はこうじゃないと。でも、どこか調子が出ませんね。やっぱりもう少し年齢が上にならないと本領発揮とはいかないなあ……)

(キャスターって料理が出来るんだ。しかも、食べた事のない物ばかりだし……どこの出身なんだろう……？ あ、そういえばキャスターは食べないのかな？)

ユーノは口に広がる旨味に表情を緩めながらも、ふと気付いた事に意識を向けた。そう、作った張本人であるキャスター自身は一度も料理へ口をつけていないのだ。ユーノはその疑問を解消するために、自分を眺め微笑むキャスターへ視線を向けた。

「ね、キャスターは食べないの？」

「え？ あー、いいんですよ。私はあまりお腹空いてませんから」

ユーノの問いかけに小さくしまったと思いつつも、キャスター

は笑顔でそう返した。だが、それをそのまま信じる程ユーノは鈍くなかった。キャスターが嘘を吐いていると察し、どうすればいいかと考え始めたのだ。

素直に言っても食べてくれないかもしれないと思い、一人ユーノは悩む。何故なら、ユーノの分以外の料理は既に食べ尽くされていて残っていないかったのだ。つまり自分の分しか残っていない。だからユーノは考えたのだ。キャスターが食事をしてくれる言葉を。

(どうしよう？ どうすればキャスターが僕の分を食べてくれるかな？)

(これは私に食べさせようとしてますね。んもう！ 嬉し過ぎますよ、マスター！ で・も……優しいのはいいですけど、私に気を遣うなんて十年早いです)

互いに相手の気持ちに気付いている二人。やがてユーノが何かを思いついたのか、一瞬だけ表情を変えた。それをキャスターは見逃さない。それでも、気付かぬ振りをしてユーノの出方を待った。そこに彼女なりの優しさがある。

「あのさ、キャスター」

「何です？」

「僕、もうお腹一杯なんだ。でも、残すのは勿体無いから……食べ残しで悪いんだけど」

「私にそれを食べて欲しい。そう言っんですね、マスターは」

「うん。ごめんね」

どこかからかうような笑みを見せるキャスターに違和感を覚えながらも、ユーノはそう言っただけにしていた器と匙を手渡した。それをしっかりと受け取り、キャスターは嬉しそうにこう告げた。

「いやん、マスターったら幼いのに大胆ですねえ。こゝれ、間接キスですよ？」

えっ？ …… あっ！？

クスクスと笑うキャスターと指摘を理解して慌てるユーノ。無論周囲は、キャスターが子供故に純情なユーノをからかっていると理解している。なので、どこか微笑ましく思いながらも「もう嫁さんをつまえたか」や「大したもんだ」とからかうように囁き立てた。それにアタフタしながらユーノは顔を真っ赤にして違うと言っているが、今度はそれにキャスターが悲しそうに着物の袖で顔を隠し、泣き真似をするのを見てそちらのフォローに入る。

そんな賑やかでどこか微笑ましい昼食風景だった……

日も暮れ、テントに戻ったユーノ達。調査は無事完了し、明日には撤収となったためどこかユーノの顔は明るい。キャスターはそんな彼を不思議に思い、その理由を尋ねた。それに返ってきたのは、予想だにしない言葉。

戻ったら、みんなにキャスターの事を紹介出来るからね。

自分の家族として周囲に認識してもらいたい。ユーノはそう続けて締め括った。それにキャスターは少し呆気に取られるも、ゆっくと表情を緩めて笑みを浮かべた。

嬉しかったのだ。自分を使い魔ではなく家族と捉えてくれている事が。周囲に使い魔と告げるが、ユーノはそれだけで終わるつもりはないと理解してキャスターは笑みを見せる。

一方、ユーノはユーノで分かった事がある。たった一日だが、彼なりにキャスターの事を理解したのだ。自分をどこからかう事が多いが、心の底では大事に思ってくれている事。軽いノリに見えるが、ちゃんと深い思慮と鋭い観察眼を持っている事を。

「あ、そうだ。キャスターはどこ出身なの？ 今日の料理は見た事も食べた事もなかったから」

「えっと……こちらにあるか分かりませんが日本という島国です」

「にほん？ 島国かあ……機会があつたら調べてみるね」

「ホントですか？ じゃ、見つかったら本当の和食を作りますね。調味料とか私の知る物に出来ますから」

キャスターの言葉にユーノは不思議そうな表情を浮かべた。本当の和食との意味を理解出来なかったのだ。そこでキャスターが語る料理話。それを面白く思いながら耳を傾けるユーノ。

そこからやがて話は変わり、キャスターが話すのは昨夜出来なかったサーヴァントに関する詳しい話。宝具について話し出したのだ。その部分を聞いてユーノが抱いた感想は、宝具とはロストロギアではないかとの気持ちだった。

なので、キャスターの話が切れた瞬間を狙って、ユーノはロストロギアの事を教えた。それを聞いたキャスターは微かに驚きを示すも成程と納得する。何せ、自分があの聖杯戦争で戦った相手が有していた宝具は、どれもこれも恐ろしい物ばかりだったのだから。

（思い出だけでも、どうやっているのか謎の物ばかりでしたからねえ。あれを失われた技術で作られた物と言うのかも）

意外とロストロギアとはこの世界の宝具ではないだろうか。そんな事を考えつつ、キャスターはふと思う事があった。それは、もしかするとこの世界が自分の本来いる世界の平行世界なのではないかという事だ。

魔術が進化或いは変化し魔法となり、本当の”魔法”は本当に失われてしまった。それに伴い、魔術回路もリンカーコアへ変質しているのでは。そう予測を立てたのだ。

しかし、それはすぐに否定した。ユーノが教えてくれた使い魔の事実。それはキャスターの知るこれとはまったく異なっていたからだ。であれば、平行世界ではなく完全な異世界。そこでキャスターが導き出した答えは……

（まさか……私はマスターじゃなくて”世界”に呼ばれた？）

受肉している事。有り得ない世界にいる事。そして、運良く面倒を見てくれる相手に巡り会えた事。それらが仕組まれていたとすれば辻褄が合う。キャスターはそう冷静に考えながらも、それを受け入れる事はしなかった。

それだとしても、自分がマスターと思う相手は目の前の少年だ。

そう強く感じているからだ。何せ彼女はあの聖杯戦争で逆らつてはいけない相手にさえ抗い、マスターのために勝利したのだから。

それを思い出せば今更と言える。そう、常にマスターのために戦う。しかも、今回のマスターは自分を家族とまで言ってくれたのだから。その弟のような少年を微笑ましく見つめ、キヤスターは静かに心の中で呟く。

この出会いをありがとうございます、マスター。そして、出会ってくれてありがとう、マスター。

かつての主人と今の主人へ感謝を告げるキヤスター。それに当然気付かず、ユーノはキヤスターへ熱弁を振るっていた。今は管理世界と管理外世界について話している。それに相槌を打ちながら疑問をぶつけていくキヤスター。それにユーノは知識を総動員して精一杯応えようとした。

「じゃ、管理局って言う組織を知っているのが管理世界なんですか？」

「簡単に言えばそんな感じだったかな？ でも、管理外だからって管理局を知らないとは限らないんだ。中には介入を拒否してるだけの世界もあるって聞いた」

「あらあら、意外と複雑ですねえ。そうだ！ マスターは管理局には入らないんですか？」

「え？ 考えた事も無かったよ。正直、僕は魔導師よりも考古学者みたいな仕事が向いてると思うし」

そこでユーノがキヤスターに頼んだのは、色々な魔術を教えて欲

ファーストデイズ（K & amp ; A）

「……以上が僕と彼女の出会いです」

話し終えたクロノは静かに席へ着く。ここはアースラ内の艦長室。そこでクロノは、リンディとエイミィにアルクエイドの詳しい説明をしていた。さすがに色々と問題がある内容だったが、それでもクロノの仮定をアルクエイドが肯定したり或いは補足する事で理解を得る事が出来た。

リンディはやや困惑し、エイミィはどこか嬉しそうな表情を浮かべていた。当然リンディは局員として考え、アルクエイドの話を重く見ての顔。エイミィは局員としてよりも個人としての考えからの顔だ。

（次元漂流者……そう上に報告するしかないわね。歴史に名を残した故人を使い魔と出来るシステムなんて、それを知れば変な事に利用する者達が現れるかもしれない。とにかく、それも含めて彼女の話は秘密にするよりないわ）

（クロノ君を助けてくれた、かぁ。しかも魔法も無しで。さっき少し話した感じは気さくな人だったし、あたしとしては楽しくやっていきたいな）

共通点は二人してアルクエイドを見ている事。当の本人は艦長室の装飾を面白そうに眺めている。クロノはそんな彼女に視線を送るも、どこか呆れた顔をしていた。そう、一度もアルクエイドは動きを止めた事がないのだ。

ずっと動き回り、クロノが説明をしている間もそれを補足しながら室内を歩き回り、視線を常に動かしていた。彼女にとってアース

ラ自体も珍しければ、艦長室の妙な和風染みた装飾の数々も楽しかったのだ。

あの街での日々。そこでも色々な景色や物を見てきた彼女だったが、今回は異世界ときている。見た事のある物も何か違うかもしれない。そんな風に思い、彼女は心躍らせながらこの場にいたのだ。

「ね、クロノ。仮にもマスターになったんだから、私の面倒はちゃんと見てね」

「さつきも言ったが、僕は善処するだけだ。大体この世界への滞在を望んだのは君自身じゃないか」

そう、あの時アルクエイドがクロノへ頼んだ事はそういう事。彼女は異世界に興味を持ち、そこで飽きるまで暮らしたいと思ったのだ。それにもうサーヴァントではなくなった自分を召喚したような形になったクロノにも興味がある。

更に彼女の勘が告げているのだ。ここに残れば面白い事に出会えると。実を言えば、アルクエイドはその気になれば自分が本来いた世界へ戻れる。彼女は”世界”のバックアップを受けている。その感覚を辿れば行けない事はないのだ。

(でも……今は無理に行く必要ないかな？ 何となくまだここにいた方が良さそうだし)

席に戻り、リンデイが用意してくれた緑茶を手にして、アルクエイドはそれを見つめて不思議そうに小首を傾げた。かつて彼女が見た緑茶と色が違うのだ。それは当然だ。それには普通の緑茶に砂糖とミルクが加えられているのだから。

疑問符を浮かべるアルクエイドへクロノは無言。エイミイもそれ

を楽しそうに眺めている。リンディは一人不思議そうな顔をしていた。何故なら、この緑茶は彼女が考案した物なのだ。

「どうしたの？」

「私が前見たのと違うみたいだけど、これが緑茶？」

「艦長の特製なんだ。一度飲んでみなよ」

アルクエイドの言葉に、エイミイがやや悪戯っぽく笑みを浮かべてそう勧めた。それにクロノが若干鋭い視線を送る。母親の好みを否定する気はないが、それを人に押し付けるつもりもなかったからだ。

「アルクエイド、別に飲まなくてもいい。これはもてなしなんだ」

「うーん……でも折角用意してもらったし、ちょっと飲んでみるね」

その瞬間、妙な緊張感が艦長室に漂う。クロノとエイミイがどこか窺うように見つめ、リンディはどこか興味深そうにアルクエイドを眺めていた。やがてアルクエイドが手にした緑茶に口をつける。その喉が確かに動き、緑茶を嚥下していく。

それはクロノの予想を超えて長く続いた。そして、アルクエイドは手にした湯のみを口から離し、小さく息を吐いた。その表情はあまり普段と変化していない。それにクロノとエイミイは意外そうな表情を浮かべ、リンディはその第一声を待った。

結構独特な味だね。嫌いじゃないよ。

その瞬間リンディが嬉しそうに「そう」と声を出した。エイミイ

はアルクエイドへどこか感心するような眼差しを向け、クロノはその言葉が社交辞令の類ではないと察し、小さく落胆のため息を吐いた。

リンデイが好む緑茶は正直砂糖が多すぎる。あれを少量にすればクロノとて構わないと思う。なのでエイミイが作る際はリンデイ用と他者用に作り分けるのだが、本人が作る場合はそうもいかない。

(母さんが作ったにも関わらず、アルクエイドは平然としているなんてな。彼女も母さんと同じぐらいの甘党か?)

そう思いどこか疲れた顔をするクロノ。リンデイはアルクエイドの評価に笑顔だ。エイミイはそんな彼女に合わせて笑みを返している。それを見てどこか笑うクロノだったが、そんな彼へアルクエイドが静かに近付いて耳打ちする。

「あれ、凄いね。私、嫌いじゃないけど好きにはなれないよって…
…何でホツとしてるの?」

「君があれに関してまだ許容出来る答えを出したからだ」

そんな二人は共に視線を前へ向ける。そこには、楽しげにあの緑茶をもう一杯作ろうとするリンデイと、それをやや苦笑しながら止めようとするエイミイがいたのだった……

あれから場所を変えて、クロノはアルクエイドと共に自室へ来ていた。正直あのまま艦長室で続けたかったのだが、リンデイは艦長

として色々と仕事があるため一旦中断となったのだ。エイミィはクロノの代わりに今回の報告書を作成している。

クロノもエイミィの手伝いをしようとしたのだが、彼女がアルクエイドともう少し詳しい話をしておいた方がいいと断ったのだ。年上の頼れる補佐官の言葉に甘える形で、クロノはこうしてアルクエイドと二人で向き合って座っているという訳だった。

「……アルクエイド。君の話有疑问じゃないんだが、確かめておきたい事がある」

「何？」

「君は本当に地球人なのか？」

クロノはその質問を執務官としてではなく個人として尋ねた。考えようによっては怒りを買ってもおかしくない質問。それにアルクエイドは特に何かを思う事もなく、顔を上に向けて顎に指を当てて考え出す。

「そうだなあ……地球人と言えば地球人だよ。でも、普通の人間じゃないから」

「……差し支えなければ、それはどういう意味か教えてくれないか？」

「クロノ達の世界にいるか分からないけど、私ね、吸血鬼なんだ」

アルクエイドはそう軽い口調で告げる。その内容の重さにそぐわぬ声。それにクロノは少し呆気にとられるも、驚く事もなく息を吐いた。アルクエイドが常人ではない事を彼はどこかで察していたの

だ。吸血鬼との言葉の意味も分からぬではなかった。

かつてこの次元世界にそういう種族がいたとの言い伝えもあるのだ。故に彼は大きな驚きを浮かべる事なく、冷静にアルクエイドへ対処する事にした。こういう異種族間の揉め事は、まず無条件に相手を差別したり恐怖したりする事から始まると理解しているからだ。

「では君は人を襲うのか？」

「それは起こさないようにしてる。心配しないでいいよ」

そこからアルクエイドが告げる自分の話。本来ならあまり話したくない事だが、ここが異世界である事もあり彼女は比較的あっさりと話していた。ただ、クロノが真面目な性格である事を理解しているため、嘘は吐かないようにしながら、あまりいい気分にならない部分を話す事はしなかったが。

クロノはアルクエイドの話を黙って聞き続けた。判断するのは最後まで話を聞いてからだ、そう考えているのだ。確かに色々と思う事はある。それでも、彼は最後まで何も言わずにアルクエイドの話へ耳を傾けた。

そんな彼の姿にアルクエイドは少し嬉しそうに笑みを浮かべ、最後まで話し切った。クロノの姿勢に好感を抱いたのと、真摯な気持ちを感じたために。

「そうか……アルクエイド、君の話はよく分かった。色々と聞いた事もあるが、要は、君は自分の力のほとんどを使い、血を吸いたいという衝動を抑えているんだな？」

「そう。そのおかげで全力を出す事は出来ないんだけどね」

「それでもあの動きか。本当に君は凄いな」

クロノは心から呆れるようにそう告げた。そんな彼の反応にアルクエイドは小さく驚き、表情を無表情にして問いかけた。

……ね、怖くないの？

そこには、微かな不安があった。彼女が力の半分以上を使って抑えている吸血衝動。それは、裏を返せばそれだけしないと抑える事が難しいという事。それを考えれば、いつそれを抑え切れなくなってもおかしくない。

クロノはそれを分からないような相手ではない。そうアルクエイドも思っていた。だからこそ聞いたのだ。怖くないのかと。その言葉にクロノは正直な気持ちを返した。

確かに怖いさ。

その言葉にアルクエイドは驚いた。それはクロノの目に言葉とは違って恐怖が見えなかったからだ。まだ何か言いたい事がある。そう思ってアルクエイドはクロノの言葉を待った。それをクロノも感じ、その凜々しい表情のまま言葉を続けた。

「でも、それを今も君は見事に抑えている。それに、君はこの事実を隠す事も出来たはずだ。でも、しなかった。なら僕はそれに応えたい」

「クロノ……」

「とはいえ、今の僕に出来るのは君の事を信じるだけだろう。まあ、たった一日だが君がどうという人間かは……僕なりに分かったつもり

だ。だから君を信じるよ、アルクエイド」

そう言っただけでクロノはアルクエイドへ手を差し出した。それを見てアルクエイドは呆気に取られるも、ゆっくりと表情を笑顔へ変えてその手を握り返す。クロノが自分を指して”人間”と言った事に気付いたのだ。だが、その顔が何かを理解し微笑みに変わる。

あはは。でも手が震えてるよ、クロノ。

……仕方ないだろう。僕だって怖いものは怖いんだ。

その答えに心から楽しそうに笑うアルクエイド。それに恥ずかしそうな表情を返すクロノを見て、余計笑みを深めてアルクエイドは笑う。そんな彼女を見て、クロノもやがてつられたように小さく笑い出す。部屋中に響く二つの笑い声。それを聞きながらクロノは思う。

誰が何と言おうとアルクエイドは大丈夫だと。その証拠にもう手の震えは止まっている。この手に感じる温もりが教えているのだ。アルクエイドは決して人を襲わないと。その気持ちを強く込めるようにクロノは手を握り直す。それからクロノの気持ちを感じて、アルクエイドも手を握り直す。

しっかりと繋がれた手と手。そこには明確な何かが生まれていた。単なる握手ではない意味。それを互いに感じながらも、それを口に出す事はない。そんな穏やかで温かな雰囲気にも包まれる室内。すると、部屋のドアが突然開いてエイミーが顔を出した。

「あれえ？ 何か楽しそうだね。と言うか、クロノ君が笑ってるの結構レアかも」

「あ、エイミー」

「っ？！……エイミー、何か用か？」

クロノの慌てる反応に同じような笑みを見せるアルクエイドとエイミー。それでもすぐにエイミーは表情をいつもの顔へ戻すと、自分が作成した報告書のチェックをクロノへ頼んだ。それに返事を返し、クロノは素早く部屋を出て行く。

それが照れ隠しにしか見えず、苦笑するアルクエイドとエイミー。それを感じているのだろうが、それでもクロノの歩みは速いままだ。その遠ざかる背中を見つめ、アルクエイドはエイミーへ視線を向けて問い掛ける。

「いつもあんな感じ？」

「うん。普段はもう少し大人っぽくを意識してるかな。今は……珍しく素に近いね」

「そっか」

「うん。あたしはああいうクロノ君が結構好きなんだけど……あまり見せてくれないからさ」

どこことなく寂しそうに笑うエイミーを見て、アルクエイドはその理由が気になり尋ね始める。それにエイミーが訓練校時代の思い出を話し出した。それをキツカケに二人は仲を深め始める。

話している内に、互いが似た者同士と気付いて意気投合するアルクエイドとエイミー。クロノへの評価がまったく同じだった事もあってか、その表情がどんどん輝いていく。

とある一日（S&a m p・R）

「ライダーは聞いた？」

突然の忍の言葉に、紅茶を注ぐライダーの手が止まる。時刻は午前十時になるかならないか。日差しは柔らかく、風も春らしく爽やかに吹き抜けていた。そんな中、庭でのちよつとしたお茶の時間の世話を忍に頼まれたライダーは、見事な手つきで給仕の仕事をこなしていた。

「何をですか？」

「さすがが喧嘩の仲裁したって事」

忍の意外そうな表情にライダーは笑みを浮かべて応じる。そう、ライダーは知っていた。さすがが喧嘩を止めた事も、それがキッカで友人を作った事も。昨夜、寝る前の他愛のない雑談の際、本人から聞かされたのだ。

だからライダーは詳しく知らないであろう忍に、取っておきの情報を教える事にした。その声に嬉しさを滲ませて。

「ええ。それに友人が出来た事も」

「へえ、そうなんだ」

「アリスとナノハと言っらしいですよ」

その顛末を話していた時、さすがはこの上なく上機嫌だった。ライダーに何度も何度も語っては、嬉しそうに名前を呟いていたから。

そして、今日はその一人であるアリサの家へ遊びに行っている。

出掛ける際のすずかの笑顔は、ライダーにも分かる程に輝いていたのだ。それを見ていた忍もライダーの話に合点がいったとばかりに笑みを浮かべると、手にした本を閉じる。そして残っていた紅茶を飲み干して空を仰ぐ。

「そっか。今頃は仲良くしてるかしら？」

「スズカなら大丈夫でしょう」

少しすずかの性格を考えたのか、不安そうな顔をする忍。そんな彼女の言葉にライダーが即答してみせる。それに忍は苦笑しながら、それもそっかと呟くのだった……

帰宅したすずかは、夕食後にやや興奮気味にバニングス邸での事を話した。自宅に負けぬような邸宅だった事、SPと呼ばれる人達がいた事、洋風の庭なのに、作務衣と呼ばれる和服を着た小次郎と言う専属庭師がいた事等、話題は尽きなかった。

ライダー達はそれを嬉しそうに聞き、すずかの話に相槌を打つ。アリサが習っているバイオリンに興味を覚えた事も告げ、それを自分も習いたいとすずかが言い出すと、忍達は揃って軽い驚きを見せる。しかし、忍はすぐにそれを許可した。

自主的にすずかが何かをやりたいと言い出す事は珍しいと思ったからだ。その姉の快諾に笑みを浮かべて礼を述べるすずか。そして最終的に今度は自宅に呼びたいと言うすずかにノエル達が笑みを見

せる。

「では、屋敷の大掃除をしなければいけませんね」

「後は庭の手入れも重点的に、ですね」

「ファリンはあまり張り切らぬ方がいいと思いますよ」

かえってドジを踏みますから。そう断言するライダーにファリン以外が笑う。言われたファリンはやや拗ねた表情でライダーを睨んだ。それを見て忍が放った「子供みたい」との一言で、ファリンの怒りの矛先が変わると同時に叫んだ。

「忍お嬢様あ！」

怒り心頭のファリンに忍も謝るが笑ってはいはしようがない。ノエルがそれを見かねて嗜めるが、そんな彼女もどこかも楽しそうだ。ライダーはそんな光景を眺め、視線をすずかへ移す。

すずかも笑みを浮かべ、三人を見つめている。だが、ライダーの視線に気付いたのか、視線を彼女へと移した。

「どうかした？」

「いえ、賑やかだと思ひまして……」

すずかの問いかけにどこか懐かしそうに答えるライダー。衛宮邸の時間を思い出したのだ。その微笑むような声にすずかは笑顔で答えた。

ライダーが来てからだよ？　こんなに賑やかなのは。

そのすずかの言葉が意外だったのか、ライダーは驚いた顔で彼女を見つめた。それを微笑ましく思い、すずかは笑みを返す。ライダーが来てからというものの、月村家には笑いが絶えない。

確かに以前からフアリンと忍がムードメーカーだったが、ライダーが来て以来、それが余計に際立っていた。ライダーの的確な意見や鋭い指摘に、二人がリアクションを返すからだ。それにノエルやすずかまで笑い、それが更なる笑いに繋がる。

今もフアリンに詰め寄られて忍が困っているが、いつもなら仲裁役のノエルも、どこか楽しそうにそれに参加している。そんなやりとりを横目で見ながらすずかは告げる。

「本当にライダーが来てくれてよかった」

ライダーがもし居なければ、すずかはアリサやなのはと友達になれなかった。その友人を得るキツカケ。それは、クラスの一人がアリサの髪の色をからかった事に端を発したのだから……

クラスの自己紹介が終わり、担任の教師がいなくなった途端、一人の少年がアリサの髪を指差し、外人色と言い出した。無論、アリサはそれを無視していたが、あまりにもしつこいためについて彼女も我慢の限度を超えた。

その少年へ無言で近付き、勢い良く蹴り飛ばしたのだ。たまらず後ろへ倒れる少年に追い討ちをかけるようにアリサは言った。その顔は怒りを宿すように赤くなっていた。

「男のクセにしつこい！ 自分が日系色だからって、外人外人うるさいのよ……！」

蹴られたシヨックで少年は呆然としていたが、自分が馬鹿にされた事は理解できたらしい。その言葉に顔を真っ赤にしてアリサへ掴みかかるうとしたのだ。

だが、そんな少年を止めた者がいた。すずかである。彼女はアリサを馬鹿にするような少年の言葉を止めようか止めまいか迷っていた。だが、その踏ん切りをつける前に現在の状況となってしまうのだ。そのため、彼女はいち早く動いた。自分の勇気の無さを反省して。

「ダメっ！ 気持ちは分かるけど、手を出したらいけないよ」

「そうだよ！ それに、先に人を怒らせたのは君なんだから」

少年を諭すすずかに同調する声がある。それがなのはだった。なのははすずかの前に立つと少年にこう言った。

「自分がされたり言われたりして嫌な事は、人にもしちやいけないの。でも……」

そこまで告げ、なのははアリサへ振り向く。その視線にアリサは僅かに怯む。なのはは怒っていたからだ。

「嫌なら嫌って言わなきゃなの。言葉にしないと、何も伝わらないんだよ」

そうはつきりと言い切るなのははアリサは言葉がなかった。そし

て何かを考えた後、バツが悪そうに少年へ顔を向ける。彼女が嫌う子供っぽさ。それが今の自分の行動そのものだったと理解したのだ。故に大人らしい対応を心がけ、素直に謝る事にした。

「……アタシが悪かったわ。その、蹴って……ごめんなさい」

それを聞いて、すずかもなのはも笑みを浮かべる。少年も毒気を抜かれたのか、それに謝罪で応じた。そんな事があり、その後すずかは、なのはとアリサから少年を抑えた事を感じられたのだ。

それにすずかは照れながらも、お返しとばかりになのはとアリサを誉めた。自分の意見をはっきり告げたなのはと、素直に間違いを認めて謝ったアリサを。そんなやりとりを経て、三人はそれぞれの名前を再確認し、友人となったのだ……

（あの時、私が動けたのはライダーと出会っていたから。自分を動かす勇氣。それをもらったから）

すずかは思う。あの時、少年を抑えなければ二人と友達になる事はなかったと。そして、あの時そう出来たのは、ライダーから勇氣を貰ったから。何かを待つのではなく、自分で何かを起こす。

そのための勇氣をライダーからもらったから、自分は動く事が出来たのだとすずかは思っていた。そこにすずかを現実へ引き戻す声が響いた。忍の絶るような声だ。

「ねえライダー、ちょっと助けてよ！」

さすがに旗色が悪いと判断したのか、忍がライダーに助けを求めたのだ。それにライダーは口の端を歪めてこう言った。

「欲しい本があるのですが……」

それを買ってくれるなら助けると言わんばかりの声であった。ライダーは月村家で養われているが、メイドとして働いている扱いにもなっている。そのため週に一度僅かだがお金を貰い、書店まで本を買いに行っているのだ。

そのジャンルの雑多さにはさすがと忍も驚いたものだったが、ライダーとしては以前からそうだったために特に何か言う事は無かった。そして、今彼女が欲しがっているのは女性向けのファッション誌を始めとした三冊。なので、渡りに船とばかりにライダーはそう告げたのだ。

「い、いいわ。来週は二倍出す。だから　っ！」

助けて。その言葉を言う前にライダーがファリンを取り押さえていた。正確には、二倍ののに音辺りで動き出していた。そのあまりの素早さに、助けを求めた忍だけでなく、ノエルやファリンも言葉がなかった。

驚く周囲を他所に、ライダーはファリンの耳へ口を寄せると静かに囁きだす。それはどこか妖艶な光景だった。見ている忍が思わず顔を赤めてしまうほどに。

「ファリン、それぐらいでいいでしょう……」

「ら、ライダーお姉様……あの、息が……」

「あまりシノブを困らせてはいけません。もう十分反省しています

……」

「は、はい……」

「では 後片付けは私とノエルがやりますので、ファリンはお茶を淹れてください」

ファリンが頷いたのを受けて、ライダーは妖艶な雰囲気を一変させてそう言い放ち、食器を手に厨房へと消える。後に残されたファリンは、顔を真っ赤にして床に座り込んでいた。

ノエルもそんなライダーを追うように食器を手にして動き出し、すずかと忍は呆然とそれを眺める。そんな呆気に取りられている忍へ、ライダーは厨房から舞い戻ると、さらりと告げる。

「約束をお忘れなく」

それだけ告げ、再び厨房へと消えるライダー。それに再び呆然なつて見送るすずかと忍。ファリンは小さく「脈拍が…… 血圧が……」と呟いているが、その顔がどこか嬉しそうに見えるのはきつと気のせいだろう。

そんなファリンが再起動したのは、ライダー達が食器を洗い終わった後だった。ライダーからお茶の支度はどうしたのかと言われるまで、ファリンはその場で放心していたのだから……

ファリンの淹れた紅茶を飲みながら、再び穏やかな雰囲気にかまれる月村家。それぞれの手には本があり、忍は工学関係、すずかは

推理小説、ライダーが礼儀作法、ノエルは心理学、ファリンがドジをなくす百の方法であった。

元々月村姉妹は読書家だった。それにライダーが加わり、読書の輪が広がったのだ。忍はライダーへ、ライダーはすずかへ、すずかが忍へと本を薦めあう事が盛んになった結果、月村家全体が読書家になっていった。

ノエルはライダーのように感情溢れるヒトになるために、ファリンは初めは三人の話についていくためだったが、最近は思うところがあったのか、自分を変えるなどの自己改善系の本を読んでいる。

「ね、ライダーはどんなジャンルが好きなの？」

「ジャンル、ですか……？」

忍の問いかけでライダーは困ったように表情を曇らせる。ライダーにとって好きなのは読書そのものであり、ジャンルにこだわり等ないのだ。しかし、最近特に読み漁っているものを思い出し、ライダーはそれを答える事にした。

「本屋さんがオススメするものです」

「……は？」「……」

ライダーの返答に忍だけではなく、何気なく聞いていたすずか達も声を出した。そんな四人の反応に不思議そうな顔を返し、ライダーは自分の言った言葉が正しく伝わっていないのだろうかと思っただのか、更なる説明を告げた。

「本のプロが読んだ方がいい、と宣伝されているものです」

そのライダーの返しに忍は言葉を失う。それは聞いていたはずかとファリンも同じだ。戸惑う三人にライダーはどうして分かってもらえないのかと言わんばかりの顔をする。

そこへその雰囲気から脱したノエルがピシヤリと言った。

「ライダー、それはジャンルではなくコーナー名です」

そのノエルの的確な突っ込みに全員が頷く。ライダーは、そんなノエルの言葉に「そこまで大差ないと思いますが」と不思議顔。だが、ノエルが首でそれを否定すると、忍とファリンがそれを援護するように頷いた。

そんなライダーとノエルを見つめ、すずかはある事を思い出していた。よく二人が互いに薦めあうのが、部下のうまい操縦法等の本である事を。そして、それを見てファリンが軽く凹んでいた事も。

「では、ノエルは何なのですか？」

「私は人間心理です」

「あ、私は恋愛小説です」

「私は……ま、ファリンと同じでいいわ」

「私はファンタジーかなあ」

ノエルの言葉を皮切りに、次々と好きなジャンルを告げていく月村家。それを聞き、ライダーは何やら悩みながら問いかける。

「私も……何か絞った方がいいのでしょうか」

「いいんじゃない？ 別になくても」

あっけらかんと忍はそう告げた。彼女としては軽い雑談として聞いたのであって、ここまで大袈裟に捉えられるとは考えてなかったのだ。だからこそ、忍はライダーに微笑みかける。

「だってライダーは、読書は好きなんですよ？」

「……はい」

「なら、それでいいの。無理に話合わせようとしなくて、ないならないって言うてくれればそれでいいから」

こんなの他愛のない家族の会話よ。そう告げた忍に、ノエルとフアリンも頷く。すずかもライダーに笑って頷く。彼らにしてみれば、これはほんの話題提供のようなものだ。それをキツカケに互いの事をもっと知れたらいいな。その程度の事なのだから。

だが、その忍の言い方にライダーは心に迫るものを感じた。この月村家に来て一月弱。まだそれだけしか経っていないのに、自分を家族と言い切る忍達に言い様のない感情を抱いたのだ。

（これが感動と言うのですか……？ ああ、涙が溢れそうとはこんな気持ちなのですね）

最後に泣いたのはいつだったか。そんな事を思いながら、ライダーは微笑む。その目に、微かに光るモノを浮かべて……

とある一日（A & a m p ; A）

作務衣を着た長髪の男が洋風の庭で作業をしている。その横にアリサが寄り添うように立っていた。男の名は小次郎。なぜ作務衣を着ているかというと、あの格好は流石に目立つのでアリサがスーツと共に普段着として用意したのだ。

実はここだけの話、作務衣姿の小次郎をアリサは気に入っている。本人としても動き易いので好んで着ているので、スーツはおそらくこのままクローゼットの中で眠り続けるだろう。

「ほう、友人が出来たか」

「そ、すずかとなのは。明日、早速すずかが遊びに来るから」

なのはは予定があつて無理らしいわ。そう告げる表情はどこか残念そう。そんなアリサを横目に、庭の植木を手入れしながら小次郎は笑う。その笑みにアリサは嫌なものを感じた。

そう、それは確実に自分を不快にさせる兆候だったのだ。まだ共に暮らし出して長くないが、それでも互いの事を多少とはいえ理解している。そこからの経験上、アリサは自分の直感は当たると踏んだ。

「それは重畳。その娘にはここは虎の巣だと分かったか」

「誰がトラだああ！たくつ、とりあえず粗相のないようにね」

やはり予想通りだった。そう思いながら、アリサは小次郎へそう告げると屋敷へ戻っていく。その後姿に小次郎は思う。

(余程嬉しいのであろうな。足取りが踊っておるわ)

笑みを浮かべて植木に視線を戻し、小次郎は普段よりも更に丁寧に手入れをしていく。普段よりも念入りに景觀を整えておこうと思つたのだ。それはアリサの言葉を意識してだろう。

アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎。すっかり庭仕事が板に付きだした彼は、なんだかんだでアリサに優しい。何せ、屋敷の者達が揃つてこう告げるのだ。共にいる時は兄のようだと……

門の前で立ち尽くす一人の少女。彼女　月村すずかは生まれて初めて自宅以外の豪邸を見た。その横で自慢げに立つアリサだったが、彼女は知らない。自分が月村家に訪れた際まったく同じ反応をし、すずかに同じ事をされる事を。

「ま、こんなとこで立つてるのもなんだし、早く行きましょ」

「そ、そうだね」

アリサについていきながら、すずかは辺りを見渡す。西洋風の庭は見慣れている。それでも他人の家だと思つと、どこか違うように見受けられたからだ。だが、そんな中に完全に浮いている存在がいた。

それは枝きりバサミを手にし、肩にタオルをかけた作務衣姿の小次郎だった。そんな違和感全開の姿にすずかは呆然と立ち尽くす。それに気付いたアリサが視線の先を追い　原因を認識するや否やその場から駆け出した。

「こんの、バカモノおおおお!!」

叫びと共に繰り出された跳び蹴りを、小次郎は逃げるでもなく、上体をそらし空いている手で受け止める。跳び蹴りの状態で固定されるアリサ。しかし、そのまま終われないと思ったのだろう。足首を掴まれながらも、何とかしようとバタバタと暴れたのだ。

そんなアリサだったが、小次郎に何かを言われ急に大人しくなった。ただ、その顔を真っ赤にしていたが。それを眺めるすずかは、何があつたのだろうと不思議顔。

以下、そのやりとり。

「放しなさいよ!」

「それは出来ぬ」

「どっしてよ!??」

「服に土が着いてしまつのでな」

「いいから放せ!」

「暴れるでない。すかーとがめくれあがっておるぞ?」

「なっ　?!」

そこで小次郎に静かに降ろされたアリサは、ブツブツ文句を言いながらもどこか恥ずかしそうにすずかの所へ戻っていく。そんなアリサにすずかは尋ねた。あの人は誰なのかと。

それにアリサはやや怒りを込めた声で答えた。小次郎と言って、住み込みの専属庭師であると。そして、この家の人間で唯一自分を丁寧扱わない奴だとも言った。

「その割にはアリサちゃんと仲がいいんだね」

「べ、別にそこまでってワケじゃないけどね」

そう答えて、アリサは急ぎ足で玄関へ向かって歩き出す。それはどう見ても照れ隠し。そんなアリサをすずかは小さく笑みを浮かべて追いかける。意外といいところのお嬢様と言うよりも、自分と同じで庶民的かもしれない。

そんな事を思い、すずかはアリサへ話しかける。それを受けて隣り合いながら会話を始めるアリサを眺め、小次郎はおもむろに植木の手入れを始める。

どうやら親しみを持たれたようだな。

そんな独り言を呟きながら……

その後すずかと色々な話をし、アリサがやっている習い事の一つであるバイオリンに彼女も興味を持った事で、会話は更に盛り上がった。今度はなのも一緒にと約束し、アリサがすずかを見送った時には時計が六時を過ぎていた。

初めて同年代の、しかも同性と長時間話した事はアリサにとって大きな出来事であった。その興奮冷めやらぬ彼女は、夕食時にもすずかとの話をし小次郎を呆れさせた。だが、それを顔に出さない辺りに小次郎の優しさがある。しかし……

「それでね……」

「ありさ、手が止まっておるぞ」

食事が始まって既に五分が経つが、未だにアリサの食事は一品たりとも手を付けられていない。さすがに小次郎もそれは見過ごせないのか、手にしたナイフとフォークでハンバーグを一口大に切断し、それをフォークに刺すとアリサの口の前へ持って行く。

その見事な所作に感心するアリサだったが、それもそこまで。何故なら、そんな風に小次郎の事を見つめていたアリサへ彼は極自然にこう声を掛けたのだ。

ほれ。

まるで餌を与えるようなその言い方にアリサは青筋を浮かべるが、ここで怒ってはまた小次郎を喜ばせるだけだと思い、黙って口を開ける。入れられたハンバーグからは濃厚なソースの味と肉の旨味が口一杯に広がり、それがアリサを笑顔にする。

それを眺め、軽く笑みを浮かべて小次郎も同じ様にハンバーグを口にする。こうして彼が肉を食べるのは初めてではない。しかし、肉食文化があまりなかった頃の人間だった彼からすれば、現代の食事はやはり驚きが多いもの。

「肉を食すのはまだ些か慣れぬが、これも美味よな」

「でしょ？ 今度はステーキやトロットロに煮込んだビーフシチュウを食べさせてあげるわ」

驚くような小次郎にアリサはそう勝ち誇るように言った。小次郎が未だに慣れない事の一つが食事。菜食中心だった時代の小次郎からしてみれば、肉を食べる事などほとんどなく、しかもそれが洋風になれば更に珍しいものとなる。

そのためアリサは小次郎にもっと驚いてもらおうと、シェフ達に頼んで様々な料理を出させている。おかげで食事は小次郎のこの上ない楽しみとなっていた。

どこかの騎士王と違い、味ではなく食材や見た目などの雅さに重きを置いているのが小次郎らしさだが。

そんな小次郎は、アリサの挙げた料理名に心底不思議そうな顔をしていた。それがアリサには堪らなく優越感を感じさせる。何しろ、小次郎は基本アリサを小馬鹿にしているので、こういう時でなければ彼の上に立てないからだ。

「すてーきとは何だ？」

「牛肉を厚切りにして炭火で焼くものよ。専用のたれをかけたり、塩をかけたりして食べるの」

「ほう……ただ焼くのみとは単純よな」

「でもお肉の味が純粹に楽しめるわ」

「それも然り。では、ビーふ……？」

「ビーフシチューよ、シチュー。そうね……」

自慢げに語るうとしてアリサはふと思った。考えてみれば、シチューを説明するなんてした事がないと。シチューはシチュー。そう片付けてしまうのが普通だから。

そう、それはアリサが小次郎に出会ってから常にしてきた事だった。世の中の事を説明する時、自分が如何に『常識』と言うモノに縛られているのかを実感するのだ。

これはこういうものだから、こうなんだ。その一言で深く考えない。どうしてそうなのか。誰が決め、なぜそれを誰も不満に思わないのか。何が正しいとか間違っているなんて、本当は誰にも分からないはずなのに。

(まあ人を殺しちゃいけないとかは絶対正しいだろうけど、そこまです極端な事は中々ないもんね。状況によっては正義が悪になるとかあるだろうし……)

そう考えた所で彼女は小次郎の言葉によって現実引き戻された。

「如何した、ありさ」

そこに若干だが戸惑いの色が見える。何せシチューの事を考え出した途端、真剣な顔をしたのだ。そこまで深刻に考える物ではないだろうと小次郎さえ思う事だったが、予想に反してアリサが悩んでいるように見えたためだ。

「別に……少し他の事を考えてただけよ」

「左様か。で、しちゅーと言うのは如何ようなものか」

アリサの答えに納得するものがあつたのか、小次郎は話題を変え
る意味も込めてそう聞いた。

「ま、簡単に言えば牛肉と野菜の煮込み料理よ」

詳しくはシェフに聞きなさい。そうアリサは言つて締め括つた。
その顔は既にいつものアリサであつた。それに小次郎は笑みを浮か
べ、目の前のハンバーグへとフォークを伸ばしてため息を吐く。

「ありさが他事を考えたおかげで、せつかくのはんぱーぐが冷めて
きておる。急いで食べねばならぬか」

「ムカツ！ 何よ、あんたが説明させたんじゃない！」

「む、ばたーじゅに膜が出来始めたか」

「聞け！」

「おお、この人参は菓子であるか。野菜で甘味とは恐れ入る」

「無視するなああつー！」

まさに虎の咆哮。しかし、既に小次郎も慣れたもので、アリサが
叫んだ瞬間耳を塞いでいる。それを見たアリサは、自分が完全に遊
ばれている事を理解した。だが、そこで終わる彼女ではない。それ
ならとフォークを手にし、小次郎のハンバーグを奪つたのだ。

一瞬、何が起きたか分からぬ顔をした小次郎だったが、アリサが
自分の食事を盗つた事に気付き、微かに笑つた。子供らしい反撃の

仕方だと思ったのだ。

「…………手癖の悪い事よ」

「ふんっ。…………アタシを無視するからよ」

ハムツと盗ったハンバーグを口に入れ、美味しいと言わんばかりに笑顔になるアリサ。そんな彼女を小次郎は眺めて呟いた。

やはり、女子は笑顔が一番よ。

そんな小次郎の呟きには気付かず、アリサは食事を続ける。その顔に満面の笑みを浮かべながら…………

おまけ

「で、これが時間」

アリサが小次郎に見せているのは携帯電話。寝る前の僅かな時間、毎晩行われるアリサの現代教室。本日の教材は文明の利器。

「なるほどな。科学、と言つのは凄まじいものよ」

手渡された携帯をしげしげと見つめる小次郎。先程までアリサに

- - - - -

すずか編の裏と云うか、その頃のアリサ達というか。これも加筆修正です。

アリサもすずかからライダーの事は聞いていますが、今は共通の話題で頭一杯で小次郎に話していません。

本格的に彼らが出会うもしくは知るのは、もうしばらく後になります。

とある一日 (N & a m p . S)

麗らかな春の日差しが差し込む公園を、サッカーボールを蹴りながら走る一人の金髪の少女がいる。その額には汗が浮かんでいるが、そんなものを感じさせないような動きで躍動感を前面に押し出し、見事なドリブルを続けていた。

そんな彼女を追いかける少女が一人。ぜえぜえと肩で息をしながらその背に追いつこうとしているが、距離は縮むどころか離れる一方であった。それでも諦めずに追いつこうとしているのだろう。彼女を見て少女は少し速度を調整している。

だが、それも空しく彼女は追いつく事が出来ない。やがて、少女は地面にへたり込んで動かなくなる。それに気付いたのだろう。少女が彼女の下へと戻ってきた。

「大丈夫ですか？　なのは」

「にゃ、にゃはは……何とか、ね」

「そうですか。大分体力がつかましたね」

「そ、そうだね。……初めは転んではかりだったし」

そう呟いてなのは思い返す。彼女がセイバーとこうして運動するようになって、もう一年以上になる。あの頃に比べれば今の自分はかなり体力がある。運動神経は良くなっていると信じたい。そうなのは切に願う。

「さ、ではそろそろ帰りましょう。モモコの朝食が待っています」

「うん。それにお出かけの準備もあるしね」

差し出されたセイバーの手を掴み、なのはは立ち上がる。今日は日曜日。学校は休みで、高町家は全員で出かける事になっていた。なのはとしては、本当はつい先日出来た友人の誘いを受けたかったが、家族全員で行動するのは中々出来ない事もあり、断らざるを得なかったのだ。

その際のアリサの残念そうな顔を思い出し、なのはは思い出す事があった。それは、セイバーから教わったある言葉。

(セイバーに教えてもらったもん。言わなきゃ何も伝わらないって)

あの日、士郎が退院した日の夜。セイバーは高町家の全員にそう告げた。子供だからとか大人だからとか関係なく、家族として思っている事を正しく伝えるべきだと。なのはへ我慢を強いてしまっただけになっていた現実。それに気付けなかったのはそこに原因がある。そうセイバーは言い切った。

その言葉になのは達は何も言えなかった。セイバーが責めているのではなく、優しさを正しく向けてほしいと純粹に願っている事を誰もが感じ取っていたからだ。

セイバーは思う。この家族は優しいからこそ、自分の苦しみを他者に知られまいとして余計苦しめる結果になってしまったのだと。それをセイバーはもう繰り返させたくなかった。他者を思いやる事は大事だが、そのために自分を犠牲にする事だけはさせたくない。

セイバーは王をしていた頃の自分の姿を、幼いなのはに見てしまったのだ。他者のために望まれる姿であろうとしていた自分と、ま

だ幼いなのはが重なって見えた。そこから彼女がかつての自分と同じ境遇にさせないためにと動くのは当然だったのだ。

(あれでみんな変わったよね)

士郎と桃子は以前にも増して休みを大事にするようになった。それは、家族との時間を大切にしたいから。恭也と美由希は鍛錬を厳しくした。それは恭也の期待に美由希が応えたいと願ったから。

そしてなのはは、思った事を隠さず伝えるようにした。ただしセイバー優先で。友達であり、姉であり、他人であるセイバーは、一番客観的に意見を述べてくれるからだ。

セイバーと並んで家路を歩くなのは。その表情は朝日に負けぬ程に輝いていた……

「ただいま〜！」

「只今帰りました」

二人は家に着くとまず玄関からそう声を掛ける。それに、おそろくキッチンにいるであろう桃子が声を返す。

「お帰り〜！ もうご飯だからお父さん達も呼んで来て〜！」

これがいつもの日常の始まりの合図。これを受けて二人は揃って言葉を返した。

「了解っ!」

どこか凜々しく、だけど可愛く答えるのには対し、真剣そのもののセイバー。そして二人は庭にある道場へ向かう。そこからは、時折固い物がぶつかり合う音が聞こえてくる。中で土郎達が鍛錬をしているのだ。

なので、それを邪魔しないようになるべく静かに戸を開けるのは。その視線の先では恭也と美由希が睨み合っていた。それを横目にしながら、なのはは見守っている土郎へと近付いていく。セイバーもそれについていく形で歩き出す。

「お父さん」

「ん？ もうそんな時間か」

なのはが来た事で全てを察し土郎は呟く。そして、膠着しそうな二人に向かって告げた。

「後三分だ。引き分けなら今日のセイバーの買い食い代は二人持ちだな」

「っつ?!」

その声に二人が動いた。一瞬だがセイバーが目を輝かせたのを見たからだ。沈着冷静な雰囲気を持つセイバーだが、食の事になると別人のようになる。それは高町家全員の認識だ。

セイバー泣いても飯やるな。それが高町家の教訓。それが出来なければ、彼女に食事を与えてはならない。同情すれば、必ず自分に返ってくるのだ。主にその財布に。現に高町夫妻は経験済みだ。

神速を使いぶつかり合う二人。それをキョロキョロと視線で追うのはと、静かに見つめる土郎とセイバー。無論、なのはには見えていないが、それでも必死に追いかけようとする所が可愛いものだ。そんななのはと違い、セイバーはそれを一つも見逃さぬようにしている。御神の剣士は彼女にとってこの上ない相手なのだ。以前戦った小次郎の剣。アレと似たものを感じていた事と、魔力も使わずこれ程の動きをしてくるのだ。その事が持つ意味は大きい。

既にセイバー自身、恭也や土郎と戦っている。未だに魔力を使わない状態では、セイバーも容易に勝ち越す事が出来ない相手。それだけでも土郎達の異常さが分かるうというものだ。

「む……」

「決まりましたね」

恭也の大振りを好機と取った美由希だったが、それは彼の誘いだっただ。だが美由希もそれは覚悟の上であり、迫り来る小太刀を敢えて流さず受ける事で勢いを殺し、己の小太刀を叩き込んだ。

しかし、それすら読んでいた恭也は打ち込まれた一撃を耐え切り、再度残りの小太刀で斬りつけた。堪らず痛み表情を歪める美由希へ、恭也は容赦なくとどめの一撃を振り下ろしたところで、それを見事に寸止めする。

それを見つめて肩で息をする恭也と美由希。恭也の勝利にどこか残念そうなセイバー。両者が自分の飲食代を持ってくれればと考えていたのだろうか。なのははそんなセイバーに気付く事もなく、隣の土郎から勝負が決まるまでの一連の流れを教えてもらっていた。

「っ…………お前…………はあ…………持ちだからな」

「わかつ…………はあ…………ってるよ」

どこか嬉しさを滲ませる恭也と悔しさと寂寥感が漂う美由希。気のせいか、その背中からはどんよりとした空気が出ている。

（これで今月のお小遣いパー…………トホホ）

そんな事を思いつつ、美由希は道場の後片付けを始める。それを横目に恭也が視線を動かせば、なのはとセイバーが道場から出て行く所だった。去り行くセイバーの背中を眺めて恭也は思う。

一瞬だが、俺が動いた時にセイバーが残念がっていたような

…………

それが事実か見間違えかは分からない。それでも、恭也はどこかでこう願う。出来れば見間違えであってほしい、と…………

高町家の食事はある意味スゴイ。料理や素材ではなく、量がスゴイ。ご飯の量もさる事ながらオカズの量も多いのだ。原因は育ち盛りの子供達ではない。一年以上前からいる家族同然の少女であった。

「モモコ、御代わりを」

「はい」

もう誰も何も思わない。まだ食事が始まって五分と経過してないとしても、それが当然なのだ。しかし、これが十分経過してなら話は別だ。大丈夫かや具合でも悪いのかだけではなく、病気かもしれないとセイバーを心配するだろう。そういうものなのだ。食事時に関するセイバーという少女の評価は。

「なのは、今日は何を買ったんだ」

「えつとね……」

「あ、父さん。醤油取って」

「ああ、ほら」

「シロウ殿、私にはソースを。目玉焼きにはかかせない」

「セイバー。はい、御代わりよ」

賑やかな食卓。ちなみにセイバーは全員から呼び捨てを望んだ。それに応えてセイバーと皆は呼んでいる。セイバーも同じく呼び捨てなのだが、士郎だけは殿付きとなっている。

セイバー曰く「家長だから」との事だが、深い理由があるのだろうと桃子と士郎は考えている。そこにあの日見せた彼女の表情の謎もあると思いつながら。

常人が見たら驚くような量の食事でもセイバーの前では普通の食事。二つあった御釜のご飯も綺麗になくなり、テーブルの上のオカズも残っているものは何もない。

それを満足げに見つめる桃子。なのは達は揃って笑みを浮かべて

いる。そして食後のお茶を啜り、セイバーは静かに告げた。

「ごちそうさまです」

「お粗末様」

既に食べ終わっているのは達も、それを聞いて片付けに動き出す。それぞれが各々の食器を持って行き、それを桃子が洗う。洗われた食器を美由希が拭いて元の場所へ。恭也はテーブルを拭き、なのははその手伝い。土郎はセイバーとサッカー評論。

いつもは仕事や学校などで忙しい朝だが、たまの休日はこんな風にゆったりと時間を過ごす。出掛けるのはお店が開き出す十時からなので、それまでは自由時間。

「ここでラインを上げれば……」

「いや、でもここからクロスに振る方がいいんじゃないか？」

サッカーチームの監督をしている土郎が、セイバーとサッカー談議をするようになったのは半年前。欠員が出た際、セイバーに代理を頼んだ事がキツカケだった。

土郎の頼みに応えなくてはとばかりに見事な運動能力を如何なく発揮したセイバーは、そのために永久出場停止という名譽の処罰を受けた。しかし、そのプレーには多くの人間が賛辞を贈った。

テーブルに目をやれば、恭也となのはが掃除を終えて雑談していた。二人の雰囲気はとても穏やかなものがある。

「学校は楽しいか」

「うん。友達も出来たし、お勉強も楽しいよ」

満面の笑みで答えるのはを見つめ、頭を撫でながら恭也は思い出す。あの頃、どこか自分の意見を述べる事に臆病だったなのは、恭也は気付いてやれなかった。それを悔いる自分をなのははこう言っ
つて許したのだ。

自分が淋しいと言わなかったからだ。悪いのは恭也ではなく、本音を言い出せなかった自分だから。そう告げたなのはに恭也は思った。強くなつたと。幼いながらも、セイバーという友を得て妹は成長したのだな。そう感じた事を。

そして、キッチンからセイバー達の様子を美由希と桃子が見ていた。

「しっかしさ」

「んっ？」

「セイバーもすっかり『高町』だよね」

「そうね。まさに、高町セイバーね」

食器をしまいながら笑う美由希と桃子。実際、セイバーを養子にしたいと桃子は提案した事があったのだが、彼女はそれをやんわりと断った。その時セイバーに言われた一言が、今も桃子の心に残っている。

セイバーはこう言った。桃子の気持ちは嬉しいが、自分にも親はいた。だから、桃子を親と呼ぶ事が出来ない。でも、許されるならもう一人の母と思って桃子に接してもいいだろうか。

その申し出に桃子は喜んでと応じ、それまではなのはの母という立場で応対していたセイバーが、急にどこか甘えるようになってくれた。そう言っただけで桃子ははしゃいだものだ。もっとも、その違いは桃子にしかなじられないものであるが。

概ね、高町家は平和。この日もそうだった。郊外に出来た大型ショッピングセンターに行ったまでは……

「じゃあ、お昼にここで合流って事で」

桃子の提案に頷く一同。まずは女性と男性に別れて散策し、お昼を食べてからそれぞれに別れて行動。最後に食料品を買って帰宅。そういう手筈になっていた。ちなみに集合場所は、二階にあるフードコート。先程から、セイバーの視線がせわしく動いている。解散の一声で動き出す高町家。セイバーはフードコートに未練がましい視線を送りながら、美由希に引きずられるように歩いている。それになのはと桃子は苦笑するしかない。

「後でまた来るから」

「それはそうですが……」

仕方ないとばかりに告げられた桃子の言葉に、セイバーはそう返して言葉を濁す。そんなセイバーになのはがほんの悪戯心で告げた一言。それが少し困った事態を引き起こす。

あんまり駄々こねると、おやつ抜きなの。

それを告げられたセイバーの顔は、驚愕の一言に尽きた。それだけではない。掴んでいた美由希の手を振りほどき、心からの許しを得るかのように桃子に縋り付いた。その光景に否応なく周囲の視線が集まる。

「ちよ、ちよつとセイバー……」

「ごめんなさいごめんなさい。もう言いませんので許してください」
周りの視線などお構いなしに懇願するセイバーを眺め、美由希はなのはへ呆れた視線を向ける。

「どうすんの、なのは……これ」

「じゃ、じゃはは……どうしよう……」

そんな二人の目の前で、捨てられた子犬のようなセイバーの懇願は続くのだった……

「これなんかどうだ？」

「いや、これは少し派手じゃないか？」

セイバーが落ち着きを取り戻し、なのは達が安堵の息を吐いた頃、
士郎と恭也は女性向けのアクセサリーショップにいた。なのはのた
めの小物を選ぶためだ。

初めはそのファンシーな雰囲気にとじろいた二人だったが、な
のはの入学祝いと友人が出来た事を兼ねたプレゼントを選ぶためにと
突撃したのだ。まあ、選び出したらそんな事を忘れてしまった二人
ではあったが。

「髪飾り……？」

「お、それはいいな」

恭也が目をつけたのはリボン等の髪飾りだった。様々な色や形の
物を見ながら、二人は悩む。ちなみに、成人男性がファンシーショ
ップで真剣に物を見定めるのは、かなりシユールである。周囲の女
性が先程からじっと二人を見つめている事からもそれが分かるとい
うものだ。

結局、二人は淡いピンクのリボンを買った。これをなのはは大変
気に入り常に身につけるようになるのだが、ある時から身につける
事がなくなる。その理由はまた別の話。

こうしてお昼の集合までに女性陣が見ていたのは衣服や小物類。
男性陣はスポーツ用品や日用品。それらの話をしつつ、フードコー
トを歩く高町家。中でもセイバーは目にする物全てに反応を示し、
そのたびになのはが説明していた。それを見ながら、美由希は気が
気でなかった。今からセイバーが食べる物は、全部自分の払いにな
るのだから。

「それで、どうする？」

「せっかくだ。皆好き勝手に店を選ぼうじゃないか」

士郎の言葉に異議はなく、それぞれが思い思いの物を頼みに行く。ただし、当然セイバーだけは美由希の後をついていった。それがどこか尻尾を振る犬のようにも見えて、密かになのは達が笑っているとも知らずに。

やがて、テーブルに様々な料理が並んだ。士郎は海鮮丼。しつかりと食べたかったようだ。桃子はドーナツが三つにパイが二つ。それにジャワティだ。甘味系なのは、やはり仕事柄気になるのだろうか。

恭也は盛りそばと天麩羅。本当はざるそばにしようと思ったとは本人の談。美由希はカルボナーラ。その表情は少し安堵している。セイバーへの出費が予想以上に少なかったためだ。なのははオムハヤシ。子供が好きなものを掛け合わせたそれを前に、満面の笑みを浮かべていた。

そして、肝心のセイバーはと言えば……

「す、すごいねセイバー」

「ええ。色々あつて迷いましたが、これだけにしました」

どこか自慢げなセイバーの前にあるのは、ナポリタンに石焼ビビンバ。それに石狩汁という体育会系もびっくりのメニューだった。ちなみに回った店で軽く五分はメニューを凝視している。

「……大丈夫か？」

「うん。……意外と少なくすんだ」

バランスを考えましたと語るセイバーの横で、美由希はあははと乾いた笑いを見せた。それに心で手を合わせる恭也。そんな様子を眺めなのはは呟いた。

「まだおやつを買ってないから、問題はこれからなの」

その呟きに美由希が顔を勢い良く上げ、セイバーを見る。その視線に気付きセイバーが美由希を見返した。その美由希の視線に含まれたものにセイバーは首を傾げる。嘘だと言ってくれと聞こえた気がしたのだ。

「どうしました？」

「ねえ、セイバー？ これで満足だよね？」

お願いだからそう言って。そんな想いを込めた問いかけに、セイバーは笑みを浮かべて答える。

「何を言っているのですミユキ。後は甘味を買わねばなりません。一階にたい焼きが売っていたので、それを買わねば」

嬉しそうにそう返し、スパゲッティを頬張るセイバー。その言葉に完全に打ちのめされる美由希。そして、それを同情の眼差しで見つめるのは達。こうしてお昼は過ぎていくのであった……

お昼を食べて自由行動になったのだが、なぜか二人組になってしまうのが高町家。土郎と桃子、恭也と美由希、なのはとセイバー。話し合ったわけでもないのにそうなってしまるのは、仲が良いからなのか。ともあれ、三組はそれぞれに歩き出す。

「ね、セイバーはどこに行きたいの？」

フロア紹介を眺め、なのはは隣のセイバーへ問いかける。そのセイバーはそんなのは見つめ、優しく微笑んでいた。

「私は特にありませんよ」

「え〜っ、つまんないの」

「では、なのはの行きたい所に」

そう笑みと共に言われては、なのはも黙らざるを得ない。結局、三階にあるアミューズメントコーナーへ向かった。様々な機械が並び、雑多な音を響かせるそこは、セイバーにとっては初体験の連続だった。

UFOキャッチャーで苦戦し、クイズゲームに唸り、レースゲームに興奮し、メダルゲームで大勝した。そんなセイバーとなのはも一緒になって楽しんでいた。一番二人が気に入ったのは景品のウサギとライオンのヌイグルミ。

セイバーはライオンが欲しかったのだが中々取れず、なのはが何とか取ったのだ。その際、手前のウサギも一緒に落ちたのだが……

「これはなのはに」

「ふえ？」

「お礼です。私には、これで十分ですから」

今日の思い出に、とセイバーがなのはに手渡した。しばらくそのウサギを眺めていたのはだったが、言われた事を理解したのだから。満面の笑みでそれを抱きしめ、感謝の気持ちをなのも告げた。

「私こそありがとう！ セイバー！」

それにセイバーは柔らかな微笑みを返して頷いた。その後、二人は手を繋いで歩き出す。笑顔で会話する互いの脇には、可愛らしい思い出の品が抱えられているのであった……

その後、再び合流した高町家は食料品の買出しを終えて帰路に着いた。勿論、セイバーは帰り際にたい焼きとみたらし団子を購入し、美由希の財布へ最後の一撃を与えたのは言うまでもない。

家に着いた時には既に日が暮れていたため、すぐに夕食の支度となったのだが、珍しく桃子の手伝いをセイバーが買って出た。それは、セイバーなりの感謝の気持ち。何も話さぬ自分を受け入れ、家族同然に良くしてもらい、今日もまた思い出をくれた事に対する精一杯の恩返し。

「さ、まずは何をすればいいですか？」

そのためだけに書いたわけではないですが、肝心なのはそこだった
りします。

とある一日(H&a m p・A)

(またか……)

そう思い、アーチャーはため息を一つ。のんびりとした朝の時間洗濯物を干していたアーチャーが感じたのは、視線。それも、あまり良くない類のものだ。ちなみにアーチャーの格好はTシャツにジーンズと、至ってラフなものだ。残っていたはやての父親の服を修繕した物である。

はやては新しい服を買うべきだと主張したのだが、アーチャーがそれをやんわりと断ってそれを提案したのだ。もし許されるのなら、残った故人の服を有効活用したいと言って。

それにはやてが一瞬沈黙し、嬉しそうに許可したのは言うまでもない。そう、アーチャーは気付いたのだ。自身が既に霊体ではない事を。だからこそ、こうして服を手に入れて過ごしているのだから。

受肉した原因は定かではないが、今までの例から考えればこの召喚は”世界”によるものだな。その割には私個人としての行動が許されているのが不思議ではあるのだが……

この八神家にアーチャーが来て既に一週間。その三日目にして、監視されている事に気付いた。だが、その相手が誰かまではアーチャーの力を持つてしても未だ掴めていない。それでも、一つだけ確信している事がある。

(サーヴァントクラスの者ではないな。そうならば、既にはやてへ何らかの行動を起こしているはずだ。だが、それ以外なら何が……?)

そう、その相手は彼が警戒する相手ではない事。可能性はかなり低い、もしかするとはやてがこの世界の危機に關つている存在かもしれないと思ひ、アーチャーはその動向を窺つていたので。

しかし、車椅子で魔術師でもない少女であるはやてがそんな存在には思はず、アーチャーとしてはこの監視される理由がまつたからなかつたのだから。

何か手がかりでもあればと、はやてへそれとなく聞き込みをして得られた情報は、彼女には後見人のような存在がある事。その相手であるギル・グレアムという人物へは、既にはやてがアーチャーの事を伝えてゐる。

父方の遠い親戚ではやての事を偶然知つたと嘘は吐いてゐるが、それを調べる事があれば、アーチャーはその人物がこの監視に關係してゐると踏んでゐた。

聞けば、親の古い友人というだけではやての後見人をしてゐるらしい。美談ではあるが、アーチャーは当然疑つてゐた。無論、はやてにはそんな素振りも欠片として見せてゐない。

初めは八神夫妻の遺産關係かと思つたのだが、驚く程健全に運用されてゐて、これは違つたとすぐに判断。ならばと、はやてにグレアムの人物像をそれとなく聞いてみたものの、手紙でのやり取りしかない彼女に詳しい事が分かるはずもなく、結局アーチャーは独自で調べるしかなかつた。

(いつものように周囲に人はなし。ゐるのは……)

周囲をごく自然に窺つアーチャー。そこにゐるのは。

(いつもの猫、か)

この家で暮らすようになってから、アーチャーがよく見かける猫がそこにはいた。初めは魔力を感じたので使い魔かとも考えたが、この世界に魔術師がない事は把握したため、その可能性を無くした。今は、偶然魔力を持つてしまった特殊猫として接している。

「またお前か」

アーチャーの声に可愛らしい声で鳴く猫。その近くまで近付き、彼はポケットに忍ばせてある小魚を取り出す。

「ほら」

それを手に乗せて差し出すと、猫は嬉しそうに食べ始める。それを眺め、アーチャーは思う。

(ここまでなるのに苦労したものだ)

最初は視線が合っただけで逃げられ、次は近付こうとして逃げられ、三度目は警戒されながらも、小魚を与えて現在に至る。その理由ははやてがこの猫を飼いたいと言い出した事が原因。

アーチャーが二度目に逃げられた際の話をした所、はやてが是非飼いたいと言い出したのだ。当然アーチャーは止めた。野良猫のようだし、人に深い警戒心を持っているから無理だと。それでも、はやては退かなかった。

数十分に渡る口論の末、結局アーチャーが色々試して、それでだめなら諦めると約束させたのだが……

(まったく……こつもうまくいくとは思わなかったな)

三度目の際、試しに声を掛けてみたのだ。通じる通じないはともかく、動物に敵意がない事を表すにはそういうのも効果があると知っていたからだ。そして小魚を与える事に成功し、アーチャーがそれを無表情ではやてに伝えると、彼女は満面の笑みでガッツポーズしてこつ言った。

よっしや！ 首輪と名前やな！

気が早い。

アーチャーがそんなやり取りを思い出していると、手に乗せた小魚が無くなった。見れば猫は満足そうに舌なめずりをしている。それを見てアーチャーは手を引つ込めた。

それに構わず、猫は身だしなみを整えるように前足で顔を掻いている。それを見てアーチャーは小さく笑う。もしかしたら、この猫もはやてと同じで温もりに飢えているのかもしれない……

その後、猫はまたどこかに行ってしまった。だが去り際にアーチャーを見ていたので、おそらく明日も来るだろうと彼は踏んでいた。

「アーチャー、ちょう来て〜」

「分かった。すぐ行く」

リビングからはやての声に、アーチャーは空の洗濯籠を手にか

の中へと戻る。すると、そこには鉛筆を手に白紙と向き合っはやての姿があった。その紙には、何やら文字が書かれている。

「どうした？」

「これなんやけど……」

そう言うてはやてが見せたのは、猫の名前らしきものが書き連ねられたチラシの裏。みけ、たま、しゃむ、ぽち等様々だ。それを認識し、アーチャーはこめかみを押さえた。

「まさかとは思うが、これは」

「ねこの名前や！」

「……だろっな」

自身の言葉を遮って告げられたはやての元気一杯の声に、予感的中とばかりに頭を悩ませるアーチャー。それを見ながら不思議そうに首を傾げるはやて。

そんな彼女へアーチャーは告げる。懐き始めてはいるが、まだまだ飼うのは早いと。それにはやては反論する。飼う事になってからでは遅いと。そんな討論をしばらくし、結局折れるのはアーチャーだった。

「……致し方ないが、名前を決めるのは協力しよう。だが、首輪やトイレ等の準備はダメだ」

「ええやん。ここまできたら全部」

「それでは君の思い通りだ」

そこは折れる事は出来ないとはかりの断言に、はやてはケチと吹き口を尖らせアーチャーを見つめる。それを気にも留めず、アーチャーは洗濯籠を手に動き出す。

今日の予定は買い物と図書館への本の返却となっているのだ。そのためはやての部屋に入り、目当ての本を手に取りろうとした時、アーチャーはある本に目を奪われた。

(何なのだ、この本は……?)

それは鎖で縛られていて、開く事が出来ないようになっている。だが、その本から感じる魔力はどこか不気味ささえ漂わせている。何となくだが、不幸を呼ぶような雰囲気さえある。

「どないした？」

アーチャーが中々戻ってこないのも、はやてが様子を見に現れたそれを幸いとアーチャーは件の本を手に取り尋ねたのだ。この本は何だと。はやてはその指し示す本を見て、どこか納得した表情で答える。

よくは知らないが物心ついた時から家にあり、一度も開いた事がない事を。そして妙な愛着があり、捨てずに取ってあるとも。それを聞き、アーチャーは密かにある事を試みる。

「トレスオン
解析、開始」

だがその瞬間、彼へ本能的な『何か』が告げる。コレは危ない。手を引け、と。それと共に一瞬ではあるが、何か邪悪な気配が強く彼の体を駆け巡った。

「っ?!」

「アーチャー？」

その恐怖感に思わず手を引つ込めてしまふアーチャー。それをどこか不思議そうに見つめるはやて。何故なら、その時のアーチャーの顔は恐怖に歪んでいたのだ。

一方のアーチャーはある確信をする。未だ分からぬ監視者。その目的はこの本だと。確証はない。それでも彼の勘がそれを強く肯定していた。故にアーチャーは迷わない。少しでも可能性があるなら、徹底的に。それが、彼のやり方だ。

「はやて、この本を私に預けてくれないか？」

「ええけど、何で？」

「何、少し気になってね。それに見た目もある。君には似つかわしくない」

そう言つて、アーチャーは鎖で縛られた本を手に自室へと向かう。使われていない部屋を掃除し、その一室をアーチャーの部屋としてはやてが使わせているのだ。

手にした本を棚に入れ、それを外から容易に見える位置に置く。そして、気付かれないようにトラップを仕掛け、念のために簡易結界を敷き、準備を終える。

アーチャーは監視者の目的を明確にするためにこの罫を仕掛けた。もし、この本の入手が目的ならば必ずここに侵入する。だが、それ以外の目的ならば自立つ動きは起こさない。まずは、相手の目的と実

力を知る必要がある。そのための畏、そのための結果。

「な、ほんまにどうしたんや」

「別に何でもない。さ、そろそろ出掛けるぞ。まずは図書館からだ」

はやての声に反応するようにいつもの顔へ戻し、アーチャーは車椅子を押し始める。それにはやては何か言いたそうだったが黙る事にした。アーチャーの表情がどこか怖かったからだ。

(一体、何があるんやろ？ あの本に)

そのはやての疑問に答えが出るのは、ここからかなりの時間が必要となる。そう、九歳の誕生日。その忘れられなくなる日まで待たねばならなかったのだ……

「今日は何にする？」

「そうだな……。む、鳥が安いかな。なら、チキンカレーでどうだ？」

「おっ、ええな。ならわたしが野菜の皮むきするわ」

「頼む。後はサラダでも作るか……」

スーパ-のカゴを抱えるはやてと車椅子を押すアーチャー。その姿はこのスーパ-で知らぬ者はいない程の有名人であった。何しろ

そのアーチャーの日本人然としない容姿が目立つし、更にはやてが車椅子と来ている。

事情を聞いた人達は皆揃って、今時珍しい話だと思って応援してくれていた。そこには、はやての人見知りしない性格とアーチャーの主夫ぶりも関係している。結果、ご近所で知らぬ者はいない有名兄妹となってしまうのだ。

「な、それわたしが作る」

元気良く手を挙げるはやてに、アーチャーは笑みを浮かべる。そう、アーチャーの料理を食べた日以来、はやては急に自立心が芽生えたのか、彼から家事を教わりだしたのだ。

車椅子なので危険だとアーチャーは言ったのだが、はやてはそれを承知で頼み込んだ。現在、はやてはもっぱらアーチャーの手伝いをしながら炊事や掃除を教わっている。

「ほう……サラダとは言え大変だぞ？」

「ふふん。わたしやって、いつまでも手伝いだけやないって教えたる」

アーチャーの言葉に自信たっぷりに戻すはやて。それを聞き、アーチャーは笑みを深める。

「ならば任せよう。マカロニサラダを、な」

「な、なんやって　っ!？」

突然のはやての大声に周囲の視線が動く。それでも、それがはやて達だと気付くと誰もが微笑みを浮かべて視線を戻した。つまり、

今のような事はよくある事と認識されているのだ。

おや？ どうしたはやて。先程までの自信はどこへ行った？

皮肉屋スマイルではやてを見つめるアーチャー。それにはやては悔しそうな視線を向ける。だが、それも少しすると一転、同じような笑みを浮かべてこう言った。

「ならアーチャー、お手伝いたのむな。わたしはまず野菜の皮むきあるから」

「なっ……」

「任せるって言ったな？ せやからサラダに関してはわたしが指示出す側や」

その台詞にアーチャーは嫌な既視感を覚える。何かこの論理の仕方は覚えがあると記憶が訴えるが、同時に本能が思い出すなど叫んでいるのだ。そして、その言いようのない不安はとどめのはやての言葉で的中する。

あれ？ どないしたアーチャー。さっきまでの余裕はどこ行った？

そうにつこりと微笑むはやてに、アーチャーはあかいあくまの姿を重ね、首を振る。そんな事はあるはずないと、強く強く言い聞かせるように。そこで彼ははたと気付く。はやての声が彼女に似ている事を。

そこから付随して開きかかる記憶に蓋をし、彼は今までの会話を忘れる事にして買い物へと意識を移す。そんなアーチャーを楽しそ

うにはやては見つめていた。やり返せたと思いながら……

楽しくも騒がしい食事を終え、二人は後片付けをしていた。今日のカレーは美味しかったとはやてが言えば、アーチャーがサラダはまだまだと返す。それにむくれながらも食器を洗うはやて。そんな彼女をさり気なく気遣い、アーチャーは次の食器も手元に差し出す。たった二人の家族。だが、不思議とはやては淋しくなかった。それはアーチャーがいつも傍にいるからだろう。彼女が何かをする時、アーチャーは必ず見てくれている。安易に手を貸すのではなく、見守る。はやてが言い出さない限り、アーチャーは手を出さないのだ。

それが本当の優しさだと、はやては知っている。何故ならばやてが危険に晒された時は、すぐさまやってきて助けてくれるのだ。

「明日の朝はカレーやな」

「ふ、一晩寝かせた私のカレーは驚くぞ」

「お、なら驚かんかったら罰金百万円や」

「どうしてそうなる」

そんな会話をしながらはやては思う。こんな時間がずっと続きますように、と。強く、強く、心から願いながら……

とある一日（F&L）

額から滝のような汗を流し、フェイトは目の前の相手を見つめる。まだ三分も経過していない。にも関わらず、ランサーはフェイト達三人を圧倒していた。

初めにアルフが襲い掛かった。それを槍で一蹴、その隙を突いてリニスが幾重にもバインドをかけたが、それも三十秒と持たずに消され、まるで計っていたかのように飛び掛っていたフェイトとリニスを蹴散らしたのだ。

離れては槍で、近付けば体術で。魔法を放つてもフォトンランサーではまるで効果なく、それにまず当たらない。そんな絶望じみた状況でも、フェイトは諦めなかった。彼女には切り札とも呼べる魔法があったからだ。

【アルフ、リニス、少しだけ時間を稼いで】

【いいけど、何する気だい？】

【試してみたいものがあるの】

フェイトの指すものが分かったのか、リニスが若干上擦った声で叫ぶ。

【まさかっ！？ ダメですフェイト！ それは今の状態で使ってはっ！！】

そんな制止の声を振り切り、フェイトは目を閉じて手にしたデバイスを掲げて何かの詠唱を始めた。それにランサーは面白そうに口

元を歪め、槍を地面に突き立てる。その行動にアルフとリニスの表情が驚きに変わる。

何するかしらねえが、面白え。見せてみる、フェイトオ！！

咆哮。それをまるで意にも介さず、フェイトは詠唱を続ける。それは今の彼女では到底出来ない大魔法。フォトンランサーファランクスシフト。彼女の使える魔法でも最大の威力を誇るものだが、使用条件があつた。

それは万全の状態である事。無論、今の彼女が万全であろうはずがない。身に纏ったバリアジャケットは傷付き、魔力も三分の一程消費している。そんな状態でフェイトにとつての大魔法を使えばどうなるか。それを思い、リニスとアルフが同時に息を呑む。

「フェイトっ!?!」

その視線の先で詠唱を続けるフェイトが一瞬よろめく。それを支えようと動くアルフとリニスだったが、それが叶う事はなかった。ランサーの視線がそれを踏み止まらせたからだ。手を出すな。そう告げる眼差しで二人を睨みつけるランサー。

そのあまりの気迫に二人は微動だに出来ない。そんな中、フェイトは何とか詠唱を終え、その名を告げる。それに自分のありつただけの願いを込めて。

「フォトンランサー、ファランクスシフト……ファイア！」

それは雷光の雨。ランサーを撃ち抜かんと殺到するフォトンランサーの群れ。それをフェイトは必死に見据えていた。ランサーへ届け。そんな気持ちを胸にして。ランサー目掛け降り注ぐ魔力の槍。それが次々とランサーへ殺到し、その姿を隠していく。

やがて、舞い上がった煙が晴れて行き、ゆらりと人影が現れた時、フェイトは絶望した。全身に傷を負っていたなら良かった。せめてかすり傷でもあれば、フェイトはまだ希望を持てただろう。

だが、無情にも現れたランサーは無傷だった。彼は、顔面蒼白となったフェイトとアルフ、言葉を失うリニスを見やってその手にした槍を振り、にやりと笑みを浮かべて

「やるじゃねえか」

そう言った。どこか嬉しそうに、でも悔しそうに。

「え……？」

困惑するフェイトと同じような表情のアルフ。ただ、リニスはランサーの表情の意味を悟った。

(槍を使ったから……ですね)

「俺は避け切るつもりだったが、一発だけかすりそうになったもんでな」

槍を肩に担ぎ直し、苦笑い。それでフェイトも理解したのか、その顔に喜びが浮かんでいた。アルフだけは未だに事情を理解出来ないのか、やや難しい顔をしている。

「じゃ、じゃあ……」

「おう。合格にしてやらあ」

「「やったあ〜！」」

からからと笑うランサー。その言葉がよほど嬉しかったのか、アルフはフェイトを抱き上げながら喜んでいる。フェイトも笑顔を浮かべていた。その光景を横目に、リニスはゆっくりランサーへ近づく。それに気付き、ランサーはいつもの笑みを浮かべた。

「何だ？」

「優しいですね」

そのリニスの言葉にランサーは驚きもせず答えた。

「へ、そんなんじゃないよ」

そう答えるランサーはどこか楽しそうだ。リニスはそんなランサーに自然と笑みを浮かべる。ランサーが告げた合格との意味。それは、フェイト達がランサーに戦い方を教えてもらえるかどうかだ。

無論、ランサーは初めからそのつもりではあったが、リニスがそれに待ったをかけたのだ。出来ればフェイト達の実力を知ってからにしてほしいと。そこには、ランサーとの実力差を確かになりたいとの考えがあった。

それを悟ったのか、ランサーはこの試合を行った。結果として合格になったが、本来はランサーに一撃当てなければ合格とならないにも関わらず、ランサーは当てていないフェイト達を合格させた。

それを指してのリニスの優しい発言。だが、それにランサーはこり返した。最初から合格させるつもりではあった。しかし、それは自分達の全力が通じない相手がいると教えてからだ。その意

味で、あの魔法は締め括りとして丁度良かったとも。

そんなランサーにリニスは嬉しそうに笑みを見せた。それと同時にある決意を固める。それは今後のフェイト達を思つての事。そして、考えられる最悪を避けるための行動だった……

あの訓練の後、フェイトは念のために休む事になり、アルフはその付き添いも兼ねて傍にいる事を選んだ。それを好機と捉えたりニスは、ランサーへ話があるとデバイスルームへ案内した。

「へえ、中々面白いな」

初めて見るものに興味を示しながら、ランサーは視線を動かしている。それをリニスは可笑しそうに笑う。先程の戦闘で見せた表情とまるで別人だったからだ。戦士でありながら少年。そんな表現がぴったりの存在。それがランサーなのだ。

「で、話つてのは何なんだ？」

「……私がフェイト用のデバイスを作っている事は話しましたね？」

リニスの言葉にランサーは頷く。今日の戦闘で使つたものもリニスが試作したものだからだ。もつとも、リニスからすればあれは未完成。完成すれば、今よりもフェイトの事を支える事が出来るはずと彼女は断言していたのだ。

「それが私にプレシアが与えた最後の指示。おそらくそれが終われ

ば……」

私は役目を終え、消えるでしょう。そうリニスは告げた。ランサーは僅かに驚きを見せるが、それもすぐに消える。リニスがまだ何かを伝えたそうだったからだ。

ランサーの視線にリニスは意を決して語り出す。ここからは決してフェイト達には言わないでほしいと前置いて。そこからリニスが語ったのは、プレシアの目的とフェイトの秘密に関わる全てだった。その内容は、ランサーにとっても衝撃だった。

プレシアには娘がいた。名をアリシア。夫を亡くし、女手一つで育てていたのだが、ある時プレシアの行っていた研究実験が事故を起こし、大惨事を引き起こしてしまった。

そして、それに愛娘であるアリシアも巻き込まれ、覚める事のない眠りについたのだ。だが、プレシアはその現実を受け入れなかった。愛娘を生き返らせるために様々な生命工学や研究を調べ、模索し、実験を繰り返したのだ。

「例えば、あの時にプレシアも死んでしまったのかも知れません」

リニスはそう言って話を戻す。その一つである『Project Fate』に目をつけ、アリシアの記憶や外見などを完全に模倣した存在を作り出したのだ。しかし、それもアリシアには成り得なかった。そのアリシアと為り得なかった存在。それがフェイトなのだ。リニスは告げた。

「結局プレシアは現存の技術に望みを持たなくなったようです。今は失われた超技術の象徴アルハザードを追い求めています」

おそらく、フェイトはそのために利用され、捨てられるでしょう。

それだけ告げ、リニスはランサーを見据える。その目は、貴方はどう思いますかと問うていた。その視線にランサーは何でもない事のように言い切った。

関係ねえ。

その答えに絶句するリニス。ランサーは続けてこう言った。アリアがどうのプレシアがどうのなんて興味ない。自分がすべきはただ一つ。フェイトを守り、立ちほだかるモノを全て突き穿つのみだと。

その言葉にリニスは安堵と悲しみの感情を同時に抱いた。この男ならフェイトだけでなく、プレシアも助けてくれるのではないか。そんな期待があったからだ。

しかしそれは、今打ち砕かれた。ランサーはフェイトは助けても、プレシアは助けない。そう思い、俯くりニス。それを見てランサーはただ、と続けた。リニスがその声に顔を上げてランサーの顔を見る。

「あの女に、フェイトの頑張りを認めさせなきゃ癪だしな。だから、ま……」

簡単には死なせねえよ。そうランサーはリニスに告げた。その顔は普段の人懐っこいものではなく、真剣な漢の顔。そこに込められたのは、戦士としての誓い。決してこのままにはしない。

そんな強い気持ちを感じさせるその眼差しにリニスは見惚れた。そんなリニスの横を通り過ぎ、ランサーはドアの前で立ち止まる。

「それに、お前も消させやしねえ。何せお前は……」

良い女だからな。背中越しにそう言っただけで部屋を出て行くランサー。部屋に一人残されたリニスは、流れる涙もそのままにただ感謝していた。ランサーを遣わせてくれた存在に、神と呼ばれる存在に初めてリニスは感謝したのだ。

（本当にありがとうございます。ランサーと引き合わせて頂いて。フェイトやアルフと出会えて。プレシアとアリシアに助けてもらえて）

これまでの全てを感謝するように、リニスは涙を流しながら祈り続けていた。ランサーがテストアロツサ親子を助け、守り抜いてくれる事を心から信じながら……

リニスと別れたランサーは、ある考えを持ってプレシアの元へと向かっていった。リニスとの約束を果たすために。そして、フェイトの頑張りを無駄にしないためにも。

長い通路を走り、ようやく目的の場所に辿り着いたランサー。そしてその扉を勢い良く開け放つと、躊躇う事なく中へと足を踏み入れていく。そこにいる女性と話をするために。

「……何の用？」

「あなたに良い話を持ってきた」

「良い話……？」

突然の来訪者に怪訝な顔を見せたプレシアだったが、ランサーの言葉に僅かだが興味を示す。それを食いついたと言わんばかりに思い、ランサーは告げた。先程リニスから聞いた話を。そして最後にこう付け加えた。

「で、仮にアリシアが生き返るとして、あんたは今のままでいいのか？」

「……どう言う事？」

「例えばだ。せっかくアルハザードとやらに行く方法が見つかったも、今のあんたじゃただで済まないだろ？」

ランサーの指摘にプレシアの表情が僅かに変わる。実際失われた世界と呼ばれるアルハザードへ行く際、何が起きるかはまったく分からないのだ。ランサーの指摘通り、そこへ行くための手段が体に強い負担を強いるとすれば辿り着く前に死んでしまってもおかしくないのだから。

そんな事を考え、やや顔を曇らせるプレシアへ更にランサーは続ける。術があっても、当の本人が耐え切れないのでは意味がない。だから、今は自分の体を労わる事が必要だと。

それにプレシアが何か反論しようとして、出来なかった。ランサーが床に何か文字のようなものを刻んだその瞬間、プレシアは体が少し軽くなった感じを受けたからだ。

「力を象徴する『太陽』のルーンを刻んだ」

「……すごいわね」

ランサーはそう告げ、プレシアに視線で訴える。体の調子はどうかと。それを感じ取って答えるプレシアは、いつもの表情ではあったがその声には驚きが若干含まれていた。

それを理解し、ランサーはプレシアを見つめ続けた。ここからが本番だと思つて。今、プレシアは自身の知らぬ力に感心している。おそらくそれを使った自分の事を使える奴だと考え出しているはずだと。

「せつかく娘が生き返つても、母親にすぐ死なれちゃ救われねえ。だから、俺に考えがある」

「何かしら」

今までと違つて返事が早い。そう思うも、ランサーは今までと同じような態度を貫く。

「おっと、教えてやってもいいが条件がある」

「……言つてごらんさい」

ここだ。そうランサーは感じ、獰猛な表情で告げた。

リニスをくれ。

その瞬間、プレシアの表情が変わつた。何故そんな事を言い出すのか分からない。そんな理解に苦しむ顔だ。室内に少しだが沈黙が訪れる。だが、プレシアとしてもランサーの考えに強い興味を抱いている。

故にその内容次第では、使い魔であるリニスを与えるぐらい構わないか。そう判断し、彼女は内心の気持ちを微塵も出さずに冷淡な

声で答えを告げた。

「……話次第ね」

「そうかい。ならここで終わりだ。精々娘を泣かすんだな」

あっさりとしたランサーの一言にプレシアの余裕が消えた。不治の病と言われている自分の体を文字を刻んだだけで症状を軽くした。その事実がプレシアにランサーの重要性を訴える。

アルハザードに近づく術を知っているかも知れない。そんな期待を抱かせるにはランサーの行為は十分だったのだから。だから、彼女に珍しく焦りの色が生まれる。ランサーが再度話を持ちかけてくるとは思えなかったからだ。

「っ?! 待ちなさい! ……いいわ。好きにきなさい」

少しも未練はないとばかりに、足早に立ち去ろうとしていたランサーをプレシアは引き止めた。その言葉に含まれた焦りに、ランサーは自分の賭けが成功した事を悟った。

「俺に無断で勝手に消したりしねえだろうな」

「そこまで聞いているのね。ええ、しないと誓いましょう」

ランサーの鋭い視線に微かに息を呑むプレシアだが、それでも平然と言葉を返せるのは重ねた年齢の為せる技か。その彼女の返答に満足そうに頷き、ランサーは自分の賭けが上手くいった事を喜んだ。

そんな彼を眺め、プレシアが聞こえるか聞こえないか程度の声である事を呟いた。それは、彼がプレシアと初めて会った際の出来事を思い出したからだ。

「……でも、喰えない男ね」

「ああん？ どういう意味だ、そりゃ」

そのプレシアの言葉にランサーは耳ざとく反応した。プレシアはそんなランサーへ不敵な笑みを浮かべて問いかけた。

「あの子の言葉しか分からないんじゃない？」

そう言われたランサーは呆気に取られるが、すぐに笑い出して答えた。

「んな事も言ったな」

「……まあ、いいわ。それより、話を聞かせてちょうだい」

そう答えるプレシアの顔にはいつもの表情があった。ランサーはそれを確認し、己の考えをプレシアに告げるのだった……

- - -
- - -
- - -

ある意味本編のF&mp・L組。加筆修正版です。

リニスを手助けしたいと思うなら、プレシアの生存が必須という中、ランサーが取れる行動。

そして、それが思いもよらぬ結果への布石になっていく……はずで
す。

とある一日(Y&P.C)

「ここがミッドチルダですか……」

「うん……」

キャスターの感心するような言葉にユーノも呆気に取られるような声を返す。今、二人はミッドチルダの転送ポートにいた。管理世界で一番の賑わいを誇るだろう世界。そこを一度見てみたいとキャスターが言い出した事がその原因だ。

スクライアの者達に許可を取り、ユーノはキャスターと共に覚えただばかりの転送魔法を使ってここへ来たのだ。周囲に行く人々はいかにも初めて来ましたといった雰囲気の間二人を見て、微笑む者や軽く馬鹿にするような笑みを浮かべる者と反応は様々だ。

「とりあえず動きましょう、マスター」

「え？ あ、ああ。そうだね」

並び立つ高層ビルを見つめていたユーノを現実へ引き戻すキャスター。そんな彼を微笑ましく思いながら、キャスターはその手を繋いだ。

「キャスター？」

「これだけ人が多いとはくれるかもしれませんが、なので、こうしましょうか」

キャスターの言葉にユーノは周囲へ視線を動かした。今まで見た

事がない程の人が動いている。確かにキャスターの言う通り、下手をすればはぐれてしまうだろう。そう判断し、ユーノは握られた手を嬉しく思っ握り返す。

「みたいだ。キャスター、ありがとう」

「どういたしまして。でも、これぐらいでお礼を言われてると少し照れちゃいますね」

「そんな風には見えないけどなあ……」

「ムッ！ 私の言う事を疑うんですか、マスター」

歩きながらそんな会話を交わす二人。その後姿はどこから見ても仲の良い姉弟だ。まあ、キャスターが狐耳と尻尾を出しているので、使い魔然としているのでそう思われないかもれないが、ユーノの感覚としては彼女は姉にも似た存在と言えるので間違いはない。

見る物聞く物が初めて尽くしのキャスターと知識はあっても見るのは初めてのユーノ。ミッドチルダという都会で過ごす二人の時間は、こうして始まったのだった……

二人がまず訪れたのはユーノが通う事になる魔法学院。実は魔法の才能をユーノに見い出した一族の長は、外出のついでに入学手続きをしておけと言っていたのだ。既に細々とした事は終わっていたようで、ユーノはただ言われた通りにサインをしたりするだけ。

最後に軽い説明を受け、彼の初登校とも言える事は終わった。思

ついていたよりも簡単に事が終わったため、どこか拍子抜けしているユーノだったが、キャスターはそんな彼へ段取り自体はもう終わっていたからだろうと告げた。

きつとマスターが来た時点ではほとんど手続きは終わっていたんでしょう。で、後はマスターが署名するだけで良かったんです。

そっか。だから族長も誰でも出来るって言うってたんだ。

公園で談笑する二人。ここでこれからどうするかを相談中なのだ。まあ、相談も何もお互いにミッドチルダに関しては無知に近いので、先程の学院で簡単な観光案内に近い説明を聞き、一応と小さな冊子をもらってそれを眺めてはいたのだが。

とはいえ、ミッドは元々観光地ではない。そのため、案内に書かれているのもベルカ自治区や郊外の方などの都心から離れた場所ばかり。二人としてはクラナガンを見てみたかったので、どうしようかと思案中。

「やっぱり観光となると郊外ばかりだね」

「ですねえ。ま、普通は景色や食べ物などを楽しむものですから」

「じゃ、郊外へ行く？」

そのユーノの問いかけにキャスターはやや困った表情を見せた。郊外へ行くのは構わない。だが、それには時間と何よりお金が掛かる。歩いて行くには距離がありすぎるのだ。

（マスターが渡してもらった資金はそこまで多くありませんし、散財はさせたくないですからね……）

それを正直に言えば、優しいユーノは気にするなと返すだろう。それではいけない。それにキャスターとしては、彼と一緒にいるだけで楽しいのだから。そう考え、ならばとキャスターはユーノへ告げた。

「それもいいですけど、今日はクラナガンの街を見て回りましょう。正直、郊外の景色はスクライアで見る物と大差ない気がしますし」

「……そうかも。じゃ、そうと決めれば早速行こう！」

キャスターの答えに納得し、ユーノは席を立つとその手を普通に彼女と繋いで歩き出す。その行動にキャスターは小さく笑みを零すと、ユーノに合わせるように動き出すのだった……

その後、街に出た二人だったが、ユーノの予想に反してはしゃいだのはキャスターの方が早かった。元々色々な事に興味を持ち易い彼女。故に目に映る物全てに反応を示したのだ。

だが、それが自分への配慮だとユーノは何となくだが気付いていた。周囲にはキャスターは使い魔と見られている。主人である自分がおのぼりさんで見られないように、自身が興味を抱きそうな物へ彼女が真っ先に反応してくれているのだと。

「あ、見てくださいマスター。あんなに大きなモニターが壁に埋め込まれていますよ」

「ホントだ。凄いなあ……」

「おっと、あつちにあるのは何かのお店のようです。おおっ！車を改造しての移動式とは……理に適った事を考えましたねえ」

「アイスクリームだね。折角だから買っついでいこうか、キャスター」

「さすがですマスター！女心を分かってますね。甘い物は大抵女性の好物ですから。ここ、テストに出ますよ」

そんなキャスターの言葉にユーノは苦笑。一体何のテストだろうと思っただけではない。後ろの尻尾が上機嫌の犬のように動いていたからだ。どうやら、少なくとも目の前の相手は甘味が好きらしい。そう判断してユーノは記憶する。

今や家族となった姉代わりの存在の好みをまた一つ。こうして少しずつではあるが、キャスターの事を知っていくユーノ。対するキャスターはユーノの事をほとんど言っていない程知っていた。

何せ、彼女は愛らしい外見の女性。男の扱いも慣れたものだし、ユーノから家族のように思っていると説明されたキャスターに出来ない事はなかった。

スクライアの者達からユーノの事を聞き出す事。それにもう何の障害も無くなっていたのだから。こうして自身の事を大半知られたユーノとあまり知られていないキャスターという構図は出来上がった。

ちなみにユーノがキャスターの事をもっと教えてと頼んだ際、彼女は恥ずかしそうにこう返した。

女の秘密を知りたいって言うのは理解出来ますけど、もう少

し時間を置いてくれませんか？ 具体的には、後十年ぐらい。

えっと、それは逆に具体的過ぎない？

理由はよく分からないが、何となくその時のキャスターの目が危ない光を宿している気がして、ユーノはやや怯えるような声を返したのだ。そんな事を今でも思い出せるユーノだったが、それでもこう思うのだ。

(キャスターって、本当に僕を大事にしてくれるんだなあ)

周囲からユーノが見下されたり、或いは侮られたりしないようにそんな風に思ってくれているキャスター。その気持ちを感じ取り、ユーノは嬉しく思いながら歩く。既にキャスターは店先でどのアイスを頼むかを思案中のようで、楽しそうに色とりどりのアイスを眺めていた。

「ね、ね、マスター。どれも美味しそうですよ。迷っちゃいますねえ」

「迷ってるならダブルにすればいいよ」

「ダブル？ 二つ頼めばいいって事ですか？」

「違うよ。二段重ねにしてもらうんだ」

ユーノは苦笑するように店員へミントとチョコのダブルと注文した。それに笑みを返し、手馴れた手つきで店員が見事に二つのアイスを一つのコーンの上に載せた。

それをやや食い入るように見つめるキャスター。それをユーノは

受け取り、代金を渡す。そしてキャスターへ視線でこれがダブルだと告げた。それに頷きを返し、ならばとキャスターも店員へ注文した。

じゃ、じゃ！ 私はストロベリーとバニラでお願いしますっ！

その様子がいつもと違って本当に子供のように見えて、ユーノは少し呆気にとられるもすぐに嬉しそうな笑みを浮かべた。

（キャスター、もしかして今は素直な反応を見せてるんじゃないかな？）

そうだとすると意外な一面を見れたと思ってユーノは笑う。それを不思議に思いながら、キャスターは手にしたアイスへ舌を伸ばす。それを店員がやや苦笑気味に眺め、ユーノへ代金を払ってくれようように告げたところで彼の笑いは終わりを迎えるのだった……

食べ歩きは行儀が悪い。そう思ったユーノは、店の近くにあったベンチに座ってアイスを食べていた。キャスターとしては別にそこまで煩い事を言うつもりはなかったが、ユーノ自身が決めた事ならと何も言わず従った。

先程から、少し興味本位でユーノへ見えるようにアイスを舐めているキャスター。それがどこか卑猥な印象を受けるのは、ユーノをからかっているつもりなのだろうか。だが、生憎この時のユーノにそんな知識は当然皆無なため……

キャスター、そんな変な食べ方してると溶けちゃうよ？

不思議そうにそう彼女へ告げるだけ。それにキャスターはやはりかと小さく呟く。

「今のマスターが理解したらちよつと不安になってましたけど、やっぱり分かりませんよねえ……」

「えっと……ごめん」

「あ、謝る事はないですよ。私としては、マスターがこっちは完全に歳相応と分かったので色々と楽しみが出来ました」

私がしっかりと教えてあげないと。そう言つて気合を入れるキャスター。それが何故かあまり良い意味ではない気がして、ユーノはやや不安そうに彼女を見つめた。そして二人はアイスを食べ終えた後、その場を後にする。

街中を再び歩くユーノとキャスター。しかし、その会話はもう浮かれたものではなくなっていた。話題にしているのが、ユーノが来年度から通う事になる魔法学院に関してだったからだ。

キャスターは使い魔扱い。無論、学院へ連れて行く事は出来ない。そのため彼女は、ユーノが学院へ通う間しばらく会えなくなる。それをどうにかして解決する術はないかと考えていたのだ。

ユーノとしては、キャスターのその気持ちだけで嬉しかった。正直一人で心細いとの思いはある。それでも成長を期待し、帰りを待つてくれる相手がいるのは、何よりの励みとなると考えていたのだ。

「むむむ……やはり私はお留守番しか道はないですか」

「ごめんね、キャスター。長期休みになったら会いに戻るよ」

「それは嬉しいんですけどお……こうして過ごせるのが当分お預けになるのが……」

「……入学すればそうなるもんね。でも、まだ三ヶ月ぐらい先だから」

キャスターの寂しそうな声にユーノも同じような声を出すものの、最後は明るい声を出してそれを振り払おうとする。その空元気にキャスターが小さく微笑み、繋いでいる手を少し強めに握る。

「そうですね！　なら、それまでに魔術のお勉強を可能なだけしておきましょう」

「うん、お願い」

笑顔を向け合う二人。それを少し強くなってきた日差しが照らす。その光を受けながら、二人はクラナガンの街を歩く。あまりスクライアではお目にかからない最新機器などを眺めたり、本屋ではキャスターが日本語の本を見つけて少しだけ喜びを見せたり、そこから派生して日本がある地球の存在を確認し、いつか二人で行ってみる事を約束したりと、様々な出来事を経験して。

日差しが色を変えて、やや物悲しい雰囲気を漂わせるようになって、ユーノとキャスターは転送ポートへとやってきていた。半日近く歩き続けたが、元々遺跡発掘などを生業としているスクライア一族のユーノにとっては、そこまで肉体的には大した事はなかった。精神面はそうでもなかったが

キャスターの方もそれは同じ。さすがに疲れたのだ。とはいえ、それはユーノと同じく精神面だったが。異世界の、しかも大都會ともあり、キャスターとしては予想以上に珍しい物が多かったのだ。

（意外と疲れましたねえ。でも、収穫もありましたし……もし行けるのなら日本へ行って確かめたい事が出来ました）

（キャスター、軽く疲れてるみたい。これは帰ったら、揃ってすぐ寝ちやうかも……）

互いにややお疲れの顔をしている二人。それでも、視線を動かして相手を見るなり笑みを返す。それは、今日の時間がとても楽しかったという証。その気持ちを現すように、繋いだ手へ優しく力を込めるキャスター。それに気付いて、ユーノも嬉しく思っけて力を込める。

感じ合う温もりに笑みを深めるユーノ。キャスターはそんな彼を見て、姉の如き雰囲気小さく頷いて歩き出す。

帰ったら汗を流して早く寝ましようね、マスター。

そうしたいけど……それまで起きていられるかなあ……

ふふっ……じゃ、私と一緒に汗を流しましょうか？

そ、それは遠慮しておくよ。うん、頑張っけて起きておく。

キャスターの提案に少しだけ顔を赤くして慌てるユーノ。そんな彼に表面上は不満そうにしながらも、内心で微笑むキャスター。そ

とある一日（K&Amp;A）

「着いたぞ。ここがグレーム提督の家だ」

「へえ、凄いね。一瞬で着いちゃうんだ」

「そ。と言つても、転送魔法は座標がちゃんと分かってないと安心して使えないからね。どこにでも簡単に行けるって訳じゃないからさ」

エイミイの言葉にアルクエイドが納得するように頷いた。彼女としてはエイミイが言った感覚で捉えていたからだ。相変わらず自分の考えを理解するのが早いと思いつつ、アルクエイドは視線を周囲へ動かした。

周囲に民家はなく、少し離れた位置にある家らしい。庭もそれに広く、中々広い一軒家。彼女が抱いたグレーム邸の感想はそんなものだった。

あれから二ヶ月程が経ち、クロノは長期休暇になったのを利用して、アルクエイドを連れて一度地球へやってきたのだ。目的は魔術の存在を探るためと、アルクエイドの一度行ってみたいと言った街へ出かけるためだ。

そのために彼はもう一人の父とも呼べる”ギル・グレーム”提督へ許可を得て、ここイギリスにある彼の自宅庭に設置された転送ポートを利用してもらったのだ。

「それにしても……」

「ん？」

クロノのため息混じりの言葉に揃って視線を動かす二人の女性。

「本当についてくるとは思わなかったぞ」

クロノはそう言つてエイミーを見つめた。その視線に彼女はあははと軽く笑い、アルクエイドへ視線を向ける。それにアルクエイドは一瞬不思議そうな表情を返すも、エイミーがそこでウインクすると何かを理解したのか楽しそうに頷いてみせた。

「私が一緒に来てつてお願いしたんだよ。ほら、クロノは見知らずの相手と話すの不得意そうだし、私はちよつと世間知らずでしょ？

エイミーなら人懐っこいし、機転が利きそうだから」

「そーそー。それにあたしはアルクの友達だからね」

アルクエイドのフォローに笑顔で続くエイミー。あの日からアルクエイドと仲良くなったエイミーは、彼女をアルクという愛称で呼ぶ事にした。アルクエイド自身もそんな事は初めてだったため、喜んでそれを受け入れたのだ。

そんな二人を見つめ、クロノはやや疲れた顔をする。よくもここまで仲良くなったものだと改めて痛感していたのだ。しかし、即座に立ち直つて反論する事も忘れない。

つまり君達は、僕を役立たずと言いたいんだな？

その声に微かな怒りが混ざっていると気付き、アルクエイドとエイミーは揃って苦笑するもすぐに謝った。そんなつもりはないと言つて。無論クロノも本心から二人がそう考えていると思つていないし、二人も彼が本当に怒つているとは思っていない。

だが、男としての面子を軽く潰した形になったのは事実。故に謝罪をしたのだ。クロノへ少し言い方を考えるべきだったとの思いを告げて。それを理解し、クロノもそれを長く引っ張る事はしなかった。彼も立场上怒りを見せただけで、そこまで気にはしていなかったのだ。

それでも、やはりどこか歳相応の反応を見せてしまった。そんな彼の少年らしさに二人が内心で微笑んでいると知りつつもだ。

「まずは時計塔とやらへ行こう。そこに何か手がかりがあるはずだ」
「頼むね、クロノ。魔術師って結構性質が悪いからさ。上手く隠れてると思うんだ」

「ま、何とかなるでしょ」

「分かった。それとエイミィ、緊張しないのは構わないが気を抜き過ぎないでくれよ」

揃って歩き出す三人。向かうは一路ロンドン。時に新暦六十五年の事。地球では皇月と呼ばれる時期になったばかりだった……

時刻は昼を過ぎ、日は高く昇っていた。その日差しを浴びながら、クロノ達はロンドンにある一軒のオープンカフェで休んでいた。

「見事に何にも無かったねえ」

「そうだな。魔力反応はおろか、それらしい人物もいなかった」

気楽に笑うエイミーとやや思案顔のクロノ。その視線は揃ってアルクエイドへ向けられている。その相手であるアルクエイドはアイステイーを飲みながら空を見上げていた。

そう、彼女はもう確信したのだ。ここには魔術師はいないと。真祖である彼女の感覚でも、ここからは魔術的なものを一切感知出来ないのがその理由。今はそれをどうクロノ達へ切り出すかを考えていたのだ。

(どうしよっかな？ まだ絶対って訳じゃないけど、多分そうだよな。他にも魔術師がいる場所に心当たりがない訳じゃないけど……)

そう思い視線を戻すアルクエイド。そこには彼女の言葉を待つクロノとエイミーがいる。

「あのね？ 多分だけど……もう、この地球に魔術師はいないと思う」

「……そう、か。いや、そうじゃないかと思ったんだ。何せ、君は時計塔へ近付くにつれて不思議そうな表情をしていたし、今もどこか違和感を感じているように見えた」

「あー……そっか。アルクは色々凄いもんね。その関係であたし達には分からない事が分かったんだ」

アルクエイドの言葉から大体の事情を理解する二人。その頭の回転に感心しつつ、アルクエイドは肯定するように頷いてみせた。ちなみに彼女の体質についての詳しい話はクロノしか知らない。

「エイミーとリンディは彼から”生まれながらに普通とは違う特殊な体質”とだけ説明した。その中に魔力反応を感知する事も含めてエイミーは考えたのだ。」

「まあね。後は……もしかして、私が生きてた時代とは違う時代に来ちゃったのかも」

アルクエイドはそう明るくふざけ半分で告げた。すると、それを聞いたクロノが至って冷静な声でこう返し、彼女を驚かせた。

もしくは違う地球かもしれない、か？

その声はただ思った事を素直に問いかけただけに聞こえた。エイミーはやや呆気にとられ、アルクエイドはクロノを驚いたまま見つめていた。その視線を受け止めながら、クロノは手にしたアイスティーを一口飲んで言葉を続けた。

「君の話聞いた時からどこかで思っていたんだ。君の知る地球と僕の知る地球は本当に同じ場所なのかと」

彼はアルクエイドと出会ったあの日にその正体を聞いた時から思っていたのだ。地球の平行世界から来た存在ではないか、と。その根拠は何と言っても魔術というシステム。

秘匿されているとはいえ、そんなものが存在していれば魔力反応などで分かる。それに、魔術を使うにも関らず魔力保有者が未だに珍しい地球。そこから考えても妙としか言いようが無かったのだ。

だからクロノは確かめに来たのだ。魔術などの話を自分とエイミー、それにリンディだけに止めて。そしてどうやらその推測が正しいらしいとクロノは感じていた。管理外世界である地球。そこに存

在するはずの魔術と呼ばれる力。それは自分達の知る地球にはないと。

しかし、それはクロノへ一つの問題をもたらす。そう、アルクエイドの事だ。平行世界への行き来など見た事もなければ聞いた事さえない。その存在自体怪しまれていたのだから。

「……アルクエイド、君の住んでいた地球へ帰る方法なんだが」

言い難いが、きっと相手もそれを既に理解しているはず。そう判断し、クロノはやや真剣な声を出す。今から告げる事は非常に重いと考えながら。だが、そんな彼の気持ちを受け止める前にアルクエイドはあっさりこう告げた。

ああ、それなら大丈夫。私、その気になれば帰る事出来るから。

……………なんだって？

あまりの衝撃発言にさすがのクロノも耳を疑った。今、目の前の相手は何と言ったのか。そんな気持ちが表情にありありと浮かんでいる。エイミイなどは既に話が見えない場所へ行ったからか、いつもの調子でアイステイーを飲んでからアルクエイドへ問いかけた。

「帰る事が出来るってどうやって？」

「うんと……私、一言で言うなら”世界”と繋がる事が出来るんだ。その”世界”の反応を辿ればきっと帰れるはずだから」

「詳しい事を聞くと頭痛がしそうだが、詰まる所、君が僕へ滞在を希望したのは旅行のようなものか？」

「そんなとこ」

呆れと怒りと悲しみと、とにかく色々な感情を込めた声でクロノはそう問いかけた。それにアルクエイドがあっさりとした声を返したので、力無く項垂れる。それでもアルクエイドへ文句を言わないのは彼自身理解したからだ。勝手に自分が勘違いをしていたと。

アルクエイドは帰る手段に心当たりがあつた。だからこそ余裕があつたのだろう。あの時見せた寂しさのようなものは、きつと望まぬ場所に来た不運を嘆いたようなものだ。そう彼は結論付けた。

しかし、そこでふと気付く事があつた。それはアルクエイドが言った言葉。帰れるはず。それは断言ではなく予想。そこからクロノはある事に思い当たる。そのために顔を上げて彼女へ視線を向けた。

「少しいいか、アルクエイド。君は帰る方法に心当たりがあるだけで、それが確かかまでは分からないんじゃないか？」

その問いかけにアルクエイドは少しだけ意外そうな顔をして、すぐに嬉しそうに笑ってみせた。

「よく気付いたね。そうだよ。絶対とは言えないけど、可能性は高いだろうから心配しないでいいよ」

そんな風にどこまでも明るくあっさりと返すアルクエイド。だが、そんな彼女へ待ったをかける者がいた。

「そうなんだ。でも、駄目だよアルク。あたしは絶対大丈夫ってならないと行かせたくない。だって、アルクの方法って平行世界を渡るんだよね？ そんな大きな事をするのに、アルク自身も不安要素

がある時点であたしは反対。それに、それでアルクに何かあったら帰りを待つてる人も悲しむ事になるんだからね」

エイミイはアルクエイドの言葉に対してそう言い切った。それはいつもの声だが、どこか有無を言わせない力が込められている。それは友人となつた相手への心配。更にアルクエイドを待つている者達の気持ちの代弁だつた。

確かに会えないのは寂しいが、それでも危険な方法を使つてまで戻ってきて欲しいとは思えない。確実な手段が見つかるまでは、安全に暮らしていて欲しいと思うだろう。エイミイは少なくとも自分ならばそう思うからこそ、アルクエイドへ言い切れたのだ。

（あたしだつて大事な人がそうだとしたら、無理に帰つてこさせようとして何かあるよりも安全に戻つてこられるまで待つよって伝える事を選ぶし）

生きていればいつか会える。なら、少しでも危険性が有る内は簡単にさせる訳にはいかない。それがエイミイの考えだつた。それを感じ取り、アルクエイドは呆気にとられていた。自分とエイミイは赤の他人。それにも関わらず、ここまで自分の事を思ってくれる事にそのお人好しさと純粹さにアルクエイドは心から笑つた。それを聞いてクロノとエイミイは怒るでもなく、ただ黙つてそれを見つめた。分かっているのだ。何故彼女が笑っているのかを。

【アルクって、もしかしてあまり誰かから心配された事ないのかな？】

【かもしれないな。周囲とは違う力を持つてしまったようなものだ。それで疎まれていたのかもしれない】

アルクエイドの事を知っているクロノは、エイミーの問いかけに迫害されていた可能性を考えて答えた。明るく笑みを絶やさないアルクエイド。その影にはどれ程の闇があるのか。それをクロノは思い、一人息を吐いた。

元の世界には彼女を待っている相手がいるのだろう。だが、同じように待っている苦労や試練もあるのだろう。彼女と知り合った自分は、それを乗り越える手助けをしてやりたい。しかしそれは出来ない。そう考え、彼は無力感を感じていた。

(アルクエイドの行く道は彼女だけで進む道だ。それは分かっている。それでも、こうして知り合ったんだ。何かの力にはなってやりたい。彼女の事を知った以上は余計に……)

そう思うも、自分からそれを言い出す事は出来ない。アルクエイドはそれを喜ぶだろうが、きっと断るだろうと予想出来たからだ。だから、クロノは思うだけにする。それでも何か力になれるのなら、出来るだけ手を貸そうとは決めていたが。

そんな事を思うクロノの前では、アルクエイドが笑うのを止めて息を吐いていた。エイミーはそんな彼女に楽しそうな表情を見せている。アルクエイドがいい笑顔を浮かべていたからだ。

「あー、うん。やっぱりエイミーもクロノと同じだね。じゃ、とりあえずどうしても帰りたいって思うまでは帰らない事にするよ。で、その時は協力してくれると助かるかな」

「仕方ないなあ。じゃ、その時は友人としても執務官補としても手を貸すから」

「僕もだ。仮にもマスターらしいしな」

「お願いね。頼りにしちゃうから」

そこで会話も終わり、三人は店を出た。エイミイの提案で買い物をする事になったのだ。もう魔術がない事は確定に近い。次に向かうのは、それでもアルクエイドが行ってみたいと言う日本。そこへ行くための準備と題しての行動だ。

それが建前と知っているクロノだったが、それでもエイミイだけでなくアルクエイドまで乗り気となれば止める事は出来なかった。結局女性二人に連れられるまま、あちこちの店を回るはめになるのだった……

日も暮れ、辺りを夕闇が包む。クロノはグラム邸のリビングから外の景色を眺めていた。当初はホテルに泊まろうと考えていた彼だったが、それを見越したグラムが転送ポートとしてだけではなく、自宅を宿泊に使ってくれて構わないと気を遣ったのだ。

クロノはそれをすまなく思いつつも感謝を述べ、現状に至る。エイミイはキッチンで料理中。アルクエイドもその手伝いをしているが、その様子はさながら子供が初めて手伝っているような状況だ。

「ね、エイミイ。これはどうするの？」

「ん？ あ、それはね……」

楽しそうな二人へ視線を動かし、クロノは自身も気付かぬうちに小さく笑った。姉妹のように見えたからだろうか。それとも微笑ましく思えたからだろうか。どちらにせよ、クロノが浮かべた笑みは

優しいものだ。

あの買い物最後の最後を飾ったのは食料品店だった。それは、イギリスでの外食はあまりオススメ出来ないというリンディから忠告を受けたため。そう、かつて彼女は夫であるクライドと共にイギリスを訪れた事があった。

その目的は、長期休暇で自宅へ帰っていたグレアムに結婚式の仲人を頼むためだ。その際、二人で食べた昼食があまり美味しくなかったのだろう。故に彼女はクロノへその事を告げていたのだ。美味しい店があっても高いだろうから、出来る事なら自分で作った方がいいと。そこには、グレアム邸を使える事とエイミーが同行する事を見越したリンディの推理力があった。

「なあ、僕は本当に手伝わないでもいいのか？」

「「「いいよー」」」

一度断られた申し出だが、やはりする事がないと思ってクロノは再度手伝いを申し出た。しかし、それに二人は即答で返す。それがどこか幼く聞こえ、クロノは小さく苦笑し「そうか」と返してソファへ向かって動いた。

邪魔してはいけない気がしたのだ。女性二人での楽しい料理教室。そんな風に見えたからだろう。微かな寂しさを感じるも、クロノはそれでも静かにソファに座って料理が出来るまで待つ事にした。

後ろの方から聞こえるエイミーとアルクエイドの楽しそうな声を聞きながら、彼は軽い暇潰しとして買った新聞を読み出す。それと同時に一人今後の事を考えていた。

(明日は日本へ向かって、アルクエイドの行きたがっている街へ向かう。そこが彼女の知っている場所と全て同じではないと思うが、万が一もある。もしそこが本当に彼女の知る街だった場合、魔術の存在の有無も怪しくなるからな)

明日の予定などを思い出し、クロノはため息一つ。日本へ行つた事はないため、道中の詳しい案内はアルクエイドへ頼らざるを得ない部分があるのだ。空港に着いた後からが問題の連続かもしれないと思い、彼は一抹の不安を抱く。

するとそこへ食欲をそそる匂いがしてきた。思わず視線を動かすクロノ。その視線の先では味見をして表情を輝かせるアルクエイドと、そんな彼女の反応に自慢げな表情を見せるエイミイがいた。

まあ、何とかなるか。

それを眺め、クロノは誰にでもなくそう呟いて新聞を手にしたままキッチンへ向かって歩いていく。二人が手招きしているからだ。食事の時間となったと理解し、クロノは二人へ声を掛ける。

彼の手にされた地元の新聞の日付。それは五月五日となっていた。彼は知らない。これから彼らが行く国でロストロギア絡みの事件が起きているなどとは……

- - -
- - -
- - -

クロノのとある一日。無印中という事態です。原作の描写でも、彼

らが動いたのはあの次元震があればこそ。今回はまじかると違う原因でジュエルシード事件が起きるので、ユーノは行方不明と言う訳ではありません。

これでクロノの無印への介入が変化します。それがどういう形になるかは無印開始をお楽しみに。

遭遇編その1

「いらっしゃいませ。二名様ですか？ ……では、こちらへ」

どこかぎこちない接客。その言葉遣いも少したどたどしい。それでも対応された側が笑顔なのは、相手が金髪の可愛い少女だからだろうか。案内し終わり立ち去ろうとした時も、頑張つてと声を掛けられている。

「は、はい。ありがとうございます」

戸惑いながらも笑顔で答える少女。それはエプロンを着けたセイバーだった。なのはが学校に通うようになり、時間を持て余したセイバー。そんな彼女へ桃子が翠屋の手伝いを持ちかけたのだ。

初めこそ「接客は……」と渋っていたセイバーだったが、桃子の提案した新作優先試食権を聞いて即座に合意。こうして、セイバーは翠屋で働き出したのだが……

「お姉さん」

「え……？ あ、はい！ 今行きます」

かつては王として多くの要人や人と接していたため、そこまで難しくないだろうと思っていたセイバー。だが、それが客商売ともなると話は別だと理解するのにさして時間は掛からなかった。

「すみません。注文いいですか？」

「し、少々お待ちください」

まだ二組しかいないのに既に困惑気味のセイバー。それを眺め、桃子と士郎は小さく苦笑するのだった……

朝の時間を終えて軽い休憩をもらったセイバーは、休憩室の椅子に座ってテーブルに突っ伏していた。そんな彼女を桃子と士郎は微笑ましく見つめる。

あの後もオーダー提供やお会計等、セイバーは戸惑いながらもそれらをこなし、無事に朝の時間を乗り切ったのだ。勿論、桃子や士郎の手助けだけでなく、お客さんの暖かい気持ちもあればこそだが。

（接客とは、ここまで疲れるものなのですね）

そう思いながら、セイバーが考えるのは相手をした客の事。皆、セイバーの事を微笑ましく見つめ、頑張つてと声を掛けてくれた。その一言がどれだけ自分は嬉しかったか。自分には向いていないと思っても、その一言で頑張ろうと言う気になった。

（私も、単純なのかも知れません）

どこか笑みを浮かべ、セイバーはそう思った。なのはが帰ってくるまでまだまだ時間がある。なのはに笑われないようにしなくては。セイバーはそう自分に言い聞かせて立ち上がる。

「シロウ殿。教えてほしい事があるのですが……」

少しの時間も無駄にすまい。そんな思いを胸にセイバーは店内へと戻る。一方、その頃なのはと言えば……

「ね、今日学校終わったらウチのお店に寄らない？」

「翠屋に？」

「でもいいの？」

場所は学校の屋上。いつものように昼食を三人仲良く食べているなのは達だったが、突然の彼女の提案にアリサとすずかはそう不思議そうに返す。何気ない弁当をつつきながらの雑談。その中でなのはの言葉は二人にとって意外なものだった。

なのはの家が自営業なのは二人も聞いていた。そして、そこが翠屋という人気店である事も知っている。海鳴では結構な有名店なのだ。だからなのか、あまりなのはも翠屋の事は話さない。自慢しか出来ないから、となのはは苦笑してその理由を二人へ告げていた。

そんななのはがわざわざ自分からお店の話をするのは珍しい。アリサとすずかはそう考え、なのはを見る。その視線の意味する事に気付き、なのははやや楽しそうな顔を見せて口を開いた。

「実はね、今日からセイバーが働いてるんだ」

「へえ、あんたの言った年上の友達が？」

「そうなんだ。あ、それで？」

「にやはは、うん。一人で行くと、何だかお客さんじゃないみたいで気が引けて……」

身内ではなくお客さんとして行きたい。そうなのは言った。それに二人も納得し下校時に寄り道する事で話は纏まった。それがセイバーにとって大きな出会いに繋がるとは知らずに……

「ありがとうございます。またお越し下さい」

笑みを浮かべ、カップルを見送るセイバー。お昼のピークも過ぎ、店内も落ち着きを取り戻し始め、セイバーも僅かだが息を吐く。初めこそ戸惑う事も多かったセイバーだったが、忙しくなるにつれ、そんな事もなくなっていった。

厳密にはそんな余裕がなくなったのだ。やって来る客、怒涛の如きオーダー、それらの洗礼を受け、否応なくセイバーは鍛えられた。習うより慣れるとはよく言ったもので、セイバーは持ち前の集中力で教えられた事を全て覚える事が出来たのだ。

「セイバー、少し休憩していいわよ」

「そうですね。分かりました」

桃子の言葉にセイバーはまた一息吐き、奥へと向かう。そんなセイバーを土郎と桃子は嬉しそうな笑みを浮かべて見つめる。予想以上だったのだ。今までの暮らしでセイバーの事はそれなりに二人も知っている。

だから、初日も自分達が支えれば問題なく終わるだろうと思っていたのだ。だが、蓋を開けてみればそれ以上の動きをセイバーはし

ていた。いや、しようと努力した。それを感じ取り、二人は笑みを浮かべたまま互いを見つめる。

「……すごいな」

「ええ。集中力は家の誰よりもあるわ」

お客さんの反応も上々だし、と笑う桃子。その言葉に土郎も頷き、呟く。男性客が増えるだろうと。それに桃子が当然よと答える。それに自信満々だなとばかりに視線を桃子へ向ける土郎に、彼女はウインクと共に言い切った。

私の自慢の娘だもの。

そう断言する桃子に土郎はただ笑うしかなかった。しかし、内心では彼もそう思っているので否定もしない。故に、静かに注文のコーヒーを淹れ始めるだけだった……

校門を出て、翠屋へ向かうなのは達。歩きながらの雑談も、内容は翠屋とセイバーに関するものばかり。何が一番のオススメなのか、どんな性格の人か。それになのは常に答え続けるのみで、話題を振る事が出来なかった。

そんな事を取りとめもなくしているうちに、目的の翠屋が見えてきた。その外観にアリサもすずかも一度足を止め一しきり眺める。落ち着いたと言うよりは、どこか洒落た雰囲気のお店構え。でも、決して若者向けかと言えばそうでもない。万人を受け入れるような温

かさも感じるのだ。

「あ、あれだよ」

「へへ、オシャレじゃない」

「うん。すごく良い雰囲気」

それを感じ、笑顔で誉めるアリサとすずか。友人二人に褒められ、なのはは照れくさそうに笑う。それを恥ずかしく思ったのか、なのはは急ぐように店のドアを開ける。

「いらっしゃ……あら？　なのはじゃない」

「えへ、来ちゃった」

「「お邪魔します」」

軽く驚く桃子へなのはは照れくさそうに笑う。丁度そこへ後ろからアリサとすずかが顔を出し、小さくお辞儀した。それだけで何かを悟った桃子は、笑顔を浮かべ言葉を返す。

「いらっしゃい。それと初めまして。なのはの母で、桃子って言います」

「初めまして。アリサ・バニングスです」

「初めまして。月村すずかと言います」

礼儀正しく挨拶する二人に、桃子は内心良く出来た子達だと感心

していた。きつとちゃんとしたしつけを受けているのだろう。そんな風を感じる事が出来たのだ。そんな感心する桃子へなのは今一番気になっっている事を尋ねた。

「ね、お母さん。セイバーは？」

「えっ？ ああ、奥で休んでるわ。お昼は頑張ってたから」

そう告げると桃子は何か悪戯めいた笑みを浮かべ、なのはにこう言った。

「奥のテーブルに座って待ってなさい。すぐにオーダー聞きに行くから」

「いいの？」

「うん。なのはのお友達が来たんだから、今日は特別よ」

その言葉に嬉しそうな声を上げる三人。それを見て、微笑む桃子。やはり子供だなど、そう感じたからだろう。そんな微笑ましい光景を眺める桃子。それに気付かずなのは達は言われるままに店の奥へと歩き出す。

そんな一部始終を苦笑しつつ土郎は見ていた。桃子の考えている事が分かったからだ。案の定、桃子は店の奥へ消えて行く。セイバーに接客させるつもりだろう。そう予想し、土郎は小さく息を吐く。

（ま、なのはもそれが目当てみたいだな）

我が娘ながらいい性格をしている。そう土郎は笑いながらも考え、これからの事に思いを馳せる。セイバーは一体どんな反応を見せる

のだろうと、どこかで彼も楽しみにしながら……

「ゴメンね」

「いえ、十分休みましたから」

桃子の声にそう答え、セイバーは再び仕事へと思考を切り替える。桃子は、ちよつと厄介な電話対応でしばらく動けなくなりそうと言つてセイバーに手助けを願い出たのだ。

無論、セイバーはそれを断るはずがなく、素早く店内に戻ると言われた通りに水を三つ載せたトレーを手に奥のテーブルへ向かう。そこには、なのはと同じ学校の制服の少女が三人。一人は背を向けているが、二人はセイバーを見て　　何故か頷いた。

(? ……何かあるのでしょうか、私に)

その行動の意味が分からず、セイバーは首を傾げるものの、相手が子供でも仕事をしっかりこなさなければと、テーブルの横に立ち　　言葉を失った。

「にゃは、頑張ってるねセイバー」

「な、なのは? どうして……」

そう、なのははセイバーにこう言った。冷やかしには行かないから安心してと。それを聞きセイバーは内心安堵していたのだ。自分

が接客に不慣れだとしても、無様な姿を見せずにすむと。

なのはの前では、セイバーはしっかり者でありたかったのだ。既に、そんなイメージを自分で崩していると知らないで。そのため、目に見えて動揺するセイバーに、なのはは笑みをこぼすとアリサとすずかに視線を移す。

「アリサちゃん、すずかちゃん。この人がなのはの一番最初に出来たお友達のセイバーです」

「初めまして。アリサ・バニングスです」

「初めまして。月村すずかです」

「あ……は、初めまして。セイバーと言います」

二人の挨拶にセイバーもやっと思考を取り戻し、挨拶を返す。その態度はまだ落ち着きを失っていたが、それでも声は普段通りだったのだから大したものだろう。

そんなセイバーに二人は笑みを浮かべる。なのはの話していた通りだと改めて感じたからだ。年上だがどこか同じ歳ぐらいに感じる時があり、キリツとしているものどこか可愛い。なのはが簡単に話したセイバーの人物評。それは、実に的確に言い当てていた。

そんな事を思い出して笑う二人にセイバーは困惑顔。なのははその理由が分かるのか、同じように笑っている。だが、セイバーは完全に思考をリセットし、水をテーブルに置くとなのは達のオーダーを聞こうと伝票を取り出した。

「それで、ご注文は」

「あ、私はアイスレモンティーとチーズケーキ」

「なら、アタシはアイスミルクティーにショートケーキ」

「私もアリサちゃんと同じもので」

なのはが慣れた感じでオーダーを告げると、それに続けとアリサが告げた。すずかはそんなアリサと同じだったため、セイバーは既に慣れつつある手つきでそれを書き込むと再度それを読み上げる。

それが間違っていないかを確認し、なのは達が頷いたのを見てセイバーは伝票をしまつと、そこで軽く一礼した。それがどこか様になっていて、思わずなのは達は言葉を失う。

「かしこまりました」

その去って行く後姿を見て我に返る三人。凜々しいという表現がピッタリのもだった。おそらく、あれがエプロンではなくちゃんとした正装ならばもっと映えるだろう。そう思い、ふとアリサとすずかは自分達にも同じような存在がいた事を思い出した。

（小次郎も髪型さえいじれば洋装いけるのよねえ……着たがらないけど）

（ライダーのメイド服も似合ってるし、ドレスとかも綺麗だと思うなあ。一度着てもらおうかな？）

同居する家族のような存在。その事を思い出すと同時に、いち早くすずかは思いついた事があった。

「そうだ。なのはちゃん、アリサちゃん、今度うちに遊びに来て。」

是非会わせたい人がいるの」

「あ、もしかして、それってこの前言ってたライダーさん？」

「ライダーさん？」

アリサの口から出た人物名に小首を傾げるなのは。どことなくセイバーと似た印象を覚えたからだ。すると、そんな三人へやや上ずった声が聞こえてきた。

何ですって?! ライダー!?

それはオーダーを告げ、なのは達の所へ戻ってこようとしていたセイバーの声だった。その顔は信じられないものを聞いたと言う表情だ。だが、周囲の目を考えたのかセイバーは小さく咳払いをすると、小さく頭を下げて謝り出す。

騒がしくして申し訳ないと思ったからだ。そんなセイバーがペコペコと頭を下げる様が可愛らしく見えたためか、周囲の客達も何か言う事はなく苦笑や微笑みを返すだけだった。

それに安堵すると、セイバーは素早くなのは達のテーブルへ近付いた。そして、やや困惑するすずかの目を見て問いかけたのだ。その人物は女性か。その髪の色は紫で、恐ろしく長くないか。そして最後に、妙な眼帯をしていないかと。

その問いにすずかは驚きながらも、全てを肯定した。どうして知っているのだろうとさえ思ったのだ。その質問にセイバーは驚きを隠せぬまま、こつ答えた。

「その前に頼み事をされてくれませんか、スズカ。ライダーへこつ

伝えて欲しいのです。セイバーが話したい事がある、と」

「えっと、いいですけど……」

「先程の問いかけの答えを聞きたいのですね。わかっています。私は、以前彼女と共に暮らしていました」

それだけ告げると、セイバーはどこか遠い目をしてテーブルから離れていく。その後姿を見てなのは胸が締め付けられるような感覚を覚えた。セイバーは自分の過去を話したがらないのだ。

それを土郎達は特に気にせず暮らしている。だが、なのはだけは少しかセイバーの過去を聞いた事がある。そのキツカケは外国人であるはずのセイバーがやたらと日本慣れしている事。

その理由を聞かれたセイバーが教えたのは、衛宮邸での日々の一部。高町家と同じように自分を受け入れ、家族同然に接してくれたとセイバーは懐かしそうに語ったのだ。

その時、確かにセイバーは言ったのだ。戻れるのなら戻りたいと。勿論、なのは達と離れたいと言う事ではない。もう一度会えるなら、会ってみたいと言う事だとセイバーは優しく告げた。

(でも、セイバーにとってそのお家は……大切な思い出なんだよね)

なのははそんな事を思い、浮かんでしまったある考えを必死に否定する。

(違う！ セイバーは私を置いてどこかに行ったりしない。だって……)

思い出すのはあの出会いの夜。友達として名前を名乗り合った後、

告げられた約束のような言葉だ。

私は、なのはの剣になります。そして盾にもなります。しかし、なのはが望むのなら……私はただ、貴方の友でありましょう。剣でも盾でもない。ただなのはの友として、傍に。

あの日、セイバーはそうなのはへ誓った。だから、となのはは思う。

（絶対にセイバーはいなくなったりしない。私と約束したんだから！）

このなのはの思いはその後変わらず強く残り続ける。決して裏切られる事はない。そう信じていたからだ。だが、彼女は後に知る。傍にいるという事が意味するのは、必ずしも自分が考えている状況だけではないのだと……

.....

サーヴァント遭遇編その一。

衛宮邸組の二人がついに出会います。セイバーとライダー。二人が出会う事で一体何が起きるのか？

その模様はこの次で……

遭遇編その2

「セイバー、ですか」

「うん……」

すずかから告げられた内容はライダーを驚かせるには十分だった。それは、自分以外のサーヴァントがいたという意味だけではない。近くにサーヴァントがいたにも関わらず、今日までその存在に気付かなかった事でもあるからだ。

それが彼女の中にあつたある答えを肯定しているように思え、ライダーは一人思案する。それはセイバーもまた、自分と同じ状態になっているのではないかとの考えだ。

（もし私だけでなくセイバーもそうになっているとすれば、この召喚は厄介な意味を持つ事になりますね）

ライダーの中に生まれた一つの推測。そして、それはある意味あつてはならない事。それを確かめるためにも一度会う必要がある。そう思い、ライダーはすずかへ視線を向けた。

「話がある、と言っていたのですね？」

「う、うん」

「そうですか……」

やはり会わねばならない。仮に推測が外れているとしても、セイバーと情報交換をしておくに越した事はないと判断したのだ。だが、

その前にすべき事がライダーにはあった。

不安そうな顔で自分を見ているすずかを安心させる。それが今ライダーがしなければならぬ事だ。そう思っただけで優しい笑みを浮かべ、ライダーはすずかの髪を撫でる。それにすずかがくすぐったような笑みを見せたのを見て、彼女も笑みを浮かべた。

そして、心からの想いを込めて告げる。スズカの考えているような事にはなりません、と。だから心配いらぬとライダーは微笑む。すずかはまだ不安が残っているものの、そのライダーの笑みに笑みを返す。ライダーを信じよう。それがすずかの想いであり、導き出した結論だったのだから……

いつものように午前の仕事を終えると、ライダーはノエルとファリンに許可を得て屋敷を出た。向かう先は翠屋。そこに居るのである。うせいバーに会うためだ。

忍にねだり、創ってもらった専用自転車を駆り、ライダーは疾走する。その様はまさに風。凄まじい速度で道を駆け抜けるライダーは、その視線の先に目当ての建物が見えるや否やブレーキをかけると同時に自分の足を地に着け、車体を斜めに傾ける。

土煙さえ上がりそうな勢いで、自転車は店先で見事に停止。周囲がそんな光景に言葉を失っている中、ライダーは何事もなかったように鍵を締めて店の中へと入って行く。

「いらい……」

「お久しぶりですね、セイバー」

思わぬ来客に笑顔のまま固まるセイバー。ライダーはそんな彼女へあっさりとその答えた。セイバーが固まった理由はライダーのメイド姿にあった。見事に着こなしているからではない。その裾が擦り切れ汚れていたからだ。それも、尋常ではないほどに。

未だ固まるセイバーにライダーは首を傾げる。そして、その視線を追い理由を理解した。自分の服が汚れているからだ。店内を汚す訳にもいかないと、わざわざそれを払いに外へ出るライダー。その際に鳴った鈴の音で、セイバーはようやく我に返った。

「桃子、すみません少し外します!」

「え、セイバー?」

「このお詫びは必ずします。では!」

戸惑う桃子にそう一方的に言い放ち、セイバーは店を出た。そして、店先で汚れを払っているライダーの前に立つと、その手を掴み走り出す。その後ろから桃子の声がしたのを感じ、セイバーは更に速度を上げた。

「何を急いでいるのです?」

「私にも色々あるのです!」

「やれやれ……」

その色々を教えて欲しいのに。そう思うもセイバーの表情にどこ

か懐かしさを感じ、ライダーは密かに笑う。やがて、視界に海が見えてくる。どうやら向かっている先はその近くにある公園らしい。そのライダーの予想通り、海が一望出来る公園へ着くとそこにあるベンチへセイバーは座った。ライダーもそれに倣うように座った後はただ黙った。その視線は共に海へと向けられていた。

しばしの沈黙。互いに言いたい事や聞きたい事が沢山あるのだ。しかし、どこから話せばいいのか切り出しかねているというところだろう。だが、このままでは埒が明かれないと思ったのか、ややあつてセイバーが意を決して口を開いた。

「私がここに来たのは、もう一年以上前になります」

セイバーの独白にライダーは視線を送る事で続きを促す。それに応じるように、セイバーは召喚されてから今までの事を簡潔に、そして噛み締めるように語った。

その内容にライダーも思わず聞き入ってしまった。それは、高町家の対応が月村家と同じだったから。突然現れた異常な存在を家族として扱ってくれる。そんな共通点を見出し、ライダーは思わず咳く。

「……似ていますね」

私の所もそうなのです。そう言って、ライダーは自分の事を語りだした。召喚された時、目の前の少女に間桐桜の姿を重ねた事。彼女も人には言えない悩みを抱えていた事。そして自分を受け入れ、家族だと思ってくれている事。

それらの話を聞き、セイバーはどこか楽しそうに咳いた。

「……似ていますね」

「ええ。まったくです」

そう言い合う二人。その表情は苦笑い。そりが合わないのは互いに認めるところではあるが、なのは何故こつも現状が似ているのか。それを考え、同じ結論に行き着いたからだ。

「シロウ達のせいですね」

「それを言うならおかげですよ、セイバー」

そう、二人が久しく忘れていた人との繋がりとその温もり。それを思い出させたのは衛宮士郎。そして、凜や桜、大河にイリヤといつた衛宮邸の面々。あの場所で得たその暖かさが自分達の中に残り、きつと寂しい想いを抱いていた少女達の下へ呼んだのではないか。そう二人は結論付けた。

その後、しばらく二人は無言で景色を眺めた。その沈黙は初めとは違い、どこか穏やかなものを漂わせていた。しかし、ライダーがその雰囲気破る発言をした。それはあの推測を確かめるため。

「セイバー……」

「何です?」

「おかしいとは思いませんか?」

ライダーは憶測に過ぎないと前置きしたが、ある一つの結論を告げた。自分達の記憶が残っている事や、魔力供給を受けていないの

も関わらず、未だに現界出来る事。そして、これはライダーしか分からなかったが……

「霊体化出来ない、ですか？」

「ええ。召喚された当日に霊体化しようとはしました。魔力供給を受けていない事は、スズカとのラインを感じない時点で把握してしましたから消耗を抑えようと思ったのです。しかし……」

何故か出来ず、そこでライダーは確信した。即ち 受肉していると言つ事を。

「ば、馬鹿な……では我々は、守護者として召喚されたと言つのですか!？」

「私はそう考えています。それ以外にこの状態を説明出来ないのです」

信じられないといった顔のセイバーに、ライダーは無表情でそう返す。霊体化はライダーにとっては出来て当然の行為。だが、当然例外がある。それは”世界”によって召喚された場合だ。

消滅の危機から世界を救うために召喚される場合、サーヴァントは生前と同じような状態となる。つまり、肉体を与えられるのだ。セイバーはそれが分からなかった。彼女は特殊なサーヴァント故に肉体を持ったままだったからだ。

しかも、あの衛宮士郎に召喚された際、セイバーはラインが繋がれていない状態だった。それもあってなのはどのラインが繋がれていない事も平然と受け止めてしまっていたのだ。

「もし貴方の考えが正しければ、なのはやスズカは……」

「ええ。いずれ世界の破滅に関するのでしょうか。私達はそれを守るのか、下手をすれば……」

そこでライダーは口を噤んだ。その理由はセイバーにも分かる。もしなのは達が世界を救う人間ならば、彼らはそれを守護する立場だ。しかし、もしなのは達が世界を破滅させる人間ならば、彼らはそれを排除する立場へ変わる。

現時点ではどちらとも言えないのだ。なのは達が世界を救う可能性を持つ人間なのか。それとも破滅に導く可能性を持つ人間なのか。願わくば前者であって欲しい。そう二人は心から願った。

「……とにかく、もしかするとこの街に他のサーヴァントも呼ばれている可能性があります」

「そうですね。自分だけならともかく、こうして貴方もいた。ならば、七騎全員が呼ばれていても納得します」

「まずはスズカやナノハの周囲です。可能性が高いのはその辺りでしょうから」

「分かりました。では、アリスにもそういう存在がないかをなのはに聞いてもらいます」

セイバーの言葉にライダーの思考が止まる。そんなライダーに、セイバーはどこか不思議そうな表情を返す。何か気になる事でもあっただろうかと思ったのだ。ライダーはやや考えた後、躊躇いがちに口を開く。

スズカの話では、アリスの家には最近住み込みとなった小次郎と言う名の男がいるそうです。

その瞬間、セイバーが息を呑んだ。小次郎との名を聞いて彼女が思い出すのは、柳洞寺で戦ったあの侍だったからだ。

「……アサシンがその名を名乗っていました。佐々木小次郎、と」
そこまで言って、セイバーは深呼吸をしてライダーの方を向いた。その目には何かを決意したような光が宿っている。

「私に任せてくれませんか？ 彼とは、少し因縁がありますので」
「そうですね。ではお任せします。ですがセイバー、これだけは言っておきます」

ライダーはそう言うことや優しげな表情を浮かべる。それがセイバーには少々意外だった。今までライダーが自分へそんな表情を見せた事が無かったからだ。

そんなセイバーへライダーは囁み締めるように告げる。それはあの衛宮邸での日々を過ごした相手への気持ちを込めたもの。親しいとは言えなかったが、それでも時には笑みを浮かべ合った事もあった友人への気遣い。

決して怪我などしないでください。ナノ八達が悲しみますので。

……ええ、約束します。貴方の気持ちを受け取った私は決して負けません。

セイバーはそう言ってライダーへゆっくりと右手を差し出す。それを不思議そうに見つめ、ライダーは尋ねた。これは何のつもりかと。それにセイバーはやや恥ずかしそうな顔で答えた。

ライダーと友になりたい。その気持ちを受け入れてくれるのなら、その証に握手をしてくれないかと。それに呆気にとられるライダーだが、小さく笑みを浮かべるとそれを握る。

「フフツ、貴方も可愛らしい事を言うんですね」

「い、いけませんか？」

「いえ、良いと思いますよ。ナノハの影響ですか？」

「きつとそうだと思います。さつきも言いましたが、出会っていきなり友になりたいと言われたので……」

そこから二人は今までにない程笑顔で話し出す。どこか嬉しそうに、そして懐かしむように。その手はもう離れていたが、心はしっかりと繋がれている。そんな事を互いに思いながら昔話に花を咲かせる二人。その横顔を春の日差しが照らしていた……

学校から帰るとすぐにすずかはライダーを捜した。いつもなら一番に出迎えてくれるはずのライダーが出迎えてくれなかったからだ。洗濯物を取り込んでいるファリンを見つけ、ライダーの事を探ねるすずかへ返ってきたのは出かけているとの答え。

それでもすずかはどこか落ち着けなかった。セイバーに会いに行

っていると理解したからだ。すずかはライダーが絶対に戻ってくる
と信じている。信じているが、怖かったのだ。もしかしたら、ライ
ダーが昔の知り合いの下へ行ってしまうんじゃないかと。

（早く、早く帰ってきてライダー……っ！）

そんなすずかの願いが届いたのか部屋のドアをノックする音がす
る。それに飛び跳ねるように反応し、すずかはドアを開けた。そこ
には、彼女が待ち望んでいた姿があった。

「どうしたのですか、スズカ。そんなに慌てて……」

そこには、驚いた顔のライダーが立っていたのだ。その手には翠
屋と書かれた箱がある。セイバーとの話を終えたライダーは、自転
車を取りに戻るついでにと翠屋でシュークリームを人数分買って帰
ったのだ。勿論セイバーへ対応を頼み、その様子を見てライダーは
色々とからかった事は言うまでもない。

すずかの反応と表情から何かを悟ったライダーは、小さく微笑む
と手にした箱を見せてこう告げた。

「これからシノブ達とティータイムと洒落込もうと思ひまして、ス
ズカを誘いに来たのです」

もう三人共待っていますよ。そうライダーに告げられ、すずかは
嬉しそうに頷いて部屋を出た。前を歩くライダーと並ぶようにすず
かは歩く速度を速める。それに気付いたライダーが、歩調を少し緩
めすずかに合わせた。

するとすずかはその気遣いに気付いて嬉しく思い、ならばと空い
ているライダーの手を握って微笑んだ。その手に感じる温もりにラ

イダーも知らず笑みを浮かべている。

「ありがとうライダー」

「どういたしまして」

互いに微笑み合い、二人は歩く。その視線の先には、椅子に腰掛け同じように笑みを浮かべている忍達の姿があった……

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

遭遇編その二。加筆修正版。かなりまじかると変化しています。

次回は小次郎とセイバーの再会をお届け。

遭遇編その3

「で、よく分かんないけど、セイバーさんとライダーさんは知り合いらしいわ」

寝る前のいつもの時間。現代教室を終え、今日の出来事を語るアリサ。そのアリサの話を聞いた小次郎は驚きを顔に張り付けていた。端正な顔立ちを固め、幽霊でも見たのかと言わんばかりの表情だ。それはそうだろう。もう会う事などないと思った相手の名を聞かされたのだ。それも、一人は彼にとっては好敵手と呼べる相手。あの山門で剣を交え、初めての昂りを味あわせてくれた存在の名だったのだから。

「ありさ、もう一度言ってくれぬか？」

「ん？ 何を？」

「今日翠屋なる店で出会った者の名を」

初めて聞く小次郎の真剣な声に、アリサは戸惑いながらも答えた。

「……セイバーさんよ」

一体何なのよ。そう呟くアリサ。そんなアリサから視線を外し、小次郎は外の月に目をやり、内心で喜びを溢れさせていた。己が好敵手と認めた相手が、もう二度と会えぬと思っていた相手がこの町にいる。それが小次郎の眠っていたものに火を付けた。

ふつつつと燃え上がる内なる炎を感じながら、小次郎は笑う。中々世の中は狭く、そして粹な計らいをすると思いながら。その表情

を今までした事がない程に輝かせて。

（待っておれセイバー。あの時の楽しみを、喜びを今一度味わおうぞ）

再戦を想像し高まる気持ちを抑える小次郎。そんな彼をアリサはどこか寂しそうに見つめていた……

あくる朝、小次郎は日課の庭仕事を早めに終わるとセイバーに会いに行こうとした。だが、一つ大きな問題があった。そう、小次郎は屋敷から出た事がないのである。

その一つの理由として、バニングス邸の広さがある。つまりその庭だ。その庭を世話している小次郎としては、のんびり世話をしていれば時間が過ぎていく。早朝に剣の鍛錬をし、朝食後はアリサが帰宅する夕方近くまで世話をする事。それが彼の一日の過ごし方だったのだ。

勿論、一番大きな理由がある。それはアリサが外出を禁じたからだ。アリサはいつか自分が小次郎を案内してやろうと考えて、そう命令した。それに小次郎が従う義理はないのだが、それを少し匂わせただけでアリサが涙目になったため、彼は今まで庭弄りをして過ごしてきたのだ。

「ふむ、道を聞こうにも鮫島殿はおらぬし、下手に出かけ迷いでもすればありさが笑うのみ。はてさてどうしたものか」

そう考え、結局小次郎はこの日出掛ける事を諦めた。それはある事を思い出したからだだった。

（セイバーは、今翠屋なる茶屋で働いておるとありさが言っておったな。ならば、昼間行ってもあしらわれるだけか）

こうして、小次郎は残念そうなため息を吐くと庭へと戻っていく。会えぬならせめて刀を振り、邪念を無くそうと決めたからだ。本来の格好に戻り、愛刀の物干し竿を構えて小次郎は刀を振るう。その姿は内心を反映してか、美しくもどこか悲しそうに見えた……

学校からの帰り道、アリサは習い事に向かう車の中で、一人不安に駆られていた。原因は昨夜の小次郎の様子。小次郎はあまり物事に執着しない。そんな小次郎がセイバーの名前には異常な反応を示した。

無断外出は禁じているが、元々小次郎はそれに従う必要がない。それをアリサは理解しているからこそ不安だった。おかげで今日の授業中は、指名されたにも関わらずそれに気付かず軽く叱られたのだ。

（あいつ、セイバーさんと知り合いだっていうのかしら？ 時代錯誤待のくせに英国女性と知り合いなんて……）

本人が聞けば、それとこれがどう関係すると呆れる所だろうが、今のアリサに正論は意味を持たない。そう、アリサはきつと認めないだろう。その感情が嫉妬と呼ばれるものだと言う事を。

矛先こそ小次郎に向けているが、不安の原因はセイバーが可愛ら

しい女性だった事ともう一つある。それも人が聞けば呆れるか、もしくは微笑ましいと感じるもの。

(あいつ、アタシの名前は片言っばいのに、セイバーさんの名前は綺麗に発音してた！)

昨夜、無意識に小次郎はセイバーの名を呟いた。それをアリサは確かに聞き、余計に腹を立てていたのだ。自分はどこか違和感を感じるにも関わらず、同じような響きのセイバーは流暢に発音した事。それがアリサには不快だった。

「帰ったら……絶対色々聞き出してやるんだから！」

そんなアリサの決意に比例するように車も速度を上げる。そして自宅に到着するや否や、アリサは怒りを抑えぬままに車から降り立った。そんな彼女に小次郎は困惑していた。

いつものように帰ってきたアリサを出迎え、いつものようなやり取りがあるかと思えば、彼女は彼に何も言わず屋敷の中へと向かって行ったのだ。こんな事は今までなく、しかも小次郎には原因が分からない。ただ、恐ろしい程不機嫌である事だけは察していた。

「すまぬが鮫島殿、ありさの事について何か知っていれば教えてくれぬか？」

「……それが、私にもさっぱり」

「そうか。……つまらぬ事を聞いたな、許せ」

アリサの傍付きである鮫島に分からないとなると、小次郎に取れる方法は一つしかなかった。その方法を考え、小次郎は苦笑い。と

言うのも、それは直接尋ねるといつ至ってシンプルなもの。

(私も変わったものよ)

そう思い、小次郎は食堂へ向かう。もうすぐ夕食の時間だ。アリサが来るのを待ち、そこで何に怒っているのか聞こうと小次郎は思っていた。

一方のアリサと言えば、自室のベッドに横たわって小次郎に対して自分が取った行動を後悔していた。せつかく小次郎が普段と同じように接してくれたにも関わらず、アリサは何故かそれを無視して逃げるように部屋まで来ていたからだ。

あそこですいつものように会話していれば。そんな思いが先程から頭を巡る。もし、これが完全に自分が悪ければ何の躊躇いもなく謝罪する事が出来るのがアリサである。しかし、今回はアリサの中では小次郎が先に悪さをした。

よって、アリサは自分だけが謝る事はないと思っている。故に悩み苦しんでいた。

(悪いのは小次郎なのよ！……でもでも、アタシの態度も問題よね……)

「あゝ、どうしたらいいのよっ!!」

そこにアリサのお腹の鳴る音が響く。ふと時計を見れば夕食の時間。どんな状況でも正確に栄養摂取を要求する体へ、呆れたように小さくため息を吐くアリサ。結局、未だに結論を出せぬまま食堂へ向かう。その表情は、まるで死地に赴く戦士のようだった……

普段ならば出てきた料理を小次郎が尋ね、それにアリサが答えたり、あるいはその日の出来事を互いに語ったりするのだが、この日は珍しくそうではなかった。

理由はアリサが言い出せなかったのでも、小次郎が聞かなかったのでもない。この日は、たまたまアリサの両親が揃って食事に参加できたのだ。

「どうだいアリサ。学校の方は？」

「すごく充実してるわ、パパ」

久しぶりに会う娘に満面の笑顔で接する父。彼も愛娘と過ごす時間を多く取りたいと思っているのだが、仕事が忙しい身では中々そうもいかない。そのため、こういう機会がある時は一秒さえ噛み締めるように過ごすのだ。

父と笑顔で話すアリサの横に座る小次郎は、彼女の母と会話をしていた。アリサの事を夫同様気にかけている彼女としては、その変化を目ざとく感じ取っていた。その原因となっているのが小次郎だろうと、そう確信しながら。

「小次郎さんはどうです？ 少しはウチに慣れましたか？」

「そうさなあ……。未だにまなーと言うものには戸惑うが、大体の事は理解したかと」

ただのボディガードに過ぎない小次郎が、こうしてアリサの両

親と食事出来るのは、彼らが恩人である小次郎を大層気に入っていたからだ。言動が古風ではあるが風流を理解し、今時には珍しい程義理堅い。

その剣の腕が立つにも関わらず、それを自慢もせずただ愚直なまでに高みを目指している事も高評価だ。何より、アリサが慕っているのが一番大きい。

仕事であまり傍にいてやる事が出来ない自分達に代わり、兄のようになりサを見守ってくれている。それに伴ってか、アリサの笑顔が増えたと言う報告も二人には入っている。

それを二人は聞き、こうしてアリサへ会う度に実感するのだ。故に小次郎へ言葉にならない感謝の気持ちを抱いていたのだ。もう本人へそれを伝える事はしない。それを以前一度言った事があるのだが、小次郎はそんな事はないと言って否定したのだ。

私がありさを変えたのではない。ありさ自身が己を変えただけにすぎん。そして、それは両親の教えと日々があればこそであるうよ。

その言葉を聞いて、二人が益々小次郎へ好感を抱いたのは言うまでもない。だからこそ理解したのだ。小次郎の在り方がアリサへ良い影響を与えているのだらうと。

「そう言えば、毎日小次郎君は庭の手入れを良くしてくれているそうだが」

「私の単なる気晴らしよ。気にする事もない」

「あらあら、でも本職の者達が中々の腕だと誉めていましたよ?」

「それは重畳。私の気晴らしが役に立って何よりよ」

後は、自分達に対して特別な対応をしない事。誰を相手にしても己を崩さず、乱さず、淡々と振舞う。それが小次郎の良い所だと二人は思っている。

こうして久しぶりの家族揃ったの食事も終わり、アリサは早速と上機嫌なままで帰宅の際の事を謝ろうと小次郎の下に駆け寄った。しかし、それに小次郎は、たまにしか会えない両親との時間を大切にしろと告げて与えられている部屋へ歩いて行ってしまったのだ。

その背中を見つめ、アリサは少しだけ言葉を失っていた。それはつまり自分のした事を気にしていないと言う言外の宣言と受け取ったのだ。自分が散々悩んだのが馬鹿らしく思えたが、その言葉を実行する事にした。

何故なら、そう告げた時の小次郎はアリサの良く知る表情だった。リビングへ向かおうと小次郎へ背を向けるアリサだったが、一度だけ振り返った。視線の先にある少し離れた背中へアリサは小さく呟く。

……ま、今回はこれでキャラにしとくわ。

アリサはそう呟くと、笑顔を浮かべて来た道を戻る。両親に色々と話したい事がある。まずは最近出来た友人の事を話したい。その思いを胸にアリサは駆け足で通路を駆けて行くのであった。その離れていく足音を聞いて、小次郎がどこか微笑みを浮かべていると知らずに……

翌日、アリサは普段の彼女に戻っていた。小次郎は結局昨日の不機嫌の理由が分からぬままだったが、機嫌が良くなっていたのでよしとした。

「じゃあ、行ってくるわ」

「気をつけてな。おお、そうであった。ありさ、少し頼みがある」

小次郎のその声に元氣良く歩き出していたアリサの足が止まる。振り向き、視線で用件を尋ねるアリサ。それに小次郎は神妙な面持ちで切り出した。

「翠屋なる茶屋へは、どのような道で行けるか教えてくれぬか？」

「……やっぱりそれか。教えてもいいけど、アタシが帰ってきてからね。それまで待ってなさい」

そう言い切って、アリサは小次郎の答えも聞かずに歩き出す。それを何も言わず見送る小次郎。その顔にはいつもの笑みが浮かんでいた。やはりこうでなくては。そんな事を考えているような笑みだ。こうして小次郎はいつものように日課を終えてアリサを待った。そしてアリサが帰宅すると、小次郎は無言を言わず彼女を連れて屋敷を出た。車で送ると鮫島が言ったのだが、アリサは歩きで構わないとそれを断った。それを聞いて、鮫島はその理由を察したのだろう。どこか苦笑気味に「お気をつけて」と見送ったのだ。

アリサに連れられて歩く小次郎は、初めて見る海鳴の町を興味深そうに眺めていた。目に映るもの全てが小次郎にとっては未知のものばかりだったのだ。街灯に電信柱、信号機に横断歩道。

目に映るそれらを子供のよような表情で不思議そうに尋ねる小次郎。そんな彼に、アリサは呆れながらもどこか嬉しそうにそれに答える。端から見れば、それは滑稽にしか見えないだろう。だが当の本人達には楽しい時間であった。特に、この機会を狙っていたアリサにとっては。

そんな時間もやがて終わりが来る。翠屋に着いたのだ。そして、その店先にセイバーとなのはがいた。セイバーはエプロン姿ではなく、普段着で。アリサがなのはを通し、小次郎の事を伝えておいたためだ。

実は、もしアリサがなのはへ小次郎の事を伝えなかったとしても同じ結果になっていた。何故なら、なのははセイバーからアリサへアサシンという名に聞き覚えがないかを確認してくれと頼まれていたのだ。

そんな事も知らず、小次郎は目に映るセイバーから記憶に残っている雰囲気と同じものを感じ、静かに笑みを浮かべる。きつと自分と同じ感覚を相手も抱いているはず。そう思いながら、小次郎はセイバーへ声をかけた。

「久しいな、セイバー」

「ええ、アサシンも変わらぬようで何よりです」

「……何処が良い場所はあるか？」

「……こちらへ」

挨拶もそこそこに小次郎の申し出を受けて、セイバーは内心でやはりと思いつつもそう返して歩き出す。アリサはその後を追おうと

して、その手をなのはに掴まれて止められた。

疑問を浮かべるアリサになのはは無言で首を横に振る。邪魔になるから行ってはいけない。そうなのはが言っているようにアリサは思った。思わず残る片手を握り締める。悔しいのだ。見れば、なのはの空いている手が強く握られているのか小刻みに震えている。

(そっか……なのはもアタシと同じ気持ちなのね)

視線を戻せば、既に二人は見えなくなっていた。アリサはそれをどこか寂しく思いながらも、やり場の無い怒りと共に吐き出した。

小次郎の……バカ。

その眩きは夕闇の風に溶けて消えた……

町外れの山の中。士郎達が朝の鍛錬に使っている場所に二人はやってきた。人気のない場所であれば問題がある。それを互いに理解していたからだ。

「まさか貴方までいるとは思いませんでした」

セイバーはそう言って本来の鎧姿へと変わる。その手には風を纏った聖剣を携えて。

「それは私の台詞よ。よもやお主が居よう等とは思わなんだ」

小次郎もそれに応じるように本来の着物姿へ変わる。その手には愛刀の物干し竿を携えて。

「一応確認を。どうしてもやるのですね？」

「応よ。試合うぞ、セイバー」

その声で小次郎の雰囲気が変わる。同時にその構えがセイバーも良く知るものへ変わる。

”燕返し”と呼ばれる小次郎の必殺剣。本来”魔法”である多重屈折次元現象を引き起こし、同時に神速の斬撃を三発叩き込むもの。簡単に言えばただそれだけ。しかし、それがどれ程恐ろしい技かはその身で受けた事のあるセイバーには分かる。

何しろ、あのセイバーですら二度は避け切れないと言わしめた技なのだから。故にセイバーにも緊張が走る。覚悟はしていた。だが、まさか試合開始の合図のような扱いで放たれるとは思いもしなかったのだ。

「いきなりですね」

「致し方あるまい。あまり時間をかけると騒々しいのがおるのでな」

此度は急がねばならぬ。そう小次郎は苦笑いで答える。セイバーはそんな小次郎を見て微かに笑みを見せると、意を決したのか聖剣を構え直す。それは小次郎も初めて見る構え。どこか居合いを思わせるそれに、小次郎は恐怖と感動を覚えた。

「ほう……何か新たな技でも会得したか」

「……私も以前のままではない」

「それは重畳。ならば……」

そして、時が止まる。いや、正確には止まったかのように二人が動かなくなつたのだ。風が静かに吹き抜けていく。木々を揺らし、木の葉が音を立てる。そして、その揺れが収まった瞬間

「っつ！」

空間が爆ぜた。セイバーの動きを見て刀を振るおうとする小次郎だが、その瞬間、その目が見開かれた。まるで小次郎の呼吸を外すようにセイバーが加速したのだ。

それに驚く小次郎へ迫るセイバー。そして、その姿を見て小次郎は直感で理解した。何故セイバーが加速出来たのか。彼女は鎧を纏っていないかったのだ。

「……見事。鎧を消して身軽にするとはな」

「いえ、これは私だけの力では成し得ませんでした」

小次郎の喉元に突きつけられた聖剣。小次郎の刀は振り抜かれる直前で止められている。刹那の間の後、小次郎が我に返って燕返しを放とうとした時には、セイバーは既にその懐に入り込んでいたのだ。

自身へ向けられた聖剣を見つめながら告げた小次郎の言葉。それへセイバーが返した言葉を聞き、疑問を浮かべる小次郎。そんな彼へセイバーはその理由を答えた。そう、確かに鎧を消したのは速度を上げるためだと。

だが、それだけではない。彼女は小次郎の俊敏性を警戒し、もう一つ速度を上げる手段を講じたのだ。それは御神の技である”神速”だった。しかしそれは本物ではなく、あくまでセイバーが模倣したものだ。

無理矢理無意識下にある肉体の能力制御を外させ、その力を全て引き出させるのだ。その上に魔力開放して得られる元来の爆発力と鎧分の魔力を速度へ変換して上乘せし、ようやく小次郎の上をいく速度を出す事が出来たという訳だ。

だが、セイバー版神速には一つ欠点がある。セイバーは当然ながら神速の状態などに慣れていない。そのため、現状では直線的な動きしか出来ないのだ。士郎達に何度も挑んで、耳で聞き体で覚えた奥の手だった。しかも、これの使用には大きな問題がある。それは

……

「ぐっ……」

セイバーの強靱な体を持ってしても、これを使った後はしばらく満足に動けなくなる事。故に、セイバーはこれを神速ではなく”諸刃”と名付けている。相手には恐怖を、使う者には尋常ではない負担を強いる事を皮肉っての命名だ。

地面へしゃがみ込むセイバーを見て、小次郎もその使った方法があまり良くないものと察したのか、どこか苦笑するように声を出した。

「成程な。私と同じく真つ当な剣ではないか」

「え、ええ。私が模倣した技を使う者達は御神と言う流派の剣士です」

「御神？ ……それは興味深いな。今度その剣士に会わせてくれぬか、セイバー」

そう尋ねながらもセイバーに手を差し伸べる小次郎。それに微かな驚きを見せるも、小さく笑うセイバー。その表情のまま小次郎へ礼を言うと、手を取って立ち上がる。

「会わせるのはいいのですが、加減はしてください。彼らはサーヴァントではないのですからね」

「分かつておる。しかし、御神か。会うのが楽しみよな。早く私もお主のような芸当を身に付けたいものだ」

そう言って笑う小次郎にセイバーも笑みで返す。そして内心思う。もし小次郎が御神の剣技を会得する事になったら、それこそ手が付けられなくなるのではないかと……

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

遭遇編その3。勝負の内容を若干修正。諸刃についての欠点を少し変えました。

今回のようにアーチャーとの出会い方も少し変わります。

空白期（A & a m p ; A）

「どうした？　それで終わりか恭也」

「くっ……まだだ！」

再び神速を使つて小次郎へと迫る恭也。だが、それを小次郎は完全に見切っている。迫り来る恭也を見つめ、迎撃として再び打ち込まれる小次郎の剣閃。それが恭也を捉え　　ながらも彼の動きは止まらなかった。

「なんとっ?!」

「はあああああっ!!」

小次郎の剣閃は確かに鋭い。だが、恭也は何度も受ける内に理解したのだ。それは鋭いが重みにやや欠ける事を。故に考えたのだ。敢えて意識を刈り取られないように、小次郎が木刀を振り切る前に自らの体を使つてそれを止める事を。

更にそこから必殺の一撃を決めて勝負を着けるしかない。その作戦を恭也は実行したのだ。小次郎が驚いたのはその発想を理解したからだ。肉を斬らせて骨を断つ。それを迷う事無くやってのけた恭也の剣士としての在り方。それに対する称賛と驚愕。そして、そんな小次郎へ恭也が放つは……

「あれはっ!?!」

恭也の放とうとする技を理解し、美由希が思わず上ずった声を上げた。それは恭也の得意とするもの。だが、試合などで見せるよう

なレベルの技ではなかったのだ。土郎もそう考えているからこそ、恭也が何故それを選んだかを悟って眩く。

「薙旋、か。恭也の奴、本気だな」

御神の奥義の一つである薙旋。それを使ってまでも恭也は小次郎に勝ちたかった。その気持ちを噛み締め、美由希も土郎も恭也の勝利への執念を感じた。そして、その一撃を小次郎は。

「……見事よ」

耐え切った。いや、正確には直撃の瞬間自分から後ろに跳ぶ事で衝撃を逃がしたのだ。柳の如きその動きに、恭也だけでなく土郎達すら驚愕した。御神の奥義。それを喰らいながらもしつかりと二本の足で立っている事。それが三人にとってどれ程恐ろしい事か。

更に恭也は今の一撃で力のほとんどを使い切ってしまった。その気持ちも今の状況を見た事で萎えてしまっている。小次郎もそれを理解しているのだろう。静かに構えた。

その瞬間、道場の空気が張り詰めた。それと同時に三人は悟る。もう万が一にも勝ち目はないと。それだけの”何か”が小次郎の構えにはあった。

「これも武士の情け。せめて我が秘剣で終いとしよう」

その言葉に恭也はどこか心が震えるのを感じた。これ程の剣士が自分を認めその奥義を見せてくれる。それを理解し、恭也は身体と心に力を入れる。萎えていた戦意を取り戻し、小次郎から感じる圧迫感を振り払い、立ち上がって小太刀を構える。

その恭也の姿に小次郎も笑みを見せ「やはり強き剣士よ」と眩い

た。自身が生きた時代とは違い過ぎる現代に、自分も相対した事がない程の立派な剣士がいた。それが小次郎には嬉しくて堪らないのだから。

「恭也、受け取れ。我が秘剣、燕返しを！」

放たれるは三つの剣閃。それが同時に襲い掛かる。逃げ場無きその攻撃を、恭也はかわすのではなく敢えて受けた。

静かに崩れ落ちる恭也。それを素早く土郎が駆け寄って支えた。そして、そのまま視線で小次郎へ礼を述べる。剣士として小次郎の行為に感じるものがあつたからだ。

奥義を見せた恭也へ、自分の奥義を見せる事で返礼とした小次郎の在り方に心からの敬意と感謝を込めて。美由希も感じ入るものがあつたのか、小次郎と恭也へ頭を下げた。剣士としての在り方を見せてもらえたと思つた故に。

だがそんな彼らと違い、なのははただ驚いていた。負ける事などないと思つていた兄の敗北。セイバーと土郎以外には無敵と信じていた存在。それを見事に倒した小次郎に。

それと同時に分かつた事があつたのだ。剣士の礼儀等はなのはには理解出来ないが、それでも小次郎が恭也を認めたからこそ最後の技を出した事を。

（小次郎さんって……ホントに凄い人だったんだ）

なのはの抱いた思いは、美由希や土郎の思いでもあつた。セイバーはそんな高町家の面々の表情を見てその考えを察して呟く。

「……私といい勝負をすと言つたはずです」

それはどこか拗ねるような声。その声に対して苦笑を返すのは達。そんな光景を眺めながらも、セイバーは視線をなのは達から小次郎へと合わせていた。

（アサシンも召喚されていて、尚且つ受肉している。こうなると、私達七騎が全員召喚されているという予想もあながち冗談では済まないかもしれません）

あの戦いの後、帰り道で話した事を思い出してセイバーは気を重くなるのを感じた。小次郎が自由に歩ける事から薄々感じていた。そして、アリサからは魔力を一切感じなかった事も含め、ライダーと話した事が徐々に真実味を帯びてきたのだ。

出来れば外れていて欲しい。特にバーサーカーは元々理性を失っている存在だ。それが”世界”に使役されたとしたらどうなるか。そう考えると、セイバーには現在いる戦力でも止め切れるか自信がない。

ランサーもいれば何とかなるのでしょうか……

自分やライダーに小次郎と加えてランサーも居れば、いかなバーサーカーと言えども勝てない相手ではない。逆に言えば、バーサーカーとなったヘラクレス相手にはそれぐらいではないと勝てないのだ。

そんな状況にはなあってほしくないと思いながら、セイバーは小次郎との試合を始めようとする土郎の背を眺める。もしなつたとしても、この一家は必ず守ってみせると強く誓いながら……

あのセイバーと小次郎の再会と再戦を兼ねた次の日の事。小次郎は早速とばかりに高町家を尋ねた。目的は一つ。セイバーが会得した”御神”の剣技を見るためだ。

セイバーから既に事情を聞いていた土郎達だったが、小次郎の技量を知りたいと恭也が言い出してそのまま試合となった。だが、結果は前述の通り恭也の敗北に終わった。本物の神速に初めこそ小次郎も驚いたが、それだけだった。

セイバーと互角の戦いが出来る小次郎からすれば、恭也達の神速の速度は見えぬ程ではなかった。あくまでも御神の技は人の身だからこそその脅威。サーヴァントとして存在する小次郎からすれば、それは十分対処可能な範囲だったのだから。

だが、恭也の放った雑旋だけは小次郎も心から驚き、そして同時に称賛したのだ。人の身でありながらそこまでの技を会得し、更に研鑽する姿に。そして、飽くなき向上心と勝利を諦めない恭也の姿勢へ応えるために、小次郎は敢えて燕返しを放ったのだ。

小次郎の心に、現代の剣士も捨てたものではないと思わせた恭也に対する最大限の礼として。それを瞬時に汲み取り、恭也も受けて立ったのだ。最後まで挑戦する姿勢を崩さないように、と。そして、今小次郎は土郎と戦っていた。

土郎は手強かった。理由として戦闘の経験量が違う事と、恭也と小次郎の試合を見ていたのが大きい。小次郎の剣閃を紙一重で防ぎ、防げないと分かるや自分へのダメージを最小限に抑えるべく、恭也よりも見事に受け流す。

小次郎の戦い方に近いものがありながら、土郎は恭也と違う力もある。恭也でさえ未だ追いつけない姿が、御神の剣士の一つの完成

形がそこにあった。

「やるな、流石は恭也の父上と言ったところよ」

「小次郎さんこそ恐ろしいですよ。もう御神の剣を見切り出してますね」

互いに浮かべるは笑み。土郎は、ここ最近感じていなかった高揚感から。小次郎は、恭也よりも洗練された土郎の強さから。それぞれが喜びと楽しさを表情に浮かべている。それを見ながらなのははぼつりと呟く。

「何でお父さん達って戦うのが好きなんだろ……？」

それはなのには分からない感覚。誰かと戦う。それは、自分も相手も傷付ける事になる。何か理由があり、仕方ないならまだ納得出来る。だが、ただ強くなりたいだけで戦う事はなのには理解出来なかったのだ。

(強さって、誰かと戦わないと持てないものなのかな?)

その答えをなののはが得るには、この日からかなりの時間が必要となる。本当の強さとは何か。戦う事の持つ意味とは。それらを彼女なりに見出すキツカケ。それは、これより二年近く経ったある日に訪れる事になるのだ……

結局、勝負は土郎の敗北で幕を閉じる。勝負を決したのはやはり小次郎の放った燕返し。それを土郎もかわしきれず、何とか耐え切るうとしたのだがそれも叶わず床に伏した。美由希はその光景に驚愕すると共に、小次郎の強さを改めて感じていた。

セイバーは、土郎の傍に駆け寄り心配そうに声を掛けるなのはを見つめていた。恭也は土郎が敗れるところで気が付いたらしく、呆然とそれを眺めて呟いた。

見えなかった……

その呟きに美由希も頷き、視線を小次郎へ向ける。最後の剣閃、燕返し。それを離れた場所から二度も見ていた美由希だったが、それを見切る事は出来なかった。

美由希も恭也も知らない。彼らは本当は見えている。だが、それが同時に見えたために見切れていないと思っただけなのだ。それを土郎達を知るのは、この日の夜。なのはがセイバーに燕返しの事を尋ねた際の答えを聞いてである。

（”御神”の剣士。そして、その技……か。中々興味深いものよ。良い修練相手にもなりそうだが……さて）

小次郎は視線を土郎からなのはへ移し、しゃがみこんでその頭に手を乗せた。それになのはが顔を上げると、小次郎は真剣な表情で告げる。

「すまぬな。つい加減をし切れなんだ、許せ」

「小次郎さん……？」

「私らしからぬ事よ。つい、そなたの父上が強いものでな。熱くな

りすぎてしまった。だが、心配いらぬ。土郎殿は……ほれ」

なのはに安心させるように軽く笑みを見せる小次郎。その視線を受け、なのはが振り向くと土郎が目を覚ましたようで、その視線が合った。それに土郎がどこか申し訳なさそうに笑い、なのははそれに喜びながらも文句を言い出した。

そして、それを聞きながら恭也達も笑みを浮かべて道場内が和む。それを感じながらセイバーは小次郎へと近付く。先程のなのはとのやり取りを聞いて思った事があるのだ。

「やはり変わりましたね」

「よく言う。そなたが一番変わっておった」

「そうですね……そうなんでしょう」

二人して笑い合うセイバーと小次郎。そんな二人の視線の先では、心配したと怒るなのはに謝っている土郎と恭也がいた……

アリサは不機嫌だった。朝起きた時、小次郎は外出していたからだ。無断ではない。鮫島に言伝を頼んでいたから。だが、それでも納得いかなかった。何故なら行き先は高町家。目的はおそらくセイバーだろうと思ったからだ。

（アタシが起きるまで待ちなさいよ！）

今、アリサは食堂で小次郎を待ちながらある事を考えていた。それは、どうすれば小次郎が高町家から早く帰ってくるかである。現在の時刻を見れば、いつもなら朝食を食べ始めている頃となっていた。それにも関わらず、小次郎は未だに帰ってきていなかったのだ。小次郎の性格上、朝食を向こうで食べる事はしないと思うが、それにしても不安なのだ。先程からアリサはなのはへ電話しようという度思った事か。

そして、アリサが六度目になる携帯での連絡を結局断念した時、小次郎が食堂へ現れた。それに一瞬笑顔になるアリサだったが、すぐにそれを消し、不機嫌な表情でそっぽを向いた。

それに小次郎は不思議顔。だが、まだアリサが朝食を食べていないのを悟り、笑みを浮かべて椅子へと座った。自分を待っていてくれたと悟ったのだ。

「先に食べておればいいものを」

「……別に。アタシの勝手でしょ」

「然り。だが、待たせたようですまぬな。高町の者達とこれからの事を話してきたのだ」

「そ。まあいいわ。食事にしましょ」

小次郎の謝罪に若干機嫌が良くなった瞬間、彼の告げた”これから”に再び機嫌を悪くし、アリサは素っ気無く会話を打ち切った。それに小次郎はアリサの不機嫌を悟るが、原因にまでは思い当たらないように首を傾げるだけだった。

そうして最初は不機嫌なアリサだったが、食事をしている内に段

々といつもの調子になり、小次郎もそんな彼女に笑みを見せた。特に、小次郎がフレンチトーストの由来を尋ねた時に、フレンチはフランスの事でトーストは焼いたパンだと聞いた途端、彼が言った一言がアリサの不機嫌を根こそぎ持っていった。

「……随分と近い異国なのだな。まだこんなにも温かいとは」

一瞬言葉を失うアリサ。しかし、小次郎の言った言葉の意味を理解した後はもう爆笑だった。アリサの中ではこれ以上ない程のヒットである。小次郎の言った奇妙キテレツな言葉の中でも、これは中々ない。

そんな風に笑うアリサに小次郎は小さく笑みを浮かべるも、何も言わずに手にしたフレンチトーストを口にする。こうして、その日の朝食も笑顔で終わりを迎えた。それでも、アリサの心の底にはまだ不安が燻っているのだった……

「トレーニング？」

「うん。セイバーと一緒にね」

「そうなんだ。それで今日から始めるの？」

いつもの昼休み。屋上で風を感じながらの食事時、なのはが言い出した「これからあまり遊べなくなるかも」の発言にアリサとすずかが尋ねた事に対して返ってきたのがそれだった。

アリサが確認するように問いかけ、それに答えたなのはの言葉を

聞いたすずかが遊べなくなるとの言葉から、今日からとそう判断したのだろう。そのどこか寂しそうな言葉になのはは無言で頷く。それにすずかは何も言わずやや顔を伏せた。

一方、アリサはなのはが何故そんな決断をしたのか何となく察していたため、その表情は暗くはなかった。

(なのはも不安なんだ……)

自分が感じた取り残される感覚。あれをきつとなのはも感じたのだろうとアリサは思った。だからこそ、アリサは力強く言った。

「いいじゃない！ 自分が決めたなら頑張ってやりなさいよね！ アタシも何か始めてみるから」

(アタシも負けない！ 絶対置いていかれるもんか！)

「あ、アリサちゃん……うんっ！」

(アリサちゃんもなんだね……一緒に頑張ろう、アリサちゃんっ！)

その言葉に込められた思いを察し、なのはも笑顔で頷く。互いに笑顔を見せ合う二人をすずかだけが不思議そうに見つめていた。セイバーと小次郎の一件を知らないすずか。しかも、彼女の傍にいるライダーはそういう勝負とは無縁である。

そのため、彼女は今のままではライダーと同じ場所にいる事が難しいとは感じない。故に二人の心情などを理解出来るはずもなかったのだ。だが満面の笑顔のなのはとアリサに、すずかも結局笑顔になるのだった。

それでも、すずかはせめて一週間に一度は三人で遊ぼうという提案を出した。それが二人に受け入れられると、すずかは安堵の表情を浮かべる。その後はもういつもの時間だ。他愛の無い事で話す三人。それでも、その話題に上るのはセイバー達サーヴァントの事ばかりだったか……

その日、家に帰ってくるなりアリサは小次郎に対してある事を告げた。それはなのはの告げたセイバーとのトレーニングに影響を受けた事。

「じょぎんぐ?」

「そ。早朝の運動って体にいいらしいの。だから、明日からするわ」

アリサの提案に小次郎は何やら思案顔。それを見てアリサは断言する。そう、それは自分の決意。そして、子供っぽい抵抗。

「でも、早朝って子供が動くには何かと物騒でしょ? だから、あんたが護衛なさい」

その瞬間、小次郎が理解出来ないとばかりの顔を見せた。そして何かを考え、アリサへそれを伝えようと口を開いた。

「……護衛なら鮫島殿がおる」

「あんたがやるのっ!」

だがその考えは即答で却下された。その声の感じからもうこれはどうあっても変わらないと理解し、小次郎は苦笑しつつ息を吐いた。

「承知した」

裂帛の気迫で告げるアリサ。それを見て小次郎は従った方がいいと思ひ、反論を諦めたのだ。早朝にやるという事は、高町家での鍛錬に行けなくなると考えた小次郎。その事が顔に出たのか、どこか寂しげな表情をしていた。

そんな彼の考えを読んでいたのだろう。アリサはその表情を見ると、恥ずかしさを隠すように小次郎へ顔を背けてこう告げた。

「でも、それはあんたがなのは家で訓練してからでいいわ。ただし、それが終わったらすぐに帰ってきてアタシの護衛よ。いい？」

その発言に小次郎はアリサの考えのキツカケを悟ったが、それが彼女の嫉妬から生まれたものとは思わず、ただ帰りが遅くなった事に対して寂しくなつたと勘違いしていた。

とはいえ、アリサの不安を感じ取った事に変わりはない。だから大人らしく小さく微笑んで、その心遣いに感謝しつつ優しく声を掛けたのだ。

「……………気を遣わせてすまぬな」

「別にいいのよ。それと……………明日からよろしくね」

そう言つてアリサは屋敷の中へと入つていく。その後ろ姿を見送りながら小次郎は笑みを浮かべる。出会つた当初はどこか不安定な心をしていたアリサ。それが、今や当然のように他者へ気を配るよ

うになっている。その成長を感じ、笑っていたのだ。

(男子、三日会わずに剋目して見よとは言つが、女子も似た様なものよ。ふむ、子を持つ親の気持ちとはこうであるか)

自分の考えが親のように思え、小次郎は心底おかしそうに笑う。それを夕日がただ黙って見つめていた……

.....

空白期という幕間。こんな感じに書いていこうと思います。やはり戦闘描写が苦手です。書いてもこんな感じに短い……

やはり書いて思つのは、こんな日常を書く方が俺にはまだ向いてると感じる事です。

鼓動編（無印ver）

「バルディッシュ、セットアップ」

”セットアップ”

フェイトの体を包み込む魔力の光。それがほぼ一瞬で衣服へ変化し、フェイトを包む。それを見て、ランサーはしきりに感心していた。無論、バリアジャケットにはなくバルディッシュにである。リニスが完成形だと胸を張っただけあり、それはランサーの目から見ても良い出来と思えたからだ。そして、ならばランサーが抱く気持ちはただ一つだった。

「じゃ、早速やるか」

フェイトがバルディッシュの感触を確かめたのを見計らって、ランサーはそう笑って言った。その雰囲気は早く戦ってみたいというものだ。それにフェイトも頷き返す。

行われているのはいつもの訓練。ただ、実際の試合は最後。それまではリニスとランサーによる戦術の講義。死線を何度も越えたランサーの話は何にも勝る生き残る術であり、リニスはもとよりアルフですらその話に聞き惚れる程の英雄譚なのだ。まあ、ランサー本人はそんな気は更々ないし、意図的に話していない部分もある。

ランサーの話が終われば、次はリニスによる魔法を用いた戦術の話に変わる。これはランサーも興味を持っていて、特に設置型の魔法を聞き、ルーンと組み合わせられないかと本気で考えているくらいだ。しかし、ランサーは魔法が使えない事が分かり、それは幻と

消えた。

そして講義が一段落すると、ランサーとアルフが食事を要求する。それに苦笑しながら動くリニスと手伝いを買って出るフェイト。と、ここまでがいつもの流れ。ランサーとアルフによる肉の奪い合いがあり、それを何とかしようとするフェイトとリニスが楽しそうに見つめるのもいつもの事。

そんな風に時間は過ぎる。しかし、その穏やかさと温かさはフェイト達にとって欠かす事の出来ないものとなっていた。だが、その時間は確実に何かの始まりを運び始めていた……

「ま、今日はここまでだな」

「……ですね」

ランサーの視線の先には、大の字になって倒れているアルフとバルディッシュを支えに何とか立っているフェイトの姿がある。リニスは床に座り込み、疲れながらもランサーの言葉に笑みを浮かべて応じていた。

ランサーとの戦いは、フェイト達にとって得る物ばかりだった。魔法が通じない相手にどう対処すべきか。もし勝てないならどうすればいいのか。そんな事を即座に判断し、実行しなければ、待つているのは敗北という名の死。

無論、非殺傷の概念や次元世界の常識はランサーもリニス達から聞いて知っている。だが、彼は本当の戦場を知っている。故に彼女

達へこう告げた。

追い詰められた奴が、そんな事に構ってくれると思うな。

そうバツサリと切って捨てたのだ。そもそも、戦うのに自分の命を賭けない事自体、ランサーには信じられない事なのだ。戦いとは互いの生死を賭けたもの。ならば、傷を付けられるどころか命を失う事が当然である。

その事を身を以って知っているランサーだからこそフェイト達へ教えたかったのだ。戦場に出してしまえば男も女もなく、また常識などは無視される事さえあるのだと。

故に、ランサーが叩き込んでいるのは勝つ方法ではなく負けない方法。如何にすれば、格上を相手にしても負けずにすむか。どうすれば逃げられるかを徹底的に教え込んでいた。

フェイトはランサーに持ち前のスピードを見出され、アルフと共に前衛としての心構えと役割を教え込まれた。リニスには司令塔としての重要性和後衛としての弱点を示唆された。

「撤退は負けじゃねえ。立派な戦術だ。どんなに笑われても、侮辱されてもいい。とにかく生きろ」

ランサーは訓練を終えて休む三人にそう告げ、最後にこう締めくくった。

「生きて生きて、最後に勝って笑うのさ」

獰猛な笑みでそう言い切ったランサーにフェイト達は何も言えず、ただその顔を見つめるだけだった。三人は知らない。それがランサーの本来の戦い方ではない事を。誰よりも逃げを打つ事を好まない

事を……

突然だが、ランサーは戦いが好きだ。それと同じぐらい宴会が好きだった。気に入った相手との語らいは、何にも勝るランサーの楽しみの一つなのだ。そしてこの日はそんな彼が好きな宴会の口実があった。

「「バルディッシュ完成おめでとうー！」」

「お、おめでとう……」

バルディッシュ完成祝いである。揃って製作者であるリニスへ向かって声を掛けるランサーとアルフだったが、そのテンションの高さに若干気後れ気味のフェイトがいた。そんな三人にリニスは微笑みを浮かべて応じる。

「ふふっ、ありがとうございます」

テーブルには、リニスの作った料理が所狭しと並んでいる。肉料理が多いのは、ま、ご愛嬌という奴である。言い終わるや否や思い思いに手を伸ばすランサーとアルフ。その標的は肉料理。まさに肉食獣そのものだ。

「まったく、少しは落ち着いて食べてください」

「いいじゃないか。本当にめでたい事なんだか……って！ それ、

「アタシの！」

「へ、余所見する方が悪いんだよ」

子供っぽい笑みを浮かべ、アルフの手にしていた鳥の唐揚げを口に入れるランサー。それに怒り心頭と言った顔で迫るアルフ。そのやり取りは、まるで似た者同士というか兄妹みたいというか。とにかく、それをフェイトもリニスも呆れながらもどこか笑顔で見つめる。

そしてフェイトは思う。この場に母が居ればどれだけ楽しいのだろうか、と。しかし、今プレシアは体調を崩し、自室で療養している。リニスとランサーが世話しているので大丈夫だとは思っているが、それでも会いたいと思ってしまうのだ。

（でもダメ。ランサーが言った。母さんは私を大事に思ってる。だから、病気がうつらないように滅多に会っちゃいけないんだ）

ランサーからそれを告げられた時、フェイトは嬉しくて思わず泣いてしまった。それをランサーが気まずそうにしながら、優しく頭を撫でてくれたのをフェイトは今でも覚えている。

だからだろうか。フェイトはリニスが姉なら、ランサーは兄だと思っっている。共に自分を教え導いてくれる存在。優しくもあり、厳しくもある二人はフェイトにとって愛しい家族なのだ。そこまで考え、ならばとフェイトは思う事があった。

（アルフは……どうだろうか？）

そう考え、フェイトは笑みを一つ。何となく友人という答えが一番近い気がしたのだ。そして一人強く思う。いつか必ず、この輪の中に母を加えてみせる。そんな事を心に誓うのだった……

「具合はどうだ？」

「良くはないわね」

ランサーの問いかけにプレシアは寝たままで応じた。そう、ルーンを刻まれた部屋の中央にあるベッドにプレシアは横たわっているのだ。内側には力の太陽を、外側には守護を意味する大鹿を刻み、免疫力と生命力を増加させている。

ランサーはルーン魔術を使ってプレシアの体を出来る限り休め、アリシアの事をリニスに任せる事を提案した。無論、自身が持つ魔術の知識を教え、それと魔法技術を組み合わせる研究も既にリニスが始めている。

ランサーが狙ったのはプレシアの暴走阻止。それとフェイト達との和解だった。体を病魔に蝕まれ、精神的にもプレシアは追い詰められていったのだとランサーは読んだのだ。

故に愛する娘を突破口に自分を見つめ直す時間を与え、以前の状態に近付けようとしていた。勿論それだけではない。可能ならばアリシアもどうにかしたいと考えている。何故ならば、彼女は……

（フェイトの姉ちゃん、だからな）

未だに互いの存在を知らない二人ではあるが、もし可能ならおそろく助けたいとフェイトは思い、アリシアもまた彼女に会いたいと願うだろう。アリシアが喋れるのなら、きつとそう告げる。

そうランサーもリニスも思っていた。だからこそ余計プレシアを死なせる訳にはいかなかった。プレシアの状態が今のようになった背景には、アリシアの蘇生を目指した事が大きく関係しているからだ。

（母親が自分のせいで死んじまうなんて……させるかよ！）

もしアリシアが目を覚ました時、母親が余命幾ばくもなく、それが自分のためだと知ればどうなるか。今度はアリシアがプレシアと同じ気持ちになるかもしれない。そこまで考えランサーは首を振る。そんな事はないと。自分が絶対に阻止してみせる。例え、この身が朽ち果てようとも。そんな事を思っているランサーをプレシアは黙って見つめていた。

自分が人形と内心呼んでいるフェイトを守り、使い魔でしかないリニスを欲しがり、煩いアルフをからかい、そして。

（私を助けようとする、なんてね）

プレシアはそう思い、微かに笑う。それは嘲笑。自分に対する嘲り。己を省みず、ただアリシアの事だけを考えていたはずだった。でも、ランサーの一言がそれを間違いだと言わせた。

アリシアが生き返っても、自分が共に過ごせないならそれに何の意味がある。あの楽しかった日々を取り戻すために自分は行動していたのではなかったのか。そう気付いた時、プレシアはやっと冷静に自己を見つめる事が出来た。

そして思い出したのだ。かつてアリシアと約束した事を。だからこそランサーの提案を受け入れ、こうして療養しているのだ。

「おかしなものね……」

「あん？」

「何で、今までこんな簡単な事に気付かなかつたのかしら」

プレシアの言葉にランサーは理解出来ないでも僅かに推測するべく考える。そして、心底呆れたように返した。

何でも難しく考えすぎなんだよ、てめえは。

そんなランサーの言葉にプレシアはそうねと返し、思いを馳せる。あの失った日々。それが取り戻せる。そんな予感を感じながら……

アルフは困惑していた。ランサーから話しておきたい事があると
言われ、彼の部屋に呼び出されていたからだ。その理由にまったく
見当も付かず、更にその時の真剣な表情を思い出してアルフは顔を
赤める。が、それを首を振る事でいつもの状態へと戻して呟いた。

「一体何だつてのさ……話ならリニスとでもすればいいだろ」

この前、久しぶりにフェイト達の前に現れたプレシアはこう告げ
た。リニスは今後ランサーを主とするようにと。その理由が分から
ないフェイトとアルフは困惑したが、リニスはその瞬間目を閉じて
嬉しそうに頷いたのだ。

そして、現在リニスはランサーの傍でプレシアの世話にあたって

いる。今のリニス様子は見ていて分かるぐらい嬉しそうなのだ。アルフもリニスと同じく元は動物だ。だからこそ余計分かる。リニスが女としてランサーに惹かれていている事は。

(バカらし……何でアタシ、こんな事考えてんだろ)

アルフにとって、ランサーはフェイトや自分を鍛え、食事を取り合い、よくちよっかいを出してくる奴でしかない。決して、戦っている時は恐ろしいけどカッコイイとか、何だかんだで自分の好きなものは譲ってくれて優しいとか、たまに可愛いとかいい女だとか言われて嬉しいとか思っていないのだ。

そんな色々を思い出し、アルフは再び首を振る。そして、意を決してランサーの部屋へ入った。

「呼ばれたから来たぞ」

「おう。ま、ここに座れよ」

ランサーの部屋はほとんど物が無い。正確にはベッドと時計以外ない。物欲がないのか、ただ何かを置くのが嫌いなのか知らないが、とにかくランサーの部屋は綺麗だった。

そんな事を思っているのが分かったのか、ランサーは笑って告げた。同じ顔を一度訪れた際、フェイトもしたのだ。故にアルフの考えている事はお見通しと言う訳だった。

「欲しいもんはあるが、暇がなくてな。何せ、今は色々忙しいしよ」

「そんなもんかい？」

「そんなもんだ」

その割にはよく昼寝している所を見かけたりする。そうアルフは思つて、言うのを止めた。これではいつものように雑談とからかいの流れにいく。そう感じて視線をランサーに送る。

それをランサーも分かつたのか、先程までの軽い雰囲気は鳴りを潜め、たまに見せる真剣な表情に変わる。それだけでアルフは話とというのが重要な部類と理解した。

「話つてのは、簡単に言えば今後の事だ」

ランサーはそう言つて、低い声でただしと付け加えた。その前にしなければならぬ話がある、と。そこでランサーが話し出すのはフェイト誕生に関する一連の出来事。

アルフはそれを聞きながら、何故ランサーが精神リンクを切つておけと前置いたのかを理解していた。とてもではないが、フェイトに対して自身の動揺を隠せないだろうとランサーが読んだのだと。

やがて話は終わり、アルフは感情のやり場に困つていた。大事なフェイトを道具としか考えていなかったプレシア。その彼女がフェイトの姉に当たる少女を想つて行動し続けていた事。そして、その無理が祟つて体を弱らせている事。それを何とかするべく、リニスとランサーが努力している事。

それらを聞いてプレシアへ怒りを心から抱けなくなったのだ。無論プレシアへの怒りは今も当然ある。だが、ランサーに言われた言葉がそれを素直に出させないでいた。

アリシアがフェイトで、お前がプレシアならどうする。

そう。どうしようもない怒りを出せないでいたのは、理解出来てしまったから。なぜプレシアが凶行に走ったか。どうしてフェイトを見てくれなかったか。

(辛かったんだ……あの女も)

自分が失った愛する娘そっくりの存在。それから慕われる度に、心配される度に、己の過去を突きつけられている気分になっていたのだ。だからフェイトを娘ではなく道具として見なければならなかった。そうでもしなければ、自分の心が壊れてしまうと。

それだけ考えて、アルフは涙を浮かべた。理解も納得も出来た。しかし、それでも言わねばならない事がある。そんな心のままにアルフは叫んだ。

「でも！ 辛いのはあの女だけじゃないっ！ フェイトだって辛いんだよ！」

頑張っても頑張ってもプレシアはフェイトを見てくれない。どこまでいっても声さえ掛けてもらえない。それでもフェイトはいつも決まっつてこう言うのだ。

きつと、今度は笑ってくれる。

そんなフェイトの表情を思い出し、アルフは突然立ち上がると喉が張り裂けんばかりに吠える。それは最早言葉になっっていない。しかし、そこに込められたものはランサーには伝わった。

フェイトの想いがプレシアへ届けと。純粋な願いが、無垢な祈りが叶うようになると言わんばかりの強い思い。それが、アルフの全身を通して流れているように感じられたからだ。

そんなアルフの咆哮を聞きながら、ランサーは静かにその頭に手を置き呟く。

「もういい。もう分かった。だから、泣くな」

女に泣かれるのは、苦手なんだよ。

その言葉にアルフは我に帰る。ランサーはただ気まずそうに頭を手を置いていただけ。それだけ、それだけのはずなのに、アルフは涙が止まらなかった。

それは、さつきまでの涙とはまた違う涙。先程のものが悲しみの涙なら、今流れているのは嬉しさの涙。自分と同じ思いを持っている奴がここにいる。フェイトを、リニスを、自分達を絶対に裏切らない存在がここにいる。そう思って、アルフは流れる涙を拭いながら笑みを浮かべるのだった……

ややあって、アルフが落ち着きを取り戻したのを確認し、ランサーは本題を告げた。それはこれからの事。フェイトの地力を上げ、どんな相手にも負ける事がないようにしていく。そして、アルハザードなどという不確かなものではない方法でアリシアを助けられるものを見つけて出す。

それと同時にプレシアの体を治す術を見つけてはならない。ルーンで出来るのは、精々延命治療のようなもの。根本的な解決策を見つけてはいけないのだ。

「で、お前にも協力してもらいたくってな」

「フェイトに教えないのはやっぱり……?」

「あゝ、まあ、なんだ……出来るなら最後まで知らねえ方がいい」

そうアルフに告げるランサーはどこか遠い目をしていた。その目にアルフが感じたものは哀しみ。きつとランサーも、この事で思う事があるのだろう。

アルフはそう考えて不敵に笑う。それはアルフなりの励まし。いつも自分をやり込めてくれるランサーへの、ちよつとした仕返し。決して泣いたところを見られた気恥ずかしさからくるものではない。そう自分を納得させてアルフは口を開いた。

「とか何とか言つてさ、話すのがメンドーなだけだろ」

「はっ、んなワケね〜だろ」

「いや、そうだね。大体あんたはさ……」

そこから愚痴を言い始めるアルフ。それをあしらいなながらも、たまにムキになって反論するランサー。それにアルフもヒートアップし、口論は三十分も続いた。

その終止符はアルフのお腹の音。揃つて時計を見ればそろそろ夕食時。そのため、毒気を抜かれたからかランサーも笑みを浮かべてアルフを見る。そのランサーの笑顔が気に入らなかったアルフは、鋭い犬歯を見せて尋ねた。

「何さ?」

「何、やっぱり可愛らしいって言うんだよな。この場合はよ」

「なっ?！」

「ま、お前もリニスもいい女だぜ。毛色は違うがな」

二つの意味で、と続けてランサーは笑う。アルフはそんなランサーに掴みかかるように迫る。だがその顔は真っ赤だ。それをかわし、部屋から駆け出すランサー。それを必死に追い駆けるアルフ。逃げながらもからかうランサーに反論しつつ、アルフは心底思った。

(やっぱアタシ、こいつ嫌いだよ！)

そう思いながら追い駆けるアルフ。だが、誰かがその様子を見たのならこう言っただろう。その顔はどこから見ても楽しそうだと……

.....

準備編も中盤。プレシアは、きつと冷静になれればこういう人だと思いません。

後、女所帯に漢は禁物。その気がなくても気を惹いちゃいますから。

鼓動編 (A・sver)

朝の日課である洗濯物を干しながら、アーチャーは視線を感じ振り向いた。そこには既にお馴染みとなった猫の姿があった。やはり今日も来たのかと思いつながら、アーチャーはそれでも笑みをみせて猫へ近付いていく。

「待っていたぞ」

アーチャーはそう言うと、以前の小魚ではなく用意してあった御椀を猫の前に置く。そこには俗に言うねこまんまが入っている。朝食の残りを使ったものだが、アーチャーは捨ててしまうよりは有効活用するべきと考えて用意したのだ。

「残り物ですまないが、味は保障する。食べてくれ」

そうアーチャーが言うとそれを理解したのか、猫は渋々と言った雰囲気では食べ始めるが一口食べて動きが止まる。それにアーチャーの表情が強張った。まさか自分の料理は動物には通用しないのか。そんな考えが一瞬過ぎり、思い直す。

いや、自分の料理はあの冬木のトラにも通用したのだ。ならば、同じ猫科の生き物に通じぬはずはない。そんなどこかピントのずれた事を考え、アーチャーは猫を見つめた。

そんな風にアーチャーが自分の料理へ絶対の自信を取り戻すと同時に、猫が先程よりも速い速度で食事を再開した。それを安堵の表情で見つめるアーチャー。だが、今日はこれで終わりではない。はやてに頼まれた事を遂行しなければならぬのだ。それは、昨日のとある会話から始まった……

「な、アーチャー。聞きたい事があるんやけど」

「どうした？ 分からない問題でもあったか」

そう答えてアーチャーは畳んでいた衣服をテーブルに置く。今年、本来なら学校に通うはずだったはやては、通信教育という形で勉強に励む事にした。学校に行けない事もないが、無理して何かあったら大変だとはやて自身が決断したのだ。

本音はアーチャーと離れたくないという事だったのだが、それを素直に言える程はやては精神的に幼くなかった。まあ、アーチャーにはどこかで気付かれているのだが。

「ちやう。勉強の事やなくて、猫の事や」

「……問題に集中しないか」

「それがちやう気になってな。あの猫ちゃんって、オスなんかメスなんか聞いてなかったって思い出したんよ」

そんなはやての言葉にアーチャーは呆気にとられるが、確かに自分も確かめてはいない事を思い出し、呟いた。

「言われてみれば確かに確認していなかったな」

「な、そやから名前決めるためにも明日確認しといて。もう、大分

「懐いたんやろ？」

はやての言う通り、この三週間小魚や干物などを与えてかなり警戒心は薄れているが、それも以前と比べればだ。まだどこか心を許していない気がアーチャーにはしていた。

理由は猫の視線。大分マシにはなったが、未だにこちらを見る視線はどこか鋭い。おそらく人間に余程酷い目に合わされたのだろうと、アーチャーは推察していた。

密かに飼い猫にしようと思ははやてに対し、何度となくアーチャーが釘を刺しているのもそれが根底にある。距離を置いて接するべきだ。それがアーチャーの結論。よって名前をつけるのは反対しいが、飼い猫になるとなると話は別なので……

「分かった。明日何とか確認を取っておこう」

「うん。頼むな、アーチャー」

「だが、性別が分かったからと言って首輪を買うのはダメだ」

そのはつきりとした断言にははやてがやや動揺を見せる。

「な、何言つて」

「ホームセンターのチラシに赤丸が打ってあった。これは君の仕業だろう」

「しもた！ ……隠すの忘れとつた」

はやての言い訳を遮ってアーチャーが提示したのは一枚のチラシ。

そのチラシのペット用品のあれこれに見事赤のマジックでチェックがされていた。それを見て言い逃れは出来ないと悟り、はやては意気消沈して頂垂れた。

そんな彼女を見てアーチャーは軽く笑みを浮かべていたが、それをはやてが知る事はなかった。その後もはやてと雑談しながら、アーチャーはいつものようにその日を過ごしたのだ……

(さて、そろそろいいか)

昨日の出来事を思い返している間に御椀にあつた餌も綺麗に無くなり、猫は満足そうに舌なめずりまでしている。それを好機と見たアーチャーは、出来るだけ猫を怖がらせないように持ち上げた。

そしてその陰部を確認して 暴れ出した猫に手を激しく引つ搔かれた。じわりと血が流れる。受肉したため、簡単に傷を負う事になったと思ひながらアーチャーは猫を見つめた。

「……やはりまだ触るのは早かったか？」

威嚇の声を上げアーチャーを睨む猫。心なしか、顔が赤いようにアーチャーは思った。

「猫とはいえ、女性は女性か。すまない。故あって性別を確認したくてな。許してくれると助かる」

なんとなく感じた罪悪感を振り払うようにアーチャーは言った。その言葉に気を落ち着けたのか、猫は幾分か機嫌を戻したようであ

アーチャーを見る目がいつものものに近くなった。

それにアーチャーは息を吐く。これで猫が二度と来なくなれば、はやてに何を言われるか分からなかったからだ。とは言え、冷静に考えればはやてのせいとも言えなくもないのであるが。

安堵するアーチャーに猫は一鳴きすると、塀へ飛び移ってそのままどこかへ消えてしまった。ここ最近の去り際はこんな感じだな。そんな風に思いながら、アーチャーは残りの洗濯物を干していくのだった……

「それで、メスなんか」

「ああ。おかげで名誉の負傷だ」

「いや、チカンしたから当然やる」

「誰のせいだと思っている」

「まだ危ないから私に任せておけ……」って言ったアーチャーのせい」

微妙に似ているモノマネをして告げるはやてに、アーチャーは反論を諦めた。こうなると結局はやてのペースになり、自分が折れなくてはいけなくなるからだ。

最近、アーチャーははやてとの論戦勝率が七割を切ったように感じていた。まあもつともそれは彼自身のせいなので、自業自得なのだが。ともあれ、猫の性別が判明したのならばはやてが張り切らぬは

ずはない。

「じゃあ、名前は女の子っぽくせなあかな！」

「……好きにしまえ」

もう何を言っても無駄だ。そうアーチャーに思わせる八神はやて。現在、小学一年生。

「うーん……キティは……外国っぽいなあ。ルナ……って黒猫やないし……」

あ〜でもないこ〜でもないと言いながら、楽しそうに笑うはやて。その顔を見てアーチャーも笑みを浮かべる。すると、そこへはやてが問いかけた。何かいい案はないかと。それにアーチャーはやや考え、ある事を思いついて冗談交じりにこう答えた。

「リン、と言うのはどうだ？」

アーチャーにしてみれば、それは他愛　いや悪意しかない冗談だったのだが、凜の事を知らないはやてが気付くはずはなく、何度かその名を繰り返して満足そうに頷いた。

「よし！ それや！」

「なっ?!」

驚くアーチャーを尻目にはやては綺麗な名前だと凜の名を誉めている。このままでは猫の名がリンと言う名で決まる。そう考えた途端、どこからかあかいあくまの声で「猫に私の名前付けるなんてい

い度胸してるわね。待つてなさい。すぐそっちに行つてあげるから」と幻聴が聞こえた気がした。

そう思ったアーチャーの行動は迅速だった。まずはやての前に立ち、その両肩に手を置いて真剣な眼で告げた。

「すまないが、その名はやはりやめてもらえるか」

「なんで？ 綺麗やし、ええ」

「頼む」

はやての言葉を遮り、アーチャーは有無を言わせない口調で告げた。その初めて見るアーチャーの真剣な表情に、はやては顔が火照るのを感じ、急いで俯いた。

何故かそれをアーチャーには見られたくないと思つたのだ。更にそれを悟られないために普段よりも大きい声で告げる。

「わ、分かった。なら、他の名前考えてな」

その言葉に安堵したアーチャーは善処しようとして返してはやてから離れていく。その足音を聞きながらはやては顔を押しさえていた。やはり少し熱い気がすると、はやては感じた。

（何やる……？ 風邪やるか？ でも、体はダルないし……）

きつと見つめられて恥ずかしかつたのだろう。そう結論付け、はやては再び勉強に意識を向ける。いつか歩けるようになった時、学校の授業についていけるように。そう考え、はやては強い志を胸に問題集へと挑むのであった……

図書館の前で立ち尽くすアーチャー。彼は今はやてを待っていた。本来ならついでに行くのだが、はやては自分で行ける所は一人で行きたいと、アーチャーを待たせて、中へと入っていったのだ。

（用件は返却のみだし、そう心配する事もないか）

そう考え、アーチャーは笑みを浮かべる。少々過保護かもしれないと思っただけだ。時折吹き抜ける春風が日差しを浴びる体に心地良い。そうアーチャーが感じた時、周囲の空間が色褪せて一切の音が聞こえなくなった。

「ほう……結界の類か。この世界に魔術師はいないはずだったのだが、私も耄碌したかな？」

解析せずとも、アーチャーにはこれが結界である事はすぐに理解出来た。過程こそ違い、世界が変わるように感じると言う点では彼の切り札と同じなのだから。

そんな風に軽口を叩きながら、周囲を警戒しつつアーチャーは気配を探る。相手が自分に対し友好的な存在とは思えなかったからだ。もし仮にそうだとすれば、こんな事をしないで接触してくる。そう判断したからだ。

「お前は何者だ」

そんなアーチャーの目の前に仮面を着けた男が突然現れた。その

視線を受け、アーチャーは思い出す事があった。

「貴様か。ずっと私を監視していたのは……」

「答える。お前は何者だ。なぜあの少女の下にいる」

仮面の男の言い方にアーチャーが微かに表情を変える。それは怒りと嘲り。自分達を監視しておきながら何も理解していない。そう感じたからの感情。あの少女が望んだ在り方。それは決して上下関係など有り得ないのだから。

「下にいる、だと？ 違うな。散々監視しておきながら、そんな事も分からなかったのか？」

「何？」

「私ははやての下にいるのではない……共にあるのだ！」

気合一閃。アーチャーは投影した干将・莫耶で男に斬りかかった。その鋭い一撃を前にして男が取った行動は、回避でも防御でもなかった。ただ、その手を前に出しただけだったのだ。しかし、それにアーチャーは驚愕する事になる。

「何だと?!」

男の前にバリアとでも呼ぶべきものが展開されたのだ。それが干将・莫耶の切っ先を防いでいる。と、そこで男から何か嫌なモノを感じ取ったアーチャーは即座にその場から離れた。

直後、そこに光の弾が殺到した。それを察知したアーチャーの行動に男は感嘆の声を上げる。だがアーチャーはそんな声に反応を返

さず、鋭い視線を向けるのみ。

「良く気付いたな。もう少しだったんだが」

「生憎、悪運は強くてね。こういう時の勘は良く当たる」

「成程な」

アーチャーの答えに苦笑している男だったが、その体に然程隙はなく、アーチャーも攻めあぐねていた。あまり手の内を晒したくないという思いと相手の魔術が問題だったのだ。

詠唱もなく、瞬時に展開出来る防御魔術などアーチャーも聞いた事がなかった。それでもあのまま押し切っていれば、おそらくあの盾は壊せる。しかし問題があったのだ。

（先程のやり方といい、戦い慣れしていると見ていいだろう。ならば、他にも何か手を打っていると思っただ方がいいな）

魔術師には二つのタイプがいる。一つは学問として魔術を研究している者。もう一つが魔術を実践的に研究している者だ。おそらく目の前の相手は後者だろうと踏み、アーチャーは警戒した。

戦い慣れした未知の魔術師相手に戦うには状況が悪すぎたのだ。何しろここは相手の展開した結界の中。故に何が起きるかも分からないためだ。

それでもアーチャーは現状を打破する術を模索する。宝具クラスを投影すればこの結果を破壊出来るだろう。だが、それはリスクが大き過ぎる。それは自分が異能者と相手へ告げ、妙な興味を抱かれる事になりかねないからだ。

「……一つ答える」

結界を突破する術を考えていたアーチャーへ、仮面の男はいきなりそう切り出した。それを無視しようかとも考えたアーチャーだったが、何か情報を得られるかもしれないと思いついた。

「何かな？」

「お前は……守護騎士ではないのか？」

「守護騎士？ 君にはこの身が騎士に見えるかね？ 私はただのしがない弓兵だよ」

「つまり守護騎士ではないのだな」

「さてどうだろうな。実はそうだとしたらどうする」

アーチャーの音が一段と低くなる。そして、その身に纏う闘気がより濃いものへと変わっていく。それに男は静かに頷き、何故か構えをといた。それに警戒を強めるアーチャーだったが、それを気にせずに男は言った。

「もうお前に用はない」

「おや……逃げるつもりか？」

「ああ、そうさせてもらおう」

アーチャーの挑発をアッサリと男は受け流し、その場から空に向かって。

「飛んだだと……」

「一つだけ忠告する。あの本には関わるな」

「待て！ あの本が狙いなら何故奪いに来ない。いや、そもそもどうして監視に留める。その気になれば」

アーチャーの言葉に答える事なく、そのまま仮面の男は姿を消した。それと同時に色褪せていた景色が戻り、日常の音が甦った。そんな中、アーチャーは先程の戦いで得た情報を整理していた。

（得られた情報は、守護騎士と言う言葉に……謎の魔術）

それに、とアーチャーは呟き、視線を空へと移した。

「あの本に関わるな、か」

それはつまりはやてに関わるなと言う事だ。そして関わり続ける限り、またあの仮面の男が現れる。だとしても、アーチャーは構わなかった。あの得体の知れない攻撃は厄介だが、勝てぬ相手ではないとアーチャーは感じていたのだ。

故に次に戦う事があれば必ず倒す。それだけの確信が出来る要因があるからだ。それは相手から感じた魔力量。確かに中々のものだが、それはあくまで人間としては、だ。加えて戦い慣れはしているようだが、接近戦は不得手と見たのだ。

その証拠にアーチャーの剣撃をかわせなかった。様子見と情報収集をするために加減した一撃だったのだが、相手はそれに反応できなかったからだ。ならばこの身で勝てない者ではない。

そう結論を出し、自分が召喚された原因がおぼろげながらアーチャーには分かり出していた。あの鎖で縛られた本。あれがその原因となるのだらうと。そこに後ろから彼を呼びかける声があった。

「アーチャー、お待ちせ」

「……意外に遅かったな」

はやての声にアーチャーは思考を止めた。それと共に気持ちを日常に切り替え、何事もなかったように普段通りの表情を作る。

「返却が並んどってな。それで時間食ってしまった」

「それなら仕方ないな。で、今日の昼は何にする」

いつもの様にはやての車椅子を押し始めるアーチャー。それに笑みを返すはやて。穏やかな日差しの中、二人の声が楽しそうに響く。そうして離れていく後姿をあの猫が黙って見つめていた……

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

準備編もやっと残すは数話。情報を得るため、全力で戦わないアーチャーとその存在の正体を知りたい仮面の男。

結局、アーチャーが得られた情報は極僅かですが、果たしてこれがどうなるのか。今回の闇の書事件は、展開がまったく違うものにな

るので楽しみに。

交流編その1

その日、すずかは図書館に来ていた。読書好きのすずかは買うだけでなく、こうして手軽に本を読める図書館にもよく顔を出すようになった。それに付き添う形でライダーも来ているのだが、最近すずかはむしろ自分がその付き添いで来ているような感覚があった。

それは読書好きのライダーへ図書館の事を教えた事に端を発する。彼女は個人では買う事が難しい蔵書を持つ図書館を気に入ったのだ。今も難しい専門書の辺りで本を探している。

「……また貸し出し不可なんだろうなあ」

すずかの視線の先には、大きな本をその場で読み始めたライダーの姿があった。ライダーがその場で本を読むのは、大抵そういうケースなのだ。

どうして座って読まないのかとすずかが尋ねた際、ライダーは座りに行く時間ももつたいたいと答えた。なので、今のライダーは完全に読者モード。おそらくすずかが声を掛けるか、本を読み終わるまでその場から動かないだろう。

そんな光景に笑みを浮かべ、すずかも再び周囲の本を見渡し、興味が湧く物がないか探し始めた。その時、視線の先に車椅子の少女が映った。その少女はすずかも何度か見かけた事がある。

どうやら棚の中段にある本を取ろうとしているらしい。だが、車椅子の上に背丈が低い事もあり、当然ながら手が届かない。それでも何とか取ろうとしているため、先程から見ているとはらはらするような体勢をしていた。

「あのままじゃ危ないよね」

そう思うや否やすかは踏み台を探した。そしてその少女の近くに立って、目的の本を手にとると彼女へと差し出した。

「はい。これだよな？」

「あ、どうもありがとうございます」

その独特の訛りを含んだ喋り方にすかは若干驚き、そして笑みを返す。

「どういたしまして。でも、ダメだよ。見てて危なかったから」

少しドキツとしちゃった。そうすかは続けた。それに少女は少しバツが悪そうに頬を指で掻く。どうやら自分でもそう感じていたらしい。

「あはは、ほんま助かりました。実はわたしも、これ、ちょう危ないかなって思ってたよ」

「ホントにね。何もなくてよかったよ」

「ほんまにありがとうございました」

そう言っ頭を下げる少女にすかは微笑みを浮かべた。そして、ある事を思いついて名前を尋ねる。

「ね、お名前教えてもらってもいい？」

「えっ？」

そんな事を聞かれるとは思わなかったのか、少女の顔が驚きに変わる。自分も逆の立場ならそうなるだろうなと想像し、またそんな反応を好ましく思いながら、すずかはまずはと自分の名を告げた。

「私、月村すずかっつて言います」

「あつ……ええつと、わたしははやて。八神はやて言います」

「はやてちゃん、だね。……うん。可愛い名前」

「そんな……。それ言うたら、月村」

「すずかでもいいよ」

はやてが苗字で呼ぼうとするのを聞いて、笑顔で遮りながらすずかは名前と呼んでくれる事を願った。その申し出に再びはやてが驚きを見せるも、ならばと一度軽く咳払いをしてから言葉を紡いだ。

「こほん。えつと、すずかちゃんもキレイな響きやんか」

はやての綺麗との評価にすずかは思わず照れ笑い。それを見てはやてが更に誉め始めて数分で二人のやり取りはお開きとなる。はやての背後にライダーが現れたのだ。

だが、まったく気配も感じさせずに現れた事に驚き、その場で固まるはやて。しかし、小声で「メイドさんや……」と呟いているので原因はそれだけではないようだ。更にその目はしっかりとライダーの胸部に注がれている。

「スズカ、そろそろお昼です」

はやての視線を意に介さずライダーはそう告げた。すずかはその言葉に手元の時計へ目をやった。確かに時刻は正午を告げようとしていた。確かにそろそろ帰宅しなければ昼食を食べるのが遅くなり、忍辺りが文句を言いかねない。

そう考え、すずかは小さく苦笑する。ライダーも同じ事を考えているのか、その表情は笑みを浮かべている。すずかはそれを見て、先程とは違う笑みを浮かべるとはやてへ視線を向けた。

「ごめんね、はやてちゃん。また今度会おうね」

「え？ あ、うん！ またな、すずかちゃん！」

それを合図に互いへ手を振り合い別れる二人。はやてはすずかの今度との言葉に、驚きと嬉しさを感じたために反応が若干遅れた。ライダーはそんな様子を眺め、不思議に思っただけを傾げた。

すずかの交友関係を既に把握しているライダーにとって、はやては未知なる存在だったからだ。まだ把握していなかった友人がいたか。そう思い直し、確認をとライダーはすずかへはやての事を尋ねた。

「スズカ、彼女も友人ですか？」

「そうならいいかな。はやてちゃんって言って、今日知り合ったばかりの子なんだ」

「そうですか……」

ならば納得です。そう呟きライダーは歩く。その手はすずかと繋

がれていた。彼女達は知らない。それが、とても大事な出会いになる事を……

「少し遅くなってしまったか」

今日は休日という事もあり、はやてを図書館に送った後にアーチャーは一人買い物を買わせていた。本当ははやても行きたがっているのだが、アーチャーとしては、休日は混雑が予想されるため周囲の迷惑になりかねないと言って彼女を説得していた。

そのため、祝祭日や休日等の日は自分一人で買い物を買わせる事になっている。まあ、その反面はやてが色々と要求する事になり、アーチャーに迷惑を掛けているのだが、彼も彼女もそれを互いに楽しんでいる節があるのでいいのだろう。

そして、この日ははやてが欲しがっているゲーム機を買いに行く事になっている。そのため軽く摘める物と思い、アーチャーはサンドイツチを作ってきたのだが、そのために少し時間を食ってしまったのだ。

「ん？ ……上機嫌だな」

そう呟くアーチャーの視線の先には笑顔で手を振るはやての姿があった。その様子に軽く意外性を感じたアーチャーは、疑問を浮かべたまま車椅子の後ろに立つ。

「ちよう遅刻や」

「すまない。簡単な昼食を作っていたのでね。後で公園でも食べよう」

「そか。ま、今日は気分がええし、大目に見たる」

そう言っではやては再び満面の笑顔を見せる。それはアーチャーの見せたバスケットの中身に期待しているだけではない。アーチャーはそう思い、聞いて欲しそうに自分を見つめるはやてに苦笑しつつ、その思惑に乗ってやる事にした。

何か良い事でもあったのか、と。それにはやては、よくぞ聞いてくれましたとばかりにすずかとの出会いを語り出した。それを合図に車椅子は動き出す。柔らかな日差しを浴びながら、カラカラと音が響く。その音にはやての楽しげな声が混ざっていた。

「で、今に至るっちゅーわけや」

「成程、良く分かった。で、もうそろそろお目当ての店だぞ」

どこか笑みを浮かべ、アーチャーは視線ではやてを促す。その先にはゲームシヨップがあった。それを見てはやては急かす様に視線をアーチャーに向ける。それに応じ、アーチャーは車椅子の速度を上げた。

それに楽しそうな声を上げるはやて。その声に悪戯じみた笑みを返し、アーチャーは更に速度を上げる。それにはさすがにはやても驚く。と、そこで即座に急停止を掛けるアーチャー。それでもはやてが落ちないようにしている所が彼らしい。

「おわっ！……何してくれるんや!？」

「何、君が楽しそうだったのね。少しばかり刺激を増やしたただだ」

満足して頂けたかね？ そう笑うアーチャーにはやては頬を膨らませる。仲の良い兄妹のような姿がそこにはあった……

麗らかな昼下がり。庭にあるテーブルに腰掛け、すずかはライダーが淹れてくれた紅茶を飲みながら春風を感じていた。その膝では猫が一匹心地良さそうに眠っている。それは向かいに座っているライダーも同じ。膝に乗った猫にどこか躊躇いながらも、その背を撫でている。

月村家は猫屋敷と呼んでもいい程猫がいる。その世話もノエル達の仕事の一つなのだが、ライダーはこの仕事だけが唯一苦手だった。彼女は蛇の属性を持っている。それがどうも猫と相性が良くないのか、あまり懐かれれないのだ。

「はやてちゃん、か。また会えるといいな」

「会えるでしょう。彼女もよく見かけます」

すずかの呟きにライダーはそう答える。彼女は平日も暇を見つけては図書館を訪れている。なのではやての事も知ってはいる。だが、彼女の傍にアーチャーがいる事には気付いていない。

受肉し、存在が完全に確立された状態ではサーヴァントとさえも気配は人とそう大差ないものになってしまうのだ。それにいかなる運命の悪戯か、ライダーがはやてに遭遇する時に限って彼女は返却

のみで帰ってしまうのだ。よって待っているアーチャーと鉢合わせる事もなかった。

「そうだった。それにしても……ライダーも大分手馴れてきたね」

「そうでしょうか？ 未だにこれだけはファリンに勝てません」

それ以外なら圧勝なのですが、と言いながらライダーは猫の喉を触る。それが嬉しいと言わんばかりに猫はご機嫌な声を出した。それにやや嬉しそうな笑みを浮かべるライダー。そんな彼女を見て、すずかは小さく微笑む。

「らしいね。ライダーに勝てる唯一の仕事だって、ファリンも自慢してたっけ」

胸を張ってそう言っていたファリンを思い出しながら、すずかはどこか苦笑するように言った。すると、それに応じるように後ろから声が聞こえた。

それ以外でも頑張っただけだね。

その声に振り向くすずか。そこには姉の忍がいた。手には一冊の本が握られている。機械工学系の物だ。そうして突然現れた忍は、当然のように空いてる椅子に座って紅茶を無言で催促する。

ライダーもそれを分かっているから、座った時点でカップに紅茶を注ぎ出しているのがこの家に慣れた事を如実に示している。程なく出てきた紅茶に満足そうに頷き、忍はカップに口をつけた。

「もう、お姉ちゃんったら自分で注ごうよ」

「人に淹れてもらうから美味しいんじゃない」

それに一応ライダーもメイドなんだからと、忍は笑う。ライダーもその言葉に頷き、すずかにこう告げた。

「そうですよスズカ。シノブはものぐさなだけです」

「っ！……ちょっとライダー！」

紅茶を噴出しそうになりながら、忍はライダーを軽く睨む。それに何でしょうと言いたそうな顔でライダーは首を傾げる。そんな反応を見て、更に不機嫌な眼差しを向ける忍。そしてその二人を笑いを堪えながらすずかは見ていた。

「誰がものぐさよ、誰が！」

「シノブですが……？」

「違っでしょ！」

「何がです？」

そんなやり取りが展開され、すずかはもう限界だった。堪えていた声を出し、その笑い声に二人は口論を止めた。すずかが笑う事は珍しい訳ではない。

だが声を上げて笑う事はあまりない。今もお腹に片手を当て、片手で何とか声を殺そうと口を覆って笑っている。そのためだろう。膝で眠っていた猫が起き出し、どこかへ行ってしまう。それを眺めずずかは申し訳ない気持ちを抱くも、声を抑える事が出来ずいた。

忍とライダーはやや唾然とした表情でその光景を見つめていたが、やがてそんな風に笑うすずかにどちらともなく微笑む。

「ま、もういいわ。何か気が削がれたし」

「同感です。スズカは心を癒す力でもあるのでしょうか？」

「さて、ね。……ライダー、もう一杯もらえる？」

「ええ、分かりました」

穏やかな昼下がり。月村家の庭を爽やかな風が吹き抜けていた……

それから一カ月後、図書館に楽しげに語らうすずかとはやての姿があった。あの後も度々出会った二人は当然のように本の話をするようになり、もう友人と呼んで差し支えない関係になっていたのだ。

「今日もライダーさん来てへんの？」

「うん。気を利かせてくれてるんだと思う」

そう、二人が楽しげに話すようになってからというもの、ライダーは意図的にすずかと図書館に行く事を避けるようになった。それは、学校が同じであるのは達と違って、すずかと中々会う事が出来ないはやてに配慮したためだ。

「そか。優しい人やな、ライダーさん」

「それ、ライダーに伝えとくね。きっと照れると思うけど」

「あ、ええなあ。照れるライダーさんとかわたしも見たい」

はやては既にライダーとも会話する仲になっていた。と言っても平日にたまに会えば、くらいのものが。ちなみに何度かその胸に手を出しそうになって踏み止まった事が多々ある。

もつとも、はやてが気付いていないだけでライダー自身はそんな彼女の葛藤を見ていたのだが、何も言わないだけだったりする。

「そや。今度、わたしの家に遊びに来て。面白いゲーム買ったんよ」

「そうなんだ。……じゃあ、来週の日曜日は大丈夫？」

「よっしゃ。なら、来週な」

「うん。来週ね」

はやてが出した小指にすずかも小指を絡ませ、互いに笑顔を見せる。

「いつか、アリサちゃんやなのはちゃんにも会わせたいんだけど…」

「…」

「あゝ、良く話してくれるお友達やな。写真で顔は知っとるし、わたしも会いたいけど……」

そう言つて二人揃つて苦笑い。二人の共通の話題はやはり本。だがアリサはともかく、なのはあまり本を読まないイメージがある。そうすずかは勝手に思っているのだが、それが意外と正解なのだから笑えない。

それを聞いているはやても一人会話に入れずオロオロするのを想像した。二人の苦笑いは、つまりそういう事であつた。

「あ、でもゲームはなのはちゃんも好きみたいだから」

「おお、なら何とかなるか」

そう言つてまた笑う。今度は水を得た魚のように元気な姿のなのはを思い浮かべたからだ。すずかは親しい友人を勝手な思い込みで動かす事に苦笑し、はやては直接話した事もない相手へ先入観を抱いている事に苦笑した。

「なんや、わたし達けつこうヒドイ事考えてる気がする」

「ふふ、同じく」

そう言つて笑みを浮かべ合いながらすずかは思う。きっと、アリサやなのはともはやては仲良くなれると。何しろ、あのライダーと物怖じせずに話す事が出来るのだから。

なら、アリサやなのはにも同じように接する事が出来るはず。そうすずかは結論付け、いつか来るだろう日々を思いを馳せる。はやてを加えた四人で楽しく過ごす、そんな光景に……

空白期（H&Amp;A）

八神家、リビング。そこに難しい顔をしたはやてがいた。その向かいにはアーチャーが座っている。その二人の間には、様々な名前が書かれたチラシが置かれている。そのあちこちに×印が打たれているのだが。

どこか重苦しい空気漂う室内。とはいえ、実際ははやてが思っているだけなのだが。そんな中、搾り出すようにはやてが呟く。

「……なあ」

「何だ？」

「みーちゃん、てのはどうやる……？」

「……単純だが、いいとは思ってぞ」

「ぶぐ、もうちょうシリアスさを出さんかい」

どこか呆れたように答えるアーチャー。それに不満そうな表情を浮かべるはやてだが、どこか楽しそうだ。こうして、八神家に現れる猫はみーちゃんという名前に決まった。これは、その名前が決まった日の様子……

庭に出て、今か今かとみーちゃんを待つはやて。それを横目に苦

笑しつつ洗濯物を干していくアーチャー。時間から考えてそろそろ来る頃かと思い、アーチャーがはやてに食事の入った皿を渡す。

それは、みーちゃん用にされた皿。新しく買うと言って聞かなかつたはやてだったが、アーチャーの「無駄遣いは許さん」の一言に沈黙。それに二人では皿を沢山使う事もないので、一枚ぐらいみーちゃん用にしても問題は無かった。そのため、この日から八神家に”みーちゃん皿”と呼ばれるものが出来たのだった。

「おつ、来た来た」

可愛らしく声を出しながら、扉を降りるみーちゃん。それをいつも以上に笑顔で迎えるはやて。それに気付いたのか、みーちゃんはどこか不思議そうに首を傾げた。

が、はやてが皿を置くとそれもすぐに元に戻り、食事に駆け寄り食べ始める。まさしく猫まっしぐらという奴である。そんなみーちゃんの反応に満足そうな表情のアーチャー。はやてはそれに気付かず、嬉しそうにみーちゃんを眺めていた。

「おー、相変わらずよー食べるなあ」

「そうだな」

「うーん……でも、昨日はもうちょうゆっくり食べとった気がするなあ」

はやての呟いた何気ない一言にアーチャーも日々の事を思い出し、注意深くみーちゃんを見つめた。確かに初めて自分の作った食事を与えた時と今では、食べ方が若干違うように感じた。

(そういえば……あまり気にしていなかったが雰囲気もどこか時折

違う気がするな)

それが何故かは分からなかったが、アーチャーはそれを頭の片隅で覚えておく事にした。どうしてか、流していいような気がしなかったのだ。この時から、アーチャーの中で再びみーちゃんへの疑念が生まれ始めた。そして、それが思わぬ形で功を奏すのだがそれはまだ当分先の話。

やがてみーちゃんが食べ終えたのを見て、はやてが両手を広げて微笑みかける。それに応じてみーちゃんがはやてに近付いたところで……

「おいで、みーちゃん」

「っ?!」

「おわっ!? ……どないしたんやろ」

呼びかけに驚いたのだ。明らかに呼ばれたのが自分の名前であると理解したかのように。それにはやても驚いた。だが、はやては突然呼びかけた事に驚いたとしか感じなかったのか、そのまま不思議そうにみーちゃんを見つめた。

するとみーちゃんも立ち直ったのか、再びはやてに向かって近付きその膝に乗った。それをどこか訝しげに見つめる者がいる。アーチャーだ。しかし、その視線を直接みーちゃんに向ける事はせず、洗濯物を干しながらそれに隠れるように見ている。

そして、はやてと戯れるみーちゃんを見つめながらある事を考えていた。それは、あの図書館前での襲撃以来感じなくなった監視の目との関連。

(あの仮面の男の視線を感じなくなつて久しいが……もしや……？
いや、流石に考え過ぎか。だが、あの猫にはまだ何かある気がする。
注意だけはしておくか)

そんな風に考えるアーチャーに気付かず、はやてとみーちゃんは
楽しそうに遊ぶのだった……

「みーちゃん、ばいばい」

塀に登り、はやて達を見つめているみーちゃん。それに笑顔で手
を振るはやて。アーチャーは苦笑混じりにそれを眺め、軽く手を振
る。それに満足したのか、みーちゃんは一声鳴くとそのまま去つて
行った。

それを見送り、はやては二度ほど頷いてアーチャーへ視線を向け
た。その視線から何を言いたいかを察し、アーチャーはピシヤリと
告げる。

「首輪はダメだ」

「何でや!?!」

どうして分かったという表情のはやて。それにアーチャーはため
息一つ。仕方ないといった表情で告げた。

「先程の名前を呼んだ時の反応を見ただろう? あれは、おそらく

別の名で呼ばれているのだ。だからこそ、驚いたのだろう」

「そうなんか？ わたしはてっきり突然声を掛けたからや思ってた」

「それもあるかもしれん。とにかく、飼い猫の可能性も出てきた。首輪は、もう少し様子を見よう」

「うつつ……しゃくないか。でも、最後はもう受け入れてくれとったなあ」

初めこそ名前を呼んでも反応が悪かったみーちゃんだったが、徐々に慣れたのか最後は嬉しそうに鳴き声を上げていた。それを思い出し、はやては笑みを浮かべる。それにアーチャーは内心微笑みながらも、こつ咳く。

「ただ諦めただけかもしれんぞ」

「何で人の喜びに水差すんや！」

その一言にはやてが怒る。それに皮肉屋スマイルで「何、私は自分の経験から言ったただけだ」と返すアーチャー。そんな言葉にはやては一瞬笑みを浮かべるも、すぐに怒りの顔に戻し「どついう意味や！」と言い返す。

そこから始まるいつもの口論。だが、そこにあるのは怒りでも呆れでもない。この他愛ないやり取りを心から楽しんでいる。そう、喜びと嬉しさがそこには溢れている。

そして始まりは口論でも、それがやがてその日の話へと変わるのもいつもの事。昼食や夕食の献立をチラシヤ冷蔵庫の中身を確認し、

相談しながら決めていく。

最近はやても作れるものが増えてきており、簡単な食事ならば一人でもこなせる程に成長していた。だが、味は未だにアーチャーには遠く及ばず、更なる精進を誓いはやてはアーチャーの教えを受けているのだ。

「今日は……牛肉が安い、か」

「あ、なら肉野菜炒めはどうやる。そろそろ野菜使い切らんと……」

「そうだな。なら、それは夕食にしよう。片栗粉でとろみをつけ、中華丼仕立てにすればいい」

「おう、じゃ、わたしスープ作る。卵とワカメで中華スープ！」

「ほう……では頼む。さて昼食だが……」

「な、それなんやけど……」

こんな感じで会話する二人。とても子供と大人の会話ではないが、それでもどこか楽しそうに二人は話す。何を作るか。誰がやるか。チラシを前に色々意見を出し合う。

はやての要望をどこか嫌がりながらも、それを叶えてやるアーチャー。アーチャーの意見を納得しながらも、どこかで反論するはやて。でも、結局最終的には両者とも受け入れてしまうのだから仲がいい。

そんなこんなでこの日も献立を決め、はやての勉強が終わり次第買い物に行く事で決着となった。

「よっしゃ。ならさくつと終わらせよか」

「そうか。では三分間で片付けろ」

「どこの巨大ヒーローや！」

そんな馬鹿げた会話もまたご愛嬌。ともあれ、アーチャーから分らない場所を教えてもらいながらのはやての勉強も終わり、二人は強い日差しの中へと出かけるのだった……

外の暑さが嘘のように感じる店内。そこにアーチャーとはやてはいた。梅雨に入り、蒸し暑い日が続く中、はやての楽しみは晴れた日のみーちゃんとの戯れと図書館でのすずかとの会話。そして、スーパーでの買い物なのだ。

別に雨が降っても構わないのだが、アーチャーが風邪を引く事もあると言って中々出させてくれない。そのため、彼女は雨の日は退屈を感じる事がある。

（ほんま、過保護なんやから……）

そう思いながらも、その優しさがはやては嬉しいのだ。だからこそつい甘えてしまう。雨の日の買い物は、アーチャーも普段よりも早めに終わらせて帰ってくるのだ。

その理由。それははやてを一人にしておくのが心苦しいため。だが、それをはやては気付きながらも口にする事はしない。ただ、熱いお茶を準備して出迎えるだけ。

それがここ最近の彼女のルール。そして、はやての淹れた熱いお茶を飲みながら、二人でするその日の会話が彼女なりの雨の日の楽しみ。

(雨の日が楽しくなるなんて思わへんかったわ。アーチャーが来てくれてから、つまらない日がないもん)

「どうした？ 何か気を惹く物でもあったのか」

そんな風に考え笑うはやてに気付き、アーチャーが不思議そうに問いかける。それにははやては余計に笑みを深くして首を振る。

「何でもないわ」

「そうか。さ、今日もしっかり見極めてもらうぞ」

「よっしゃ！ 任せて」

これもいつもやり取り。食材の見分け方を実践しながら、はやてに覚えさせるクイズ形式。これも最近のはやての楽しみ。まず何のヒントもなしにアーチャーが選んだ二つの品物を見比べて、どちらが質がいいのかをはやてが見極める。

例えそこで正解していても、その根拠を聞いて間違っていれば指摘し、不正解扱い。不正解でも、目を付けた根拠が合っているなら誉める。そんな授業のような状況がはやてには堪らなく楽しい。そして、正解した時の一瞬見せるアーチャーの笑みが好きなのだ。

今日は牛肉の見極め。それをはやては不正解。目の付け所も良くなかったのだが、アーチャーはどこか仕方ないといった表情で告げ

た。今回はかなり厳しいものにした事。だから、はやてが間違えるのも仕方ないと。

それを聞き、アーチャーからそういう場合の見極め方を教わるはやて。同様にその話を周囲の主婦達が聞いて成程と頷いていた。そして、そのままはやて達はお菓子売り場へと向かう。すずかと知り合って一月が経ち、最近はたまにすずかが遊びに来るようになったのだ。

そのため、手軽に摘めるスナック菓子をはやては欲しがっているのだが……

「これだな」

そうやってアーチャーがカゴに入れるのは、新潟で取れた米を使った煎餅。とてもではないが小学生が好んで食べるお菓子ではない。

「……なあ、どうしてもあかんの？」

「スナック菓子はあまり体にいいものではない。煎餅などは流石に自宅では作れんが、その類が欲しいなら私がそれより美味しいものを作ってやる」

そう、アーチャーが買うのは煎餅やアラレといったもの。スナック菓子はほとんど買わせてくれないのだ。どうしてもと言えば、苦々しい表情で一つ買ってくれるが、それでも野菜等を使った比較的にいいものしか買わない。

はやてもそれが分かっているので強くは言わない。確かにアーチャーの作るおやつはどれも美味しく、すずかも驚いた程なのだ。

「そやけど……」

「はやて、勘違いするな。私は好きでやっているのだ。それに、君達が嬉しそうに食べるだけで作り手としては満足する。それを今の君なら分かるはずだ」

アーチャーの言葉にはやてが思い出すのは、初めて作った目玉焼き。黄身は潰れ、とても美味しそうに見えないそれを、アーチャーは文句も言わずに食べた。そして笑みを浮かべて「まあ、お世辞にも上手ではないが……美味かった」と言った。

その言葉を聞いた時、はやては涙を浮かべて微笑んだ。その時はやては教えられたのだ。作った側として何が一番嬉しいのかを。料理を作る者が何よりも聞きたい言葉を。

そう、どんなに疲れて、どんなに大変でも、誰かが”美味しい”と言ってくれる。それだけで全ての苦労が吹き飛ぶのだ。それを思い出し、はやてはアーチャーを見つめる。

アーチャーは既にはやてから視線を外し、レジへと向かって車椅子を押していた。だが、はやてはそんなアーチャーへ心の中で呟く。

(ほんま、わたしは幸せもんや。こんなにわたしの事を考えてくれる人がおる。ほんま、おおきになアーチャー)

この日、はやては初めてアーチャーを唸らせる味を出す。その時のアーチャーの顔を、はやては終生忘れなかった……

.....

- - - - -

空白期。今回ははやてとアーチャー。他の組よりも家族度が高い二人。ただ、会話がかなりアレですが……

さり気無くA・Sの布石も入ってますが、これは別になくても構わない程度です。なのでさらりと流してくれても構いません。

交流編その2

「じゃあ、また明日」

「うん。またな」

互いに手を振り合い、はやてとすずかは別れた。いつものように図書館で会話し、共に連れ立って外に出た所で、また若干言葉を交わして別れる。

二人が友人となって早三ヶ月。最初は図書館のみの付き合いだったが、今ははやての家にも遊びに行く仲になっていた。そして、それに伴い……

「今度はなのはちゃん達も一緒だからね」

「分かつとる。楽しみにしとるな」

やっと都合をつけ、はやてとなのは達の初顔合わせが行われる事となったのだ。明日が待ちきれないといった顔のはやて。それを微笑ましく思うアーチャー。

この時の二人は知らない。その楽しみにしている明日が、将来を左右する出会いの日だったと……

家までの帰り道、はやてはずっと翌日の事を話していた。何をするか、何を話すか、考え出したらキリがない程話題が湧き出してく

る。そんなはやてに、アーチャーは内心微笑ましく感じながら冷徹に告げた。

「相性最悪ならどうする？」

「おう、それは大丈夫や。わたしにはアーチャーがおるし」

アーチャーとうまくやっていけるなら、大抵は平気やから。はやてがその口の端を吊り上げて言い切り、アーチャーの方を見上げた。それにアーチャーも負けじと笑みを浮かべて呟く。思い込むのは勝手だが相手は子供だという事を忘れるな、と。

そんな大人らしからぬ切り返しにはやては頬を膨らませてブーイング。それを相手に、事実だと切つて捨てるアーチャーへ大人げないと呟くはやて。それにアーチャーは皮肉屋スマイルで返す。そんないつもの雰囲気。

「さて、今日はどうする？」

「そやなく、軽く蒸し暑いし……涼しげなもんがええ」

「承知した。なら、冷やし中華に棒棒鶏バンバンジーといこう」

「おう、中華やな。なら、わたしはササミ裂くのやりたい！」

嬉しそうに宣言するはやてにアーチャーは笑みを浮かべ、ならついでに錦糸卵でも作ってもらうかと返す。それにはやては少し不満顔。アーチャーから家事を習い出してかなり経つが、未だにその腕は彼に遠く及ばないのだ。

だからだろうか。それを知っているアーチャーを睨み、文句を述べるが悉くあしらわれてしまう。そんな会話が車椅子の立てる音と

混ざりながら、夏の空に消えていった。

その頃、すずかと言えば家路を一人歩いていた。足取りはどこか軽く、浮き立つ気持ちを如実に示している。はやてと同様にすずかもまた、なのは達と過ごせる機会を待ち望んでいたのだ。

「……時間、かかっちゃったな」

すずかはそんな事を呟くと、入道雲が流れる空を見上げる。本当なら、もっと早くはやてとなのはやアリサを会わせられるはずだった。しかし、前準備として互いの事を知っておいた方がいいとすずかが考えた事と、急になのはが予定が空しくなってきたのが重なった。

そのため様々な情報をやり取りする事にし、なのはとアリサの方からはやてに会いたいと言い出してくれたのだ。はやてにその話をした時、嬉しかったのかその目が涙目になっていたのをすずかは見た。

「私が会って欲しいなんて言うのは、何か違う気がしたんだよね……」

二人がはやてに会いたいと思ってくれるようにしよう。自分のために都合を付けさせる事に罪悪感を感じていたはやてのため、すずかが選んだ方法がそれだった。

おかげで時間は掛かったが、はやても何の躊躇いもなく会う事を快諾したし、なのはとアリサも優先的に予定を空けてくれた。これなら今度会う時は楽しい時間になるに違いない。

そこまで思い、すずかは笑う。はやてがかなり読書好きと教えた時、なのはは予想通りに感心しアリサに突っ込まれていた。なのは

とは大違いね、と。

(それから、読み易くて面白い本ない？　って聞かれるようになったよね)

そう、なのはは国語が苦手だったがアリサ命名のはやて効果により、その成績を向上させていた。明日会う時にお礼を言わなきゃとなのが言っていたので、おそらくはやては戸惑い、理由を知って笑うだろうとすずかは予想している。

「……っと、いけない。足が止まってた」

まだお昼前とは言え、もう日差しは真夏の太陽が激しく照り付け南国並み。日射病にならないようにしなきゃ、と思いつくは家路を歩く。その足取りは、心境に呼応するように先ほどよりも一層軽くなっていた……

「明日のトレーニングは中止にしたい、ですか？」

「ごめんね、セイバー」

「いえ、それはいいのですが……どうしてです？」

セイバーが小次郎と再戦した翌日から、なのはは彼女とのトレーニングをやりたいと申し出た。最初は、休日に行っているランニングかと思つたセイバーだったが、なのはが望んだのはもっと本格的な

ものだった。

さすがにそれはとセイバーは止めたのだがなのはの意志は強く、士郎監修のメニユー以外の事を絶対しないという条件で二人のトレーニングが始まった。

そのおかげか、今では体力と反射神経、動体視力ならアリサにも勝てる自信がなのはにはあった。

なのはがそんな事を言い出した理由。それは、少しでもセイバーに追いつきたいと考えたから。置いていかれたくないと、思ったから。セイバーに守ってもらっただけじゃなく、自分も彼女を助けられる存在になりたいと心から思ったのだ。

そのために苦手な運動方面を鍛えようと考えた。長所を伸ばす前に欠点を少しでも改善しておこうと思ったからだ。そのため、アリサやすずかと中々遊ぶ事が出来なくなった。

だが、アリサからは小次郎の一件で理解を得ていたし、すずかからは自分が納得するまで頑張つてと励まされた。それもあって、なのははより二人と仲良くなった気がしていた。

「明日、すずかちゃんのお友達のお家に遊びに行くの。だから」

（はやてちゃん、だっけ。本好きの明るい賑やかな子だつてすずかちゃんは言ってたけど）

「そうでしたか……わかりました。では、明日は休養日とします」

「ありがとう、セイバー」

笑顔でお礼を言うなのはにセイバーも笑みで返す。もう少しした

らお盆になる。そうになったらセイバーだけじゃなく、家族ぐるみでの修行が待っている。キャンプの用意を持って二泊三日という日程のものだ。

まあ、実際はキャンプでしかないのだが、なのはにとっては山登りだけでも結構なトレーニングとなる。その時に今日の分を取り戻すぐらい頑張ろう。そう思い、決意を改めるのはであった……

「明日は何を着て行くのかしら？」

アリサは上機嫌だった。それは明日、八神はやてに会えるからだ。何故それがここまで嬉しいのか。それは、はやてがすずかから見せてもらった写真の感想にある。

はやてはアリサの髪の色を見て羨ましそうに「キレイな髪の毛やなあ……」と言ったのだ。それをすずかから聞いた瞬間、アリサは即決ではやてと会う事を承諾した。

そう、アリサは自分の髪の色等にコンプレックスを持っている。そのためはやてが素直に自分の髪の色を褒めてくれたのが嬉しかったのだ。しかし、なのはがあ的一件以来自分を鍛え始めたため、今日までそれが延びてしまったという訳だ。

（でも、それも今日でおしまい。なのはもやっとトレーニング休んで会う気になったし、楽しみね）

すずかの話によれば、はやては親戚の人との二人暮らしで関西系の訛りがある子。趣味は読書と料理との事。それを聞き、自分も何

か料理でも習おうかと思ったアリサだったが、それを止めた人物がいた。

バニングスの専属庭師にして、アリサのボディガードの佐々木小次郎である。彼はアリサからそう相談を受けた際、即座に答えた。

止せ止せ。ありさが炊事など無理よ。

どうしてよ？

生粋の箱入り娘ならば確かに家事は出来た方が良いが、生憎ありさは虎の。

トラじゃなあああい！！

その時のやりとりを思い出し、思わず拳を握るアリサ。しかしそれども、ふと緩められる。

「…………お淑やかになれば、小次郎はアタシの傍にずっといるのかな…………？」

思い出すのは、あの日セイバーと小次郎が戻ってきた後の事。疲れた顔のセイバーとどこか嬉しそうな顔の小次郎が帰ってきたのは、二人がアリサ達の前から消えて三十分ぐらい後の事。

二・三言セイバーに何かを告げ、小次郎は楽しみに帰路についたのだが、その道すがらアリサは何も聞けなかった。初めて見た表情の小次郎。それをもたらしたのがセイバーだったと言う事は、アリサの心に強い衝撃を与えたのだから。

あの日以来、小次郎はアリサの許可を得て早朝の高町家に通うよ

うになった。その理由は後日なのが教えてくれたため納得できたが、それでもアリサの気分は晴れなかった。

結局、小次郎がセイバーの所に行っているのが気に喰わないのだろうとアリサは考えている。アリサはまだ恋愛感情など理解できない。好きと愛してるの違いなど明確に分からない。でも、好きと嫌いの違いは分かる。そして、それでは小次郎は……

「好きになれる訳ないでしょ、あんな奴」

そう吐き捨てるように言って、アリサは誰に聞かせるでもなくポツリと呟く。

でも、嫌いにもなれないのよ……

アリサは知らない。それが小次郎に対しての思慕の思いだとは。恋慕ではなく思慕。自分を知らず導いてくれる小次郎。そんな彼に兄にも似た感情を抱いているのだから。

小次郎の興味を自分にだけ向けさせたい。そんなアリサ・バニングス、小学一年生。その心は態度や行動に比べ、未だに歳相応の幼さを残したままであった……

「「「「「こんにちは」」」」」

「おっ、いらっしやい。とりあえず上がって」

「「「「「お邪魔します」」」」」

元氣良く挨拶を交し合うのは達。声がキレイに揃っているのは仲がいいからなのか。そんな三人にはやては笑みを一つ浮かべて、リビングへ三人を案内する。

そこにはお茶の用意をするアーチャーの姿があった。その様子がやけに様になっていたため、見慣れたすずかとはもかく初見のなのはとアリサはやや呆気に取られたように見つめていた。

「あ、お邪魔してますアーチャーさん」

「ん？ ああ、すずかか。それと、髪を結んでいる方がなのはでブルンドの方がアリサか」

初対面の少女達を簡単に呼び捨てするアーチャー。だが、そんな事を気にするような事はない。既にすずかによってアーチャーの事もある程度聞いていた二人は、その聞いた通りの人なのかと理解しそれぞれ自己紹介と挨拶を終える。

それにアーチャーは軽い笑みを浮かべ、挨拶と共に自己紹介を返しなのは達をテーブルへと招いた。はやてはアーチャーがなのは達へも相変わらずな対応を取る事に軽く呆れつつ、どこか嬉しそうに車椅子を動かしていた。

「さて、まずは座ってくれ。それと、君達は紅茶で平気かな？」

「はい」

「ええ」

なのはとアリサの返事を聞き、グラスに注がれていく紅茶。そのアーチャーの動作は実に様になっていた。それに感心するような声

を漏らす二人にはやてとすずかは微笑み一つ。

その光景は、自分達が同じものを初めて見た時とまったく同じ反応だったからだ。きちんとティーポットを使い、水で紅茶を淹れ、それを冷蔵庫で冷やすという手間を掛けたアーチャー謹製のアイスティ。それを四つ。目にも涼やかなグラスに入れられ、手前に置かれる。好みで使えるようにミルクまで添えて。

「ふえ〜……」

「……やるわね」

「ふふっ」

「えっと、ま、アーチャーはこういう人なんよ」

一切の無駄なく動くアーチャーの所作に感嘆の声を上げるなのはとアリサ。それに慣れたとばかりに笑うすずかと、どこか照れくさそうなはやて。

そんな四人に構わず、アーチャーは既に茶菓子のシフォンケーキを切り分けている。ちなみに今日のこの時のために、アーチャーは二日前から材料や茶器を準備していたりする。

キレイに四等分されたそれを皿に載せてグラスの横に置き、アーチャーは仕事は終わったとばかりにリビングから出て行くこととする。それをはやては止めなかった。同じくすずかも。

そんな二人の反応になのはとアリサだけが少し気にしていたが、はやての笑みに理由を思いついたらしく、その顔に納得の色が見えた。

「優しい人だね」

「ちょうイジワルやつたりするんやけどな」

はやての言葉にアリサが心から納得するように「確かにそんな感じね」と返した途端、全員笑う。と、そこでなのはがある事に気付いた。

「にははは……って、まだはやてちゃんに自己紹介してないよ!？」

「あゝ、そういえばそうね。……何か、とつくに終わらせてた気がしてたわ」

「だね。じゃ、まずははやてちゃんから……」

すずかの言葉にはやては頷くと、なのは達の顔をしっかりと見つめて微笑んだ。

「こうして会うんは初めまして、やね。わたしは八神はやて言います。はやてって呼んでくれると嬉しい」

「初めましてはやてちゃん。私は高町なのは。なのはでいいよ」

「初めましてはやて。アタシはアリサ・バニングス。アリサでいいわ。それと、髪の毛褒めてくれてアリガト」

笑顔で互いを見つめ合う三人。それを嬉しそうに見守るすずか。その光景は、まるで以前からの友人であったかのような雰囲気を感じられるくらい、何の違和感もなかった。

それから、四人はとにかく話した。学校の事や家の事、家族の事

に趣味の事などなど、喋り足りないと感じるぐらい話した。予想通り、なのはのお礼の言葉にはやてが困惑し、理由を聞いて納得しつつ笑った一幕もあったが。

そして途中にアーチャー作のお昼を食べて、それから夕方までゲームをしながら過ごした。更におやつとしてアーチャーが差し入れたホットケーキと冷房で体を冷やしすぎないようにとの配慮からのホットココアを平らげ、さすがにこれ以上は無理だと思う時間まで四人は遊び続けた。

「じゃあ、またね」

「今日は楽しかったわ」

「またね、はやてちゃん」

玄関で思い思いに手を振る三人。それを心から嬉しく思い、はやても負けじと手を振り返す。

「うん。わたしも楽しかったわ。また遊ぼな〜！」

はやての声に三人は笑顔で頷いて家路を歩き出す。そのまま三人が見えなくなるまで、はやては玄関先で手を振り続けた。そんな光景を見ながらアーチャーは一人笑みを浮かべていた。

だが、一つ気になっていた事があった。それはなのはから感じた魔力量。そこから自分のある推測が当たっている事を確信したのだ。

（あれだけの魔力を隠しもせず、それに対して動きがない。やはり、この世界に魔術師はいない。……だが）

以前自分を襲撃してきた相手を思い出して、アーチャーは眉間に

皺を寄せる。あの仮面の男は確かに魔術を使ってきた。なら、どう
いう事なのか。そこで思いつくのは自分と同じく……

イレギュラー
(異端者、か)

そう考えれば納得がいく。この世界とは違う世界からやってきて、
何らかの理由である本に目を付けたが何か事情があり直接行動には
移せない。でなければ、アーチャーが現れる以前にあの本が奪われ
ているだろう。

だとすれば、あの謎の魔術は異世界のもの。ならば、自分が知ら
ないのも頷ける。だからこそ監視していつか行動出来る機会を待っ
ているとアーチャーは結論付けた。

そんな風に思考に耽るアーチャーをはやては不思議そうに見つめ
ていた。難しい顔で物を考えている時のアーチャーは、何か自分の
知っている彼ではない気がしているからだ。

そこへ湿気を含んだ生温い風が吹き抜けた。その不快さに顔をし
かめるはやてとアーチャー。揃って思うのは、早く家の中へ戻ろう
という事だった。

「む、そろそろ家に入ろう」

「そやな。な、今日は晩御飯何？」

「豚が安かったのな、生姜焼きにしようと思っている」

そんな会話をしながら二人は家の中へと戻っていく。楽しげに笑
みを浮かべながら。それはいつもの日常。穏やかで緩やかな平和な
時間。だが、その時間がいつまでも続かない事を二人を見つめる猫
だけが知っていた……

遭遇編その4

今日も賑わう喫茶翠屋。その賑やかな店内の一角だけが沈黙に支配されていた。そこにいるのはメイド服のライダーとエプロン姿のセイバー、そして Tシャツにジーンズ姿のアーチャーだった。

三者に共通しているのは困惑。その内容は違えど浮かべている表情は同じ。先程から一言も発せず、ただ時間だけが過ぎていく。どうしてこのような事態になったのか。それは今から三十分程遡る……

「な、翠屋さんに行ってみたいんやけど」

キツカケははやてのそんな一言。つい最近出来た友人、高町なのはの両親が経営する喫茶店。中々評判が良く、アーチャーも何度か近所の付き合いで聞いた事があった。

弓兵アーチャー。既にその身は近所で評判の主夫となっている。故にご近所の井戸端会議さえ顔を出す事も容易なのだろう。本人が聞けば情報収集だと言いつ張るだろうが、その様子を見た者がいれば違和感が無さ過ぎると指摘するぐらいに。

「それは構わないが、どうして急に行きたいと？」

「あのな、なのはちゃんが昨日言っとったけど、明日から三日くらい出掛けるらしいんよ」

「それで？」

「そやから、見送る代わりに気いつけて行ってきてって言いたいや。今日はお家の手伝いする言うとったし」

そんなはやての言葉をアーチャーは笑う事はせず、ただ黙って立ち上がる。そして、そのままはやての部屋へ行き、手にある物を持って現れる。それは麦わら帽子。夏の日差し対策にアーチャーが買った物だ。ちなみにはやてへの誕生日プレゼントでもある。

「なら、これを身に付けてくれ。今日も日差しが強い」

「うん。それじゃ……」

「ああ。行くとしよう」

アーチャーの言葉に笑顔で頷くはやて。それにアーチャーは笑みで応える。手渡されたお気に入りの帽子を被り、ご機嫌と言わんばかりにはしゃぐはやてを見ながら、それに呆れながらもどこか嬉しそうに相手するアーチャー。

なのは達と友人になってから一段と明るくなったと思いつつ、アーチャーは車椅子を押す。そんな二人を真夏の太陽が激しく照らしていた……

まだ朝と呼んで差し支えない時間にも関わらず、夏の太陽は燦々と光と熱を放っていた。そんな中、汗を流しながら庭仕事をする二

人のメイドの姿があった。

「お姉様、終わりました」

「こちらも終わりました。さ、次はノエルと合流し屋敷の掃除です」

疲労の色を見せるファリンにライダーは容赦なく次の仕事を告げる。その言葉にファリンが崩れ落ちた。どうやら休みたいらしい。潤んだ瞳でライダーを見上げるファリン。それを困った顔で見つめるライダー。

そんなお見合いがたつぷり三分。先に根負けしたのはファリンだった。何せ、その間も二人を真夏の太陽は容赦なく照りつけるのだ。いかな自動人形とはいえ、そんな中でじっとしていれば嫌になるというものだ。

「あゝ、もう限界です!」

そう言うや否や屋敷へ走り出すファリン。それを見送り、ライダーはため息一つ。そして、その後を追うように歩き出すと先の方を走るファリンへ向かってこう言った。

「そんなに急ぐと危ないですよ」

「ふえ?」

その声の原因なのか、はたまた既にそれが決まっていたのか。ファリンはライダーが声を掛けると同時にキレイに躓き

「あつっ!」

地面と二つの意味で熱いキスをした。それはもう見事なまでに。そのあまりの光景にライダーでさえ足を止める程だった。まるで漫画のように沈黙が流れる。ややあって我に返ったのか、ライダーが動き出した。

「……大丈夫ですか、ファリン」

急ぎ足でライダーはファリンへ近付く。数々のドジをしてきた彼女の中でも、今回ののは中々痛そうだった。故にライダーの声にも心配の色が見える。そんなライダーの声にファリンはゆっくりと起き上がり、呟いた。

「なんで私だけこんな目に……」

その目はまさに涙目。世知辛い世の中を恨むような呟きをしているファリンに、ライダーは内心微笑ましいものを感じながらそれを表に出さずに手を差し伸べた。

それをファリンは掴んで立ち上がり、トボトボと歩き出す。その後をライダーは追うように歩き出した。だが、ライダーはファリンの背中を見つめてある事を考えていた。

それは、すっかり意気消沈しているファリンを何とか励ましてやりたいとの思い。元気で明るいファリン。その彼女が自分をお姉様と呼んだ時、ライダーは不思議とすんなりそれを受け入れられた。

以来、すずかとは違う意味でファリンはライダーの中で妹のような存在に変わった。それはきつと、ファリンが無邪気で素直な性格なのも影響している。物事を考え過ぎるライダーにとって、思った事を正直に表現出来るファリンはある意味羨ましい存在でもあったのだから。

だからこそ、今のファリンを見る事はライダーにとって辛い。普段の明るく元気なファリンへ戻って欲しい。そう思い、ライダーは何か出来る事はないかと考える。

(何かないでしょうか？ ファリンを元気付ける方法は)

これまでのファリンとの出来事を思い出すライダー。まだ一年も経っていないが、それでもその思い出は山のようにある。共に料理を作り、焦がして失敗した事や、買い物帰りに団子を買って二人だけで食べた事など。ファリンとだけに限っても数え切れない程思い出があるのだ。

(……そうです。ファリンは甘い物が特に好きでした)

そんな中でも多いのが食べ物に関する事。それに関連して思い出すのは、友人となった相手の顔。それを振り払おうとして、はたとライダーはある事を思いついた。

「ファリン、翠屋のシュークリームはいりませんか？」

「え……？ 欲しいですけど……どうしてです？」

「仕事を頑張っているファリンへ私からのささやかなご褒美です」

元気付ける意味合いも込め、優しく微笑むライダー。それが伝わったのか、ファリンも徐々に表情を笑顔に変えた。こうしてライダーは残りの仕事を事情を話すと苦笑しつつ了解したノエルとファリンに託し、愛車を駆って翠屋へと向かう。

凄まじいスピードを出す自転車。風となってライダーは行く。その先に予想だにしない相手が待っているとも知らずに……

「いらつしやいませ」

入口のドアの鈴が音を立ると同時にセイバーとなのはの音が重なる。喫茶翠屋。その看板娘なのはと名物店員となったセイバーの笑顔がやってきた客達を出迎える。

夏休みのためか、最近は一モーニングが終わった後も客足が中々途切れないのはそれもあるのだろう。そう分析した土郎の意見を聞いて、要因に自分が含まれない事を気にして美由希が少し落ち込んだのは内緒の話。

「モモコ、ケーキセット二でモンブランとショートを」

「はい」

「シロウ殿、ドリンクはアイスのブレンドとカフェオレです」

「よしきた」

セイバーの声に即座に動く高町夫妻。セイバーの後ろではなのはと恭也がオーダーを聞きまわっている。

「ご注文を繰り返します。ガトーショコラにアイスティーですね？」

「セットが三つですね。かしこまりました」

男性客にはセイバーや美由希が、女性客には恭也かなのはとなっていて、余裕がない時以外はそれで動くようになっていて。一部の男性客は可愛らしいのはに接客して欲しいと思っっているかもしれないが、得てしてそういう事を思う者ほど上手いかないものである。

「はい、二百六十円のお返しです。ありがとうございました」

笑顔で見送る美由希。レジは基本その時空にいる者がする事になっっているので、当然誰がするかは運次第だ。夏休みに入り、忙しいと言ってもお昼や午後のピークに比べればまだ軽い。そのためか高町家の面々には余裕がある。

特に既に三ヶ月以上を働き続けているセイバーにとって、この程度は自分一人でも何とか回せるレベルであった。勿論、手伝いをよくしている恭也達から見てもセイバーの上達ぶりは凄まじく、特に美由希はどこか凜とした雰囲気を漂わせる彼女に尊敬の念すら抱いた。

そうしてそんな忙しさが落ち着き、それぞれが小休憩を取り始めた頃、彼らが現れた。

「いらっしゃいませ」

「えっと、わたし、なのはちゃんの友達で八神はやて言いますけど……なのはちゃんいます？」

「なのはの友達？ ちょっと待ってて」

笑顔で出迎えた美由希だったが、相手が妹の友人と分かるとその笑みの質を変えて、店の奥へと消えた。それに対し、少し不安顔の

はやてを見てアーチャーは笑みを浮かべて囁いた。

「心配するな。営業妨害ではないし、後でシュークリームを買って帰るだろう」

暗に、客でもあるから気にするなと、そうアーチャーは告げた。それをはやても分かったのか、若干表情を和らげる。

「そや、な。……って、美味しそうなケーキやな」

「まったく……。む、確かにこれは……」

視界に入ったショーケースへ視線を移すはやて。その変わりよりの早さに呆れつつも、同じく視線を移しその目を鋭くするアーチャー。その目は、腕利きパティシエだった桃子のケーキが己の域と同等かそれ以上である事を読み取っていた。

一方のはやては、目にも鮮やかな品揃えに心を奪われていた。はやても女の子。甘い物は好物とまではいかないが、好きではある。そんな風にショーケースを眺めている二人に、なのはは声を掛けるに
くかった。

何しろ質こそ違い、二人は食い入るようにケースを見つめている。そんな光景になのはは苦笑いを浮かべつつ、軽めに声を掛ける事にした。

「いらっしやい。はやてちゃん、アーチャーさん」

「あ、なのはちゃん」

「邪魔しているぞ」

良かった、聞こえた。そう内心思いながら、なのはは用件を尋ねた。それにお盆のキャンプに出かけるため、見送り代わりに来た事をはやてが伝えてなのははに満面の笑顔を向けた。

「そやから、気いつけて行ってきてな」

「ありがとう、はやてちゃん！」

わざわざ自分にそう告げるために来てくれた事になのはは心から喜んだ。まだ友人となって日は浅い。それでもはやての気持ちかなのはには伝わったのだ。

そんなやり取りを端から見ていた土郎達だったが、そのはやての思いにその顔を綻ばせていた。セイバーと出会う前は孤独感を抱いていただろうなのは。それが今はこんな優しい友人を得ている事に嬉しく思ったのだ。

そこへ来店を告げる鈴の音が響き渡る。音に反応し、アーチャー達が振り向いた先には……

「ら、ライダー……だと」

「アーチャー……ですか」

見事なメイド服に身を包み、楚々として立つライダーの姿があった。ちなみに裾がまた擦り切れ汚れていたりする。

「お、ライダーさんや。お久しぶりです」

「ハヤテ……？　そうですか。貴方の言っていた親戚と言うのは……」

…」

「にゃ？ アーチャーさんもライダーさんの知り合いなの？」

何とも言えない雰囲気醸し出していたアーチャーとライダーだったが、それを見たなのは言葉に彼は敏感に反応した。

「なのは、それはどういう意味かな？」

「えっと、実は私の家には」

「セイバーがいるのです」

「なん……だと……」

アーチャーの問いかけに答えようとするのはだったが、それをライダーが遮った。その言葉にアーチャーは今までにない程の驚きを浮かべる。そんな彼らを前に、なのはは一人いじけるようにはやてへ枝垂れかかった。

「うつつ……はやてちゃくん。私が言いたかったのに……」

「まあまあ、氣い落とさんとして」

そんななのはをはやてが慰める。そして、そのなのはの声が聞こえたのか、店の奥からセイバーが顔を出し。

「なのは、どうしたので……」

固まった。それはもう見事にアーチャーの顔を見て硬直したのだ。

「……とりあえず、奥の席にどうぞ」

きつと何か事情があるんだろう。そう判断した美由希の提案に三人は静かに動き出す。そして、なのはとはやては店の奥にある休憩所へと向かう。おそらくまた色々あるんだと、そうなのはが予感したから。

それにはやてにも話を聞かなければならない。そうなのはは思い車椅子を押した。はやてはそんななのはの雰囲気疑問符を浮かべるも、初めて入る店の裏側にちよつとだけ興奮しているのだった……

「……まさか、私以外のサーヴァントが現界しているとはな」

「感知出来なかったのでしょうか？ 当然です」

ライダーのその言葉にアーチャーの表情が変わる。それは納得。以前の、いや昔のアーチャーならばそんな事はないと一蹴しただろう。だが今の彼には心当たりがあった。

「そうか。君達も受肉しているのだな」

その言葉にライダーが頷いた。それだけでアーチャーは分かった。何故はやてがなのは達と出会ったのか。それはきつとこの世界が滅ぶ要因に彼女達に関するからだ。

あくまでも推論だ。明確な証拠はない。それでも、アーチャーとしてはセイバーとライダーへ言わずにはいられない事がある。それ

はあの本の事。解析しようとし、何故かそれを拒絶するような反応を感じた物の事だ。

だがその前に確認しておく事がある。そう思い、アーチャーは二人へ問いかけた。この召喚をどう考えていると。その言葉に二人はため息を吐いた。それが何よりの答え。

「貴方と同じ結論です」

「おそらくですが”世界”に呼ばれたと思っています」

「そうか……」

ラインが繋がっていないのに魔力を自ら生み出している。そして、仮初ではない肉体を得ていた。更には、失っているはずの記憶まで持っている。ここまで条件が揃えばそう答えを出すか。そう考え、アーチャーは小さく息を吐いた。

「やはり、貴方も自分の事を把握していたのですね」

「ああ。守護者として召喚されたのは初めてではないのでね」

ライダーのどこか納得するような言い方にアーチャーは嫌そうに言葉を返す。それを聞いてセイバーが何かを言いたそうに視線を向けるが、そうさせる事をアーチャーはしない。

そのため、アーチャーは切り出した。はやての家にある謎の本の事を。そして監視を受けていた事と謎の魔術を使う襲撃者と出会った事を。それを聞いて二人は表情を変えた。

「……どうやらその本が私達の召喚に深く関係しているようですね」

「ああ。おそろくだがそうだろう」

「でも、何故その襲撃者はその本を？」

「分からん。だが、あの本はあまり良くない類の物だ。今は何かある訳ではないが、いずれ事件を起こすだろうと読んでいる」

そこで三人は黙り込んだ。出来る事ならば、その本を処分するな
どして安全を確保したい。しかし、下手な事をして余計な問題を起
こすとも限らない。そう考えたのだ。

そんな重たい沈黙を破るように、セイバーがアーチャーへこんな
事を尋ねた。それははやくとの出会い方だ。もしかすると自分と同
じように召喚された時、彼もまた孤独に怯える少女に出会ったので
はないかと思っただのだ。

そして、そんなセイバーの予想は当たっていた。アーチャーが語
る出会いの思い出。それはやはり少女の支えになろうとしたサーヴ
アントの姿だったのだから。

それを話し終えたアーチャーへセイバーとライダーは笑みを浮か
べていた。それに不思議そうな表情を返すアーチャーへ、二人は揃
って告げた。同じだと。

私もライダーもそうだったのです。目の前の少女から孤独感
を感じ、それを取り除く事になったもので。

私は姉のような扱いで、セイバーは友人になって欲しいと言
われたそうです。

……そうか。揃いも揃って身近な存在となる事を望まれたと

いう訳、か……

そう呟くアーチャーは、いつもの皮肉屋としてではなく、あの誓いを思い出した際の顔をしていた。そう、即ち”エミヤシロウ”としての顔を。

その表情にセイバーとライダーは声を失う。目の前にいるのはアーチャーだった。だが、同時に別の衛宮士郎でもある。自分達を一人の女性として扱い、不器用ながらも他者の夢を自分の夢に変え、前に進み続けた『正義の味方』がそこにいた。

それとは至った場所は違う存在ながらも、出発点は同じなのだ。二人は知らない。彼はもう掃除屋として己を呪い続けた男ではない。在りし日の『想い』を取り戻し、パートナーの少女に大丈夫だからと笑顔で告げた『正義の味方』だとは。

(あの笑み……やはりアーチャーも『シロウ』なのですね)

(彼も以前のままではない、と言う事ですか。となるとあまりスズ力を接触させない方がいいかもしれません)

その笑みに抱く思いこそ違え、二人は確信する。この男は信頼に足る相手だと。

「……アーチャー、話があります」

「何かな？」

「私とセイバーは、守護者として世界に動かされる事をよしと思っ
ていません。故にいざとなった際、私達は世界を相手に戦います」

「……そんな事が出来ると思うのか？」

信じられないとばかりに問いかけるアーチャー。それもそうだろう。彼は”世界”の強大さを知っている。その強制力を誰よりも知っているのだ。それでも、ライダーとセイバーはアーチャーを見据えて言い切った。

出来る出来ないではなく、やるのです。

その宣言にアーチャーは目を閉じた。思い出したのだ。自分があの誓いを思い出した時の気持ちを。もう諦めない。そう自分は誓ったはず。故に彼は笑った。その雰囲気は先程までとは別人のものだった。

「……そうだな。それぐらいの気概がなければ相手に出来んだろう」

「アーチャー……？」

「何、中々愉快だと思ってね。」世界”を相手に戦う、か。いいだろう。いつも使われるばかりではないと教えてやるのも一興だ」

「……犠牲が出るかもしれませんよ？」

予想外にあっさり乗ってきた事に違和感を感じつつ、セイバーはアーチャーが一番嫌うだろう予想を告げる。それに対してアーチャーが返したのは、想像だにしない言葉だった。

よく言う。それを出さないようにしながら守るのだろう？

その言葉はいつもの皮肉屋の顔で告げられた。それに思わず言葉

を失うセイバーへアーチャーはこう続けた。それに犠牲を出す事を許容出来ても、それを最初から肯定するようなセイバーではないと。それを聞いたライダーがそれはアーチャーもだと返すと、彼は一瞬言葉に詰まる。その瞬間、セイバーがおかしそうに笑い出した。それにつられるようにライダーも笑い、アーチャーはその二人の反応にやや渋い顔をするも、最後には一緒になつて笑つてみせた。

しばらく三人の笑いがその場を和ませる。だが、それもやがて終わり、アーチャーがある事を告げた。

「本の事をしばらく放置したい？」

セイバーは理解出来ないような声を出してアーチャーへ視線を向けた。自分達が召喚された原因と思われる物を放置する。その理由が分からなかったのだ。それを感じ取り、アーチャーは自身の推測を述べた。

「ああ。あれがいつ問題となるか分からないが、あの襲撃者の行動からして突発的に何かを起こす訳ではなさそうだ。もしそうなら、あの監視者が身近に潜んでいた理由が分からん」

「成程。もしそれが急激に問題を引き起こす物なら、近くには万が一の際に巻き込まれかねません」

「そういう事だ。きっと何か予兆があるのか、或いは鍵となるものが必要なんだろう。守護騎士との言葉からして、あの本を守る存在がいるのかもしれない」

その結論にセイバーも納得とばかりに頷き、守護騎士との言葉からある事を思い出してアーチャーへ告げた。それは小次郎の存在と

あの推測。サーヴァントが七騎全て召喚されている可能性だ。

それを聞いてアーチャーも有り得ないとは言わなかった。既に自身を含め、四騎も海鳴に召喚されている。しかも、それが揃ってあの第五次聖杯戦争を戦った者となれば納得せざるを得ない。

「では、この街にランサーやキャスターだけでなくバーサーカーもいるかもしれない？」

「ええ。偶然で片付けるには些か問題がありますので」

「私とライダーだけなら単なる推測で済んだのですが、アサシンまでするとなると冗談では済まない気がするのです」

セイバーはそう言って、現にと前置いて告げる。なのは達の出会いが自分達を出会わせているのだと。こうなるとなのは達が出会い、親しくなっていく相手がサーヴァントを傍に置いている可能性が高い。

だがその意見を受け入れつつ、アーチャーはこう反論した。召喚時期が自分達四人は多少とはいえずれている。ならば、残る三人はまだ召喚されていない可能性もあると。故に捜す必要はあるだろうが、下手に動き回っても無駄に終わる可能性がある。それを考慮し、アーチャーはこう締め括った。

「今は彼女達に知り合った者達の中にランサー達が共に居るかを確かめてもらおう方がいいだろう」

「そうですね。それで分かればよし」

「分からないでも、聞いた事で現れた際に教えてもらえるかもしれない

「ませんね」

これで話は終わった。そう思った三人は、気を緩めるように息を吐いた。これで当面の行動は決まった。後は時が来るのを待つのみ。そう考え、セイバーはふと視線をある場所へ動かした。

「……そういえば、彼女は足が不自由なのですか？」

「ああ。どうも生まれつきらしくてな。原因は不明だそうだ」

「それは大変ですね。原因不明とは」

「アーチャー、もし良ければ私が力になりますよ」

セイバーは自身の宝具であるアヴァロンの使用をアーチャーへ提案した。それをアーチャーは受けようとして、表情を一変させた。その変化に戸惑うセイバーとライダーだったが、その理由に二人も何となくだが気付いた。

「あの本が足の病気の原因ではないか。そう考えたのですね、アーチャー」

「……あの本ははやてが生まれた時からあるらしい。しかも、どうも彼女が言うには妙な愛着があるそうだ」

「そうになると下手に宝具を使うのは止めた方がいいかもしれません。その魔力が本へ影響する可能性もあります」

ライダーの締め括りに二人も頷いた。未知の存在である謎の本。アーチャーが感じた恐怖にも似た感覚。そこから考えても、決して

良い物ではない事は明白。ならば活動を促進される可能性を持つ行動は取るべきではない。

そう判断した三人は、話題を別の事へ変える事にした。本に関する事はもう粗方決めた。今すべきは今後の事を見据えた事だと思ったのだ。そこでライダーが挙げた話題はこんな事。

「ハヤテは、スズカが遊びに来て欲しいと言つても中々色好い返事をしてくれないそうですが、何故です？」

はやては何度かすずかに誘われる機会があるにはあった。だがすずかの気遣いが災いし、強く誘うまでには至らなかつたのだ。すずかは、車椅子のはやてに家まで越させるのは悪いと思った。はやては、車椅子の自分が行く事ですずか達に気遣いさせたくないと思つた。

そんな互いの気持ちがあつたため、未だにはやては自宅以外ですずか達と遊んだ試しがなかつた。それをアーチャーが答えると、セイバーがならばとばかりに笑顔を見せた。

「話は簡単です。ハヤテもなのは達も互いへ気を遣い過ぎなので、から、それをしなくてもいいと言えればいいでしょう」

「確かにそれでいいのかもしれませんが。互いに少し相手の気持ちを汲み損ねている部分があるようですし」

「かもしれん。あの年頃ならば普通はそこまで気を回さないのだが、どうも彼女達はそこが子供らしくないからな」

話が纏まつたと頷くセイバーは、そのまま手をアーチャーへ差し出した。それに不可解と言わんばかりの表情のアーチャーだったが、ライダーは思い当たる節があるために苦笑した。そんな中、セイバ

「は凛々しい顔を緩めて笑う。」

「これは希望なのですが……アーチャー、私と友になってくれませんか？」

「なっ……」

言葉を失うアーチャー。ライダーは小さく「やはりそうきますかと納得の顔。」

「私はライダーと友になりました。アサシンとは友ではないですが、共に剣の腕を競う相手として認め合いました。後は貴方です」

その言葉を聞いてアーチャーは答えに窮する。それを横目にライダーはセイバーに同意する。中々出来ない経験でしたと、笑いながら。そして、握手をした事も教えて、ライダーはアーチャーを見る。その目は、はっきりさせなければセイバーは納得しないと告げていた。その視線を受け、アーチャーはセイバーへ目を向けた。セイバーはやや緊張の面持ちでアーチャーの答えを待っていた。

「……友では些か困ると言ったらどうだ？」

「どうという意味です？」

「何、君とは友ではない関係でいたいのだよ。私としての理想は……そうだな……ふむ、同士では駄目だろうか。あの聖杯戦争で最初から手を組んだ仲である私達には相応しいと思うのだが」

そう告げ、アーチャーはセイバーを見つめた。その申し出にセイバーは少し考え込み、やがて満足そうに頷いた。そしてそれを見て

アーチャーは嬉しくもどこか悲しそうな笑みを浮かべて差し出された手を握る。

気付いたのだ。目の前のセイバーが”エミヤシロウ”として経験した聖杯戦争ではない聖杯戦争を経験していると。何故ならアーチャーは最初からセイバーと手を組んだ事は無かったのだから。

(やはり彼女は”あの”聖杯戦争を経験したセイバーか。私が魔術使いとして初めて戦ったあの聖杯戦争を……)

アーチャーが複雑な想いを抱いている事を知らず、ライダーは目の前の光景に苦笑しつつもその手に自分の手を重ねた。

そして視線をアーチャーに向け、小さく告げる。変わりましたねと。その言葉にアーチャーはため息を吐いてこう返した。

「それは君もだ」

「そうですね。みな変わっています」

「きつとなのは達の影響でしょう」

笑みを浮かべ合いながら、三人はその視線を動かす。そこには、あまりにも話が終わらない事に業を煮やしたなのははやての姿があった。その姿を見てアーチャーは苦笑した。

確かにそれは認めざるを得ない。そう思いながら、純粹で素直な性格のセイバーが一番強い影響を受けているだろうとも感じていた。そこへセイバーが何かを思い出したようにライダーへ視線を向けた。

「そう言えば、何故ライダーはここに？」

「あ、そうでした。セイバー、シュークリームを五つ持ち帰りをお願いします」

忘れていました、とライダーは言って立ち上がる。それにセイバーも続き、ショーケースへ向かう。一人残される形になったアーチャーにはやての車椅子を押しながらなのはが近付いた。

セイバー達と手を繋いでいた事を不思議に思ったのだろう。それを二人はアーチャーへ尋ねる。そんな三人とは違い、セイバーは慣れた手つきでシュークリームを箱に詰めていた。それを見ながら、うまくになりましたねと言いつつもからかうライダー。そんなやり取りを眺めてアーチャーは無意識に呟いた。

「…………平和だな」

その呆れつつも嬉しそうな呟きは、なのはとはやての耳にだけ届いた。それがその顔を笑顔に変えるのだった……

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

遭遇編その4。大幅な変更。まじかるを読んで頂いた方には、これ無印どころかA・Sの展開も変わったと分かっていただけたかと思えます。

今回で現時点での海鳴サーヴァント達は存在を確認し合いました。残りの空白期を描けば、いよいよ無印突入です。

照り付ける夏の日差し。響き渡る蝉の声。時折吹く風もどこか熱を感じさせる。だが汗が流れるなのにとっては、そんな熱風でも一瞬の涼しさをくれる有難いものだ。

今、なのは達高町家は家族六人での修行という名のキャンプへと来ていた。お盆に入ったのでお店を休みにしての家族旅行。電車とバスを乗り継ぎ、とある山へとやってきたなのは達だったが、その道のりはそれなりに厳しく、なのは達の額にも汗が流れていた。唯一セイバーだけが平然と歩いていたが、その額にも僅かではあるが汗が流れている。

「もうそろそろだな」

「そうだね。恭ちゃん、なのは達は？」

「……意外としっかり歩いてるぞ」

視界に見えてきた川辺に土郎が隣を歩く美由希へ声を掛ける。それに笑みを浮かべて答える美由希。そして、そのまま視線を後ろを歩く恭也へ移し、そう問いかけた。

恭也はどこか嬉しそうに答え、視線を後ろへ向ける。そこには桃子と会話しながら笑みさえ浮かべるなのはがいた。対する桃子の方が少し疲れている程だったから、なのはがいかに体力をつけてきたのか分かるというものだ。

セイバーとは言えば、一番後ろを歩いていた。それはなのはが疲れた際おぶってやるうとの配慮なのだろうが、どうやらその心配はいらないようだ。その証拠にセイバーもどこか嬉しそうに笑ってい

る。

「なのは、凄いわね。こんなに……体力ついていたのね」

「にははは、セイバーとのトレーニングの成果です！」

「うふふ、そうね……私も何か始めようかしら？」

笑顔で語り合うのはと桃子。それを眺め、微笑むセイバー。視線の先では、士郎達がもう川辺にテントを張り始めていた……

テントを張り終えた士郎達は早速とばかりに訓練を　　するのではなく、手にしたのは釣竿。なのはが不思議そうにそれを見つめるが、セイバーはそんな彼女へ笑みを浮かべて告げた。

この山での滞在中は基本自給自足なのだ。つまり、魚や木の实などを自分達で調達しなければ食事にはありつけないのだ。それを聞きなのはは驚きを見せるが、同時に疑問も浮かんだ。そして、それを確かめるべくセイバーへと問いかける。

「どうしてセイバーはそんなに落ち着いてるの？」

「ご飯食べられないかもしれないのに。そのなのはの言葉にセイバーは自信満々に答えた。もっとも、それによって気楽そうな顔をしていた士郎と恭也に戦慄が走ったのだが。」

「それは当然です。シロウ殿達が魚を沢山釣ってくれると私は信じ

ています。ええ、信じていますとも」

だからうるたえないのです。そう言い切ったセイバー。その言葉の裏に込められた『裏切ってくれるな』という想いを感じ取り、二人は他愛のない話をしていたのだがそれをピタリと止め、無言で竿を川へと投げ入れる。

その体から流れるは剣士の雰囲気。退路を絶たれた者が放つ決死の覚悟。それを全身から滲ませて、二人は手にした竿へ神経を集中させた。

それを見て、美由希は思わず咳かすにはいられなかった。

「これ……本当に修行になってるよ」

言外に二人にはとの意味を込めたその咳きを、桃子は苦笑しながら聞いていた。その視線は必死の形相で浮きを睨む士郎達へと注がれている。

セイバーはそれに気付かず、なのはと二人で飯盒を準備していた。そう、持ってきた食材は白米と二日目のカレー用の材料のみ。流石に調味料もあるがそれも基本的なものだけなのだ。

そして、セイバーとなのはは米の量を計り、それを汲んだ川の水で洗い出す。美由希はほのぼのとキャンプを楽しむのはと、死地に赴いたような士郎達の対比を感じ、桃子に断言した。

「きつと、ウチでのキャンプは字で書くと修行って読むんだね」

「……美由希、それは少し笑えないわよ」

「だよね……ごめん」

そんな風に美由希を注意する桃子の視線の先では、魚を一匹ずつ釣り上げ、静かにガッツポーズをする土郎達の姿があった……

「お兄ちゃん、これは？」

「ん？ それは……大丈夫だ」

「せ、セイバー、それは流石に毒キノコだよ」

「そうなのですか？ 言われた通り地味な色ですが……」

「真っ白でしょ?! 毒だつて、それ！」

手にしたキノコを恭也へ見せるなのは。それを見た恭也から大丈夫との言葉をもらい、なのはは嬉しそうに手にした籠へそれを入れる。一方のセイバーは美由希の指摘に不満そう。確かにセイバーの手にしているものは真っ白な色をしていた。しかもかなり大きい。それを見てなのはと恭也は、セイバーがそれを選んだ理由がすぐに分かった。だがそれを言う事はしない。だから視線をセイバー達から外し、他の物を探するのは当然の事といえた。

ちなみに色で毒があるかないかを判断するのは危険である。素人はキノコに手を出してはいけないとよく言われるのはそのため。何せ、白いキノコでも食べられる種類はあるのだから。

何故恭也がなのは達といるかと言うと、彼女達が木の実などを探すと聞いて釣りを土郎に押し付けるように任せただからだ。表向きの理由は魚だけでは絶対食料が不足すると判断したためだったが、その本当の目的は違う。もつとも、土郎はそれを誰よりも理解していたため、恭也に対し「裏切り者」っ！」と叫んでいたが。

一方、残った桃子は土郎と一緒に恭也の使っていた竿を使って釣りをしていた。釣果は、桃子が十七匹に対し、土郎は四匹という結果に終わった事だけ書き記す。原因は、土郎に余裕がなかったため。そして、その気迫で魚を怯えさせてしまったからだろう。

楽しくキノコや木の実等を採用するのは。一方、セイバーは何か先程からいやに大きい物ばかり見つけていた。食べられる物から食べられない物まで実に様々だ。

それもあつてか、なのは達は何だかんだで楽しく採取をしていた。このまま和やかで賑やかな時間が過ぎる。そんな風に誰もが感じていた。なのはがある物を見つけるまでは……

「ん？ 今、何か動いたような……？」

キノコを探すなのはの視界を一瞬何か横切った。それが気になり、なのはは視線を横切ったモノが見えた方へ動かし、固まった。そこにあつたのは蜂の巣。しかも、ただの蜂ではない。地面に巣を作っている蜂。そう、スズメバチの一種だ。

この時、なのはが幸運だったのは騒がなかった事と季節が秋ではなかった事。もしこれが秋ならばスズメバチは攻撃的になっていて、危険度は段違いに跳ね上がるのだ。

「？ どうしたのですかなのは。何か見つけたの」

一点を見つめて動かなくなったなのは不思議に思ったセイバーは、その声を掛けてゆっくりと彼女の後ろへと近付き……

「……動かないでください、なのは」

事情を理解し、セイバーはそう告げた。そんな言葉になのはが心の中で叫ぶ。

(動きたくても動けないよっ！)

そんななのはの内心を知らず、セイバーは蜂の巣を確認しその表情を凜々しいものへと変える。するとその雰囲気を知ったのか、恭也と美由希も二人の傍へ近付いて……

「……そういう事が」

「どうする？ 恭ちゃん」

二人も蜂の巣を確認し表情を変える。これがクマならば何の問題もなかった。それなら、セイバーや美由希、恭也がいれば恐れる事はなかった。

だが、スズメバチとなると話は別だ。まず数がはつきりしない。そして的が小さい。最後になのはがいる事が最大の問題。自分達の身を守る恭也達ならともかく、なのはでは自分の身を守る事も出来ないからだ。

そんな事を考える恭也と美由希。しかし、セイバーは躊躇う事無く手にした籠を恭也へ渡し、なのはを抱き上げてその場から走り去る。その行動に恭也と美由希は一瞬呆然とするが、空気の流れを感じ取って蜂が動き出したのを見て慌てて走り出した。

逃げる二人を追うスズメバチ。まるでマンガかアニメだが、本人達にとつては笑える話ではない。下手をすれば死に至る事もあるスズメバチは、下手な刺客よりも恐ろしい存在なのだ。

「セイバー！ 逃げるならそう言ってくれっ！」

「違います！ これは逃走ではありません！ 戦略的撤退ですっ！」

「同じ事だよ！ って、蜂が意外と速いつ？！」

「にゃああああ！ 蜂が追い駆けてくるよ〜！！！」

なのはを抱き抱えたセイバーと、山菜が入った籠を抱えた恭也と美由希は走る。この時、もう少し冷静になって考えれば、きっともつとマシな結果が待っていただろう。

だが、生憎四人にはそんな余裕がなかった。だから単純な事を忘れていたのだ。そのまま走ればどうなるかという事を……

「……あつ……」「」「」

そう、段差になっていたのだ。下との距離約五メートル。普段なら何でもないが、突発的に落ちれば如何にセイバー達でも驚くもの。そのまま自由落下するが、そこは御神の剣士と最優のサーヴァント。三人は何とか着地。

しかし息を吐く暇もなく、まだ蜂が追ってくるのですぐさま走り出す。そうして土郎達の待つ川辺へと戻った時、なのははポツリと呟いた。

「キャンプって……ホントに修行なの」

そのなのはの呟きにセイバー達は何も言い返せなかった……

士郎が起こした火を使って鍋を暖める桃子。その中身はなのは達が取ってきたキノコ等だ。それを味噌で味付けしただけの山菜汁。しかし、その味はセイバーの保障付き。味見をしたセイバーが満面の笑みを浮かべたのだから。

その横にはなのはが頑張って起こした火がある。そこで飯盒を暖め、その前でなのはは士郎から炊けたかどうかの判断の仕方を教わっていた。そこだけ切り取ればまさにキャンプと言えるだろう光景だ。

恭也と美由希は木の枝に魚を刺して別の火で焼き魚をしているし、セイバーは先程から何かを思い出しているのか、遠い目をして空を見上げている。

(まるで……あの頃のようにですね。野営を思い出します)

それは昔の記憶。まだセイバーが一人の王として生きていた頃の思い出。辛い事や悲しい事ばかりしかない。そう思っていた頃の記憶。だが、こうして静かに思い返してみれば笑顔があったと、セイバーは感じていた。

ほとんど悲しみや憎しみばかりの時代だった。それでも確かにあった笑顔がある。それを思い出し、セイバーは微笑む。今のような考えや感じ方が出来るのはある少年との出会いがあればこそだったからだ。

(こうして考えると私も大切な事を忘れていた。シロウ、貴方が教え……いえ、思い出させてくれた事は今も私の中で生きています)

あの日、過去に囚われていた自分を悟らせてくれた言葉。それをセイバーは噛み締め、小さく呟く。

「無かった事になど出来ない。過去をやり直す事なんて、望んではいけない……」

その言葉が今の自分に繋がっている。そうセイバーは思い、視線を後ろへと向ける。そこには楽しそうに笑うなのは達がいた。

「……私にも、守りたい『家族』が出来ました。いつか……貴方にも話せる日がくると信じています」

その時、貴方はどんな顔をするのでしょうか、シロウ。

そんなセイバーの声は肌寒さを感じる山風に乗り、静かに空へと消えた……

その後、桃子特製の山菜汁にセイバーが改めて感激し、初めてのキャンプになのはがはしゃぎ、焚き火を囲んでの家族の会話に全員がその絆を改めて感じた。

いつもよりも綺麗な星空になのはと桃子が感動し、そんな二人に土郎達は笑みを浮かべる。土郎が淹れたコーヒーや紅茶を飲みながら、高町家はなのはの眠気が限界に達するまで話し合った。

「クスツ……とうとう寝ちゃったわ」

桃子に寄りかかるようになのは静かに寝息を立てていた。それを見てセイバー達は微笑む。生まれて初めての経験を連続でしたのだ。その疲れは相当のはず。それを知るからこそ、士郎達は早く寝た方がいいと言ったのだが……

やだ！ まだ起きてる！

と言つてなのは聞かなかったのだ。それは意地ではなく、純粹に寝たくないという気持ち。もつとこの時間を過ごしていたいという素直な想いだった。そんな事を思い出しながら士郎はなのはの寝顔を眺めてしみじみと呟いた。

「なのはも……本当に変わったな」

「そうだね。セイバーが来て変わって、小次郎さんと出会った日からまた変わったよ」

どこか遠い目をする士郎に美由希も同意するように答えた。その言葉に恭也も頷き、セイバーへ視線を向けると笑みを浮かべた。

「本当にセイバーが来てくれて良かった」

「そうね。私もそう思う。こんな風に皆でキャンプなんて、昔じゃ考えられないもの」

その桃子の言葉に全員が苦笑する。そう、この山登りを兼ねた修行自体は昔からやっていた。だが、なのはや桃子を連れてくる事は

ないはずだったのだ。

しかしセイバーと出会い、なのはが自分を鍛え始めた事でそれが変わったのだ。毎年のキャンプに自分も行きたいと、そうなのが言い出したのだから。

そんな高町家の言葉を聞いて、セイバーは照れるでもなく穏やかな表情を浮かべていた。確かに自分が来た事で変わった部分はある。それでも、その一番の要因はなのはとその家族にあると思っていたのだ。

「ですが、その下地はなのはの中に元々あったものです。私は、なのはのキツカケになっただけに過ぎません」

「うっん。セイバーがなのはを、私達を変えてくれたのよ」

「そうだぞ。あのままじゃ、どれだけなのはに寂しい思いをさせた事か……」

「それに、あたし達の相手としても凄く助かってるし」

「そうだな。おかげで自分の限界を二つ程超える事が出来た気がする」

口々にセイバーの意見を柔らかく否定していく高町家の四人。そして同時にセイバーが来てくれた事を感謝する。その言葉の節々に込められた想い。それがセイバーの心に沁み込んでいく。

常識的に考えれば、怪しい者でしかなかった自分を高町家は暖かく受け入れてくれた。そして、今では本当の家族のように接して

いや、本当の家族として接している。そう考え、セイバーは噛み締めるように答えた。

「そうですか。そう言ってもらえて……嬉しいです」

(本当に……私は幸せです)

その想いを表情に表すセイバー。その美しい満面の笑みに土郎達も嬉しそうに笑みを返す。こうして夜は更けていく。セイバーの心に”暖かい何か”を残して……

翌朝なのはは驚いた。何とセイバー達が昨日の蜂の巣を持ち帰ったからだ。今後の登山客の事を考え、退治したのだという。なのは巢に興味があったのだが、土郎の「気持ち悪いぞ」の一言で見るとのを止めた。

その日の朝は、昨日取ってきた山菜の残りを使った炊き込みご飯。その味に五人が舌鼓を打つ中、一人離れた場所でセイバーは……

「……ダメだ。私には出来ない……っ！」

密かに珍味と言われている蜂の子を食べようとしたが、その見かけや蜂の幼虫という事に抵抗感を拭えず断念していた。そんなセイバーを他所に、なのは達は山の恵みを堪能する。

そして朝食が終わった後、土郎達御神の剣士は鍛錬のためになのは達と別れて動き出す。それを見送り、なのははセイバーや桃子と三人で水切りに興じる事になる。

桃子がまず最初にやってみせたのだが、何とそれが五回も跳ねた。それを見たセイバーが負けるものかと挑戦し、投げ方が悪かったのか一回で沈んだ。あまりの事に愕然とするセイバーとそんな彼女を見て苦笑する高町親子。

にやはは、セイバーでも苦手な事があるんだね。

な、何を言うのです！ 今のは少しばかり石が悪かったのでしょう。

ふふっ、そうね。そういう事にしておこうかしら。

そんな会話の後、満を持してなのはが投げた石は綺麗に三回跳ねて川へ沈んだ。その結果に喜び、なのはは桃子へ笑顔を見せる。一方でセイバーは難しい顔で川辺の石を見つめていた。

何としても桃子に勝つ。そんな執念さえ感じさせる程に。その様子を見て、桃子が微笑みながらアドバイス。なるべく平らになっている方が回数が伸びると聞いて、セイバーと一緒になつてなのはもそういう石を探し始めた。

結局最終的にセイバーの記録は六回となり、本人としては満足出来る結果で終わった。その影には平らな石を見つけ出す事を手伝ったなのはと、投げ方のコツを教えた桃子の協力があった事を追記しておく。

(楽しい事って、あつと言う間だよ)

帰りの電車の中、なのはは外の景色を眺めてそんな事を考えていた。二泊三日のキャンプ。だが、それが終わりを迎えるのは想像以上に早かった。二日間の内、一日は士郎達の鍛錬で桃子とセイバーの二人以外とは遊べなかつたのもあるが、それでも早かつたとなのはは感じていた。

ふと視線を動かしてみれば、向かいの座席では美由希がシートにもたれて寝ているし、恭也はセイバーとトランプをしている。おそらくポーカールだろうとなのはは思った。何故なら、恭也が何度も悔しそうな顔をしているからだ。

(セイバーって、対戦になると強いんだよね)

賭け事や勝負事になるとセイバーは無類の強さを発揮する。それをなのはは良く知るからこそ、ゲームでの対戦をセイバーとはしない。初めこそなのはが圧倒していても、セイバーが慣れ始めると恐ろしい程に強くなるのだ。

(でも、勘がものを言うものは本当に強いからなあ……)

そんな事を思い出し、なのはは小さく笑う。それを隣の士郎が気付き、不思議そうに尋ねた。

「どうかしたのか？」

「……ううん。何でもないよ、お父さん」

その答えに士郎は若干不思議には思ったものの、笑みを浮かべてなのはの頭に手を置いた。

「そうか。で、楽しかったか、なのは」

「うん。またみんなで行きたいな」

（そうだ。今度は私が釣りをやろう！ それでセイバーと勝負するんだ。うん、そうしよう！）

そんな事を考えなのは笑う。それに土郎も笑う。そしてそんな二人に気付き、桃子が「何？ お母さんも仲間に入れて」と言ってきたので、それになのは笑顔を浮かべて答えた。

「あのね、また来たいなって。それで、今度来る時は……」

桃子と土郎に来年の事を楽しそうに語るなのは。それを聞きながら微笑む二人。こうしてなのはのキャンプは終わりを迎える。その胸に多くの思い出を残して……

ちなみに、恭也はセイバーに連戦連敗だったとさ。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

お盆のキャンプ話。二日目は、土郎達三人は御神の剣士としての鍛錬をしていたので割愛。

カレーは夕食兼翌朝の朝食でした。セイバーの想いと高町家の想い。それがなのは知らない所で通じ合っていた。そんな話です。

空白期 (S & a m p · R)

それは、まだなのは達が二年生になる前の事……

「ドライブ……ですか？」

「そう。ライダーも見事に免許取ったし、初運転を兼ねて五人でお出かけ。いいでしょ？」

「行きましようライダーお姉様！ 紅葉が綺麗ですよ」

そう言つてファリンが見せたのは旅行案内のチラシだ。そこには美しい紅葉の写真が印刷されており、確かに目にも鮮やかであった。それを見たライダーは少し思案するが、何かを思いついたのか笑みを浮かべて頷いた。

「……いいですね。では、紅葉狩りにでも出かけましょう」

ライダーの答えに互いの手を合わせる忍とファリン。そんな二人を見て苦笑するすずかとノエル。そこからどこへ行くかをドライブであるライダー抜きで決め始める忍。そんな彼女へノエルが苦言を呈するも、ファリンがきつとどこに決まっても大丈夫と言つて忍を援護。

すずかはそんな三人を他所にライダーへ何故承諾したのかを尋ねていた。その問いかけに対し、ライダーは意味ありげな笑みを浮かべてこう返す。それはいずれ分かります、と……

月村家五人での外出。実はそれは結構珍しい。何だかんだで高町家との繋がりが強い月村家。そのため、何かイベントがあるたびになのはや恭也を誘ってしまい、五人だけでというのは中々なかったのだ。

それを考えライダーは今回の外出に頷いた。たまには家族水入らずもいいだろうと考えて。その事にすずかが気付くのは、この日の写真をアルバムへ飾る時までお預けとなる。

月村家はいつもノエルが車を運転する。しかし、それではノエルの負担ばかりになるからとライダーが告げ、運転免許を取りに行つたのがそもそもそのキツカケ。その裏には合法的に車へ乗れるようになりたいとのライダーの思惑があった。

それを気付かない忍ではなかったが、ライダーの乗り物に対する欲望は嫌と言う程理解しているために敢えて何も言わなかった。そう、彼女はあの自転車を製作した。その改良などをライダーはよく頼みに来るのだ。その頻度が高いため、忍はライダーの持つ一面を誰よりも知つたのである。

今回はライダーが運転するため、助手席にノエルが座っている。後部座席には忍とファリンに挟まれる形ですずかが座っていて、三人で楽しげに話していた。

それを聞きながらライダーとノエルは微笑み合い、視線を前方に向ける。既に車は海鳴市を離れ、郊外を走っていた。目指すは紅葉で有名な溪流だ。

「大分人気が無くなってきましたね」

「そうですね。さて、そろそろ看板などが出て……あ、あれですら

ライダー」

ノエルの指差す方へライダーは視線を向ける。そこにはガイドブックに乗っている紅葉の名所への案内があった。その指示を記憶し、ライダーはゆっくりと加速する。

実はそれは珍しい。本来ならばライダーは速度を限界まで出したがるのだ。しかし、今回は自分以外の者が乗っているために安全運転を心掛けている。後は、呆気無く速度が出るのにもやや不満がある様子。だが、一番の理由は……

「あ、あれ見てすすか」

「どれ？」

「あ、凄いです。赤や黄色が一面に……」

すすか達が景色を楽しめるようにとの配慮だ。何気ない車内の会話を出来る限りしてもらいたい。今のように、みんなが喜んでくれる時間を少しでも長く出来るようにと考えていたからだった。

（私も……やはり変わったのですね）

今までは季節の移り変わりにそこまで意識を向けた事等なかった。だが今は違う。春夏秋冬を楽しみ、愛でる。そんな日本人の心がライダーにも芽生えてきたのだ。その原因は勿論あの衛宮邸での日々と……

（スズ力達のおかげですね）

季節毎の風物詩や旬の食べ物。それらを欠かす事無く教えてくる

忍とフェアリン。それを時に嗜め、時に補うノエル。そして、そのやり取りを微笑み、慌て、楽しむすずか。そんな中で暮らしていれば、ライダーも変化するというものだ。

だがその変化をライダーはむしろ喜んでいた。興味を持てる事があまりなかった以前に比べ、今は趣味が段々出来てきた事もその影響だろう。まあ、それもサイクリングやサーフィン等の何かに乗るといふものばかりなのだが。

そんな事をライダーが考える間も車は進む。やがて見えてきた観光客用の駐車場へ入り、本来なら躊躇うような難しい場所へあつさりライダーは車を入れる。

そのテクニクに忍達だけでなく、誘導員達や他のドライバーさえ軽い驚きを見せた程だ。そして五人は車を降りると、視線の先に見える大勢の人波にややため息を吐きながらゆっくりと歩き出す。

ライダーだけは持ってきたリュックを背にした。その中身はフェアリンとライダーがノエルと共に用意した食事だ。綺麗な景色の中で食べる事を意識し、遠足のような気分でフェアリンが提案したのだ。

「さて、じゃあ紅葉を楽しみながら歩くとしましょうか」

忍の声を合図に歩き出すライダー達。視界一杯に広がる紅葉の世界。鮮やかな黄色や紅を楽しみながら五人は歩く。途中にある売店を冷やかし、道行く人との僅かな会話をしつつ、五人は景色を堪能していた。

「この辺りなら良さそうですね」

やがて、あまり人のいない場所を見つけたライダーがそう言ってリュックを置いた。そのリュックから大きめのビニールシートを取

り出し、地面へ敷く。その途端、ファリンがそれに真っ先に座ろうとしてノエルに注意された。

「先にすずかお嬢様です」

「はい……」

「別に気にしないのに……」

すずかは苦笑しながら靴を脱いでシートに座る。見上げれば鮮やかな紅。見渡せば色取り取りの山々。そんな景色を眺めて、心から来て良かったと思うすずか。その表情にライダー達も笑みを見せる。そして忍に続くようにファリンも座り、ノエルとライダーも静かに座って景色を眺めた。誰も何も言わず、ただ紅葉を眺める。その色合いや周囲の空気に心が落ち着くのを感じながら。

（凄いなあ……。こんなに綺麗な紅葉は初めてかも）

（良い雰囲気ね、ここ。……今度は恭也と二人で来たいかも）

月村姉妹は共に向かいの山々を見つめて、思いを馳せ……

（美しいですね。これが紅葉……。秋の情緒、ですか。良いものです）

（赤に黄、それに緑。本当に綺麗ですね……。あ、お土産に一枚持って帰ろう）

メイド姉妹も風に揺れる葉を眺め、思い思いに心を動かし……

（この国は、本当に情緒というものを大事にしますね……。これだ

けの人が、ただの葉を見るために動く。まさに雅のためですか。アサシンは本当に日本人なのですね)

ライダーはその場を訪れている人の数を思い出し、小次郎の事を考えて小さく笑みを浮かべる。

そんな風にどれ程過ごしただろうか。やがてファリンが思い出したかのようにリュックを引き寄せた。その行動の意味を理解し、ノエルとライダーは苦笑する。すずかと忍はその中身を知らないため、不思議そうにその行動を見つめた。

ファリンがリュックから取り出したのはランチボックスと水筒。それを見た瞬間、すずかと忍も理解し笑い出した。それにつられるようにライダーとノエルも笑う。

「花より団子ね、ファリンは」

「ち、違いますよ。そろそろすずかちゃんもお腹が空くだろうと……」

「ふふ、ありがとうファリン。確かにもうお昼だもんね」

忍の言葉にファリンがどこか顔を赤くしながら反論するも、日常の彼女を知られているために説得力がなくどこか声も弱い。それにすずかは笑みをを見せて、そのランチボックスを受け取った。

その中身はファリン作のおにぎりとノエルとライダーが作ったおかずの二段重ね。水筒の中身は緑茶である。それを見て、すずかは嬉しそうに「遠足みたいだね」と呟いた。

その呟きを聞き取り、ライダー達三人が我が意を得たりと嬉しそうに笑みを浮かべる。忍はそんな三人を見て、何を意図してリュック

クを用意したのかを察して小さく微笑んだ。

「じゃ、早速頂きましょ」

「うん」

「じゃあ、ライダーお姉様が号令を」

「私、ですか？」

「ええ。今回はライダーがある意味主役ですから」

ファリンの言葉にライダーはどこか困った顔をするが、ノエルの主役との言葉に苦笑した。そして、観念したように手を合わせる。

「では、いただきます」

「「「「いただきます」」」」

綺麗に揃う月村家の声。それを合図にランチボックスの蓋を開けるすずか。そして中身を見てすぐに笑みを浮かべた。本当に遠足のお弁当のようだったからだ。

そのメインであるファリン作のおにぎりは概ね好評だった。概ねというのは、中身を入れ忘れていたり、あまりに力を入れて握ったせいで固くなっていたものがあつたため。

一方、ライダーとノエルのおかずは何の問題もなかったのだが、それを忍が「面白みがない」と言った。それを聞いてライダーが「では、今夜はシノブが面白みのある”美味しい料理”を作ってください」と返し、忍を沈黙させる一幕があつた。

その時の忍の表情にすずか達が声を出して笑ったのは言うまでもない。そんな賑やかな食事も終わり、お茶を飲んで一息吐いた後、ノエルは散歩を兼ねた行動をファリンと起こした。

「では、私とファリンは売店に行ってきます」

「あ、私も行くわ……すずかは？」

「私はもう少しここにいる」

そのすずかの答えに忍は笑みを返すと、ライダーへ視線を向ける。それに気付き、ライダーも視線を向けて首を横に振る。もう少しこの景観を眺めていたかったのだ。それを悟り、忍は笑みを返すと靴を履いた。

「じゃ、行って来るわね」

「うん」

「気をつけて。後、無駄遣いをしないように」

動き出す忍へ平然とライダーが告げたのは、どう聞いても子供への注意としか思えない言葉だった。当然、それに忍が反応しないはずもなく……

「ライダー……私を何だと」

思っているのか。だが、忍のその言葉は言う事が出来なかった。

「お嬢様、置いて行きますよ」

「くっ！ 分かったわよ。時々ノエルも私の敵になるわよね……」

まるで自分の発言を遮るように歩き出したノエルに、忍はブツブツ呟きながら後を追う。それを笑いを噛み殺してすずかは見送った。そして、その後姿が見えなくなったところでライダーが言った言葉が、すずかの我慢を決壊させた。

「子供としか思えないです」

呆れたように言い切ったライダー。それが先程の忍が問い質そうとした事の答えと分かり、すずかは吹き出した。その笑い声を聞きながらライダーも笑う。紅葉が風に揺れる。それにより紅葉が枝から離れ、ユラユラと舞い落ちた。

それに気付いたすずかが視線を上へ移した瞬間、突風が吹き抜ける。一瞬目を閉じるすずか。風が止んだのを感じ取り、すずかがその目を開けるとそこには……

「わあ……」

「……綺麗ですね」

地面の紅葉や枝の紅葉が辺り一面に舞い散っていた。まるで紅葉の雨。そんな中、ライダーがふと手を差し出した。すると、その手に一枚の紅葉が吸い込まれるように静かに乗った。

それを見たすずかが、自分の手を同じように差し出す。するとその手にも吸い込まれるように紅葉が乗った。ライダーの紅葉はやや黄色が残るものの真紅。すずかの紅葉は黄色と赤が半々。それを見てライダーが微笑む。

「まるで、人間のようですね」

「え？」

「大人を真紅とすれば、赤子が緑。黄色は子供で、赤と黄が半分ずつなら……」

「……子供から大人へなり始めてる？」

すずかの言葉にライダーは頷き、ことう続けた。

「まさに今の私達です」

「……そうだね。私はいつ真っ赤になれるかな？」

「それは何とも。ですが、いつか必ずなれるはずですよ」

どこか楽しそうにライダーへ問いかけるすずか。それにライダーも楽しそうに笑って答えを返す。そして彼女達は揃って視線を手にした紅葉へと向けた。

（いいものです。こんな穏やかな時間を……貴方達ともっと過ごしたかったです、サクラ）

（ライダーって、やっぱり時々詩的な表現するなあ。あれ？ でもライダーのもし黄色があった気がする……）

静かに風が吹き抜ける。それを感じながら手にした紅葉を眺める二人。それからそこに会話は無かった。それでも、すずかもライダー

空白期

照りつける真夏の太陽。どこまでも続く砂浜。そして、視界に広がる大海原。ここはバニングス家のプライベートビーチ。なのは達は小学校二年生となり、夏休みの思い出作りにここへ来ていた。

はやても連れて行きたいとアリサが提案した海水浴。初め、その話を聞いたなのは達は揃って難色を示した。それははやての事を思っただった。海水浴場は人が凄いし、車椅子のはやては絶対来ない。そうなのはとすずかが言うと、アリサが自慢げにこう答えたのだ。

大丈夫よ！ アタシのプライベートビーチに行くんだから！

その時、なのはとすずかは思った。大財閥のお嬢様というのは、やはり伊達ではないのだなと……

車で海鳴から走る事、実に二時間弱。その浜は静かで、眼前には穏やかな海が広がっていた。その近くには、おそらく宿泊用なのだろう。オシャレなペンションのような建物まである。そんな光景を眺め、どこか人事のようにはやては呟いた。

「は、すごいな」

「まったく……さて、はやて」

「ん？」

「……水着に着替える前に、課題を片付けるのではなかったのか」

その呟きに同意するアーチャーだったが、その後にはやや苦い顔ではやてを見つめた。課題とは通信教育で課せられたもの。言わば夏の宿題というものである。確かにはやては出かける時、それを片付けてから遊ぶと言っていたはずだったのだ。

アーチャーの目の前にいるはやては、既に赤を基調としたワンピースタイプの水着を着ていた。見れば、なのはやすすかも水着になっている。なのははピンクのワンピースタイプ。すずかは水色の同じタイプだ。ちなみにアリスは鮮やかなオレンジの同じタイプ。このためだけに水着を四人で新調しにいったのだ。

「それがな、アリスちゃん達は宿題持ってきてないん言っんよ」

「……分かった。今回は大目に見よう」

はやての視線は、みんな持ってきてないのに自分だけやるのは嫌だ。そんな想いを込めたものだった。それを感じ、アーチャーはそれ以上の追求を止めた。そうしても何の意味もないからだ。

それに子供らしく過ごせる夏の時間にケチをつけるのもどうかと考えたのだ。なので視線をはやてから後方へと移してアーチャーは歩き出す。そこには車から降ろした荷物を運んでいる小次郎がいた。その横には恭也もおり、それを手伝っている。

アーチャーもそれを手伝うべく、近寄ったところで

「いい所に。アーチャー、これを立ててきてください。スズ力達の休憩スペースを作らなければならぬので」

水着姿のライダーに呼び止められた。車を降りる時まで確かに普段着だったはずの。ライダーはやや戸惑うアーチャーにパラソル等一式を手渡し、車のトランクを閉めた。

その道具を受け取り、アーチャーは何かを察したのか苦笑いを浮かべる。その視線は前方にある海へと注がれていた。そこに見える一人の女性がライダーが水着となった原因だろうと踏んだのだ。

「……了解した。ライダー、君も着替えたのか」

ライダーはその言葉に困った顔で頷いた。ライダーが着ているのは黒のビキニタイプ。勿論選んだのは言うまでもなく忍だ。その忍はといえば紫の水着に着替え、すずか達と一緒に海で遊び始めていた。それを見ながら、二人は息を吐く。

「……無理矢理です。私はまだいいと言ったのですが……」

「成程。やはり車内ではやてと話し合っていたのはそれだったか」

今回の外出はなのは達高町家が四人、月村家は三人、アリサと小次郎、はやてにアーチャーの計十一人という団体だ。故にバニングス家が手配したマイクロバスをライダーが運転し、ここまで来た。ちなみにノエルとファリンはお留守番。日帰りのため、すずか達の夕食等の支度をするのだそうだ。ファリンは行きたがっていたが、ノエルに止められ渋々またの機会と相成った。

「まあ、いいのです。セイバーに比べれば……」

「私がどうかしましたか？」

ライダーの声に反応したのは車内から現れたセイバーだった。そ

の姿も既に水着になっている。白いビキニタイプの水着。それにアーチャーは一瞬とはいえ見とれた。だが、それを感じさせないよう意識を切り替えるところ尋ねた。

「君も既に着替えたのか？」

「ええ。海で泳ぐのは初めてなので、楽しみだったのです」

そう答えるセイバーは歳相応の少女の表情で笑った。それにアーチャーもライダーも笑みを浮かべる。とても微笑ましいと思っただ。それにセイバーは気付き、照れくさそうに顔を伏せた。すると、そんなセイバーを呼ぶ声が聞こえてくる。

「セイバー、早く早く〜！」

「あつ、はい。今行きます！」

楽しげに手招きするなのはに答えると、セイバーは急いで浜へと向かう。その後ろ姿を見つめ、二人は呟く。

「子供だな（ですね）」

余談だが、セイバーは最初海面を走つてなのは達を驚かせた。精霊の加護によるものだったが、セイバーは海にも適応されて喜んでいて。まあ、その後はさすがに普通に泳いでいた。

なのは達は知らない。その時セイバーが取った行動。それは、かつて彼女が衛宮士郎と行ったプールでやった行動とまったく同じだった事を……

「これで終わりですか？」

「うむ。すまぬな美由希殿。手伝ってもらったつもりはなかったのだが……」

「いいんですよ。私はまだ泳ぎたいって気分じゃなかったんですから」

そう言っつて美由希は笑う。着替え終わって浜に向かおうとしたところ、建物の方へ荷物を運ぶ小次郎を見かけ、つい手伝いを申し出たのだ。だから既に眼鏡は外し、いつでも泳げる状態だった。小次郎はそんな美由希に笑みを浮かべ、ぽつりと一言。

「しかし、水着と言うのは些か破廉恥なのだ。露出が多いと思うのだが……？」

「え、ええつと……水の抵抗を減らすために生地は少なく薄くしてあるんですよ」

美由希の格好は南国系の色使いでパレオつきのもの。それをまじまじと見つめる小次郎。その視線に邪気はなく、純粹な興味だった。だが、当然その視線にどこか慌てたように美由希は答える。

ここまで遠慮なく男性に注視される事などないし、彼女としても今回の水着は少し思い切ったのだ。何せ行く先はバニングス家のプライベートビーチ。そんな庶民が行ける場所ではない海で遊べるとなれば、少々大胆な水着を着てもいいだろうと思ったためである。

小次郎は美由希の答えに納得するも、まだ何か気になるようで……

「美由希殿は、見られて良いものなのか？」

「あ、小次郎さんなら大丈夫です。って、あの、気にしないんじゃないかと、その……」

しどろもどろになる美由希。男性として見ていないと言ったようで、それを訂正するべきかと考えたのだ。そんな美由希を不思議そうに眺め、小次郎は呟く。

まあ、その姿も中々雅なものよ。

その呟きが美由希の動きを更におかしくしたのだが、それに気付かず小次郎は歩き出す。美由希もそれを見て、やや動揺したままついていく形で歩き出した。

向かう先は賑やかな声のする浜。そこではなのは達が海で遊び回っていて、はやてはずかさと砂を使って城を作っている。しかし、そんな光景を見ても小次郎が抱くのはまったく浮かれたものではない。

（ふむ。泳ぐのは鍛錬の一環と考えておった時代とは違うか。しかも海では、な。やはりこの時代は面白きものよ）

（小次郎さんって結構大胆だな。あんなにジロジロ見られたの初めてだよ。でも、不思議と嫌じゃなかったな？ ……恥ずかしかったけど）

一方の美由希は先程の小次郎から受けた視線を思い出し、頬を赤くしていた。邪心があれば美由希とて嫌悪感を抱いたし、そもそも

そんな相手ならば即座にどうこうするだけの気持ちを彼女は持っている。

だが、小次郎は無垢な子供のような存在だった。知らない事に純粹な興味を示し、水着姿の美由希相手に少しも邪な目を向ける事など無かったのだから。

「美由希殿、良ければ私に泳ぎを教えてくださいぬか？」

そこへ小次郎は美由希へそんな頼み事をした。彼としてはきつと泳法なども自分の知るものと違うのだろうと考え、教えてもらおうと思っただけだった。それを聞いた美由希は小次郎が泳げないと取った。なので、どこか意外そうな表情を一瞬浮かべる。

「え？ ああ、いいですよ。じゃ、迷惑にならないようになのは達のない方へ行きましょうか」

それでも小次郎の申し出に笑顔で応じ、美由希は先導するように歩き出す。この後、なのは達が遊ぶ場所から離れた所で二人だけの水泳教室が開かれる。

そこではクロールなどを披露する美由希とそれを見よう見真似で覚える小次郎の姿があった。その子供のような小次郎に美由希は微笑み、見事な泳ぎを披露する彼女へ彼も感心する。

そんな二人の水泳教室は昼まで続いた。美由希が小次郎を意識し出すのは、これが最初のキツカケだった……

運んでいた荷物を降ろして恭也は息を吐く。視線の先にあるクーラーボックスの中身は、スポーツ飲料などのドリンク類だ。小次郎が運んでいた方のクーラーボックスには昼食用の食材が入っている。昼は浜でバーベキューをする事になっているのだ。

そのため、現在アーチャーが下拵えをするべく建物内の厨房で働いている。まあ格好は水着なので中々シユールだろうが。少し様子を見てこようか。そんな風にからかい精神を發揮しようとする恭也と、そこへ聞き慣れた声があった。

「……何ぼくつとしてるの？」

「いや、アーチャーさんの様子を少し見てこようかと」

「あ、その顔はからかうつもりね。やめておきなさいよ。アーチャーさんって意外と繊細なんだから」

そう言っつて忍は恭也の腕に胸を押し付ける。その感触に慌てて周囲を確認する恭也。幸い誰も見ていなかったが、忍はそんな恭也に口の端を吊り上げると耳元に顔を近付け囁いた。

「もう、別に初めてっつて訳じゃないクセに」

「っ！？ 忍！」

からかうような囁きに恭也が微かに声を荒げるが、それはただの照れ隠しだと忍は知っている。だからスツと恭也から体を放すと悪戯めいた笑みを見せて走り出す。勿論、去り際に。

「恭也のムツッリ」

捨て台詞を忘れずに。それに恭也は呆れながらもため息を吐いて追い駆ける。まだ水着にはなっていないが仕方ないと。ここで追い駆けなければ、確実に後で拗ねるか文句を言われるからだ。

（つたく、忍の奴も子供みたいなどがあるんだからな。……ま、そこが可愛いところでもあるのか）

さり気無く惚気ながら恭也は走る。その視線の先には浅瀬が見える。それも人目に付きにくいような感じの。それに気付いて恭也はまさかなと小さく呟いた。いくら何でも忍はそんな事を考えていないだろうと。

この後二人はライダーが捜しに行くまで姿を見せなかった。現れた時、何故か恭也が若干バツが悪そうにしていたのと、忍の肌艶が良くなっていたのは後で分かる事である。

恭也と忍が揃って浅瀬に消えた頃、浜の方では水飛沫を上げてはしゃぎ合うのはとセイバーがいた。互いに水を掛け合い笑っている。ライダーは先程から黙々と泳ぎ続けていた。

その速度は凄まじく、何度も沖と浜を往復しているのだろうが、最早それが何回か分からぬぐらいの速さだった。すずかとはやても最初こそ波打ち際で遊んでいたが、今は砂浜で芸術に挑戦していた。

そして、そんな光景を眺めてアリサは満足そうに頷いて視線を横へと移す。そこには褐色の男性がいた。

「……ね、まだ？」

「もう終わる」

ポンプを使い、ビーチボールを膨らませているアーチャー。それをまだかまだかと待つアリサ。バーベキューの下拵えを終え、浜へと戻ってきたアーチャーを出迎えたのは意外にもアリサだった。

アリサは軽く驚くアーチャーに無言でポンプとビーチボールを手渡し「小次郎が美由希さんとどこかへ行ったのよ」と告げた。そして、それだけでアーチャーは全てを理解した。

「……終わったぞ」

「ありがとう！」

そして、現状に至る。小次郎に代わりアリサの要望を聞いてやっていたのだ。お願いや頼むからと言わず要求を突きつけるアリサに、アーチャーがきんのあくまの姿を思い出したのは言うまでもない。

恐るべきは過去の記憶か、それとも刷り込まれた世話焼きの性か。とにかくアーチャーはアリサにはどこか逆らえない時があった。アーチャーから手渡されたビーチボールを抱え、走っていくアリサの後姿を見つめながら彼は思う。

（はやてもだが、アリサもどこか凜達を思い起こさせる時がある。主にはやては口調でアリサは言動だが……）

彼は気付いていない。アリサはともかく、はやての場合は自分が少なからず原因になっているとは。それでも、アーチャーは楽しそうになのは達へ声を掛けるアリサを眺めて微笑む。このまま守護者として動く事無く時間が過ぎてくれる事を心から願いながら……

砂浜に対角線を描くように座るなのは達。その四対の視線はビーチボールに注がれている。ちなみにセイバーはライダーと遠泳対決をしていた。お昼までには帰ってくると言っていたのでなのは達は心配していない。何故なら、セイバーが食事時に帰らないなど絶対に有り得ないのだ。

「ほら！」

「ほい」

「え？ え？ あうっ！」

アリスからはやてへ、はやてからなのはへ打ち返されたボールはその上を通り過ぎる。それを何とか打ち返そうとしたのはだったが、そのままひっくり返ってしまった。

そう、これはその場から動かずに何度打ち返せるかを競うルールはやてが同じ条件になる遊びにこだわる、アリス提案のボールゲームなのだ。意外とこれが楽しくも難しいため、すずかもアリスも先程から何度も打ち返せず悔しい思いをしていた。

「なのはちゃん、大丈夫か？」

「な、何とか。でも、少し砂が口に入ったかも……」

何度か砂を出そうとするなのは。それをアリスは笑みを浮かべて見つめていた。何しろ、なのはは打ち返した回数が一番少ないのだ。

原因はなのはの運動神経だけではない。はやてから打ち返されるボールのコントロールにもあった。

打ち返せるように調整するアリサやすずかと違い、はやてはボール遊びなどやった事があまりない。なので、中々上手い場所にボールを打ち返す事が出来なかったのだ。

「ごめんなあなのはちゃん。わたしがもっと上手に返せればええんやけど……」

「いいよいいよ。私が運動音痴なのもあるんだし」

すまなさそうに謝るはやてになのはは笑顔で答える。それにはやても笑みを返して告げる。

「よっしゃ！ なら、次は絶妙な球を返したるな！」

「うんっ！ 私も頑張るよ」

互いにガッツポーズを見せ合うのはとはやて。この後、初めて継続回数が三十を超え、四人の盛り上がりは凄いものとなるのだが、それはまた別の話……

煙が立ち上る砂浜。そこにはバーベキューセットを前に鋭い目で串を睨んでいるアーチャーがいた。その周囲にはセイバー達が集まっていた。視線は全て串に向けられている。

串には野菜や魚介に肉などが刺さっている。どれもアーチャーに

よる”仕事”が施されていて堪らない匂いを出していた。なのは達もその匂いに我慢出来ず、遊びを切り上げて今か今かと待っている。

離れた場所で泳いでいた美由希と小次郎も匂いで昼時と理解したのか、砂浜に戻ってきた。唯一恭也と忍はまだ姿を見せず、ライダーはそんな二人を捜してくると言っこの場を離れている。

「いい匂いだよね」

「まったくです……」

「なのは、セイバー、くち。涎出てるよ」

美由希の微笑みながらの指摘に慌てて口元を拭うのはとセイバー。その視線の先にあるのは目にも鮮やかな串の数々。魚介の串には、アーチャー特製の醤油ダレが塗られており、それが網に落ちると何とも言えない香ばしい匂いを漂わせる。

更に、肉の串にはアーチャー作バーベキューソースが塗られているので、それも網へ落ちる度に食欲をそそのるのだ。二つの匂いによる相乗効果は高い。

何せ、なのはのように涎とはいかないまでも、アリサやすすかですえその匂いには食欲を刺激されていて、先程からお腹が鳴らないか心配しているのだから。

「……これ、何で作ったんや？」

「後でレシピを教えよう。それとさり気無く串を確保しようとするな。それはまだだ」

タレを真剣に見つめながら、シレッと魚介大目の串を手にして
るはやてにアーチャーのストップがかかる。それに苦い顔で従うは
やてだったが、小さく「ケチ」と言うのは忘れない。

はやてが手にした串はもう食べられる状態になっていた。だがア
ーチャー基準ではまだ完全ではないのだ。最高の状態で食べてもら
う。そのために一切の妥協を許さない男、アーチャー。

「何とでも言え。君には体の事を考慮した健康串をくれてやろう」

「それはおおきに。でも、わたしは野菜よりもお肉とか魚とかが必
要や思うんよ」

「心配いらん。きちんと今日の夕食で食べさせてやる」

「わたしはこれが食べたいんや！」

いつものような会話を繰り返す二人になのは達は苦笑い。仲が
いいのは結構なのだが、今ははやての大声がお腹に響くのだ。食欲
を刺激する匂い。滴るタレとソースの音。見るからに美味しそうな
串の数々。それになのは達の我慢も限界を迎えるところで……

「よし、ここから先はもういいぞ」

「……やったあ！」「……」

思い思いに串に手を伸ばすのは達。それを微笑ましく見ている
美由希と小次郎。セイバーは既に串を両手に確保しているところが
恐ろしい。しかも、肉と魚介の大目のものだ。そんな抜け目ないセ
イバーに視線を送っていたアーチャーだったが、それに彼女が気付
き。

「な、なんですかっ！」

「……いや、何でもない」

どこか恥ずかしそうな声を返した。そんなセイバーにアーチャーは懐かしさを感じて微笑むと、黙々と串に食材を刺しては網に置いていくのであった……

その頃ライダーは困惑していた。気配を探って二人を見つけたのだが、そこで展開されていたのは所謂”情事”というもので……

(さて、いつ声を掛けるべきでしょうか)

視線の先では忍が恭也に馬乗りになっている。どうやら互いに行為に夢中になり、周囲の気配に気付かないようだ。何せ、ライダーは何とか自発的に気付いてもらおうと先程から気配を敢えて出しているのだが、それが効果なしなのだから。

故にライダーはこの方法は無意味と判断した。ふと視線を後方へと向ければ、さすが達が楽しそうに食事をしているのが見える。それを微笑ましく思う反面、ライダーは自身の空腹を感じていた。受肉した事により三度の食事が欠かせないものになったためだ。

それに今日の昼食はアーチャー作。それはライダーにとっては中々味わえないものなので。

（何か手はないでしょうか？ このままではセイバーに粗方食べられてしまいます）

何としても食べたかったのだ。勘違いしてはいけませんが、ライダーは食欲魔神ではない。ただ、どこか土郎の料理を思わせる味に彼女は郷愁にも似たものを感じているのだ。

と、そこでライダーはある事に気付いた。恭也と忍が互いに息を切らせて抱き合っていたのだ。どうやら終わりを迎えたらしい。それを認識するや、ライダーは静かにそこから若干離れた。ここしかない。そう感じ取ったのだ。

「シノブ、キョウヤ、どこですか？ もう、昼食の時間ですよ」

我ながらワザとらしい。そう思いつつ、ライダーは声を出した。その瞬間、二人のいる方から物音がする。慌てる息遣いやうるたえる声まで聞こえたのだ。

ライダーはそれを確認し、息を吐いて空を見上げる。そこには雲一つない青空がある。見事な晴天。まさしく夏空だ。そんな天気を嬉しく思うも、ライダーはそれが先程の光景の原因に思えた。

「……この暑さが二人を狂わせたのでしょうか」

思わず言ったその咳きは幸運にも二人に聞かれる事はなかった。だが、二人が姿を見せた途端、ライダーは棒読みに近い感じでこう言った。

ああ、こんなところにいたのですね。捜しました。では、私は先に戻っていますので。

二人が言い訳をする暇すら与えず、役目は終わったとばかりにライダーはその場から走り去った。それを二人はただ呆然と見送るしか出来ない。この後浜へ戻った二人が見たのは、どこか安堵の表情を浮かべながらアーチャーから串を手渡されているライダーの姿だった……

そんなこんな海水浴も終わりを告げ、太陽の光が茜色に変わります。後ろ髪を引かれる思いのなのは達だったが、それでも誰も文句を言わずに車へと乗り込んだ。

夕日を浴びながら走るマイクロバス。その車内では、なのは達子供組が安らかな寝息を立てていた。すずかとはやてが互いにもたれあいながら眠り、アリサは小次郎に寄りかかって眠っている。

それを微笑みながら見つめる美由希と忍。アーチャーはライダーの話相手をし、小次郎はアリサが起きぬように気遣いながら、水平線に沈む夕日を眺めていた。そして、なのははといえば……

「すー……」

「はは、こうなるよな」

セイバーにもたれかかって眠っていた。恭也がそんなのはに着をかけて小さく笑う。何故なら、なのはがセイバーの手をしっかりと握っていたからだ。

そんな微笑ましい光景を見て恭也は心から思う。こんな時間がず

女性用の水着が全然思いつかずバリエーションが出せないの。

空白期 (Y & amp . C)

「凄いいじゃないですかマスター！ 現場監督ですよ、現場監督っ！」

「うん、そうなんだけどね。と言うか、はしゃぎ過ぎだよキャスター」

「何言ってるんですか！ はしゃいで当然です！ 遂にマスターが偉い立場になっただんですからね！」

興奮気味に告げるキャスターを見て、ユーノはやや苦笑しつつも内心とても喜んでいた。それは家族同然のキャスターが一番に自分の任された立場を祝ってくれたから。

場所はスクライア一族が暮らす世界。ユーノは魔法学院を卒業し、故郷へ戻って以前と同じように遺跡発掘などの手伝いをしていた。当然魔法学院を出た事で彼の魔法技術等は向上し、それに比例して一族内でユーノを重用する傾向は強まっていた。

そして、遂にその日が来た。大人達ではなく、彼がある発掘現場を監督として任される事となったのだ。それはユーノが更なる成長の経験としてくれるとの期待を込めた一族の者達の決断。

このままでいけば、一族の長となる可能性も高いユーノ。そんな彼の将来性を重んじた長老の判断を周囲も支持したための結果だった。勿論それをユーノもどこかで感じ取っている。だからこそ彼は冷静でいようとしていたのだ。

（小さな現場だけど、僕が責任を負って大人達を指示する事もあるんだ。長老もその助けになればってこれを託してくれたんだし）

そう思いながらユーノは先程長老から渡された宝石を触る。それは真紅の宝珠。レイジングハートと言う名のインテリジェントデバイスだ。長老曰く、とある遺跡発掘で見つけた物で一族の中で使える者がいなかったために今まであまり日の目を見なかったそうだ。これをユーノが託されたのは、部族の中で一番優秀な魔法技術を持っている事に加え、キャスターを使い魔として生み出したと思われる彼の可能性に賭けたため。ユーノならばこれを使いこなせるのではと、そう考えたのだ。

「それにしても豪儀ですねえ。まさか監督就任祝いまでくれるなんて」

「そうだね。でも、これは僕にも使いこなせないかも……」

「何故です？」

「実は……さっき試しに起動パスワードを言ってみたんだ。でも、やっぱりバリアジャケットの展開とかは無理だった」

ユーノはそう返すともう一度レイジングハートを触る。

【ごめんね、レイジングハート。僕も君のマスターには相応しくなかった】

”あまり気にしないでください。貴方はこうして起動させる事は出来たではありませんか。それだけでも十分です”

【……ありがとう。僕じゃ魔法使用の補助とかにしか使えないけど、支えてくれると助かるな】

”分かりました。私に出来る範囲で助けます”

念話で語り合うユーノとレイジングハート。それを聞き取る事が出来ないキヤスターだったが、雰囲気から何かを感じ取って小さく微笑んだ。きっと自分の力の無さを悔いているのだろうと。

正直、普通に同世代の者達から見ればユーノは十分優秀だ。しかしユーノの目から見れば、学院で自分以上の者達は沢山いたのだ。だからこそ彼は自分を磨こうとする。

何せ、ユーノは学院で知ったのだ。自分が攻撃魔法の適正が低い事を。彼がならばと支援や回復などの魔法を重点的に磨いたのはそのためだった。

それを知らないキヤスターではあったが、学院での日々がまた少しユーノを成長させたとは理解して一人頷いたのだ。一段と男らしさを増しましたねと嬉しそうな声で告げて。

(行き過ぎると問題ですが、自分を未熟だと思って精進しようとする姿勢は高得点ですよ、マスター。そのままいい男街道を歩いてくださいね)

そんな事を考えて笑うキヤスターの視線の先には、初の現場監督として何をするべきかを考えて頭を悩ませるユーノの姿があった……

「今回の事、ちゃんと理解してますね？」

「うん。僕に経験を積みませようとしてくれてるんだよね」

「はい、正解です。つまり、これがマスターの初仕事ですよ」

キャスターの言葉にユーノは不思議そうな顔を返す。自慢ではないが、彼はもう何度か仕事をしてきているのだ。それをキャスターも知っている。なのに何故初仕事と表現したのか。それがユーノには疑問だったのだ。

「あの、キャスター。僕はもう何度か仕事をしてきてるんだけど？」

「あのですね、マスター。仕事と言うのは、責任を追う立場でやってこそ初めて仕事と言えるんです。今までは……マスターは自分の事だけ考えて、自分がミスをしなければ良かったですよね？」

その問いかけにやや真剣な表情で頷くユーノ。理解したのだ。キャスターが言いたいのは、今回は一層周囲の事へ気を配らないといけない。誰かがミスをしたら、それは全てユーノのミスとなるのだと。初仕事という表現はそこから来ている。ユーノはそう思い、改めて任された事の重みを感じた。

（そうか。今度は自分の責任だけじゃない。他の誰かの事も僕のする事になるんだ。自分の事だけ考えればいいって訳じゃなく、周囲の事にもちゃんと目をやらないといけない。監督っていうのはそういう大変な立場なんだ）

どこかで分かっていたはずの事。だが、それをこうして改めて言われる事で強く意識する事が出来る。ユーノはそう思ってキャスターへ礼を告げた。それにキャスターが気にしなくていいと返すのはいつもの事。

その後話するのはキャスターによる魔術講座だ。とはいえ、魔術についてはほとんど語り尽くしてしまったため、現在はサーヴァントやそれを使って行っていた”本来の聖杯戦争”についてが主となっていたが。

「……と、言う訳で、元々は聖杯を満たすための素とするために召喚してたんですよ」

「酷い……死者の魂をそんな風に利用するなんて」

「そうかもしれません。でも、それを平気で出来るのが魔術師と呼ばれる存在なんです。根源に辿り着くためなら何でもする。それが魔術師として正しい在り方ですし」

キャスターの言葉にユーノは思わず拳を握った。目的のためなら手段は選ばない。それがどれだけ恐ろしく間違っているかは子供でも分かる。例え誰かを犠牲にすれば世界が平和になると言われても、その犠牲を最初から肯定した者に平和や正義を語る資格はないのだ。そう思っユーノはやり切れない怒りを抱く。魔術師の在り方とその行動理由に。根本から人として間違っているその生き方に彼は強い不快感と嫌悪感を感じたのだ。

（自分さえ良ければ他はどうなってもいいなんて間違ってる！ そんな事をすれば、今度はその犠牲にされた誰かが同じ事を繰り返すだけじゃないかっ！）

「それが正しいなんて、魔術師はそれでいいの？！ 自分が根源なんてものへ辿り着ければ他はどうなってもいいなんて……」

「そうですマスター。その気持ちを無くさないでください。それが

無くなった者は人じゃありません。ただの悪魔ですからね」

「キャスト……？」

「自分が生き残るには他者を犠牲にするしかない。それが当然の中、いつまでもそれを嫌い、回避出来ないか足掻いた人がいました。でも結局自分が生き残るために犠牲を出す事しか出来なくて……それを悔い、でも前を向いて歩く事しか出来ず悩み続けた。そして、殺してしまった人の分まで生き残る事では償えないと答えを出したんでしょうね。最後まで他者を犠牲にしながら戦い抜きました。でも、その人は助ける事が出来たんです。最終的には一人しか生き残れないはずの枠組みの中、奇跡的に助ける事が出来た命があったんですから」

遠い目で話すキャストにユーノは何も言えなくなる。その表情がどこか寂しそうだったからでもあるが、何よりキャストの声が懐かしそうに優しくかったためだ。きつとキャストにとって大切な人だったんだろう。そう思ってユーノは黙ってその話を聞いた。

犠牲を肯定したくない。それでもそうせざるを得なかった。キャストはその人物の事を褒めもしなかったし、称えもしなかった。だが、貶しも否定もしなかった。ただ、それが人のあるべき姿ではないかとユーノへ語りかけるように言葉を紡ぐだけだったのだ。

「……ねえキャスト。その人は、君のマスターだった人？」

「えへへ、やっぱり分かっちゃいますよね。そうです。ここへ呼ばれる前に一緒に聖杯戦争を戦った方ですよ」

「そっか。魔術師の中にもそっという人はいるんだね」

「あ、正確にはあの方は魔術師じゃありません。教えたはずですよ。魔術師とは人らしい心を捨てる事が出来る存在だと」

「じゃあ……その人は？」

「言うなれば……魔術使いぐらいが精々ですねえ。出来る事なら戦いたくない。そんな雰囲気でしたし」

ユーノの質問にキャスターはそう返してふと思う。あの助ける事が出来た眼鏡の少女は今頃どうしているのだろうと。自分の主人の事を覚えているだろうか。もしかして再会を果たしているだろうか、と。

自分と共に過ごした主人と全て同じではないが、彼も生きている。願わくば今度は普通の人生を送って欲しい。キャスターはそう思っ
て静かに目を閉じる。それを見つめ、ユーノは一人呟いた。

犠牲を出すしかないとしても、最後までそれを肯定せず足掻く事……か。

いつか自分もそんな決断を迫られるかもしれない。遺跡発掘は危険もある。その際、自分がそういう判断を下さないといけない事が今後ある可能性はないと言えない。そう考え、ユーノは誓う。何があっても、決して最後まで犠牲を出さない事を諦めないと……

日も暮れ、辺りを夕闇が覆い出した頃、ユーノの暮らす家には食欲をそそる匂いが充満していた。その原因は言うまでもなくキャス

ターの料理。ユーノが学院で生活する間、彼女は異世界の料理を勉強していたのだ。その甲斐あって、彼女はまた一つその腕を上げたのだから。

「さ、召し上がれ」

「えっと……いただきます」

「はい、どうぞ」

キヤスターによって日本式の食事作法を仕込まれてしまったユーノ。それ故に彼が手にしたのも箸だ。それはユーノが学院時代にミッドで買った物。管理外世界である地球の日本だがそこ出身の子孫などがあるため、少ないながらもその手の物を扱う店をユーノが調べて訪れたのである。

その苦労はそれなりにあったが、彼は勉強や実習で疲れた体で嫌な顔一つせずに調べた。それは、自分を愛し大切に扱ってくれる家族となったキヤスターに喜んでもらうために。

二人きりの食事だが、それでもユーノからすれば嬉しかった。キヤスターと出会う前は部族の者達と食べていたが、それとは違う温かさを感じる事が出来る。それは言うなれば一体感だ。

部族の者達もある意味では家族と言えた。しかし、やはり常に一緒とはいかない。だがキヤスターは違う。寝食を共にし、常に傍にいる。表向きは使い魔と言ってはいるが、ユーノにとっては実質姉のような存在だ。

「うん、やっぱりキヤスターの料理を食べると落ち着くよ」

「嬉しい事言ってくれますね。でも、それはあまり子供らしくない

ですよ」

「仕方ないじゃないか。同世代と遊ぶ事なんてほとんど無かったんだ」

キャスターの苦笑混じりの言葉にユーノはさらりと返す。しかし、その声に微かな寂しさが込められているのをキャスターは感じた。ユーノがどこかで同年代の友人を求めていると。

(マスター……そうですよ。やっぱり同い年のお友達は欲しいですよ。私もいつまで一緒にいられるか不安な部分もありますし、出来るなら親しい友人が出来るといいんですけどお……)

世界によって召喚されたとすれば、その要因がなくなり次第消える事になりかねない。そうなれば、ユーノがまた一人になってしまう。それをどこかで懸念し、キャスターは心から願った。

いつかユーノが親しい友人を得る事を。同性も異性も関係なく、他愛ない事を話して過ごせるそんな間柄の者達と出会う事を。願わくば早い方がいいと。そんな事を思うキャスター。彼女は知らない。その願いは予想を超える形で成就する事になるとは。

「それにしても、サーヴァントのクラスが七つあるとしたら他のクラスも召喚されてるのかな？」

「どうでしょう？　もしかすると私だけかもしれないですよ」

「それならそれでもいいんだけど。英霊なんて呼ばれるサーヴァントならないと思うけど、もし悪い人の元に現れていたら大変だから」

「……実はサーヴァントには反英雄と呼ばれる存在もいるんですよ、マスター」

ユーノの告げた仮定。それをキャスターは否定せず、ある事を語り出す。それはサーヴァントに関する事。英霊達はその名の通り、死後英雄として祭り上げられた者達がほとんどだ。だが、その中には一般的な概念で英雄と呼ばれる事になった者達とは一線を画す存在もいる。

それは、明確な悪を行った事で善を浮き彫りにしたという点から英雄と扱われた反英雄と呼ばれる者達だ。つまり、そういう者達ならば悪人の元へ召喚される可能性は高い。

キャスターが例として挙げたのはこの世全ての悪と呼ばれる事になったアンリマユだ。その話を聞いてユーノは疑問を抱く。反英雄と聞いてどれ程の悪人かと思ったのだが、聞いているだけではそれが悪人とは思えなかったのだ。

「キャスター、その人が反英雄とは思えないんだけど？」

「マスター、明確な悪と言うのは何も悪人だからではありません。この場合、彼は周囲全てから悪と認識された事。これが重要なんです」

「……その人以外全てが悪と認めた。だからその人は存在して目に見える悪となった。だからその人以外は善となる。それだからその人は善を明確にしたって事？」

ユーノの問いかけにキャスターは頷いた。そして、彼女はこう告げた。自分も反英雄に近いのだと。それに表情を驚きへ変えるユーノ。そんな彼へキャスターはかつての自分の話を語った。

傾国の美女と言われた事もある。ある時は恐ろしい獣の妖怪として暴れた事もある。それらの要素があるのが自分だと。困惑するユーノヘキヤスターはこう締め括った。自分のように複数のクラスに該当する者は、召喚者の人間が持つ要素に近いクラスへ分類されると。

「おそらくマスターは穏やかですし、ちょっと寂しがりやな部分もありますからこの姿だったんですよ」

「魔術師であるキャスターとして呼ばれたのは、僕にキャスターが他のクラスになる要素がなかったからって事？」

「多分そうですね。バーサーカーになるにはマスターが大人しすぎますし、他のクラスにも中々当てはまらないかもしれません」

「そっか。でも良かったよ。キャスターがキャスターとして召喚されて」

心から安堵して笑うユーノ。聞いただけが、狂戦士となったキャスターなど想像出来なかったのだ。それにそうなっていたら自分はこんな楽しく温かい日々を過ごす事は出来なかったはずだ。

そう考え、ユーノは息を吐いた。そんな彼の反応にキャスターは微笑む。彼女も同じ気持ちだったのだ。愛される事もあつたし愛する事もあつた。だが、それはいつも異性としての関係。今のような家族としてのものではなかったのだ。

（どこか私らしくないですけど、これはこれでいいものですよねえ。あー、子供欲しいって思う気持ちが出てきそうだなあ）

受肉した今ならそれも可能かもしれない。そんな事を考え、キャ

空白期 (F&P・I)

時の庭園。そこでランサーがしていた事と言えば、厳しく激しいフェイト達の訓練とリニス先生にフェイト達と共に魔法の勉強。そして……

「具合はどうだ？」

「いつも通りよ。それなりね」

プレシアの精神安定だった。それが意味では一番大きな役割ともいえる。こればかりはリニスでも出来ない事だったのだから。

いつもの口調で問いかけるランサーの声に、柔らかい声で答えるプレシア。ランサーがプレシアの治療に手を貸すようになって既にかんりの時間が経ち、初めこそ声にも棘があった彼女もそれが大分和らいだ。表情も穏やかなものへなり始め、本人が客観的に見れたのならそれはアリシアと共に過ごしていた頃に近い印象を受ける程に。

そうなった一因はランサーが注意した事が挙げられる。言葉や態度に棘があったプレシアへランサーはこう言った。心を休ませなければ、体が休まらないと。それにプレシアも納得し、段々とはあるが口調を穏やかにしていったのだ。

現在、プレシアの部屋にはリニスがない。リニスはアルフとフェイトと共に昼食の支度をしているのだ。その際、つまみ食いをするようにしたランサーはリニスから注意させると同時に言われたのだ。プレシアが話をしたいと言っている。

「そりゃ良かった。で、話があるって聞いたんだが？」

「……アリシアの事を何とか出来るかもしれないわ」

「へえ、そりゃすげえ。どんな話が教えてくれ」

口調こそ軽いが眼差しは鋭くプレシアを見つめるランサー。その輝きと力強さにプレシアは言いようのない安心感を覚える。プレシアは知らない。自分がランサーに向ける視線が、何時の間にか単なる信頼出来る相手へ向ける視線ではなくなってきた事を。

出会ってからの時間、プレシアはランサーと過ごす事が多かった。そこでランサーが聞きたがったのはアリシアとの日々だった。その理由は単純に興味があったからなのだが、それがプレシアに意外な効果をもたらしたのだ。

アリシアとの楽しかった日々を思い返す事で生きたいとの気持ち強くし、その度に彼女が誕生日プレゼントとして望んだものを意識して、フェイトの事を従来とは違う観点で考えるようになり出したのだから。

「まだ真実かは定かではないのだけど……」

プレシアが話す内容へ耳を傾けるランサー。そんな彼にプレシアは内心で感謝する。出会えていなければ、自分はアリシアへ合わせる顔を失っていただろうと思いつながら。

プレシアがランサーへしたのはジュエルシードと呼ばれるロストロギアの話だった。その情報を聞いた時、ランサーは疑問に感じた事があった。それはその情報をどこから入手したのかという事。

それにプレシアはどこか悪戯っぽく笑った。その笑みにランサー

は少し驚く。するとプレシアは益々笑みを深めてやや楽しそうに答えを告げた。

「……管理局に少し、ね」

「へえ……バれないようにしたんだろっな？」

「誰に言ってるのかしら？ そんな簡単に分かりはしないわ。それに分かる頃には、ジュエルシード自体は行方不明よ」

（こんな風に会話を楽しいと思えるなんて久しぶりね。アリシアが生きていた頃以来かしら……？）

そう思い、プレシアはおかしそうに笑う。ランサーはそんなプレシアにやや不思議そうな表情を浮かべるが、別に悪い反応ではないと思ひ直したのか特に何も言わなかった。

だが、そのプレシアの笑みがどこか少女のような雰囲気に思えた。だからだろう。からかいたくなつたのだ。あまり見せない顔を覗かせたプレシアへの軽い礼代わりも兼ねて。

「結構可愛く笑うじゃね〜か」

「っ？！」

「ま、お前がそう言うなら心配ないな。信頼してるぜ、プレシア」

ランサーの言葉に動揺して頬を赤く染めるプレシア。それを見て、満足そうにランサーはその場を静かに離れる。そして、そのまま扉まで歩き、プレシアの方へ視線だけ向けて告げる。

「俺がお前を信じるように、お前も俺を信じる。絶対損はさせねえ」
そう言い切ってランサーは部屋を出る。その後姿を見送ってプレシアはどこか見惚れたように呟いた。

「損どころか、もう十分得をさせてもらっているようなものよ」

そして、こんな事を思っただけでプレシアは目を閉じる。

(ランサー、貴方が私を信じるのなら、私も貴方を信じるわ。それが……例えばどんな事であっても……)

それはこう思っているから。自暴自棄となった己に、ランサーがどんな結果をもたらしてくれたかを知っているからだ。

貴方に会えた事であの子との約束を思い出せた。それだけでも、私は得をしてるわ……

テストロッサ家の食卓は戦争だ。といっても、それはランサーとアルフが取り合うだけで、リニスとフェイトは別に争う気はないのだが。

「あ、それアタシの！」

「へっ、俺の視界に入ったのが運の尽きだ」

今日もまたランサーがアルフの食べようとしていた鳥のもも焼きを奪い取り、笑みと共にそれにかぶりつく。それを悔しそうに睨みながら、アルフも負けじとランサーお気に入りのローストビーフを鷲掴み、その口へとほうばる。

それにランサーが怒りながらもどこか楽しそうにその手を料理へ伸ばす。アルフも笑顔を浮かべてそうはさせじと手を伸ばす。それを見ながらリニスとフェイトは苦笑い。食事が賑やかなのはいいのだが、些か騒々しすぎるのだ。

故に、リニスがやれやれといった表情で立ち上がり、料理の載った皿を取り合う二人に対して……

「いい加減にしてください」

バインドを施す。それも幾重にも重ねたものだ。ランサーとアルフがそれに身動きを封じられた瞬間、水を打ったようにその場が静まり返る。そう、それはリニスが我慢の限界寸前の合図。それ以上騒ぎ、料理を取り合うなら一切の食事の支度を自分達でやれという暗黙の宣告。

実際、以前同じ事をされて反抗した二人はリニスの食事を三日間お預けにされたのだ。フェイトとリニスだけ美味しそうに料理を食べる中、二人が許されたのは保存食の缶詰とレトルトだけ。

それでも最初こそ平然と食べていた二人だったが、流石に同じものばかり三日も続けば嫌になるもの。結局リニスに謝って許してもらった経緯があった。

「ふ、二人共、仲良く食べよ？」

「そそそ、そうだね。フェイトの言う通りだ」

「お、おう。いや、俺はこれをアルフに取ってやろうとだな……」

言い訳を始める二人に対し、リニスが返した返答は大きな音を立て椅子に腰掛ける事だった。その表情はとて素晴らしい笑顔。だが、ランサーとアルフは知っている。あの笑顔の下には般若の顔が隠れているのを。

だからこそ無言で座る。そして、黙って食べる。普段なら使わないナイフやフォークを使って。それを見てリニスが満足そうに頷く。フェイトはそんな三人を見て小さく呟いた。

「リニス、二人のお母さんみたい」

その呟きに気付かず、リニスはただ黙って二人が食べ終わるのを見つめていた……

食事の後片付けをフェイトとアルフに任せ、リニスとランサーはある部屋に来ていた。そこはデバイスルーム。かつてリニスがバルデイツシュを製作して以来、整備以外では使われていない部屋。だが、今日からある試みをする事になった。

「ではランサー、これに太陽のルーンを」

「おう」

リニスが手渡したのは、一般的に”ストレージ”と呼ばれる魔法

のデバイス。バルディッシュが”インテリジェント”と呼ばれるのは、優秀な人工知能を有しているためである。

そのためインテリジェントデバイスは使いこなせれば便利なのだが、コストが高い事と適性があるためにいまいち汎用性に欠けるのだ。何せどんな優秀な魔導師でも適応出来なければインテリジェントは使いこなせないのだから。

それに対しストレージは何のくせもなく誰でも使える。が、その反面これといった強みもないのだが、コストが低いために大抵の魔導師がこのストレージを使っているのだ。

だからこそ主流として使われているストレージを強化する事をリニスは考えた。道具としての機能。それをコストを掛けず高める。そこで注目したのがルーンだった。

力を象徴する”太陽”と守りの”大鹿”を刻む事で、魔法の威力やバリアジャケットの防御力を底上げ出来ないかと考えたのだ。

「……終わったぜ」

「では、早速」

だがリニスもいきなり二つのルーンを刻む事はしない。一つずつ試し、それぞれでデータを得てから二つを試す事にしていった。そして、まず太陽のルーンを刻まれたストレージを手に、ランサーへ向かって魔法を放つ。

「バインド」

「ぬっ……」

見た目は普通のバインド。だが、リニスは確信した。それがいつもよりも強化されている事に。何故ならランサーが解除するのに手間取っているからだ。

普段ならば、ただのバインドなど五秒ともたない。それが、今のバインドは実に十秒以上ランサーを拘束しているのだ。それでもバインドはランサーに解除された。その様子を見つめていたリニスは早速とばかりに感想を尋ねた。

「……どうですか？」

「話を聞いた時はどうかと思ったが……厄介だな、これは」

言葉とは裏腹にランサーはどこか嬉しそうに答えた。そう、これはあくまでも実験。魔術と魔法の融合。その目的はアリシアの再生とプレシアの治療に役立てるため。

今回の事でルーンがデバイスに影響を与えるのは分かった。そして、それが魔法の構造の脆さを補強しているのはランサー自身が感じ取った。これを応用し、治療系の魔法も効果を上昇させる事が出来ればプレシアの病気も何とか出来るかもしれない。

そう考えたランサーは、微かな光明を見い出したと思って密かに拳を握る。アリシアの方はまだ不安要素が強いが、プレシアの体については何とか出来そうな部分が出て来た。

「では、次は大鹿をお願いします」

「おう！」

想像以上に上手くいった事からそんな事を考えたランサーは、気合を入れるように返事を返した。リニスから手渡されたデバイスへ

先程よりも意気揚々とルーンを刻むのがその表れだ。

そうして大鹿のルーンを刻まれたデバイスは、結論を言えば守りに関するもの全てが向上していた。シールド等の身を守る魔法に留まらず、バリアジャケットの強度や相手からの魔法に対する耐性も向上している事が後に分かる。

これを基にデータを取り、後にリニスとランサーはインテリジェントにも適応させる事にする。だが、それは守りと力を別々に付与させる事となった。二つを刻む事にしなかったのだ。それには理由がある。それはこの後の実験が原因。

「では、最後に両方をお願いします」

「うっっ！」

最後に二つを組み合わせたデバイスを使ったのだが、これが予想だにしない結果をもたらしたのだ。

「では、まず……」

バリアジャケットを展開しようとリニスがデバイスを起動させた瞬間、それから恐ろしい程の魔力が放出される。それをランサーは感じ取ると瞬時にその手へ槍を出現させ、リニスの手からデバイスを弾き飛ばす。

そして、リニスの傍へ駆け寄るとかばうようにその体を抱き寄せた。それが完了するかしないかのタイミングでデバイスが爆発する。その音に目を閉じるリニス。ランサーはリニスを守りながら、その視線を床に散ったデバイスへと向けていた。

爆発した原因は分からないが、おそらく二つのルーンに加護にデ

バイスが耐え切れなかったのだらうとリニスは結論付けた。処理能力や許容量などがあるように、魔術の付与も耐久限界があるのだから。その推測にはランサーも納得した。

元々この世界にない魔術。それに魔法世界の道具が適応出来ただけでも凄い事なのだ。故に欲張り過ぎてはいけない。これは本来有り得ない力なのだから。

「しかし、これだけでも収穫だな」

「そうですね。ただ……まだバルディッシュには」

「ああ。壊れないとは言い切れないからな」

ランサーの言葉にリニスは無言で頷く。そう、まだ永続的に使えると分かった訳ではないのだ。それも含めた実験をしなければならぬ。だがそう思うもりニスはどこか笑顔だ。

「でも、一步前進です。いつか完全に魔法と魔術を融合させてみせます」

「頼む。しかし、俺が他の魔術も使いりゃなあ」

そう言っただけランサーは悔しげな表情を見せる。他の魔術も知識としてはある。だが、使えなければ意味がない。何せその知識の中には上手くすればプレシアに使えるものもあるのだ。

だが、それをどうすれば使えるのかがランサーにはわからない。効果は知っていても使用法を理解していない。それがランサーの知識の欠点。聖杯戦争の際、座から得た情報はあくまでランサーとして役に立つものだったのだ。

だがキャスターとして召喚されていても、それはきつと変わらな
いだろう。何故ならば、それは彼が生きた時代には無かった魔術な
のだから。

そんな悔しそうなランサーを見つめ、リニスは胸の動悸を落ち着
かせようとしていた。先程の爆発から自分を守ったランサー。その
胸に抱かれ、リニスは改めて感じたのだ。自分が強くランサーを意
識しているのを。

（さっきのランサーの顔、とても雄々しかったです……あれが”漢
”の顔というものなのですね）

リニスは山猫を素体とした使い魔である。つまり、普通の男より
も強い男に惹かれ易いのだ。それも、理性ではなく本能で。故に心
奪われる。嘘偽りない想いをぶつけるランサーに。自分を飾らない
その生き方に。どこまでも実直に、どこまでも豪胆に己を貫き通す
ランサーに。

そんな風にランサーへ想いを寄せるリニス。だが、それを口には
しない。まだ、そんな事を言い出せる状況ではないからだ。それを
深く理解しているからこそ、リニスは尽くす。プレシアに、ランサ
ーに。いつか全てをやり遂げた時、その時がこの想いを明かす時な
のだと。

（その時、貴方は私を受け止めてくれますか？）

そんなリニスの想いを知らず、ランサーは砕け散ったデバイスへ
何かを重ねるように見つめるのであった……

リニスによる勉強が終わったフェイトは、もう楽しみとなりつつあるランサーの話を自室で聞いていた。光の御子と呼ばれ、ケルトの大英雄となったランサーの思い出は純粋な物語としても心躍るものがあるからなのだが、今日はランサーの昔話ではなく……

「俺達サーヴァントが魔力を使うのは何も魔術だけじゃねえ。中には魔術を使えない奴もいるしな」

「じゃ、何に使うの？」

「基本は宝具を使うために魔力を持つてんだ」

彼らサーヴァントに関する話だった。そこからランサーが簡単に宝具を説明していく。それはサーヴァントに一つはある切り札。絶対的な効果を持つ反面色々と容易に使えない理由がある物。

それはサーヴァントの正体に繋がる事が多いため。正体を知られば弱点なども知られる事に繋がりがねない。何故なら彼らサーヴァントは英雄と呼ばれる存在。伝承や逸話などには彼らの情報が溢れているのだから。

そんな説明を聞いてフェイトは納得するように頷き、自分なりの結論を告げた。

「じゃあ、その宝具って言う物がランサーの奥の手なんだ」

「そつなるな。ま、おそらく使う事はないと思うがよ」

「そうなの？」

「俺が宝具を使う事になるとすりゃ、それは相手がそれだけの強さ
って事だからな」

ランサーはそう言って笑うとフェイトへ真剣な声で告げた。自分の宝具は一撃必殺。故に使う事自体が勝利へ繋がる。自分がそこま
でしないといけない相手など、この世界にはおそらくいないだろう
と。

「一撃必殺って……それだけ凄い威力なの？」

「違う。俺の宝具は基本使った瞬間に相手の心臓を貫く事が確定す
る。ま、投擲に対して絶大な効果を発揮する宝具を持つてる奴や運
がかなり良い奴は生き残る事もあるがそれでも深手を負う。いいか
？ つまり、どんな事をしても確実に俺の宝具は相手の体を貫くつ
て事だ」

ランサーの告げた内容にフェイトは息を呑んだ。それはとても恐
ろしい事だったからだ。ランサーは冗談を言う事はあるが嘘は言わ
ない。それを知っているフェイトはランサーの言葉を信じた。

それと同時にランサーが言った使う事はないだろうとの意味も理
解した。ランサーの強さはフェイトが身をもつて知っている。たっ
た一人で自分達三人を相手に出来、尚且つ勝利出来るのだ。しかも、
全力を出しているとは思えない状態で。

（ランサーの宝具、か。それを使った相手って今までどれだけいた
んだろう？）

ふと抱いた疑問。それ程の攻撃をランサーが放つ事になった相手

はいたとすれば、それはどれだけの人数になるのだろうか。その疑問をフェイトはランサーへ問いかけた。すると、ランサーは少しだけ懐かしむような目をし、もう会う事はないだろうと前置いて告げていく。そして最後に語ったのは……

「最近でならセイバーって奴とアーチャーの野郎だ。さっき挙げた生き残った例。それをやってのけた奴らさ」

「えっと、運がかなり良い人と投擲に有効な宝具を持ってた人？」

「おう。正解だ」

フェイトの言葉にランサーは笑みを浮かべ、その手でその頭をやや乱暴に撫でる。それが見た事のない父のように感じられ、フェイトは嬉しそうに笑った。

いつも訓練は厳しいがそれ以外では優しく賑やかなランサー。突然現れ、その日からフェイトの日常を変えた存在。アルフと口喧嘩するのは当たり前。リニスと二人でプレシアの世話をしている男。

今や彼はテストアロツサ家に欠かせない者となっていた。プレシアにもリニスにもアルフにも、そしてフェイトにも。本来彼女達へもたらされる結末。それを少しずつ変化させ、良い方向へと動かしているのだ。

フェイトのくすぐったいと言う声とランサーの笑い声が室内に響く。それを誰かが見ればこう言っただろう。仲の良い親子だ、と……

「よお」

「……フェイトはもう寝たよ」

「だろうな。だと思って来た」

深夜と呼んで差し支えない時間。急にランサーがフェイトの部屋を訪れた。だが、目的はフェイトではなくアルフだったようで、ニヤリといった笑みを見せて彼女を手招きした。

それに不思議がるアルフだったが、ランサーの表情からは悪意を感じなかった。なので、仕方ないとばかりにいそいそと部屋を出ると、部屋を出た所でランサーが手にしているものにアルフの視線が向く。そこにあつたのはワイン。しかもグラスを二つ持っていたのだ。

「ワインなんてどうすんのさ？」

「決まってるだろ？ 飲むんだよ」

当然といえば当然の答えにアルフは沈黙。そして、どこか頭を押さえながら告げる。

「アタシさ、飲んだ事ないんだけど」

「ならこれが初めてか。良い女は酒もいけるにこした事はねえ。今日で慣れとけ」

「いや……あゝ、もういいや」

まだ反論しようと思ったアルフだったが、ランサーがあまりにも楽しそうに笑っているのを見て、それを打ち切った。それにも興味があったのだ。アルコールというものに。だから、何の不満も抱かずランサーの部屋までついていく。

部屋に入るなり二人してベッドへ腰掛け、グラスを持つ。ワインについて何も知らないアルフ。だからだろう。ランサーがコルクを指で摘んで抜くのを見ても、アルフはそれがおかしい事だとは思わなかったのだ。

後に、コルクを取るための道具があるのを知った時も「ああ、そうなんだ。でも、ランサーならそれ無しで開けれるよ」とむしろ笑ったぐらいなのだ。

「ほら」

グラスへ注がれる赤い液体を眺めるアルフ。その鮮やかな色合いにアルフは思わず「キレイ……」と呟いた。それを聞いて、ランサーが笑みを浮かべる。そのアルフの声がとても艶めいていたからだ。

「……よし、んじゃ」

「えっと、乾杯……でいいの？」

「そうだな……アルフの初めての飲酒に乾杯ってな」

「はいはい……」

軽く合わせられる事で澄んだ音を立てるグラスとグラス。会話にはムードの欠片もないがそれが自分達らしいとアルフは思い、試しとばかりにワインを口に入れる。苦いような辛いような、でもどこ

かクセになるような不思議な味が口の中に広がる。

美味しいとは言えないが、不味いとも言えない。それがアルフの感想。だが、ランサーは勢い良く飲んでいる。グラスからではなくこのまま直接飲みたいと言いながら。

(は、いい飲みっぷりだねえ)

ランサーが三杯目を飲み干す間にアルフはやっと一杯目を飲み終えた。それを見て、空になったグラスへランサーがお代わりを注ぐうとしたのだが……

「アタシはいいよ。後はランサーが飲みな。ほら」

「つと……へへ、わりいな」

ランサーから瓶を取り上げ、残りをグラスに注いでゆくアルフ。それを嬉しそうに受けるランサー。この酒盛りはアルフにとって大事な思い出の一つになる。何故ならこのワインを空にした後、ランサーがぼんやりと呟いたのだ。

「……やっぱ、良い女と飲む酒は美味いぜ」

「っ?!」

(こ、こいつ、また良い女って……)

ランサーの呟きにアルフはやや嬉しそうに顔を背ける。それをランサーは特に気にもせず、空瓶とグラスを持って立ち上がる。

「俺はこれを片付けてくる。お前はフェイトのところに戻りな」

「……そうする」

そして、そのままランサーは上機嫌な表情のままふらりと部屋を出て行き、ドアが閉まる瞬間ぽつりと一言告げた。

「……ありがとよ、付き合ってくれて」

「あつ……」

アルフが言葉を返そうとした時には、もうドアは閉まった後だった。静まり返る部屋に残され、アルフは呟く。

「……何さ。お礼を言うのはアタシの方だったのに」

こっちこそ誘ってくれて嬉しかった。それを言いたかったアルフ。ランサーはリニスが欲しいと言い、彼女はそれを嬉しく思っていた。だからアルフは彼女を応援していた。少なくとも今まではそう思っていた。

だが、今日の事で気付いた。自分もランサーに惚れていると。リニスとランサーが一緒にいるのを見ると、最近どこか心がざわつくのを感じていたのだ。その理由が今夜のやり取りで分かった。

(どうしよう……アタシ、ランサーが好きなんだ……)

先程から感じる顔の火照りは決してワインのせいだけではない。ランサーの去り際の言葉。それがずっと頭の中で繰り返される。そして、同時に不安に思う。自分はお世辞にもリニスと違い女らしくない。行儀も悪いし、言動も女性らしくない。全てがリニスと違う。

(アタシじゃ……敵いつこないよ、ね)

初めての恋。初めての想い。でも、それは叶えるはずもなければ叶えていい訳にもいかない。リニスはアルフにとっても姉のような存在。その幸せを邪魔したくないのだ。しかし、しかしである。

(辛いよお……苦しいよお……誰か教えておくれ。アタシ、どうすりゃいいのさ……)

ランサーのベッドに横たわるアルフ。考えるのはリニスとランサーの笑顔。そして、それを見つめる事しか出来ない自分。そんな想像をし、アルフは泣いた。

きつと、リニスとランサーが二人でプレシアの世話をするようになった頃なら、まだ彼女はそれを心から祝えただろう。だが今はもうそれが出来ない。度重なる訓練や食事、そして今回のようにたまたま過ごす二人の時間。それがアルフを変えてしまったのだ。

それは使い魔ではなく、一人の女へ。何も知らない子供から、恋を知った女性へと。この日を境に、アルフはランサーをどこか熱っぽく見るようになる。それにリニスは気付くも何も言わなかった。それは気を遣ったのでもなく理解出来なかったのでもない。それは自分も同じだったから。だからリニスは言わない。アルフの成長と変化を嬉しく、どこか複雑に思いながら。

(ランサー、アルフまで変えてしまうなんて……いえ、私も変わったのです。本当に貴方は……凄い漢なのです)

(アタシ、決めたよ。いつかこの気持ちをアンタにぶつける。それでどうなっても、アタシは構わない)

二人は知らない。自分達以外にも彼へ想いを寄せ始めている者がいる事を。その女性が自分の気持ちを自覚するのは、まだ先の話……

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

空白期のランサーとそれを取り巻く女性の話。フェイトの出番がほぼなかったので追加。後の話に絡む要素となりました。

無印序章

彼、ユーノ・スクライアは困惑していた。それは目の前にいる一組の男女だけではない。彼の隣で驚いている女性もその原因だった。キャスターは突如として現れた二人組を見た瞬間、その男性の姿に目を見開いたのだから。

男は全身を青い服で包み、その手に赤い槍を持つている。女性、とは言っても少女であるが、彼女は黒を基調とした格好をしており、それから感じる魔力からバリアジャケットだと予想した。

問題は彼らが空間転移で現れた事。そう、ここは輸送船の貨物室。ユーノが発見した古代遺失物を時空管理局へと運んでいる途中なのだ。キャスターが直感で”厄介な事になりそう”と判断したため、ユーノは自身が護衛のような役目を自主的に買って出たという訳だ。

「……ランサーですか。まさか私の知っている相手と出会うとは思いませんでした」

「へえ、俺を知ってるとはな。そういう貴様は……魔力量や雰囲気からキャスターと言うところか？」

二人のサーヴァントは対照的な表情をしていた。キャスターはランサーを警戒しているが、彼はどこか不思議そうな顔をしているのだ。そこには、当然ではあるが互いの性格の差がある。

ランサーは相手が誰だろうと敵対するなら倒すだけ。キャスターは自身が正面切つての戦いに向いてないと理解しているので、出来るだけマスターの安全を確保出来ない状況で戦いたくないのだ。

「ランサー、もしかして……」

「あの人はサーヴァント!?」

フエイトの言葉を継ぐ形でユーノが告げた言葉。それに両者が同時に頷いた。

「ああ、そつだ。間違いねえ」

「マスター、以前教えたサーヴァントのクラスを覚えてますね？あれはランサーです。高い俊敏性と恐ろしい程の槍捌きが特徴で、あいつの場合は更にルーン魔術を使えるんです。それと宝具に注意してくださいね。あれを使われたら大抵殺されますよ」

「ほう、そこまで知られているとはな。で、お前はどこで俺と会った。生憎俺には記憶がないんだが」

「さてどこでしょうね？ その記憶がない時点で私は貴方を敵と考えるしか出来ません」

聖杯戦争に呼び出された事が一度しかないランサー。だからこそキャスターの言葉には色々聞き捨てならない部分があった。悟ったのだ。相手が自分の真名を知っていると。

キャスターはランサーの発言から最悪の状況と誤解していた。自分のはあのムーンセルでの記憶が残っている。にも関わらず相手はそれを覚えていない。つまり、純粋なサーヴァントとして召喚されたと把握したのだ。

(宝具の説明が曖昧だが、奴の視線は俺の槍をしっかりと捉えていた。どうやらこれがどうい物かまで知ってるな、ありゃ)

（不味いですね……あの時はランサーのマスターが結構まともだったし、サーヴァント同士を戦わせてマスターは手出しされない事前提で援護するシステムだった。でも、今はそんな決まりがない）

キャスターが一番警戒しているのはランサーが自分ではなくユーノを狙う事。サーヴァントである自身であればランサー相手でも多少持ちこたえる事が出来る。しかしユーノはそもいかないのだ。

「敵、ね。そうだな。お前が俺を知っていようと関係ない。邪魔するなら貫くのみだ」

「ランサー……私は最初の打ち合わせ通りでいいね？」

「おう」

ランサーが真剣な表情をしたのを見て、フェイトも気持ち切り替えた。それを感じ取り、ランサーは嬉しそうな声を返して槍を構えた。

「マスター、いざとなったら一人でも逃げてください」

「駄目だ！ 僕も戦う！」

「いけませんよマスター。教えたはずですよ。サーヴァントとは英雄と呼ばれた者達が多いって。特に目の前の相手は、たった一人で国を守るために戦い抜こうとした猛犬なんですから」

ユーノの申し出をやりわりとだがはつきり断るキャスター。最後の言葉にランサーが小さく笑みを浮かべた。それはキャスターへの肯定ではなく、自身が抱いた予想が確信に変わった瞬間だった

からだ。

そして緊張感が張り詰める。しかしランサーもキャスターも動くとはしない。そう、ランサーに対してキャスターは有利な立場にいるのだ。それは情報量。ランサーの事をあの聖杯戦争で知ったキャスターは、それを小出しにする事で彼へ心理戦を仕掛けたのだ。

自分はお前の事を全て知っていると。それに対し、ランサーはキャスターの事を何も知らない。キャスターと当たりはつけたものの、本人はそれを肯定も否定もしていない。しかも、フェイトはランサーと呼んだにも関わらずユーノはキャスターと呼ばなかったのもそれに拍車をかけた。

そこには、キャスターによるユーノへの魔術講座が関係している。そこで彼女は語ったのだ。どんな時でも情報が決め手になると。知る事は弱点にもなるが武器でもある。故に必要ならば敢えて明かす事もあると。

(フェイト……は動けないか。あの小僧がいるもんな。かと言って俺も下手に動けねえ。ああは言ったが、あいつがあんななりでライダーとかセイバーとも限らないからな。せめて小僧が名を呼べば判断出来たんだが……)

かつてのアーチャーとの初戦を思い出し、ランサーはやや慎重になつていた。あの時は自分だけだったから身軽に動けたが、今はフェイトがいる。もし自分の隙を突いてフェイトを攻撃されれば厄介だ。そう考え、ランサーは相手の出方を窺っていた。

(どうしよう……まずあのサーヴァントは私よりも強いはず。速度では勝てるだろうから、それで隣の子を押さえれば少し状況が好転しそうだ。でも、そうなるにあのサーヴァントが何をするか分からない)

フェイトはランサーがすぐに動かないのを見て自分が動こうとした。しかしランサーと同じくキャスターを警戒し、それを出し抜けたとしても不安が残るために動けない。そのユーノは唯一状況を把握し、自分の出方がこの均衡を崩す事に気付いた。

(ランサーはキャスターを警戒してる。キャスターは正面切ってはランサーに勝てないから動かない。あの子は僕を押さえたいけどキャスターがいるからそれも出来ない。つまり、僕が下手に動くとなりが変わる)

そう考え、ユーノは視線をちらりと動かした。そこにあるのは一つのケース。中身は彼が発掘したロストロギアのジュエルシードだ。ランサー達の狙いはおそらくこれだろうと察し、ユーノはどのようにかしてケースを確保しようと考え始める。

そんな時だった。ランサーとキャスターの脳裏に聞こえる声があった。それは両者共にどこかで聞いた事があるような声。そして同時にどこか嫌な印象を受けるもの。

喜べ。これでお前達の願いは叶う。

その声に二人がどこで聞いたかを思い出そうとした瞬間、輸送船を震動が襲う。それに対して全員が反応を示すと同時に貨物室へ切羽詰った声が響いた。それは輸送船の乗組員のもの。

『大変だっ！ 小さいが次元震が起きた！』

「「っ?!」「」

「何ですって?!」

「あ？ 次元震？」

その言葉にユーノとフェイトの表情が変わる。キャスターは一人状況を理解出来ていないランサーへ深刻な表情で説明する。

「つまり、この次元世界全体を揺らす地震みたいな現象で、下手をすればこの輸送船ごと粉々になるんですよ！ 戦ってる場合じゃないって事です！」

「……チツ！ ついてないのは相変わらずか」

自身の不運を嘆き、ランサーは槍を下ろした。それにキャスターは内心安堵の息を吐く。状況が悪いのは変わらないがユーノを殺される事だけは回避出来たからだ。

「一先ず脱出を考えないと！」

「お嬢ちゃんも転送魔法は使えますか？ 出来るのなら早く脱出を」

「出来るけど……あまり得意じゃないからすぐには無理。ここへはリニスに送ってもらったし」

「おい、何かやばいぞ。この感じ……不味いっ！」

ランサーが声を出しながらフェイトを抱き寄せるのと、キャスターがユーノへ駆け寄るのは同時だった。一際大きな音と共に震動が起き、貨物室へ亀裂が走ったのだ。

それは図つたかのようにケースの下へ生じてそれを落下させる。咄嗟にユーノが手を伸ばすが僅かに届かず、ケースはそのまま落下

していく。その際の衝撃で鍵が壊れたのか、口を開けたままで。

「いけないっ！ このままじゃ！」

「駄目です！ 危険過ぎますっ！」

未だに輸送船は次元震の影響で揺れている。今飛び出せばどうなるか分からない。慌ててケースを追いかけようとするユーノを押さえ、キャスターはそう考えながら視線を消えていくケースへ向けた。それは中身であるジュエルシードをばら撒くように落下している。それが何を引き起こすかは定かではない。それでも、キャスターには一つの確信めいた予想があった。あれを放置すれば大きな災いとなると。そして、それが自分を世界に使役させるキツカケになるとも。

（そんな事にはさせない。まずはこの状況をどうにかしないと。それにしてもあの時間こえた声……あれは確かにどこかで……）

キャスターがユーノを押さえながら色々な事を考える中、ランサーもまたフェイトをしつかりと押さえていた。

「放してランサー！ あれがないと母さんが……母さんがっ！」

「落ち着けフェイト！ 気持ちは分かるが、今は自分達の安全を確保する方が先だ」

プレシアから聞かされたジュエルシードを狙う理由。それを思い出し、フェイトは焦りを滲ませた声を出していた。不治の病に犯されている。そう教えたプレシアはフェイトへこう告げたのだ。その病気を治す術はジュエルシードと呼ばれるロストロギアしかない。

(こうなるとプレシアの体の事を教えたのは不味かったか？ いや、だが今はそれしか理由を用意出来ねえからな)

フェイトにもプレシアがすぐに危なくなる状態ではないと教えている。それでもやはり、愛する母が死ぬしかない状態ならば一秒でも早く治してやりたいと考えるのがフェイトなのだろう。

ランサーはそう結論付け、小さくため息を吐きつつフェイトを自分へ向けて頬を張った。その痛みでフェイトが呆気に取られる。果然とするフェイトへランサーが真剣な眼差しを向けた。

「今はお前が出て行ったらどうなる。お前の体にもしもの事がありや、プレシアの容態が余計悪化するだろうが」

「っ！」

「一先ず撤退だ。いいな」

ランサーの指摘に息を呑み、フェイトは黙って頷いた。丁度次元震の揺れも何故か収まっていたため、フェイトは予めバルディッシュへ設定してあった時の庭園の座標を頼りに転送魔法を使用した。

「じゃあな」

「あっ！」

「待ちなさい！　せめて狙った理由だけでも教えていけ！」

あっさりと逃げるランサー達に気付いてユーノが声を上げる。そんな彼に続くようにキャスターが文句と共に魔術を使おうとするも、

既に二人は消えた後。そして、貨物室に一時の静寂が戻ったのを契機に輸送船が激しく揺れ始める。

次元震の影響で機関部へ損傷が出たために爆発しそうだったのだ。それを焦る声で告げる念話へ応じ、ユーノはキャスターと共に貨物船から脱出するために飛び出した。

他の乗組員と共に貨物船から離れるユーノ達。まるでそれを待っていたかのようなタイミングで爆発する輸送船を見つめながら、キャスターは一人呟く。

”世界”の意思……だったんですかね、あの声は。

その日、海鳴市に二十一もの宝石が降った。だがそれに気付いた者は誰もいない。何故なら、それは突然現れたからだ。音もなく、ただ静かに海鳴へそれは現れた。災いを呼ぶ種として……

それから数日が経ったある日。高町家から元気な声が響き渡った。

「いってきま〜す」

「いってらっしゃい。気をつけて」

微笑むセイバーに手を振って見送られ、なのはは手を振り返しながら笑顔で走り出す。もうあの”始まりの夜”から四年以上が経ち、なのはは小学三年生になった。

未だに運動能力は自信無しだが、体力や動体視力ならセイバーの

折紙つき。あの日から続けるトレーニングの成果だ。ただ、やはり速く走ったりするのは苦手なので。

「にやっ?!」

転びそうになるのはよくある事。

「っと、危ない危ない」

しかし、そこで転ばなくなったのもまた成長。最近、特技にバランスと書こうかと考えるのはだった。そのまま彼女はいつもの場所目指して急ぐ。それはバス停。とは言っても公共ではない。彼女が通う聖祥大付属小学校行きスクールバスの停車場だ。

(良かった。間に合った)

視界に見えてきたバス停へ丁度見慣れたバスが到着する。なのは速度を落としながらバスへ向かう。呼吸を整えながらバスへ乗り込むと、そこには親友と呼べる二人の少女がいた。

学校に向かうバスの中、なのははずかさとアリサの三人で会話に花を咲かせる。これももういつもの事。そして、その話題がセイバ―達になるのもいつもの事だった。

「でね、小次郎の奴ったら、少しは女子らしさが出てきおったかなんて言ってさ」

そう言って、笑みを浮かべるアリサ。昔はどこか気にしていた自分の容姿もここ二年程は自慢するようになり、その理由をなのは達は「はやて効果」と呼んでいる。

「小次郎さんらしいね。あ、そうだ。今度小次郎さんにウチの庭もお願いしていいかな？ ライダーがその方が景観が良くなるだろうって」

微笑みを浮かべながら相槌を打つずか。後半の辺りで浮かべた表情は、頼み事をするためかどこかすまなさそうだ。

「じゃあ、お兄ちゃんやアーチャーさんにもお願いしようよ。その方が早く終わると思うの」

名案とばかりに告げるのはだがそれに二人は苦笑い。

「それじゃ、庭仕事そっちのけで戦い始めるでしょ」

「アーチャーさん一人でやる事になると思うよ」

そんな二人の言葉になのはは不満顔。だが、少し想像して……

「ごめんなさい」

心から謝った。会った途端に互いの獲物に手をかけ、ジリジリと間合いを測る恭也と、悠然としながらも一時も目を離さない小次郎それを横目にため息を吐くアーチャーの姿を幻視したから。

その行動にわかればいいと言わんばかりに頷くアリサ。すずかは小さく笑みを浮かべるのみ。そんなこんなで、この日も過ぎていくはずだった。下校時になのはが謎の声を聞かなければ……

(くそっ……封印しなきゃいけないのに)

全身を傷だらけにしたユーノは、霞む視界を何とかするべく意識を強くする。眼前にいるのはジュエルシードの思念体。だが、彼の傍にキャスターはいない。彼女は別行動をしているのだ。

その後、ユーノは救助に来た管理局員へジュエルシードを回収してくれるよう頼んだ。その調査の結果判明した落下場所は管理外である地球。故に局員は難色を示した。

何と言つても管理外ですからね。それに封印処理もしてあると伺っています。では急がずとも大丈夫でしょう。あの世界は魔力保有者が滅多にいない世界ですから。まあ出来るだけ早目に動くようにはしますよ。

難色を示した事に食い下がるユーノへ局員が告げたのはそんな返答だった。確かに封印処理はしてある。だがそれは慣れないユーノが施したものが大半。しかも、二十一ものジュエルシードを手分けしてやったのだが、発掘チームのスクライアの中にユーノ以上に魔力が多い者等いないため、その処理は正直不安定だった。

それもユーノは告げたのだが、局員は出来る限り善処すると返してそれ以上取り合おうとはしなかった。結局それに業を煮やしたユーノは、ならばと自力で地球へ赴く事を決意。渡航許可と魔法使用とデバイス使用の許可を取り、レイジングハートを手にキャスターと二人で地球は海鳴へやってきたのだ。

ユーノは封印処理が綻び、ジュエルシードが暴走する事を懸念した。なのでキャスターと二手に分かれて行動する事にしたのだ。キャスターは封印魔法を使えないが、見つけた場所を魔術で隔離する

事は出来る。人払いの魔術だ。

それと共に暴走を起こしたとしても暴れる事が出来ないような処理は出来る。なのでユーノは渋るキャスターを説得し、連絡用のレイジングハートを託してこうして単身行動していたのだ。

何とか無くしてしまった内の一つを封印し、順調に行ってくればと思っていた矢先に二つ目を発見したユーノ。キャスターへ報告して安全に処理しようとした途端、そのジュエルシードが何かの願いを受け変貌したのだ。

必死に戦ったユーノだったが、元来戦闘をした事などそこまでのい彼には少々荷が重かった。攻撃魔法も得意ではない故に有効な術を持たぬユーノ。そんな彼に思念体が倒せるはずもなく、現状のようになり込まれていた。

思念体はユーノを睨みながら距離を取る。それを見て、ここしかないとの思いがユーノに生まれた。弱った体に鞭打ち、飛び掛ってきた思念体に何とか封印魔法を展開したユーノだったが、相手はそれに耐え切って逃げるようにその場から離れていく。

それを見つめながら、ユーノは意識が遠のいていくのを感じた。戦闘による緊張感。魔力使用に伴う疲れ。様々な要素が重なり、その体は眠りを欲したのだ。

(ダメ……なんだ……あれ……ほっと……)

ユーノの思いとは裏腹に、体は緊張から開放された事も手伝い急速に眠りへと落ちていく。その直前、ユーノの体が光に包まれた。そして光が収まったそこには、一匹のフェレットらしき動物が傷だらけで眠っているのだった……

時の庭園。その一角にあるプレシアの部屋。そこにランサーとリニス、それに部屋の主たるプレシアの姿があった。あの出来事から今まで、彼らはジュエルシードの行方を独自に追っていたのだ。

「まったく困ったものね。てっきりあっさり回収してくると思っていたのに……」

「……面目ねえ」

やや憮然とした顔のプレシア。それをリニスは黙って見ている。ランサーと言えば、まるで悪戯を見つけた少年のような表情でプレシアを見つめ返している。

「……ま、仕方ないわ。まさか次元震が起きるなんて予想できなかったもの」

「未だに原因不明なところも気になりますね。あ、でも既にジュエルシードの落ちた場所はある程度絞り込む事が出来ましたからご安心を」

リニスの言葉と同時に出現するモニター。そこにはミッド文字で色々と書かれているが、ランサーにはさっぱり読めなかった。

「さすがだぜリニス。で……どこだ？」

「もつ……あれ程ミッド文字を覚えてくださいと言ったのに。第九十七管理外世界。現地惑星名称”地球”です。まだ何処にとまでは

分かりませんが、日本と言う島国なのは間違いありません」

ランサーの問いかけにリニスが呆れた。彼女はランサーへ何度かミッド文字を教えた。しかし、それがまったく意味を成していない事に内心苦笑していたのだ。そんなリニスの告げた言葉にランサーが息を呑む。

その反応に気付かぬまま、プレシアが安堵の息を吐いた。もし落下したのが管理世界であれば、彼女の考える計画は大幅な変更を余儀なくされていたからだ。

「そう。でも管理外でよかったわ。管理局もつかつに手を出さないでしょうし」

「はい。おそらく派遣されるとしても、かなりの時間を要するはずですよ」

「なら、なるべく早めに……ランサー、どうしたの？」

先程から黙っているランサーにプレシアが意識を向ける。それにつられるようにリニスも視線を向け、言葉を失った。ランサーはこれまで見た事ない程、嬉しそうな笑みを浮かべていたからだ。

そんな表情に何も言えないリニスとプレシア。それに気付く事なくランサーは呟く。何故ならば地球とは彼が生きていた場所。それ故に思う事があったのだ。

「そうか……この世界にもあったのか。他のサーヴァントもいたって事からすると……これならうまくすりゃ……」

ランサーの独り言に二人は何も言えないまま、ただその呟きに耳を傾ける。その内容は二人を驚かせるには十分なものだとは知らず

に……

楽しい下校時間。なのは達も例に漏れず、三人仲良く会話をしながら歩いていった。今月からなのはも二人と同じ塾に通う事になり、そこへ向かう途中、アリサが塾への近道と言ってわき道に入り、少し経った時だった。

【助けて……】

「ふえ？」

突如として頭に響いた弱々しい声になのは立ち止まってしまふ。それに不思議そうに首を傾げるアリサとすずか。一体どうしたのだろうと思ったのだ。そんな二人の視線に、なのはは恐る恐る尋ねた。今、何か聞こえなかった、と。それに二人は互いの顔を見合わせ、小さく笑う。場所は少し薄暗さもある場所。故になのはが怖がらせようとしているのだと考えたのだ。

「何も聞こえないよ」

「なのは、怖がらせるならもっと雰囲気出さない」

「ち、違うよお。本当に何か」

聞こえた。そう言おうとした時、再びなのはの頭に先程の聲がした。

【助けて……誰か……】

「やっぱり聞こえる」

先程よりもはっきりと聞いたからか、なのはの口調は強かった。そのなのはの言葉に二人も互いの顔を見合わせ、何かを感じたのか頷いた。そして向けられた視線は、なのはを信じると言わんばかりの力強さがあった。

それを嬉しく思い、なのははお礼を告げると同時に走り出す。助けてとの言葉から急ぐべきだと考えたのだ。三人は揃って道を駆けしていく。その途中、アリサがなのはへ問いかけた。

「で、どこから聞こえるのよ？」

「こつち！ こつちから聞こえる！」

なのはは時折聞こえる声を頼りに走る。それを先導としてアリサとすずかも追走した。そして、しばらく走った先にいたのは……

「フェレット、かな？」

「怪我してる……」

「まったく、酷い事する奴もいたものね！」

全身に傷を負ったフェレットの姿だった。見るのが痛々しい程の姿に三人の表情も曇る。なのはがハンカチを取り出し、フェレットの体をそれで包む。静かに揺らさないようにと配慮しながら持ち上げて、なのは達は息を吐く。

「どつする？」

「この子がなのはちゃんに声を掛けてたのかな？」

「まあ、状況的にそうでしょ。……この子もサーヴァントとか言わないわよね？」

不思議〓サーヴァント。アリサの中ではサーヴァントとはそういう扱いなのだ。それを聞き、なのはは苦笑気味に笑う。

「それはないと思うけど……」

「とにかく、手当てしないと」

雑談に流れていきそうな空気をすずかの発言が戒める。それに二人も頷き、ゆっくりと歩き出した。そんな中、アリサはフェレットに微かな警戒心を抱いていた。理由はある。なのはだけに聞こえた声に傷だらけの体。そして何よりそのいた場所。

（何であんな場所にいたのかしら？ 何も無い場所まで逃げてきた？ それとも……今は何も無い場所になった？）

そこまで考えて、アリサは頭を押さえる。よくは分からないが厄介な事が起きようとしている。そんな予感を感じたからだ。それは隣を歩くすずかも同じだった。もっとも、すずかはアリサとは違う意味で嫌な予感を感じていた。

もし、このフェレットが自分達の日常を壊す存在だったらどうしよう。そんな感情がすずかの中に漠然と生まれていた。アリサが冗談で告げたサーヴァントじゃないかとの言葉。それがどうも引つ掛

かっていたのだ。

（もしかしてこの子もサーヴァントに関りがあるんじゃないか……？　なのはちゃんやアリサちゃんと出会ったのも、はやてちゃんとお友達になったのもそれがどこかで影響していた気がするし……）

今までの事を思い出し、すずかはもう一度視線をフェレットへ向ける。もしそうならば、きっとその内分かるだろう。今はフェレットの怪我を治す事が優先だ。そう思い直し、すずかは意識を切り替えた。

そして、なのははフェレットを運びながら静かに、でも確かにある予感を感じ取っていた。何かが変わろうとしている、と。そんな事を一人思ったなのはは言い聞かせるように呟く。

でも変わらないし、変えさせない。私の大切なモノは……絶対に……

その呟きは、誰に聞かれるでもなく春風に乗って消えていく。緩やかに、穏やかに、少女達の日々は変化を始めようとしていた……

.....

無印編序章。まじかるとは違う展開となりましたが、ユーノの行動はこうなりました。

なのはが魔法と出会うのを期待していた方、申し訳ないです。それは次回に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6636v/>

英霊達とリリカルマジカル頑張ります

2011年10月20日08時27分発行